

# 神樓

第貳拾四號

祖山學院同窓會







棲

神

第貳拾四號

特編『法主即管長制度確立讃辭』

# 目次

口 繪 寫 眞 高祖御遺文斷片

觀 心 の 法 門……………遠藤是妙…(一)

興門教義に對する一研究……………清水龍山…(七)

「立正觀鈔」に對する疑議に就いて……………山川智應…(三)

優陀那輝師の淨顯義淨評に就いて……………小林是恭…(四)

妙法寺記並に原本に就いて……………鹽田義遜…(五)

本宗重要教判としての教觀種脫相對……………中谷良英…(六)

日蓮聖人遺文に於ける國神勸請義……………望月歡厚…(一四)

## 法主即管長制度確立讃辭

祖廟中心制度の現在と將來……………鹽出孝潤…(一三)

法國冥合の現證……………柴田一能…(一三)



給仕精神の高揚……………堀龍惇…(一三九)

宗政復古に當り青年學徒の奮起を望む……………柴田顥秀…(一四七)

卽身成佛研究序說……………室住一妙…(一五二)

御遺文にあらはれたる下種思想……………武田海正…(一五六)

對支布教と我徒の用意……………結城瑞光…(一五九)

文學些言……………齋藤要輪…(一六〇)

立正治國論を拜讀して……………中澤要實…(一六六)

歴史の一環を擔ふもの……………塚本龍晟…(一七〇)

陣中隨想錄……………小崎龍雄…(一七四)

改造か創造か……………岡部科…(一七八)

波木井書に於ける良の方の管見……………難波智龍…(一八二)

レムブラントの創作に就いての瞑想……………原隆二…(一八三)

愚思一編……………原不退…(一八七)

文藝欄

短歌……………(一九一)

山 清 し……………齋藤慎吾…

岡村教正……………後藤龍子……………石川國武

東 菑……………原 不 退

俳 句……………(二四八)

嫩 葉 子……………黑宮教文

母 を 思 ふ (隨筆)……………小林學山……………(二五〇)

作 品 集……………(二五〇)

望月海順……………永瀧堯憲……………啄 人 生

村田海仙……………畑 嬌 作

齋 藤 博 一……………東 菑……………生……………江 口 啓 惇

小 林 是 淳……………磯 邊……………涉……………黑 澤 龍 正

阿 部 東 洋……………近 藤 義……………見……………丘……………龍 芳

宮 崎 泰 賢……………K……………・ K……………生……………原 田 鐵 雄

山 本 榮 淳……………K……………生……………原 田 鐵 雄

校 友 會 報……………(二五九)……………同窓會々報……………(二六〇)

各 部 々 報……………(二七一)……………旅 行 記……………(二六六)



五  
今の世には法花經はさる

事にてをはすれとも時によて

事ことなるならひなれは

山林にましわりて讀誦

すとも將又里に住して

演説すとも持戒にて行

とも肱をやひてくやう

一、所在 滋賀縣栗太郡物部村今宿本  
像寺

一、系年 身延御在山時代ノ御筆

一、筆蹟 假名交リ消息文

一、紙質 楮紙

一、員數 第五紙目一紙一幅

一、寸法 堅九寸七分 幅七寸八分

一、行數 七行 七十五字 裏ニモ文  
字見ユ

一、遺文 御遺文集ニ未ダ見當ラズ

一、發見 昭和十年八月廿一日宗賢調  
査之砌

一、裏書 寛文十二年子正月七日 玄  
通院日元花押

元祖大士御消息一幅父宗滿  
母妙學五十年忌寄附江州本

像寺以充永代靈貨之員焉

元祿五歲舍壬申年十月望日

京都本滿寺廿四世日榮花押

(藤田敦宏誌)



うよ湖をのみ丁くのみこ

鄭婦也

すゝも鉄又里に掛し丁

山林ニありて薺

事こゝたるは心は所創

事二丁をぬすりて海にも丁

正 今の世に世に世に世に

(蘆田燦宏編)

京藩本齋寺廿四冊日榮芬明

丁未年五月十一日

好戲學正十半忌審判爲限本

元膺大士轉解息一酬父宗南

寶文十二年五月十日 文

查文

聖明十年八月廿一日宗寶閣

字良仁

十十五字 裏二字文

榮正脉目一珠一神

斟

聞言交り能息文

贈寺

蕭賢繅栗太雅神醫林今寄本

甘肅祖濟消息斷片



# 觀心の法門

遠藤是妙

一

佛教學に於て初學者を悩ますものゝ一つは、所謂専門語即ち術語であつて、而かも其の名其の言葉が同一でありながら、その時代や宗義によつて、各内容説明等を異にするといふことである。其れは他の哲學や科學以上に困ること、一語の認識を欠くことによりて、教義全體の不明を來し、一句の誤解によりて、教義全般の領解を謬ることになるのみならず、聖教の價值批判にまで多大の影響を及ぼす恐れがあると思ふ。吾等は偶々一篇の學的論文を讀み、一席の専門講演を聽く時、よくそれを實感することである。今の觀心の語も教相に對するので、教相は佛一代の教法說相と其れによりて詮顯せらるゝ教理であり、觀心はその教相又は其れによりて理解したまふを、自分の心に取入れて觀察し、實際の修行に移さるゝものなるが故に、この二つの意味のものは、佛教であるかぎり、何れの宗義にもあるわけである。例せば法相の三時教判に對する五重唯識觀の如き、華嚴の五教十宗判に對する唯心法界觀の如き、眞言の教相に對する事相の如き、淨土宗の教相に對する安心起行の如き皆それである。然し未だ天台宗の如き整備せる教相及び觀心はない、即ち五時八教を以て佛一代の聖教を判釋し、法華開顯の教理を證明するを教相となし、この教意によりて一心三觀十境十乘の方法を設け、行者陰妄の己心を觀じて三千三諦の理を顯はすを觀心とするのである。故に



教相と觀心とは天台宗の二大教義にして、教相解を開くは觀心の豫備知識となり、觀心行を立つるは教相の實際化なれば、兩者一方を缺き一方に偏することは出来ない、所謂教觀相資と稱して、天台一家の讀稱するところである。されば三大部に於ても玄義・文句の教相を述ぶる處に觀心あり、止觀の正しく觀心を示す前にも教相を廢しない、但し各部の正意より教觀の傍正を判すれども、天台宗としての本當の目的は觀心にあるのである。それは教相も所詮觀心の爲めであるから、觀心が家の教相でなければ、遂に經釋の文字だけに止まつて、何等効果も利益も正覺も得られないことになる。この邊から觀心証道の實義とも云はるゝのである。

要するに觀心は一般の佛教に通ずる意味を有ちながら、茲に云ふ觀心は天台の觀心でその教相を離れざる實際的修觀方法と心得べきである。

## 二

更に天台の教相に屬すべき玄義に用ゆる觀心は、領解すべき法相を心の上に持て來て觀るのだから、名玄義でも、體玄義でも、乃至は三諦でも四諦でも、此等の法相に附して明す所の觀心であるから、これを附法觀と稱するのである。文句に用ゆる觀心釋は、法華經の中に顯はれて來る事物、例へば大舍城とか耆闍窟山とか云へる物に托して觀心を釋するのであるから、これを托事觀と稱するのである。然し此等の觀心は、客觀的の法相事物を主觀の内に入れて、領解し易からしむる最上の方法と見るべきである。故に修行として釋する場合もあれば、法門として解釋することとあれば、觀境として解釋する時もあつて、觀心を正意とする止觀の如く、終始一貫觀境を定めて、専ら三觀十乘の修行方法を説くのは、其の内容を異にすること明かである。この止觀の觀心を縱行觀又は約行觀と稱するのであ

る。又人に依つて其の行相を異にする邊から、南岳大師の傳へたる三種の止觀、即ち漸次・不定・圓頓あれども、今の摩訶止觀に説く所は、直に法華圓頓の理を修証する圓頓止觀なのである。

### 三

以上述べたる如く觀心は修行方法には相違ないが、吾が己心を觀して法華圓頓の理を証するにあらぬのだから、觀心こそ本迹所詮の法體を顯はすものと見るべきである。この意味に於て觀心は究竟の極理でもあり、至極の絶妙とも名け得るのである。故に玄義二ノ上五十七には

今大教〔迹〕若起レバ方便〔前〕教絶ス今本地ノ教興レバ迹中ノ大教即絶ス今入レテ觀妙寂ナレハ言語道斷本ノ教即絶ス絶ハ由ニ於觀ニ將ニ此ノ絶ノ名一名ニ於觀妙ニ

と述べて、昔・迹・本・觀四重の興廢を明かにし、本迹遠近の化用も法華開顯の教理も、これを自己の心性に引入れて觀ずるとき、始めて其の機能を顯はすものであると示されて居る。此の下に荊溪の

故知徒ニ引ニクハ遠近一未レ了セ觀心一遠近ハ自彼於我ニ何爲シト貧ニ數ニ寶ニ此ノ謂也

と註せるもの、又至極御道理と感ずる次第である。茲に於てか觀心は元より修行ではあるが、所用の法門から見れば、本迹を超越したる能絶の大教とも見ることが出来るのである。言ひ換へれば觀心は教相を活かす道であるとも云へる。是は玄義の一段に過ぎないが、専ら觀心を明す止觀に於ても、全十卷の内前四卷、全十章の内前六章の間は、正修・止觀の用意方便として、教相教理を開演し、立行の土臺を築かれて居る。されば、天台觀心の内容も亦法華圓頓の教理にして、天台大師之を修し又之を証し、行者の爲めに修証の道を示されたのである。然し天台の証せられた法



華經の眞理は、諸法實相を出でない、即ち三千諸法の一つなる吾が已心を觀境と定めて、三千の諸法もこの心性の本具であり、實相の理體も即空假中であると顯はすにある。これが法華所詮の妙體であり、佛の如實に知見し玉ふ所である。故に章安大師は止觀の序に（一ノ一<sub>右七</sub>）

此之止觀、天台智者說三已心中所行、法門<sub>一</sub>

と云ひ、荊溪大師も亦輔行（止觀五ノ三<sub>左廿</sub>）に

乃<sub>チ</sub>是<sub>レ</sub>終窮究竟ノ極說

と云ふ。即ち天台至極の法門であり、觀心所行の法體と云はねばならぬ。

#### 四

次に吾が日蓮宗の觀心は何うであるか、これを鮮明にしなければならぬ、吾祖が當身の大事として、御撰述遊ばされたる觀心本尊鈔（九二八）の如き、而かも其の副狀（九五七）には

觀心ノ法門少々注<sub>シ</sub>之乃至此事日蓮當身ノ大事也

と遊ばされ、其他授職灌頂鈔（二〇二九）、總勘文鈔（一九〇七）、十法界鈔（二八九、二九〇）等隨處に觀心の語を御用ひになられて居らる。惟ふに觀心の語は天台の其れを襲用せられたとしても、其の内容法體等大に異なるのである。吾宗に於て觀心と云ふも修行の方法たる意味に相違はないが、十界事常の御本尊を境體として、一心に南無妙法蓮華經を唱ふれば、無始以來三法（本佛と本法と吾）一體の妙旨が、自然に顯現する處に、其の行相の碩異を認めねばならぬ。是を事行の妙觀とも、本化の信行とも名くるので、觀心の語には相應しない様であるが、天台の觀慧の代りに信念を

以てし、心性本具三千三諦の代りに、事相常住已心本尊を以て境體としたのであるから、天台の一念三千觀理境結成の文を會して、吾祖の信念唱題已心本尊の妙境を成したことになる。是が即ち觀心本尊（九二八）であり、壽量品の觀心（二〇二九）であり、受持讓與（九三八）の行相であり、但信唱題當體蓮華佛（九九一）の修証である。故に吾宗の觀心は、信者の心構へとも安心立行とも見ることが出来るのである。然らば斯うした吾宗の觀心は、何によりて立てられたか、端的に云はゞ觀心の法體は何であるか。申す迄もなく天台が述門方便品の眞理實相を法華の所詮觀心の法體とするに反し、本門壽量品の文底に於ける三法一體の妙旨を吾宗觀心の法體とするのである。この法體を顯す前提として、壽量品顯本の次第を考ふるに、天台は壽量品の文の如く、伽耶近成歴史的佛陀の本時は、五百千萬億塵點の昔にあると顯すが故に尙ほ有限始覺の遠壽であるから、佛の價值に高下なく、所証の境界亦迹の理實相と變りがない。然るに吾祖は、この壽量品の文の奥底を徹見して、五百塵點は無始顯本の一過程は過ぎない、是の故に壽量品の教相は、佛の無始久遠を顯はしたものであるとするのである。隨て所化の衆生も無始本有でなければならぬ、茲に始めて述門始覺の十界互具は、其儘本覺本有の十界互具となつた道理であるから、佛界にも無始の九界を具し、九界にも無始の佛界を具することになる。是を天台の文上隨他の本門に對して、文底隨自の本門と稱するのである。この本門の觀心は、南無妙法蓮華經の一心に於て、吾等凡夫の一心と如來の一心と、其儘一つであると顯はすにある。其はこの七字の題目が、因果俱時生佛同體であり極理であり心であり、本佛所証の本法であつて、三法一體の妙旨も、十界三千事相常住の當相（四十五字の法體）も、皆是の七字の展開又は變相に過ぎないからである。

若し十法界鈔（二九〇）四重興廢の一段に於て、本門と觀心と其の教體を分別するときは、本門は能入の教門なるが故に、隨自本門即ち壽量品文底の教相と見るべく、觀心は所到の妙處なるが故に、本有の妙法蓮華經の當體と見るべ



きである、所謂本尊鈔(九四二)に於ける本法三段(又は觀心三段とも云ふ)の正宗分の法體、又は内証の壽量品と稱するものであらふ。但し教觀元より二にして不二なるものなるが故は、永く別ならざる事は云ふ迄もない。

## 五

觀心の大教とか、五重相對の教觀の觀とか、觀心の法門とか仰せになられたことは、本化別頭の觀心を顯はす上に於て、最も意義深いことと拜するのである。而かも其れを當身の大事となされたことは、本佛の因果と悟道と慈悲と事業とを、其儘末法の吾祖の身の上の事とされたからである。即ち法華經の行者としての體驗から、末法の弘通は益々如説の行法(棲神廿一號一八)で進まねばならぬと信じられたからである。要するに行に活かし得ぬ教法は魂のぬけた死物に等しいものであるとの思召を以て、獅子王の如く要法の行を唱導遊ばされたのである。末法今時特に教家の活動を要する時、如説修行鈔の如き信念を以て、觀心本尊鈔の如き、吾祖が己心中所行の法門を、吾等が己心の所行として、廣宣流布の願行に精進せねばならぬ。

# 興門教義に對する一研究

——本尊鈔に於ける「本門釋尊」と「地涌千界」及本尊圖面に於ける「日蓮花押」に就て「宗祖本佛本尊」の謬を匡す——

清水龍山口述

中谷良英筆受

## 緒言

興門當代の學匠小笠原慈開師は、其機關誌『世界の日蓮』に既に十數回に亘つて『先づ本尊を定めよ』と題して、興門（近代！）相傳の『宗祖本佛本尊論』、『種勝脫劣論』、『板本尊論』、『神本佛迹論』等を論述せられてゐる。我等は〔同誌上及び身延の『棲神』に〕道理文證現證を整束して之を難じ、師亦之に答ふる所があつたが、元來師の所立は彼門相傳の本因妙・百六箇の兩卷鈔を正依とし、我等は本尊鈔等三五大部を正依とす、根本的に既に其所依を異にすれば、隨つて彼我の所見の終に一致を見るべからざるを以て、一先づ論難打切りとしたが、偶々『法華』第廿五卷第二號に、田中喜久三氏が、本尊鈔の御文に就いて本論争に觸るゝ所ありたるを以て、且く同鈔の文義を略述し、併せて興門傳承の教義を評論し、以て初心學徒の鑽仰に資せんとす。



## 本 論

彼誌連載の『先づ本尊を定めよ』、又特に堀日亨師の『日蓮正宗綱要』一一五に

種、脱判と云ふのは、大聖人の御口傳の法門で他門では餘り云はない奥深い文底、本門の重に立つ見方である。御書の中では開目鈔と本尊鈔とに少しばかり其片鱗を示されたが明晰としてない。末法今時には此日本國に本門の教主釋尊といふ佛と妙法五字の大法とが顯はるると云ふ事は、御書の多くに明に示されてゐるけれど、其本佛・本門の教主釋尊と云ふのは何日何れに生れた現人か、又は理想上の名號か、題目の五字と云ふのは何人が持つて居るものかと云ふ具體的には明晰でない。尤も通佛教の汎神觀の様に何事も理想や抽象に塗り付けて、強いて大きく模糊さうと云ふなら其でも宜からうが、宗祖様のは何しても其有舊れた類で無い様であるので、是非とも此事は事實に明示せにやならぬ。即ち本佛と云ふのは現世に生れた凡夫僧であり、本法とは壽量品の奥底に沈めて在つたのである。久遠の本佛と同格であるけれども、妙覺果滿の姿を顯はさない名字の凡僧で本因行の形である處の宗祖大聖人が、無宿善の荒凡夫の心田に始めて妙法の佛種を下ろす、此本因下種の佛法が今の時と國とに密接と合ふ生命ある教へである。此地盤から眺めて壽量品の文に明に示された久遠實成第一番の顯本佛や其本果の妙法や、其已下の佛と法とは疾に御用の濟んだもので、現代には無用のもの即ち脱佛、脱法とする。此見方が實に一般から驚異せらるべき祕中の秘説なのである。權實・本迹・種脱の三段の道理の入口は第三法門と一體である。名稱の違ひだけである。又觀心本尊鈔の五重三段の法門とも、此から出た開目鈔の五重相對の法門とも確と連絡して居る。此等が本宗で諸教の資格を區別する必要な法門である。

と。更に越えて（同綱要 一二九）

人の本尊と云ふのは法報應の三身が互に融通する上での自受用報身如來である。久遠の智德を表面として、内面では法身佛とも應身佛とも交渉するのである。其が末法には人格者としての日蓮大聖人と信じ奉つて、木像にも繪像にも作りて猶生きて御座するが如く敬ひ奉るのである。此自受用身の人格に妙事の三千の法が具つて居る處が人即法の本尊であり、三千の法に自受用身が具つて居る處が法即人の本尊である。此互具一體の處を人法一箇とも一體とも云つて我等の歸依し奉るべき佛様と仰ぐのである。或は密に考うれば御漫荼羅の中心の南〇經は法で、日蓮判は人であるから、此が人法一體である。斯う云へば一重の一體で済むのに、漫荼羅の前に御影を置く時は二重の一體となる勘定であるけれども、人法を即離するのは理の當然で、又此には一般の佛像を安置せし餘情を引く事にもなり、常識の上から追慕の意にもなる。人間名字の本宗では其がよいのでは無からうか。併し人情を超越した理智の非當に進んだ人間には、此信仰の必要は無いと云ふ事にも成らうかと思ふのである。其で吾等の世界では寺院でも教會でも俗家でも、必ず此御本尊を置き申して僧も俗も信心修行を勵む清淨の道場とするのである。又此本尊を普通の三寶即ち佛法僧に區別する時、佛と僧とは宗祖、法は妙法漫荼羅として一體三寶に見る事もあるが、古くより佛は宗祖、法は漫荼羅、僧は御開山の代表として其御影を加ふる事があり、此を三寶式とも三福一對なんども言つてゐるが、宗祖開山の時代にはありうべきものでない。目師已後に出來た儀式かも知れぬ。此は一般の通儀ではなく特別の式とも見るべきであらう。

と。言ふ所の「開目鈔と本尊鈔とに少しばかり其片鱗を示された」とは、其開目鈔に在つては鈔の冒頭總標の所習所學の三道三學（可歸依の法）と所敬所尊の三尊三德（可歸依の人）とを、別釋に至つて「其可歸依の法」其可歸依の人



を本佛、一轉して本化本僧の三大誓願に結歸し給うてあるより、彼派に在つては在、世、脫、益、の、人、佛、本、法、法、華、を、廢、して、末、法、下、種、の、人、僧、法、法、を、立、て、給、ふ、て、之、を「但法華經本門壽量品の文底に祕沈」と仰せられたもので即ち「宗祖本佛本尊義」であると立てるやうである。

然るに我等の本鈔觀は全く異つて、本鈔は本佛の三徳を全う末法に具體現し給うた謂ゆる「遣使還告」の本化本僧とは即ち日蓮的く是也と、本化本僧の人開顯書であつて宗祖を直に「本佛」也と開顯し給うた書とは見ない。随つて本鈔に「宗祖本佛本尊義」は片鱗だも示されて居ない。又本尊鈔にも全く其義無きのみならず、却つて正反對に「本佛本尊義」が、全篇始終一貫する聖判である。彼派の所立は本鈔廿八紙右

比時地涌千界出現、本門釋尊爲脇士、一閻浮提第一本尊可立此國

の文を右點訓して「地涌千界の垂迹、宗祖が、本門の釋尊を脇士と爲し、自ら主尊となつて」と解して「宗祖本佛本尊を立てるが、我等は正反對に、此文を以て「壽量本佛本尊義」の結示とする。請ふ左に之を少しく述べよう。

本鈔全篇始中終を通じて「本門釋尊」は主尊本佛で、「地涌千界」は脇士本僧であることは文義意の自然妥當で、斷じて主尊本佛が脇士なる地涌千界の脇士となる文義意はない。

一、本門の本尊の體相を明して

其本尊爲體、本時娑婆上寶塔居空、塔中妙〇經、(主尊)左右(脇士)釋迦牟尼佛・多寶佛、釋尊脇士上行等四菩薩云云〔十七紙右〕

二、其顯現の時を明して

如是本尊在世四十餘年無之、八年之間但限三八品(同上)

三、其滅後流要の時を明して

正像二千年之間、小乗、釋尊（主尊）迦葉阿難爲脇士。權大乘并涅槃經法華經迹門等、釋尊（主尊）以文殊普賢等爲脇士。此等佛造畫正像未レ有壽量品佛「以地涌千」。來入末法始此佛像「地涌千界爲脇士本門」可レ令出現「地涌垂迹」歟。（同上左）

と、略して小乗權大乘並に迹門等の迹佛と、本門壽量品の本佛「文且く主尊を標して脇士を略す」との正像迹末門三時流行を明し、續いて廣く

正像二千餘年之間、四依菩薩并人師等建立餘佛小乗・權大乘兩前迹門、釋尊等、寺塔、本門壽量品本尊（主尊）並四大菩薩（脇士）三國王臣俱未レ宗重之由申之、此事粗と雖聞之前代未聞故驚動耳目迷惑心意、請重説之委細聞之。（同上）

と數番問答料簡して

四、最後の結示が即ち今文

此時（末法）地涌千界出現本門、釋尊爲脇士、一閻浮提第一本尊可レ立此國「紙右」

と、即ち主尊も脇士も前後一貫して居る。但第三の文略明の下には、「小權迹釋尊」には各其脇士を擧げて「爲脇士」とあるに、獨り「本門釋尊」には、但主尊のみを標して「地涌千界爲脇士」の語が省略されて居る。然し續いて廣明の下には、「本門壽量品本尊」（主尊）「并四大菩薩」（脇士）と、具に主尊本佛と脇士地涌とを並べ擧げられてある。其結示の今文豈に忽ちに正反對に主尊が地涌で、脇士が本佛と成るの理あらんや。況や第一の文明に「釋尊脇士上行等四菩薩」とあるをや。然るに「爲して」と「爲つて」との調點については、古來吾宗先哲にも、前の第三の



小權迹の主尊及脇士の文と同じく、「脇士と爲して」と訓じて、而も其主尊は興門派の言ふ「地涌千界」ではなくて、「中尊の妙〇經に對して前の文の左右」を今文には「脇士」と遊ばしたまふで、若し「釋迦」と「地涌」と相對すれば、「釋迦は主尊」「地涌は脇士」なることは前後一貫、設へ「爲脇士」と訓すればとて、「地涌本僧日蓮」が「主尊本佛本尊」となるが如き佛寶(佛)僧寶(僧)師(佛)資(僧)顛倒の義ではなく、「末法に地涌千界が日蓮と垂迹示現して、中尊の妙〇經の左右(脇士)に、本門壽量品の本佛並に本僧四菩薩を脇士と爲したる一閻浮提第一の本尊を此國に始めて造り書き顯彰(出現)せしむべきか」の意である。故に今文の啓蒙に

本門の本尊につき諸御書の中、題目を本尊とし玉うと、久成の釋尊を本尊とし玉うと兩向あり中略然るに今の御文體、「本門釋尊爲脇士」とある現本に就て、或義に釋尊を以て題目の脇士と爲る義に見るべし。所以者何となれば、地涌千界が垂迹(日蓮)出現の時、本尊を建立し給ふについて、本門の釋尊を脇士とし、閻浮第一の妙法の本尊を立つるの意にして、上の「塔中妙〇經左右(脇士)釋迦多寶」等の文にも叶ふべし云云。今云く、此義現文に順するに似たりと雖も正轍の義に非るべし。一には古本に「爲本門釋尊脇士」とあるが故に。二には釋尊に直に脇士の名を付する事いかにしきが故に。三には當書の向の文並に諸御書に四大菩薩を脇士とせる格に背くのみならず、四菩薩を脇士とするに非ずんば本門の本尊顯はれざるが故に。問ふ、若し爾らば當文四菩薩を不舉、只意を以て釋尊の脇士とすると云ふ事妨げなきに非ず。垂迹出現の地涌を以て直に釋尊の脇士とする事も其義不聞、如何が會得せん。答ふ。四菩薩の本門釋尊の脇士たる事は上の文に既に顯著なる故に、今、文を省き給ふなるべし。是即ち「地涌千界(垂迹)」が出現して、地涌爲本門釋尊脇士」と遊ばすべきを、次上の「地涌千界」の言と近くかしましき故に、巧に上の「地涌千界」の言を下に及ぼし用ひて、下の「地涌」の二字を略し給ふなるべし。如此文諸文に是れ多し。

「地涌千界」の言は總を擧げて別の「四菩薩」を取る義なる事、次下の「不顯本門四菩薩」等の文も潤色とすべし云云。

と釋してゐる。扶老好師・優陀那輝師同じく此を依用し、祖書綱要導師亦今文を以て師が立つる三種本尊の中の一尊（本佛）四士（脇士）本尊の典據となして、彼派の所立を評破して、

或説云、當今下種時至、宜下用二本因口唱人法以定中本尊上法、謂南經也、人謂大聖人也、便證之以三本尊鈔云、此時地涌千果出現本門釋尊爲脇士之意曰、以三釋尊而爲地涌脇士也。中略如彼所據之文上、固明地涌出現釋尊以爲二本尊、躬自爲脇士上、即是一尊四士立意也。故古本云、此時地涌千界出現爲二本門釋尊脇士矣。是豈地涌令三釋尊爲脇士之義乎。上文云、地涌千界已心釋尊眷屬也、例如太公周公等周武臣下、成王幼稚眷屬。武內大臣神功皇后棟梁、仁德王子臣下也已上。此文周武神后擬久成尊、成王・仁德比三下種機、周公等以類地涌也。其臣宜以輔佐君、君能令臣左右、人臣還令君主爲眷屬者未有之也。總結之文亦可準知。而曲訓爲之字、恣倒解自訴不見古本不檢三前後之文之愚、一何暗短。中畧何足與議、本化大道、宗門異端莫大於此噫噫。

と云つてゐる。彼門派にあつては如上全篇前後の文義意を一貫して解すること、知らないから、今文の「本門釋尊爲脇士」を直ぐ上の「地涌千界」が、自ら主尊と成るの僻解に陥つたのである。小笠原師は漢文の語法上「脇士と爲し」と訓すべく、「脇士と爲つて」は穩當でないことを力説してゐるが、元來本鈔のみならず、祖書全體に純正漢文を以て見るべきものは一もないが、而も今文の「爲脇士」は、師の言ふが如く、文は前と同文體に「脇士と爲して」と訓むを穩當とする。が然し義は「地涌千界が本佛本尊」といふのではなく、正反對に「四菩薩を脇士と爲す本門壽量品



の本佛本尊義」であることは上述の如くである。のみならず更に

五、今文に續いて此、本尊の三國三時未有、今始めて有る歴史を叙べて、

月支震旦未有此本尊（四菩薩爲脇士）、日本國上宮建立四天王寺、未來時以阿彌陀爲本尊、聖武天皇建立東

大寺華嚴經教主也、未顯（脇士本僧を擧げて）法華經實義。傳教大師粗顯（脇士）示法華經實義、雖然時未來之故建立東方驚王不顯

本門四菩薩（脇士本僧を擧げて）、所詮爲地涌千界（末法に垂迹）讓與此（本佛本脇士の）故也。此菩薩蒙佛勅

近在地下、正像未出現、末法又不出現、大妄語大士也。三佛未來記同泡沫（廿八紙左）。

故に佛勅に應じ末法に垂迹出現して

六、「但召地涌千界（説）八品（付）囑（之）」たる「一閻浮提第一本尊始可建立此國」と宗祖が正しく此本尊を顯彰し

給ふことを「地涌千界出現」云云と示し、更に此旨を本尊圖式の上に、「日蓮花押」し給ひて以て證明印定し給ふた

のである。此「御署名花押」は、本鈔の卷尾に「文永十年（癸酉）卯月二十五日、日蓮註之（註之が他書には「花押」）」と同格であ

る。其が本尊圖面には、位置が恰も中軸になつてゐる所から、中尊と同じく御自身を本尊の中軸主尊に安置し給ふた

ものと誤解して、「七字」は法、「日蓮花押」は人などと云ふは、眼前の儀相圖式に迷惑したるもので、全く「御署

名花押」の聖意を辨へないもので笑止千萬の次第である。「御署名花押」の聖意は、上段に本尊全面を圖し終つて、

其下に「日蓮花押」と落款、奥書し給ふたもので、正しく此本尊建立主・顯彰主・圖顯主であることを極書し給ふた

ものであつて、決して御自身を中軸に安置し自ら本尊の主尊となり給ふたものではない。中軸は主尊首題と、此正法

守護の善神（鬼子母神天照太神）とで、「御名印判」は、此本尊圖顯主の責任「御署名花押」である。斷じて異解してはなら

ぬ。故に本尊圖面には「宗主導師としての聖祖」は勸請されてゐなくて、但其「顯彰主」としての「御署名花押」のみである。是れ古來大漫茶羅の前に、別に聖像一體を奉安する所以で、是れが正しく「宗主導師としての日蓮大聖人」である。試みに思へ、闍浮提一切衆生の信仰の標的、正境たる本尊を圖顯して、其本尊の中軸に御自身を自ら勸請安置し給ふの理があらうか、思はざるも甚しい哉。但し是は正しく「御署名御花押」の聖意を謂ふので、若し我等の信仰上には「御署名花押」を、直に「宗主導師」として歸依信敬し奉ることは言ふまでもない。若し此邊から言へば、別に聖像一體を勸請奉安することを要しないのである。誤解してはならぬ。

又古來在俗の佛壇には、大漫茶羅の略式勸請として一塔兩尊の本像の前に聖像一軀を安置して俗に三寶様と稱してゐる。其中尊は本法、兩尊は本佛、聖像は本僧で、此場合は垂迹日蓮聖人に本地上行を含めて本迹一體の本僧の意で、即ち本門の三寶式である。然るに上述の如く彼門に於ては種脱相對して「末法下種本佛名字本因妙行者日蓮聖祖を、教主と崇め本佛と仰ぐ」と立て、又その三寶式・三福一對の如きは、全く本尊鈔の文義意に典據なく、佛法僧の三寶の法門の綱格に違背するものである。

我等は既述の如く本鈔前後の文義意及佛法僧の三寶の綱格並に道理に準據する本佛（本門）本脇士（千界）義を直ちに文の上に訓點して「地涌千界出現して本門の釋尊に脇士と爲り」といふのである。故に文章上からは彼派の言ふが如く「脇士と爲し」と訓ずるを穩當とするが、義は「本佛本尊本化脇士」なること前述の如し。然り而して「中尊の南〇經」は彼派に在つては法即人の日蓮目受用本佛也といふも、我等は既に『棲神』及『世界の日蓮』誌上に論述せる如く法即人の體の三身・文底無始無終無作の久成本佛（若し傍邊の釋尊は用）なりと拜する。本化大士いかに高貴なりと雖も、本是れ本佛釋尊の本因の菩薩、本果が家の本因であり本眷屬本弟子である。久成釋尊は本果本師であ



る。本果は則ち行者の所期であり正境である。正的妙境を以て正しく本尊本主とすべきは法義の自然である。豈に極佛を以て却つて因位の菩薩に脇士たらしむるの理あらんや。かくの如きは出世事理俱に許さざる所である。我等が謂ふ如く「南○經」は「體の三身本佛釋尊」、「傍邊の釋尊」は「用の三身本中の迹佛」と解し來つて、方めて諸御書の法本尊佛本尊の言殊體同が會通し得らるゝのである。若し彼所立の「宗祖本佛本尊義」の如きは、門下各教團中但彼派のみの相傳法門であつて、斷じて諸御書を會通することは可能ない。

## 結 論

最後に吾近代二匠師の彼派の教論教義評を抄して以て結論に代へよう。

優陀那日輝師曰、

釋尊を捨て、蓮祖を取ると云は佛法に非ず外道也。宗祖を本尊とすること祖意に非ず、大に聖人立教の意に背く也。釋尊を本尊とするは祖師の自行化他皆然也。釋尊に依つて宗を立て、法華經に依つて立つ宗。豈に釋尊を本祖とせざらんや。毘盧舍那の名は祖師の所用に非ず、凡て祖師に達し、自宗に達し、他宗に達し、天下の人情に達するの法は其益あるべからず。祖師に順せば顯露彰灼なる久成釋尊の形相たる十界本尊あり。是れ祖師より授與せる閻浮統一の本尊、末法盡未來の本尊、久遠實成本門の教主釋迦佛也。祖師の自稱として主師親三德の導師、教主釋尊よりも大事の日蓮、一閻浮提に肩を並ぶる者なし等とは、時に約して功を論ずる激言なる耳。何ぞ必ず一偏を保執せんや。抑揚褒貶の太だ過ぐるは佛家の常也、不可異解ス。當に知るべし、蓮祖の大功は釋尊を尊奉せると法華經の殊勝を顯はし給ふとに在り。良に釋尊の佛たる所以を知ること偏に天台と宗祖とに由れり、若し釋迦を廢し法華を迹門なん

と貶斥せば誰人か之を信ぜん。佛法を捨て、別に一道を立てんと欲せば何ぞ佛を祖とせんや、蓮祖豈に佛子に非ずや。又蓮祖別に一道を開かんと欲せば、何ぞ釋尊を廢斥して自ら教を立てざる、蓮祖其勇なきに非ず、若し其力及ばざるが故に釋尊に黨すと云はゞ是れ甚だ拙也。故に若し法華を宗とせば法華の説者を尊崇すべきこと道理必然也。本尊豈に外に求むべけんや。

桓審日智師も亦曰

問ふ、或家の説に本門の本尊若し形像を立つれば則ち應に祖師を安ずべし、若し靈山の釋尊は是れ脱益の教主釋尊也、下種の導師肉身の大士は是れ本佛也と、此説云何。答ふ、若し内證に約すれば則ち祖師と釋尊と高下を論すべからず、若し外用に就けば則ち祖師は是れ名字因行の凡師、釋尊は是れ妙覺果滿の尊主、本地垂迹俱に師弟たり。夫れ本尊とは根本尊主の謂也、故に若し形像を安ずれば則ち釋尊を立て、尊主と爲す、事隨ひ理順ふ矣。昔叡岳の徒天台を以て自受用報身と爲し、釋尊を以て應身と爲し、止觀を以て法華に勝ると爲す。今日の義當時に髣髴たり、立正觀抄の破折當に鑒むべし。夫れ下種とは固と熟脱を得んが爲也、果海豈因人の所期に非ずや。故に萬德具足の如來・尊極無上の法主以て本尊と爲すは事理の當然、復た論すべき也。因人此佛に歸依し其體に會入す、故に能く其位を紹繼し其功德を受授する也。肉身の當體本有の尊形を成ずることを得る也。

と。經文祖判に立據し條理整然、特に吾祖一代の御化導の實蹟に照して堂々の論・正々の議、評破切當頗る得意と謂ふべきである。我豈黨せんや。

因に故田邊善知師の『觀心本尊鈔通解』(二三〇)にも「本門釋尊爲協士」と訓じて彼派の異解を斥つて「文に拘泥して本門の釋尊を協士と爲してと訓すべからず、何となれば協士は弟子の稱、師の佛に用ゆる例なし、異解する勿れ」と



云つてゐる。我等は文の訓み方は且らく彼派の説を穩當と認るが、義に於ては知師と同一で、彼斷じて非なること上述の如くである。

上述の如く彼派の偏に、在世の人尊釋法華經、釋法華を抑へて、滅後の人尊釋法華經、師法旨を揚ぐる思想は、蓋し日本天台の止觀勝法華劣、天台尊釋法華經、自受用報身・釋迦應身佛等の邪義の彼派に流れ入つたものである。即ち中古台徒尊舜の『止觀見聞』に曰

粟田口心賀義云、玄義文句ハ假テ在世ノ教味ヲ判ニ一代ノ教相ヲ、故ニ法華ノ能釋也。止觀ハ是レ大師ハ已心所行法門ヲ、更ニ不レ借テ在世ノ教味ヲ何ヲ可レ云フ法華ノ能釋ト耶。況ヤ就テ身土說機ニ別レ之ヲ、則チ法華能說ノ教主ハ釋尊應身佛果、所居ノ土ハ同居靈山、所被ノ機緣ハ一代聲聞迂迴道ノ類、色心二重ニ移轉スル爲ニ正機ト、所說ノ法門ハ本述二段ノ妙法也。止觀能說ノ教主ハ自受用報身如來、所居ノ土ハ皆常寂光妙土、所說ノ法門ハ天真獨朗ノ法體本迹未分ノ內證、所被ノ機ハ直入圓頓本迹未分ノ頓機也。身土說機既ニ各別ナリ、安シ能釋ナラシ乎。乃至 荊溪消フ止觀明靜ノ文ヲ云ク、衆生ハ本有ニ明靜之體ヲ、諸佛ハ修得ニ止觀之用ヲイヘリ。止觀體諸佛ハ用也、法華者從テ止觀一所ニ緣起ニ諸佛ノ所說ナレバ綱ニ劣ニ於テ止觀ニ也。

尋云、止觀自受用ノ所說ト者其證云何。答云、止觀ニ云ヘリ智者大隋等ト。弘決ニ受テ之ヲ云ク、智者ニ二字ハ即是教主ナリト、智者ニ二字ハ全同ニ佛德ニ、即以此ヲ爲ス三身中ノ自受用身ト、而シテ止觀教主ト尋云、止觀ハ本迹未分ノ法體者證據云何。答云、籤云、今此妙ノ名ハ兼ニ於本迹ニ。彼文ノ妙觀ハ獨ニ在ニ於圓ニ已上。玄文所立待絶ニ妙ハ本迹已分ナリ、故ニ云ニ兼ニ於本迹ト。彼文ノ止觀ハ未分ノ獨圓也。尋云、有ニ大意ニ不レ大意ニ無相違ニ義ト耶云何。答云、此義兩三重、一ハ不レ成ニ顯說ニ法華ノ大意ト成ニ根本ニ法華ノ大意ト。但異據一義云、非ニ根本ニ法華ノ大意ト、籤云、若不ニ開權ニ妙名不レ立ニ已上。法華者開權得名也。縱シテ根本ニ法華ノ內證ナリト猶是開權妙法ナリ、若シテ權實相對ス、今此ノ止觀ハ非權非實ノ內證法界不思議法體ナリ、故ニ非ニ根本ニ法華ノ大意ト白焉ト。一一止觀攝衆機故約ニ解行能所ニ則チ大意也。





木氏を對告とせる法門で、十分に聖意を盡さざるものであり、獨り吾興尊への兩卷鈔は單的に再々往觀心の實義を述べ給へるものである」云々（取意）。

我等は眞蹟現存殊に古今各派（貴派は別として）齊しく第一位に置く本開兩鈔（開目鈔は明治八年焼失せるも）を（文義意一）中心として宗教宗旨・教相觀心・文上文底・種脫相異體同（彼我の異同は今茲に委ふべきに）を（貫して）中これ實に兩鈔一は入文に一は副狀に、最も鄭重懇懇なる勸誡並に自信を發表し給へるに依る。若しそれ兩卷鈔に至つては、正に七花八裂水乳不辨、之を的確なる權證と爲すべからざることは、尊門唯一の學匠廣藏辰師すら尙之を疑ふてゐる程である。今具に古今の僞書說を擧ぐる事は略するが、詳しくは吾『大崎學報』第六十三號の淺井要麟教授の「聖祖門下の本迹論」及び日宗社發行に係る望月歡厚教授の『本迹論と日蓮宗の分派』就て見よ。吾人本より直に諸家の僞書說を首肯する者ではないが、現在に於て兩卷鈔の成立に關する限り、之を聖の御眞蹟とするには餘りに多くの疑義及矛盾を見る、故に此を第一正依の本典として義を立て諸御書の明文を歪曲し牽強し附會し、更に眞僞疑はしき興尊の他書に依りて之を補強せんとするが如きは斷じて取らざる所である。唯自門の相傳のみにて他門派の一切依用せざるものに依つて立義の權證とすることは、謂ゆる「論未決の已前龜鏡に立つること堅義の法に背く」（縮遺）で、論場に於ける文證の網格上斷じて妥當ではない。而も貴説は三位順師の『本因妙口決』現存せりとして該書を價值づけんとせらるゝも、宗學全書には棟師俊師寛師の口決寫本と校合の旨を記するも、順師の該原書存在を記さず、又會て吾大學に堀日亨師の講を聽ける際も、同師の言に『口決』の古寫本存於大石寺といひ、該原書の存在については當時聽かなかつた。且つ『口決』については本因妙抄と共に當然削除すべき所ありと言はれたのを記憶してゐる。豈にかゝる書を以て絶對權威とせんや。

次に御義・向記について古來一面重要視すと雖も、最近史學考證學の發展につれ、漸く専門學者中其成立を疑ふ者出づるを見る、我等は其専門に非ざるを以て、其點に關する是非は且く置く、今兩書の内容を拜するに、御義向記の觀心は、多くは是れ我家の託事・附法觀であつて正しき約行・信行觀を專にしたものではない。而して本化の正觀は信行觀で即ち本尊鈔に明す所是である。何ぞ偏に彼を尊んで反つて此を卑むや。試に思へ、富木常尊は有髮の弟子といへ年齒祖師に長じて學解深遠（四信五品鈔の如きは、且く凡俗に同じて問へるに答ふ耳）、殊に祖師の信任最も篤く、殆んど親代りとして之を遇し給ひ、重要事態即ち或は身命に關し或は宗教的體驗中の一大事實の生ずる場合は、必ず先づ氏に其旨を致され、又其賜書の多くは甚深の法義を述べ給ひ、又傳によれば無邊行菩薩を以て擬し給ふて「交互の像」を造り給へる等以て御直檀中に於ける學解的將た實際的地位を窺ふべきである。豈に在俗の故を以て本尊鈔を輕視すべけんや。重ねて言ふ、我等が本尊鈔を中心第一となし、之に開目鈔等の四大章疏を加へて宗義に於ける諸般の問題を鑽仰せんとするのは、正しく聖の御指南に依るものである。

貴説「日蓮本佛本尊」論の如きは既に屢述べた如く、一種の信仰としては或は可、但しそれが、祖文の底意、再々往觀心の實義也と言ふに至つては斷じて不可、これ實に「祖師を惡く敬ひ」、謂ゆる「孝經を以て親の頭を打つ」下剋上の邪魔外道、左袒の敵のみ。祖文に曾てかゝる義意無し。由來近く親しき祖師を尊崇するは人情の自然であるが、



さればと言つて祖、先、教、主、本、佛、を輕忽にするは眞正の教法ではない。興尊全集所々に法華聖人、或は聖人御影といひ、又は聖人の見參に入れ奉る、或は佛聖人と稱する等、若し成見を以てすれば、宛も日蓮聖祖、本佛、本尊、義を意味するかの如く見られやうが、これ盡し謹嚴正直師孝の興尊者の師嚴道尊の至情が此語を爲せるものに過ぎない。故に『三時弘經次第』には、明に「末法萬年は佛は久成釋尊、付囑の弟子は上行、弘通導師は日蓮」と書かれて居る。而も貴説は此『三時弘經次第』を以て一往權帶方便となし、興尊の本意は「無作本有の南○經本尊」なること『門徒存知抄』等に明かなりといはれるが、いかにも『存知抄』等には「繪像本像本尊」に對して明に「妙○經の大漫荼羅本尊」の説を立てられてゐるが其「妙○經」は、寬師已來の日蓮本佛義ではなくて、「無作三身の寶號・體の三身を詮表する妙○經」で、即ち「壽量顯本の文底無始無終の久成本尊」と見ねばならぬ。故に興尊は所々に權小の釋迦を本尊とするを斥ひ、或は宗祖の隨身佛なる立像の本尊に對してこそ「只是繼子一旦之寵愛待月片時瑩光」等と破してゐられるが、「本化の四大士を脇士とする本門久成の釋尊については之を自義とされてゐる。況や又興尊祖師に常隨して、祖師の法に於ける將た佛に於ける大義名分を聞く、何ぞ忽に師意に反して聖祖本佛義を立つるの道理あらうや。殊に存知抄や五人所破抄の如きは其内容上導師の『日興上人御傳草案』よりも後に出來たるものならんとの疑難すらあるをや」(草案に存知抄等に在り、不審。更に又導師は明に蓮祖を遣使還告の降壇と云へり。故に興尊の謂ゆる「法華聖人」等を以て直に蓮祖本佛論の底意也といはんは、反つて派祖の精神を誣ふる者ならざるかを疑ふものである。若しそれ興尊が後年木繪の造像を排して妙法大漫荼羅本尊を正意とせられたるは、恐らくは日大師の『尊師實錄』等に言ふが如き「末法は濁世也三類の強敵有之、爾れば本像等の色相莊嚴の佛は崇敬憚りあり、香華燈明の供養も叶ふべからず、廣宣流布の時分まで大漫荼羅を安置し奉るべし」(興尊全集(四一九頁)等)の意に出たものではなからう歟。而して「大漫荼羅本尊」は本尊鈔の四十五字の法體の理致を圖顯

したる本門八品、虛空會の儀相を寫象したものであり、中尊の南〇經は、境智冥合の法體即久成、本佛久證の本法（人法一體）であつて、斷じて日蓮本佛の義ではない。請ふ信仰と研究とを濫じ、或は寛師の「我門尊し」の偏執に拘はれて聖意を誣めること勿れ。

#### 四

貴説數々我等を評して「教網に執して觀心を知らず」といふ。而して其「日蓮本佛義」を以て再々往觀心の實義也となし、本化を本時四大に配して釋尊の師也と云云。誰か本化を以て四大に配し本行菩薩道の本土、法性之淵底玄宗之極地なりと言ふを非議しよう。而も思へ、如是高貴の大菩薩・八品來還の四大士も實に本佛の支分因徳の菩薩であつて、本時の四大と雖も、終に空大總體の釋尊に總括統綜せられてゐるではないか。久しく下方空中法性之淵底玄宗之極地に住すと雖も、而も師嚴道尊鞠躬祇奉、如來一命四方奔涌、親しく弟子の禮を以て久成釋尊を瞻仰供養し、其遠本を開顯するの近因を成じ、塔中別付の命を奉じてゐられるではないか、師弟因果最も嚴として動かすべからず、何を以てか忽ちに師弟因果を濫じ圓滿究竟の極佛を以て因位支分の菩薩に脇士たらしめ日蓮本佛と言はんや。抑よ本化出現の本意は久成釋尊の絕對性永遠性尊嚴性を驗證し、其本佛の精神を盡未來際に傳へんが爲のみ。而も貴説は別付を以て本果を本因に返還する也として釋迦脫佛日蓮本佛云云。宗祖を讃むると雖も還つて祖意を死すものならずして何ぞや。

或は云く三世循環三世益物の儀式を知らずや云云。今謂く、最も近く親しき事實を例證として之を會通しよう。それ吾國體は、天祖の神勅を基としてゐる、而して歷代の聖天子は等しく天祖の御魂の入り代らせ給へる現神として天



業を成じ給うて天祖と御一體であらせらるゝが、而も國家宗廟の神としては、建國以來嚴として天祖大神を崇め奉り、上御一人より下萬民に至るまで悉く渴仰崇敬おかざるはない。これ萬代不易の吾國體の實相であり國民の信念である。今亦例知すべし、苟も佛教と稱す、たとへ印支目の三國佛教乃至各國とりくの佛教異同尠ならずと雖も、佛教にいて其本主たり根源たる釋尊を度外視して脱也劣也無用也と捨て、偏に祖師を佛と仰ぐが如きは、全く附佛法學佛法成の外道であり、佛教と稱するも實には佛教に非るものである。故に三時三國四依の導師出づるも、未だ曾て自ら稱して佛也本尊也として反つて本主本佛を破壊せるを見ない、唯末學未得謂爲得の徒輩間々佛意祖意を誤れるものではない。即ち野狐禪者流及中古台徒尊舜等の如きあるのみ。これをしも觀心の實義也といはゞ、正に教外別傳天魔破句の邪觀のみ。若しそれ正觀の實義とは、須く從教起觀、親く之を行者自身に觀心（信行）證入して「本尊は法華經の行者の當體」、「己心三千具足三種世間也」、「日蓮と同意ならば地涌の流類」、「此本尊は行者己心にあり」等々を謂ふのである。而して師等の據る御義等亦必ず「今日蓮等の類南○經と唱ふる者は」等の一句に、附法託事の觀を正しき信行觀心に結歸されて居る。御義の御義たる但此一兩句にある。餘は唯中古天台言ひ古りたる本覺法門談の抄録であつて正しき口傳の御義ではない。故に貴説もし觀心の實義を言はんとならば、須く行者本尊義たるべきである。何となれば大曼荼羅本尊には自ら教觀の二意を含んで、其觀門の邊は、本門壽量文底觀心の實義事の一念三千一體三法の理致を圖顯して、行者觀心の妙境たらしめ給ふたものである。若し教門の邊は本佛釋尊本尊である。然るを宗祖本佛本尊と立て、我等が行者本尊義を立つるを見て惑耳驚心して「行者とは祖師一人也、行者の二字を一般の弟子門下に許すは恐れ多し」と言ふが如きは、反つて自ら教綱に拘束せられて觀心實義を知らざるもの、畢竟教に非ず觀に非ず二途不攝の本尊觀と謂はざるを得ない。

## 五

次に當其奉行の誓狀につき、日天子と天照大神とを同一視すべからずとする説。又一家相傳の「本の迹は迹に非ず、迹の本は本に非ず」等の確實なる祖文典據及其嚴密なる概念如何。更に本尊鈔結文に對する僻説、又教觀相對の彼我異同。又三祕・報恩・實相・日女等の聖文に對する歪曲的見解。又種脱勝劣の義を擴張せんとして白米と粃との譬喩の法譬不齊、或は神本佛迹を強調して而も其神とは久遠の本法・本地自受用にして聖の御魂也といふ如き神佛混同、はては無作本佛を歴史的事相生身色相莊嚴の佛と爲し、以て末法爲用云云の論等、幾多論難すべきものあるも、今は之を略して後日を期することとする。

## 六

之を要するに一代聖教に於ける小大權實迹本等の諸佛を、壽量文底無始久遠の釋迦一佛に開顯統一し、諸教を妙法五字一法に開顯統一したる所に、吾本化佛敎の釋迦敎の正系的發達究竟を見るなるに、彼門流は反て之を日蓮正宗に非ずと謂ふ。借問す、卿等は客觀的に日蓮聖人の弘められた佛法(佛)其者を論じて居るの耶、將又主觀的に日蓮聖人に對する貴門流の信仰其者を語つて居るの耶、請ふ冷靜一番、學問義學と信仰實感とを精揀し來るに非ざれば與に宗義を語られない。

已上



# 「立正觀抄」に對する疑議に就いて

山 川 智 應

## 緒 論

立正大學教授淺井要麟氏は、「大崎學報」第九十二號において、「慧檀兩流と日蓮聖人の教學」と題する注目すべき研究を發表せられた。その大體の要領は、聖人の遺文といはれるものの中に、「修禪寺決」の如き、台・密・禪・念・合談の日本中古天台の口傳法門に近きものがあつて、「開目抄」「本尊抄」等の標準遺文の教相主義と異なる思想があるのを、古來の學者がそこに『教學上見逃すべからざる一線を劃し得ざりし爲め、遂に聖人教學の實體を把握し得なかつた』人々、例せば三井敬光師乃至最近の前田慧雲・島地大等・上杉文秀諸氏をして、聖人の思想を『日本天台の思想と殆ど異らず』と斷ぜしめ、甚だしきは『修禪寺決は日徒の僞作』などいふ如き錯誤に陥らしめたものであるとし、更に進みて佐渡阿闍梨日滿師、八品日隆師、本隆寺日修師、乃至は綱要日導師等が、「修禪寺決」の思想をわが本化の教學中に肯定せる方面のあることに、それ等の錯誤的斷定を招いた原因ありとし、『十八圓滿抄等における天台教學觀と、本尊抄等における天台教學觀とは、根抵に於て異つてゐる』のを『同一視するやうでは、聖人の學系を正當に把握することは出来まいと思ふ』と説き、終りに遺文中に『慧心流繼承の諸篇と、檀那流繼承と目すべき諸篇とが、そ

れぞれの教學的傾向を保有して、對蹠的關係を示してゐる』この二つの傾向に就いて、眞に『聖人独自の教學的本面目を知る爲めにも究明』するのが、『御遺文研究上の一課題でなければならぬ』とせられてゐる、相當大問題の提出である。

今、吾等は教授の提議の全體について本誌上に論究せんとするものではないが、教授がその検討せらるべき遺文の一例として挙げられたる、『立正觀抄』に對する疑議に就いて、聊か所見を開陳せんとするのである。

教授に依ると、この「立正觀抄」の中の所破の意見として徵舉せられたる、『止觀勝法華』説は、「二帖抄見聞」中卷及び「御書抄」第廿五卷、「天台宗名目類聚抄」一末、「止觀見聞」一乾等に從へば、仙波の尊海の創唱である。しかるにその尊海が心賀法印から叡山で七箇法門の相承を受けたのは、延慶三年その五十八歳の時だから、『止觀勝法華劣』の義を唱へたのは、當然その以後であるべき筈であるのに、『聖人が立正觀抄及び同送狀を書かれたのは文永十二年……尊海二十三歳の時である。五十八歳で初めて心賀から付法相傳せられた尊海が、(その)二十三歳以前に止觀勝法華の義を唱へたとは考へられない。然るに立正觀抄には、その義が所破となつて現はれてゐる。この點いかに解すべきであらうか。その他立正觀抄及び同送狀を理解する爲めには、なほ種々の問題があるものと考へらるゝが、こゝにはたゞ一問を投じて學者の精研を希望するに止めて置く』と論じて、『立正觀抄』の僞疑を提示せられてゐる。その『學者の精研を希望する』とある語氣からすると、或は教授會下の學人に課題せられた意かも知れないが、『大崎學報』は宗門屈指の學的機關であるから、今は廣く教學界へ提議せられたものと認めて、それに對して本文を舐するに至つたのである。



勿論、教授の論旨が吾等の學的貢獻に直接接觸するものが必要ならば、必ずしもこの筆は執らなかつたであらう、だが、教授の所論は吾等が二十九年「妙宗」第十三編の「叡山における日蓮聖人の師友の研究」の後部（「日蓮聖人研究」第一卷には收めざりし部分、近く「信人」誌上に之を收載するであらう）、及び「日蓮聖人傳十講」<sup>（二）</sup>「本化聖典大辭林」<sup>（三）</sup>「三大秘法概説」等に論ぜる所と直接の關係を有する爲め、學的責任上これを闡明せざるを得ざる必要を生じたところへ、恰も「棲神」から寄稿を依頼せられたのである。

吾等の從來研究し來つたところに依れば、「立正觀抄」の所破の思想、即ち身・土・教・機に互つて、「止觀」が「法華經」に勝れてゐるといふ説を創唱したものは、仙波尊海の師の心賀の師なる栗田口靜明であつたらうとしたのであるから、「立正觀抄」の文永十二年に、その思想が所破となつてゐても毫も支障はないことになるのである。今これについて、文献的考察と歴史的考察の兩方面から、少しく研究の一端を示すことにする。

## 本 論

### 一、文 献 的 考 察

#### 1、「立正觀抄」の現存最古の寫本

「立正觀抄」に就いての眞偽が決められるについては、まづ文献的考察をして見ねばならぬが、現存最古の寫本とおもはるゝものは、身延山久遠寺に藏せられるそれであらう。その文字は恐らく、修補校正された泰堂居士の「遺文錄」とは數十十字の相違があらうが、縮刷本とは僅々の相違に過ぎぬやうであり、その奥書には左の通りある。

『立正觀抄』 一帖

正中二年<sup>（一）</sup>三月於洛中三條京極最蓮房之本<sup>（二）</sup>御自筆<sup>（三）</sup>有人書<sup>（四）</sup>之<sup>（五）</sup>今于<sup>（六）</sup>時正中二年<sup>（七）</sup>十二月廿日書<sup>（八）</sup>寫<sup>（九）</sup>之<sup>（一〇）</sup>也

身延山 <sup>元徳二庚午</sup> 重寫也

正中二年は聖滅四四年、尊海が心賀の付法を受けた延慶三年<sup>（聖滅二九）</sup>から十五年後、その歿せる正慶元年<sup>（聖滅五一）</sup>から七年前であり、元徳二年は正中二年の六年後であるから、當時尊海の創唱したものに對して、聖人門下の何人かゞ名を聖人に假りて之を偽作したものとしても、この寫本に『御自筆』とまであるのは少いかと思はれる。但しこの寫本に對しては、その初轉本を寫した人が『有人』とあるのみで名がなく、つぎに第二轉本を寫した人も『書寫之』とのみで同じく名がなく、この第三轉本も『身延山……重寫也』とあつてこれも名がない。その點は疑はしいと感じる人からは、その疑案の第一に數へられるであらう。つぎに『於洛中三條京極最蓮房之本』とあるが、身延六牙日潮師の「別頭統紀」<sup>（卷十）</sup>の最蓮房傳には、文永十二年に最蓮房も佐渡から赦されて、直ちに身延に至り、『定省奉侍』し、既に茅を下山の地に結び、尊海が心賀の付法を得た二年前の延慶元年四月化すとあるから、潮師はこの身延山の「立正觀抄」の古寫本を見てゐないもの、或は見ても取用しなかつたものとせねばならぬ。そこに疑案の第二がまた數へられるであらう。

しかし、第一の疑に對しては他の古寫本においても往々かゝる例のあることを見るから、必ずしも之を以て確定的の疑案とすることも出来ないし、第二の疑に對しては、「統紀」そのものの記事の歴史的信用度を考へねばならぬ。もと潮師のこの書を作られたのは、主として整然たる教化的の宗史を成功するにあつて、必らずしも事實の眞實性に重きを置いたものとは認めがたいやうである。といふのは現に第九卷の日昭尊者世家においては、たゞ一紙の「本門



圓、頓、戒、相、承、血、脈、譜」の全文を出して、その下に『昭尊親書今現存于池上ノ藏中、其文廣矣』と書いてあるが、『其文廣矣』とは何の意味かわからない。またその贊文中に昭師の眞蹟に、『法印』『權律師』と自書せる疑を徴し、『師曾<sup>ア</sup>在<sup>ニ</sup>叡山<sup>ニ</sup>登壇受戒<sup>ス</sup>、帶<sup>シ</sup>法印<sup>ヲ</sup>除<sup>ニ</sup>權律師<sup>ニ</sup>、後又稱<sup>ス</sup>之<sup>ヲ</sup>、何不可<sup>カ</sup>之<sup>レ</sup>有<sup>ラン</sup>』と答へてゐる。そしてその記事の中昭師の叡山を下つたのは歳十八の時としてあるから、十八で法印・權律師となつたことになるといふが如き、事實上あり得ない奇怪なことになつてゐる。また昭師のたゞ一紙の「本門圓頓戒相承血脈譜」を掲ぐるやうならば、身延山第二祖日向尊者の「金鋼集」の如き大著は必らず載せねばならぬ筈であるが、筆はその片影にも及んでゐない。また昭尊記事中には御一週忌に「錄内」百四十數通を定められたとしてあるから、「立正觀抄」を疑つたものでもない。畢竟して「立正觀抄」古寫本の如きにも注意が及んでゐなかつたものであらう。且つ「下山本國寺開山日榮上人傳」(即ち最蓮房傳)には、『或云志茂山本國寺開山者、西林房日芳』といふ異説が掲げられてゐるから、最蓮房の京都へ歸還しなかつたことを、必らずしも確定的に主張し得るわけでもない。また或はこの古寫本の

『正中二年乙丑三月於洛中三條京極最蓮房之本』

とあるのは、最蓮房、後十七年であるから疑ふべしとする人があるかも知れぬが、それは「統紀」の寂年を實とするからのことで、「統紀」の記事深く信憑するに足りぬとすれば、この正中二年は日興尊者の如きも八十一歳であり、朗門九老の日澄師の如きも八十七歳で生存してゐる頃だから、最蓮房も長命であれば生存してゐたらうし、また『最蓮房之本』といふ意味は、必らずしも最蓮房が存生してゐなくつても、その房の繼承者があれば、その處で『御自筆』の本を寫したとしても通じるのである。

以上の如く考察する時は、この寫本はその紙質やら文字の時代やら、身延山における同時代の他の寫本と比較することによつて、これを元徳二年のものと見てよいかどうか考定せられねばならぬ。

そしてそれが考定せられたとしても、前にいつた聖人門下の人が、尊海の止觀勝説が流布したに對して、之を僞作したものではないか、などといふ疑ひも、單に年代上からは容れ得る餘地はあるのであるが、それは歴史的考察によつて自然に解消せられるであらう。

## 2、「立正觀抄」は何故に常祐兩師の「本尊聖教錄」

及び日興師の「門徒存知事」に記されざるか

そこでつぎには古く御遺文の名を列ねたる、富士日興師の「富士一跡門徒存知事」<sup>(二八)</sup>や、中山の日常・日祐兩師の「本尊聖教錄」<sup>(二九)</sup>の中に、その名が見えてゐるか否かを考へると、その何れにも「立正觀抄」の名は見えてゐない。

しかしそれが見えてゐないといふことは、決して本抄が後人の僞作だといふ疑問の根據にはならぬ。なぜなら「門徒存知事」は僅々十部の御書を列ねたものに過ぎないし、常師「本尊聖教錄」もまた主として富木氏への賜書を列ね、その他の遺文は十二通を収めたに過ぎず、消息と合して六十餘通、その「錄内」に加へられたものは二十五通。更に相當多く集録せられた祐師の「本尊聖教錄」に收められたものも、之に加ふること約七十餘通で、しかもその「錄内」に加へられたものゝ明瞭なのは四十餘通である。そして祐師入滅の聖滅八七年から、僅かに二十七年を経過したる聖滅一一四年の應永三年の什門日金師の「日什門徒建立由緒」<sup>(三〇)</sup>には、すでに『錄内錄外』<sup>(三一)</sup>といふ語が出て居るし、更に七十餘年後に寂した身延日朝師の「錄内」寫本の中には、「立正觀抄」<sup>(三二)</sup>も加はり且つ現存してゐるから、「日什門徒由



緒」の頃既に成立してゐた「錄内」中にも、おそらく「立正觀抄」は加はつてゐたものであらう。何となればその以後の各派の著書中、「立正觀抄」の「錄内」たることに、何等の異論が出てゐないからである。

要するに「門徒存知事」は十書を列ねたのみで、その他は疑書だといふ意味でなく、常・祐二師の「本尊聖教錄」に「立正觀抄」を收めてゐないのも、それは京都の最蓮房の所にあつたもので、傳寫の便宜がなかつたのであらう。また祐師は身延とは相當に交通してゐたに係らず、身延所在の眞蹟御書全部は收めてゐない點からいつても（例せば「光日房書」の如きは祐師錄にない）、身延存在の「立正觀抄」第三轉本が「祐師錄」に收められてゐなくても、決して不思議はない。そして「錄内」に加へられてゐるといふ事實は、少くも聖人滅後、一百十數年後の頃は、聖門各派において、之を遺文とするに異論のなかつたことを示してゐるのである。

3. 「立正觀抄」の文章は果して聖文として疑ひなきか

つぎには「立正觀抄」の文章は、果して聖文として疑ふべきところがないかどうか、と考へられねばならぬ。おもふに眞蹟存在の遺文や、「錄内」の多くの遺文の文章に較べると、本抄の文章は少しく異なるものがあるかの如くに感ぜられるものがある。その一番著しいものは、文勢・文氣において、多くの遺文の如き豪爽暢達のところ、聊か缺けてはゐまいかとおもはれることで、用語も聖人の遺文として別に怪しまるゝ著しいものもなく、文體は當時の書取文のもの、文脈・文格もまた必ずしも疑ふべきではないやうだ。その豪爽暢達の氣勢に缺けるやうに見えるのは、説明會通を主とせられた爲めではないかと思はれるが、しかもなほ

『天台大師（靈山）聽衆（トシテ）雖（レ）宣（ト）如來出世ノ本懷（ト）、時（レ）不（レ）至（カ）故（ニ）、妙法ノ名字（ヲ）替（テ）號（ス）止觀（ト）。迹化ノ衆（ヲ）故（ニ）本化ノ

付屬不弘給。正直妙法止觀說マギラカス。故ニ有ノマ、ノ不レバ妙法ナラ帶權ノ法ニ似タリ。故ニ知シテ天台弘通ノ所化機ハ、如ニ在世帶權圓機ノ也。本化弘通ノ所化機ハ法華本門ノ直機也。』

『問。何以得レ知妙法ハ勝ニ一心三觀ニ云事上。答。妙法ハ所詮ノ功德也。三觀ハ行者ノ觀門ナルガ故也。此妙法

佛說云、道場所得法、我法妙難思、是法非思量、不可以言宣ト云云。天台ノ云、妙ハ者不可思議、言語道斷心行所滅ナリ。法トハ者十界十如因果不二ノ法也。三諦ト云、三觀ト云、三千ト云、不可思議ト云、天台ノ已證ハ天台ノ御思慮ノ所及ノ法門也。此ノ妙法ハ諸佛ノ師也。如ニ今ノ經文ノ久遠實成ノ妙覺極果ノ佛ノ境界ニシテ爾前迹門ノ教主諸佛菩薩ノ

境界ニ經ニ唯佛與佛乃能究盡ト者、迹門ノ界如三千ノ法門、迹門ノ佛當分究竟ノ邊說也。本地難思ノ境智妙法ハ迹佛等ノ思慮ニ及、何況菩薩凡夫乎。止觀之二字、觀名佛知止名佛見ト釋スレドモ迹門ノ佛知佛見ニシテ妙覺極果ノ知見ニハ也。其ノ故ハ止觀ハ天台ノ已證ノ界如三千三諦三觀爲正、迹門ノ正意是也。故ニ知シテ迹佛ノ知見也ト云事。但レ止觀ニ

絶待不思議ノ妙觀明スト云、只一念三千ノ妙觀ニ且與名ニ絶待不思議也。』

といふが如き、説明を主としながら、本化教觀からの力強い斷案が下されてゐるところなどは、遺文の氣勢風格を示すものとせねばなるまい。

## 二、歴史的考察

### 1、止觀勝法華說是果して仙波尊海に創るとすべきか

淺井教授は「御書抄」(五廿)「二帖抄見聞」(卷中)の文を出して、止觀勝法華劣の説は、仙波尊海の創唱なる證據とし、なほ「天台宗名目類聚抄」(末)「止觀見聞」(乾)にも『この間の消息を窺ふべき文献がある』といはれて、尊海創唱説



を確定せしめられてゐるが、教授の引かれたる「御書抄」の全文を見ると、

『天台宗ニ止觀、勝レ法華、劣ルト云フ義ヲ申シ出セリ。是ハ惠檀兩流ノ中檀那流ニハ曾テ無沙汰ニ事也。惠心流ニハ沙汰スル法門也。惠心流ニ取テモ杉生流ノ法門也。杉生流ニ取テモ山門正流ノ學者ハ不云事也。東塔北谷藏乘房定源ナドハ杉生流ノ法門ナレバ、自然ノ時ハ云フ也。サレドモ云々無信仰也。大略ハ田舎學者ノ云タル事被仰<sup>レ</sup>日佳眠前ニ聞タリ云云。去程<sup>ニ</sup>是、今ノ田舎學者ノ云タル事也。夫ト者仙波尊海法印ノ申シ出サレタル法門也云云。』

とある。この中の藏乘房定源には弟子貞覺の記せる「八帖抄<sup>（見聞）</sup>」があり。眞如院日佳師青年時この定源の下に貞覺と共に學べる事ある旨、その「本尊抄見聞」に書かれてゐる。「御書抄」はこの日佳師の語を載せたので、住師は文明十八年八十一歳で死んでゐるから、その定源に學べるは應永・永享の間、聖滅一五〇年前後である。そして定源は自然これをいふことはあるが信仰はしてゐなかつたとある。この定源は山上の學者であるのに、『杉生流ノ法門ナレバ、自然ノ時ハ云フ也』とあるのに注意せねばならぬ。山上學者たる定源が、全く田舎學者尊海の申出した法門を自然の時はいふといふことは、聊か不審ではないか。これは「二帖抄見聞」の「山上邊<sup>ニテハ</sup>本迹ノ上ニ觀心ノ超過ノ法<sup>アリト</sup>不レ言ハ。故ニ天台法華、不レ立<sup>テ</sup>不同<sup>テ</sup>也」とあるのとは、少し趣きを異にすると吾等は認めるのである。そして吾等は、尊舜の「摩訶止觀見聞」によつて、この止觀勝法華説の始唱者は、大和庄俊範法印の眞弟子栗田口法印靜明で、靜明がその弟子心賀に傳へ、尊海はこれを心賀から傳へたものとするので、山上においては檀那流は勿論のこと、惠心流ことに杉生一流にあつても、靜明・心賀の流れならざる、政海の土御門御門跡流や、成運の行泉房流などでは、これを認めなかつた爲めに、「二帖抄見聞」や「御書抄」のやうな時代では、専ら田舎學者尊海の始唱の如くに考へらるゝに至つたものであらうと考察するのである。何となれば、尊舜の「見聞」は明應年間の講とあるから、時代は少しく下り

聖、滅二、〇年代ではあるが、惠檀兩流の主張を明細に傳へてゐることは、「二帖抄見聞」や「御書抄」の如きものではない。即ち『止觀は法華を能釋するや』の尋ねの答として、まづ檀那流に兩義あるを擧げていふ。

『竹林房靜嚴義云、非能釋。弘云、三之一、故知一部之文、共成圓乘開權妙觀。弘云、三之一、今約止觀法華、迹理。止觀是法華迹門分也。法華者、記云三十二左、況法華之號、不レト專一門。不レト整束本迹、

不レ名法華。故迹門分止觀、非能釋。法華、已上

慧光房永辨義云、能釋也。以三三大部相配、大意釋名・入文判釋、玄義釋首題五字、故釋名也。文句、入

文判釋也。止觀、正須大意、大意者觀心也。止觀、達本迹兩段法門是行者一念、故大意也。前唐

院、本迹觀心云、天台大師弘法華經、大意釋名・入文・三門。止觀十章大意、五略經大意也。玄義、五章

七番共解、五重各說、經題目也。文句、四番四種消釋、經判文也。已上。驗見如此ノ文理、止觀一部ハ皆準法

華、建立立章段。謂標準品ノ通別二序、止觀開序ノ六段。又準待絶二妙、立相待絶待一種ノ止觀。準本

迹二門、分二妙解妙行二段。一部十章、皆依法華分明也。故妙樂ノ記云、一之九、方知、止觀一部是法華

三昧之筌蹄。將捕二妙法ノ魚兔、須止觀ノ筌蹄。故法華能釋、不レ足致疑。何況止觀開十章、

初立二大意、一章、正彰法華大意也。已上。惠光

つぎに惠心流にまた兩義あるを出していふ。

『當流義云、非法華大意。此亦有義義少異。』

止觀院、北谷一義云、止觀、法華全體一、故非能釋也。釋尊出靈山、一大事ノ因緣說妙法。天台在玉泉、

已心所行法宣止觀。鷲山、法華即泉寺止觀。故不墮能釋所釋異也。栗田口心賀義云、玄義・文句ハ



假<sup>ニテ</sup>在世ノ教味<sup>ヲ</sup>、判<sup>ニズ</sup>一代ノ教相<sup>ヲ</sup>、故<sup>ニ</sup>法華ノ能釋<sup>也</sup>。止觀<sup>ハ</sup>是大師己心所行法門、更<sup>ニ</sup>不<sup>レ</sup>假<sup>ニテ</sup>在世ノ教味<sup>ヲ</sup>、何<sup>レ</sup>可<sup>レ</sup>レシ云<sup>フ</sup>法華<sup>ノ</sup>能釋<sup>ト</sup>耶。況<sup>ニ</sup>就<sup>ニ</sup>身<sup>ノ</sup>土<sup>ノ</sup>說<sup>ニ</sup>機<sup>ノ</sup>別<sup>レ</sup>之<sup>ヲ</sup>、則<sup>ニ</sup>法華<sup>ノ</sup>能說<sup>ノ</sup>教主<sup>ハ</sup>、釋尊應身佛果、所居<sup>ノ</sup>土<sup>ハ</sup>、同居靈山、所被<sup>ノ</sup>機緣<sup>ハ</sup>、一代聲聞迂迴道ノ類、色心二重ノ移轉<sup>ヲ</sup>爲<sup>ス</sup>正機<sup>ト</sup>。所說<sup>ノ</sup>法門<sup>ハ</sup>、本迹二段ノ妙法也。止觀<sup>ノ</sup>能說<sup>ノ</sup>教主<sup>ハ</sup>、自受用報身如來、所居<sup>ノ</sup>土<sup>ハ</sup>、皆常寂光ノ妙土、所說<sup>ノ</sup>法門<sup>ハ</sup>、天真獨朗法體、本迹未分ノ內證、所被<sup>ノ</sup>機<sup>ハ</sup>、直入圓頓、本迹未分ノ頓機也。身土・教・機既<sup>ニ</sup>各別<sup>ナリ</sup>。安<sup>シ</sup>能釋<sup>ナラ</sup>乎。止云<sup>一</sup>之<sup>一</sup>左<sup>ニ</sup>、此之止觀<sup>ハ</sup>天台智者說己心中所行法門<sup>ト</sup>。己心ノ所行<sup>ハ</sup>、非<sup>ズ</sup>依經立行<sup>ノ</sup>法<sup>ニ</sup>、非<sup>ズ</sup>法華<sup>ノ</sup>能釋<sup>ノ</sup>驗<sup>也</sup>。著<sup>ニ</sup>於此旨<sup>ヲ</sup>、玄義<sup>ノ</sup>文句<sup>ハ</sup>題<sup>ニ</sup>安<sup>ニ</sup>法華<sup>ノ</sup>言<sup>ヲ</sup>、止觀<sup>ノ</sup>題<sup>ニ</sup>摩訶<sup>ト</sup>不<sup>レ</sup>書<sup>ニ</sup>法華<sup>ト</sup>。又玄義<sup>ノ</sup>文句<sup>ニ</sup>引<sup>ニ</sup>法華<sup>ノ</sup>文<sup>ヲ</sup>、或<sup>ニ</sup>云<sup>ニ</sup>此經<sup>ニ</sup>云<sup>一</sup>、或<sup>ニ</sup>云<sup>ニ</sup>法華<sup>ニ</sup>云<sup>一</sup>。止觀<sup>ニ</sup>云<sup>ニ</sup>法華<sup>ト</sup>、不<sup>レ</sup>引<sup>ニ</sup>此經<sup>ト</sup>、如<sup>レ</sup>此等<sup>ノ</sup>寧<sup>ロ</sup>非<sup>ズ</sup>顯<sup>ニ</sup>己心所行<sup>ノ</sup>止觀<sup>ノ</sup>非<sup>ズ</sup>法華<sup>ノ</sup>能釋<sup>ノ</sup>耶。次<sup>ニ</sup>遮<sup>ニ</sup>外難<sup>ノ</sup>者<sup>、</sup>至<sup>ニ</sup>レテハ<sup>ハ</sup>玄義<sup>ノ</sup>釋名<sup>ノ</sup>文句<sup>ハ</sup>入<sup>ニ</sup>文<sup>ニ</sup>、故<sup>ニ</sup>須<sup>ニ</sup>止觀<sup>ノ</sup>大意<sup>ヲ</sup>者<sup>、</sup>凡<sup>ソ</sup>以<sup>ニ</sup>三大部<sup>ヲ</sup>、支<sup>ニ</sup>配<sup>ニ</sup>大意<sup>等</sup>ノ三<sup>ニ</sup>、且<sup>、</sup>從<sup>ニ</sup>二<sup>ニ</sup>往<sup>ニ</sup>。以<sup>ニ</sup>實<sup>ヲ</sup>言<sup>ハ</sup>之<sup>ヲ</sup>、釋名<sup>ノ</sup>外<sup>ニ</sup>無<sup>ニ</sup>大意<sup>ト</sup>。既<sup>ニ</sup>以<sup>ニ</sup>七番<sup>ヲ</sup>共解<sup>ニ</sup>・五重各說<sup>ノ</sup>、釋<sup>ニ</sup>妙法<sup>ノ</sup>首題<sup>ヲ</sup>、談<sup>ニ</sup>一部始終<sup>ノ</sup>大綱<sup>ヲ</sup>、是<sup>レ</sup>釋名<sup>ノ</sup>兼<sup>ニ</sup>大意<sup>ヲ</sup>也。例<sup>ニ</sup>如下<sup>ニ</sup>有<sup>ニ</sup>金光明玄義<sup>ノ</sup>金光文句<sup>ニ</sup>無<sup>ニ</sup>金光止觀<sup>ノ</sup>有<sup>ニ</sup>淨名玄止淨名文句<sup>ニ</sup>無<sup>ニ</sup>淨名止觀<sup>ノ</sup>。是<sup>レ</sup>爲<sup>ス</sup>釋名兼<sup>ニ</sup>大意<sup>ヲ</sup>也。又而存<sup>ニ</sup>文理<sup>ニ</sup>遮<sup>ニ</sup>外難<sup>ノ</sup>。立<sup>ニ</sup>文理<sup>ノ</sup>者<sup>、</sup>荊溪消<sup>ニ</sup>止觀明靜<sup>ノ</sup>文<sup>ヲ</sup>云<sup>一</sup>、衆生<sup>ハ</sup>本有明靜之體、諸佛<sup>ハ</sup>修得止觀之用。止觀<sup>ハ</sup>體、諸佛<sup>ハ</sup>用也。法華者、從<sup>ニ</sup>止觀<sup>ノ</sup>所<sup>ニ</sup>緣<sup>ニ</sup>起<sup>ニ</sup>諸佛<sup>ノ</sup>所說<sup>ノ</sup>、緬劣<sup>ニ</sup>於<sup>ニ</sup>止觀<sup>ノ</sup>一也。止云<sup>一</sup>之<sup>一</sup>左<sup>ニ</sup>、當<sup>レ</sup>知<sup>、</sup>止觀<sup>ハ</sup>諸佛<sup>ノ</sup>之師<sup>ナリ</sup>、以<sup>ニ</sup>法常<sup>ノ</sup>一<sup>ニ</sup>故<sup>ニ</sup>諸佛<sup>ハ</sup>亦常<sup>ナリ</sup>ト。諸佛<sup>ハ</sup>止觀<sup>ヲ</sup>爲<sup>ス</sup>師<sup>ト</sup>成道<sup>ス</sup>、法華<sup>ハ</sup>是<sup>レ</sup>弟子<sup>ノ</sup>說法<sup>、</sup>豈<sup>ニ</sup>及<sup>ニ</sup>師<sup>ノ</sup>體理<sup>ニ</sup>乎。遮<sup>ニ</sup>外難<sup>ノ</sup>者<sup>、</sup>前唐院<sup>ノ</sup>釋<sup>ハ</sup>止觀十章<sup>ノ</sup>大<sup>ニ</sup>一往<sup>ノ</sup>對當<sup>ニ</sup>非<sup>ズ</sup>盡理<sup>ノ</sup>義門<sup>ニ</sup>。有<sup>ニ</sup>云<sup>一</sup>、言<sup>ニ</sup>能釋<sup>ト</sup>者<sup>、</sup>是<sup>レ</sup>附<sup>ニ</sup>顯說<sup>ノ</sup>法華<sup>ニ</sup>。覺大師<sup>ノ</sup>釋<sup>ハ</sup>、約<sup>ニ</sup>根本法華<sup>ニ</sup>釋<sup>ス</sup>大意<sup>ト</sup>也。以<sup>ニ</sup>三種<sup>ノ</sup>法華<sup>ヲ</sup>對<sup>ニ</sup>三大部<sup>ニ</sup>、止觀<sup>ハ</sup>根本法華<sup>ノ</sup>文顯說<sup>、</sup>天真獨朗<sup>ノ</sup>內證<sup>、</sup>機法未分<sup>ノ</sup>法體<sup>、</sup>三千常樂<sup>ノ</sup>諸法任運<sup>ノ</sup>效<sup>ニ</sup>根本法華<sup>ニ</sup>。諸佛<sup>ハ</sup>不<sup>レ</sup>說<sup>、</sup>祖師<sup>ハ</sup>不<sup>レ</sup>傳<sup>ヘ</sup>。天台獨<sup>リ</sup>天機秀發<sup>シ</sup>、開演<sup>ス</sup>十軸<sup>ノ</sup>止觀<sup>ヲ</sup>、故<sup>ニ</sup>根本法華<sup>ノ</sup>大意<sup>ナリ</sup>。山王院<sup>ノ</sup>釋<sup>ニ</sup>云<sup>一</sup>、止觀<sup>ハ</sup>三世諸佛

師、本佛行因相。此本佛者、非本迹相待、本一、唯本無作、內證、當位即妙三千、天真獨朗云云、本佛行因相。次三至云云大意章、即法華大意者、只是止觀大意、匪法華大意。括總始終十章、故云云大意。止云十一左、初二釋大意、囊括始終、冠戴初後。初後者十章、始終者止觀一部、如冠而戴、如袂而括、故名大意、當是彰顯謂止觀一部大意、非謂法華大意。已上。

これに明かに『栗田口心賀の義』といつてゐる。教授はこの「尊舜見聞」を以て、『この間の消息を窺ふべき文獻』としてゐるゝのに依ると、おそらく尊海が自己の創説をその相承の師たる心賀に本づけて栗田口心賀の義といつたのを、尊舜等は爾が傳へたものとせられたか、または尊海の創説といつてゐたのでは、『田舎學者の説』として一掃せられるから、尊舜の頃には尊海の師の心賀の説といふに至つたものであらうと推測して、この明文を無視せられたものでなければ、『二帖抄見聞』と「御書抄」によつて、尊海の創説なりと斷ぜらるゝことは出来ない筈である。

然るに吾等の見る所はこれに異り、この「尊舜見聞」に『栗田口心賀の義』といへるものは、當に眞相を傳へてゐるのみでなく、事實は栗田口靜明の義を心賀が之を傳へ、更に尊海に傳へたことをおのづから表はすものであつて、決して尊海の創説ではあるまいとするのである。

さらば何故に爾かく推考するのであるかといへば、若し「先徳明匠記」によれば、元來惠心流杉生流は、流祖皇覺の弟子の中、範源・俊範と傳へたのを正統とし、能眞・幸範と傳へたのを之を田舎義といふので、尊海の師の信尊はその田舎義と貶せられることに艱んで、重ねて叡山に上り、俊範の弟子の燈明院律師承瑜から相承したので、能眞四代の尊海も、またその田舎義を厭ひ、且つ法兄氏が島の廣海が登載して、松林房政海から相承せるに刺激せられ、爾來七度までも登山して心賀法印に師事し、その四度目の延慶三年五十八歳にして七箇法門の相承を受けた。その時に



心賀が『たゞ一人來れ』といへるに係らず、政海の弟子松林房一海を伴うて來たから、心賀が立腹した時に、尊海が『我は是田舎衆、性鈍にして無筆なり、大事の法義誤り聞き落さば罪恐れあり、彼に聞き書せせんが爲なり』といったので、心賀も心解けて、『然らば迎もの事に、上總の明淨房・相模の加賀殿にも聽聞あるべし』といったとある。従つてこの相傳書たる「二帖抄」の奥書には

于時延慶三年庚戌七月十日於山門無動寺常樂院書之畢

權少僧都 尊海 五十八歲

杉生五代正嫡 一海 記

とある。この時に心賀法印は六十八歳であつた。これほどみづから田舎義を厭ひ謙遜し、専ら相承を得んことに熱烈であつた尊海、この「二帖抄」を受けたる後も三度まで登叡してゐる、眞摯敬虔なる尊海が、その相承の師の心賀から傳受もせられない新しい田舎義を、自己の胸臆に任せて造り出し、これを以て仙波笠印の法門三箇條の第一箇條に置いて、これ心賀法印の相傳を得た仙波の義なり、または尊海新に感得の義なりと唱へたとすれば、これは甚だ變なことになりはしなからうか。普通の心理學的推考からすると、尊海が六十歳以後になつて、人格が急に一變しない限りは、どうもそんな事はないやうに想はれるではないか。

ではその止觀勝法華説が、なぜ心賀相傳の「二帖抄」にないかとの疑ひは、そこで當然出て來るであらうが、それはないのがあたりまへなのである。といふのは、この止觀勝法華説は心賀の師の靜明の新義なのであるから、『杉生五代正嫡』と名乗る一海同座のところで談すべき筋ではない。心賀は最初尊海唯一人で來るようといつたのを一海を同道したから、それではと明淨と加賀とを同席せしめた。この席での相傳は、おそらく政海の繼承者たる一海にも別

に異論のない、杉生流の正統義に限つたのであらう。そしてその以後において、尊海一人に對して自己が靜明から傳へた奥義の新説たる、止觀勝法華義を傳へたのであらう。尊海が己の流の重要法門を、師説によらず、自己が發明に任せて、田舎義とせられるのを憚らぬほどであつたならば、彼の七度の住山もあるまいし、弟子豪海がまた登寂して、心聴・心圓から相傳するなどといふ風習も、自然存しない筈ではないか。

では假に、仙波笠印法門の第一の、『止觀ハ法華ノ大意ニ非ズ、依經立行ノ法ニ非ザル故云云』(第二は『十行出假ヲ習ヘズ』、第三ハ『變易ノ名言實報土ニ互ラズ云云』なり)は、止觀勝法華義であつて、それを心賀から相傳したものとしても、それを更に靜明まで溯つて、彼の創説とするのは何故であるかといふことが、次に問題とならねばならないであらう。

## 2、何によつて止觀勝法華説は靜明の新義ならんと推考するか

止觀勝法華説に就いては、「二帖抄見聞」や「御書抄」の尊海創始説は、尊海の行動とその傳へられてゐる性格上には妥當でなく、「尊舜見聞」の如く心賀の義であるとしても、それを更に靜明の義であると斷じ、「立正觀抄」を以て、この靜明義を破せられたものとするのは、抑もいかなる理由によるのであらうか。

まづ第一の着眼點は、「止觀見聞」に『栗田口心賀の義』といつてゐることで、元來心賀は正親町宰相僧都といはれ、正親町流の祖とせられ、栗田口法印または大僧都は、靜明を呼ぶことは通途の例である。しかるに栗田口心賀と呼んでゐるのは、栗田口靜明の後繼者として、その義を傳へたことを表したものと見たのである。その靜明は圓爾



房辨圓から達磨禪を相承してゐるのであるから、止觀勝法華説を始唱するに應はしい人物なのであり、また心賀が靜明から印可せられたのは、弘安九年その四十四歳の時であるから、それより十二年前の文永十二年に心賀が止觀勝法華などの新義を立てる筈はないのであつて、これは當時の惠心流杉生流の正嫡を受けてゐた靜明の義でなければならぬ。さう考へて「尊舜見聞」の栗田口心賀の義なる身・土・説・機の四に互つて、止觀勝法華劣を主張する説を見ると、あれほど整つてはゐないが、「立正觀抄」の所破には、土を除いた他の三つを含んでゐる。蓋し文永十二年の頃は、靜明がひそかに新義を立てはじめた頃で、この學説が未整理始唱の時で、そこへ恰も最蓮房が佐渡から歸つて京都三條京極の房に居て、ふとその新義を直接にか間接にか聞知して、これを聖人に報知し來つて御意見を求め、聖人これにお答へになつたのが「立正觀抄」で、天台宗ことに當時惠心流杉生流正嫡の學匠の新説を、逸早く聞知したことによつて、最蓮房の台家における學的位置をも推想し得べしとするのである。この詳細は嘗て二十九年前に「妙宗」誌上に論じて置いた。(近く「信人」に登載す)

第二の着眼點は、忠尋著と署してゐる、「法華略義見聞」卷中の四重興廢の下に、左の文がある。

『私<sup>栗田口</sup>義<sup>於レテ之ニ有リ</sup>三義<sup>檀那院ノ義ニ云</sup>。迹門<sup>分ノ觀心也</sup>。迹門ノ教<sup>行者ノ心地ニ引當テ觀ズルガ</sup>故<sup>ハ</sup>、觀心ノ大教<sup>興レ本ノ大教亡スト云也</sup>。常住院<sup>義ニ云</sup>流<sup>惠心</sup>、今<sup>ノ</sup>觀心<sup>ト</sup>者、本門<sup>ノ</sup>中<sup>ノ</sup>觀心<sup>也</sup>。本地無作<sup>ノ</sup>三身<sup>ヲ</sup>心地<sup>ニ</sup>引當<sup>テ</sup>、觀<sup>ズル</sup>故<sup>ニ</sup>觀心ト云也。當流<sup>ノ</sup>相承<sup>ニ</sup>云、今觀心ノ大教<sup>ト</sup>者、本迹未分<sup>ニ</sup>天真獨朗<sup>ノ</sup>摩訶止觀<sup>ノ</sup>觀心<sup>也</sup>。』(四三)

以下一重二重三重の疑を出し、その第三重の答の中に左の文がある。

『先<sup>ノ</sup>四重興廢<sup>ヲ</sup>可<sup>レ</sup>得<sup>ル</sup>心。三周得悟ノ聲聞、妙法華已前<sup>ニ</sup>證<sup>シ</sup>但空ノ理<sup>ヲ</sup>、至<sup>ニ</sup>法華ノ迹門<sup>ニ</sup>入<sup>ル</sup>初住眞因ノ位<sup>ニ</sup>、尙<sup>ホ</sup>有<sup>リ</sup>始覺始成ノ思<sup>ニ</sup>。故<sup>ニ</sup>爲<sup>ス</sup>迹門<sup>ト</sup>。至<sup>ニ</sup>本門壽量<sup>ニ</sup>、始<sup>ニ</sup>聞<sup>ク</sup>本地久成ノ旨<sup>ヲ</sup>。如此<sup>ノ</sup>兩前<sup>ノ</sup>迹門・本門次第<sup>ノ</sup>故<sup>ニ</sup>。屬<sup>ス</sup>顯說<sup>ト</sup>。

法華。根本法華。自體。如來。內證。全。絶。待。對。故。本。迹。外。建。立。觀。心。法。門。也。然。十。重。顯。本。中。住。迹。顯。本。者。本。迹。對。顯。本。也。住。本。顯。本。有。三。種。一。本。地。無。作。住。本。顯。本。二。法。々。常。住。住。本。顯。本。三。諸。法。未。分。住。本。顯。本。也。根。本。法。華。法。門。向。住。本。顯。本。中。第。三。未。分。不。思。議。住。本。顯。本。也。

更に第四重の難の後に

傳教大師ノ四重興廢日記ニ云、一家、教觀ニ亦有四種。一、爾前ノ大教、二、迹門ノ大教、三、本門ノ大教、四、觀心ノ大教。爾前ノ大教ハ正ニ隱密法華、本迹ノ二大教ハ是レ顯說法華。觀心ノ大教ハ正ニ指ニ佛意根本法華。所レ言觀心ノ大教者、自受用身、住ニ自行ノ報土ニ爲ニ內證ノ十界ノ自說ニ受用ノ法ニ云。

とある。これは粟田口靜明が、「摩訶止觀」を以て自受用身報土の説にして、直達の機の爲めに説ける根本法華なりと立つる思想を明かに語つてゐるものではないか。およそ此の「略義見聞」中卷には「十妙生起次第事」の下に『私云粟田口』と引き、下卷にも「十界互具事」の下に『粟田口決云』と引き、更にまた同じく忠尋著と署せる「法華文句要義聞書」第七の終には、『粟田口私云』の下に、方便品の十如是に就いて、『皇覺和尚の云く』として三個相傳といふものを擧げ、山家大師の秘傳、行者三世本末一念究竟の決なるものを載せ、その次に

『物語ニ云、先德ノ中ニ忠尋皇覺成就此行。祖師法印數年雖修此行不成就。予先年三年籠山ノ時、横川ノ新院ニ修此行。要ハ如ニ生死一大事相承。本末究竟文所依スルガ故ニ、遂ニ加之開示悟入。四佛知見、悉地經ノ四相院ノ意也。蘇悉地ニ四種ノ衆生開佛知見。四種ノ衆生者四曼衆生也。』

と圓密一致で結んでゐるが、靜明が『祖師法印』といふのは即ち俊範の師の範源法印なることが知られる。「法華略義見聞」は卷尾に「漢光類聚私」とも副題してゐる。又いはゆる「漢光類聚」も、第一卷に教に重々ありとて、一に



應同局情、教を爾前帶權經とし、二に破開局情、教を迹門、所談とし、三に本覺、教を本門俗諦常住、教とし、四に直顯眞實、教を今、心要所顯六即十章ノ文字言句なりとし、佛意內證、根本法華本迹未分不思議法然、自體なりとして、止觀を以て本迹超過の教なりとし、第三卷に「還源反本事」の下では、傳教大師晨旦において五箇の法門を傳ふとて、一心三觀・一念三千・止觀大旨・法華深義の外に第五に兼稟達磨宗と擧げ、第四卷には、山家大師唐朝より二箇の宗義を傳ふ宗教と宗旨となり。宗教とは顯說法華・依經立宗、宗旨とは根本法華・依心立宗なり。玄義・文句は宗教、止觀は宗旨、檀那流は宗教分依經立宗を傳へ、惠心流は宗教は依經立宗、宗旨は依心立宗と傳ふ。達磨傳來の法門は佛心の法門、止觀の説已心中所行法門とは亦佛心の法門なりとて、止觀は本迹超過、圓禪一致なりの説をしてゐるが、俊範法印などの破禪の思想とは全く異なるもので、同じく忠尋といへる前所引の「法華略義見聞」等の靜明義と頗る相似せるものである。したがつて吾等は此の「法華略義見聞」「同聞書」「文句要義聞書」「漢光類聚」等の書を以て、靜明邊において文字化せられ、多く彼の思想の混入せるものであらうと考へるのである。

以上の所引によつて靜明が止觀勝法華の説を爲したであらうことは、ほゞこれを推考することができるのであるが、次には、それが如何にして室町中世以後に至つて、山上に明かでなくなつたのであらうかを考へねばならぬ。

### 3、何故に後の叡山に靜明説が跡を絶ち仙波に之を残すに至つたか

惠心流は惠心・覺超・勝範・長豪・忠尋から杉生法橋皇覺に傳へた。皇覺は藤原頼長の曾孫左衛門佐基俊の子であるが、法脈をその従弟左近衛少將季通の子の範源に傳へた。範源は之を眞弟子の俊範に傳へ、俊範は之を眞弟子の靜明に傳へた。靜明は眞弟子に仁承があつたが不器であつたと見えて、之を心賀に傳へた。心賀は靜明の女婿であると

何かで見たが今記憶せぬ。心賀は心聰に傳へ、心聰は心榮(心圓と同一)に傳へ、心榮は心瑜・心源に傳へたとして、「慧檀兩流血脈」の心瑜の下は斷絶してゐる。そして心源は關東金鑾檀林の第二祖で、初祖豪海も心聰から印を受けてゐる。この心源の系脈から後世天台僧正や、「先德記」の著者定珍なども出てゐるから、心賀の系統は山上に絶えたと見える。心聰は嘉曆四年(聖滅四八)に華園法皇に「一帖抄」を奉獻した。法皇は之に對して一卷の抄を書されて心圓に下された。心圓之を書寫して、豪海に授けたのは貞治六年(聖滅八六)である。この頃山上には、かの住本寺日大師に七箇の法門を授けた圓實房法印直兼が、「惠心流宗督在我」といつてゐた。また同じく俊範・靜明の系脈を受けた行泉房成運は東塔北谷にも居て「尊舜見聞」に「止觀法華全體一故、非能釋一也」と説く、止觀勝法華否認論者であるが、この人の末は榮運・能運・勤運と續いて行泉房流である。俊範門の政海の後は一海・承海・充海・圓海・救海と土御門御門跡流として續いた。これまた止觀勝法華をゆるさぬ。靜明の子の仁承の子靜範は、相當の法器であつたと見え、靜明の弟子維運から受法して法印權大僧都に進んだ、その弟子に慈能があるがこれまた止觀勝法華義ではないらしい。また「御書抄」に出てゐる東塔北谷の定源も惠心流杉生流の人であつたから、自然の時はいふが信仰はないとは、靜明義は知つてゐたが、今日では其の説をいふ者は山上になく、田舎にのみ存するといつたのであらう。東塔北谷は元來は檀那流の慧光房大律師澄豪の居た處だから檀那流が多いが、惠心流がないではない。現に惠心僧都の「枕雙紙」に附せる杉生皇覺の三十四條相承の傳承者の、東塔北谷教王房叡憲も、師の良憲慈護房も同じ北谷に住してゐた。そして三十四條の第四條の相承には、「觀心意者、迹本兩説只是衆生一念心也。法華一部體本、自圖衆生己心。故知法華諸法、總體衆生亦諸法、總體……一切衆生皆法華兩門觀體也」と説いて、法華止觀同一體説であつて成運と異らぬ。即ち止觀は本迹二門に互るといふ惠心流の正説なのである。かくの如く山



上には、室町中期以後心賀の系統が絶え、と共に、止觀勝法華劣説は跡を絶つたのだから、そこで後の山上學者は之を誤つて、尊海の創説と考へたものであらうと斷じ得られるのである。

以上の如く歴史的考察を下す時は、止觀勝法華説は、「二帖抄見聞」や「御書抄」の如く、尊海創説とすることのむしろ誤りであることが判明するのであるから、淺井教授がこの一義によつて「立正觀抄」に加へられた疑議は、もはや解消せられねばならない筈である。そして身延の本抄古寫本の奥書を考へる時は、吾等の會々の考察が甚だ當を得てゐることを感ずるものである。

## 結 語

佐渡から歸京した最蓮房は、聖人と同門なりし靜明が、止觀勝法華などいふ恐ろしい新義を、密かに唱へてゐることを知つて、之を聖人に報じた。そこで聖人が之を破して正觀を示されたとあれば、甚だ自然だが、聖人滅後に仙波尊海が、かゝる新義を唱へ出したとしても、果して偽書を作つて之を破せねばならぬといふ程の必要が、あり得るかどうかといふことも、まづ考へねばなるまい。勿論、この靜明義に影響せられて、富士の「本因妙抄」などの偽書も、作られたものと吾等は信じてゐるが、一體に偽書といふものは、その用語・文體、文脈・文勢、文氣・文格において、到底眞を摸することの出来ぬものがある。「立正觀抄」は、尊海が心賀の相承を受けた延慶三年（聖滅二九）から、「録内」の定められた應永の頃（一〇頃）までに偽作せられたとするには、第一その必要のあつた事が疑はしく、第二に之を偽

作し得る人が求めにくい。況や内容において、眞作たることの肯定せらるべき前述の如き幾多の理由があるをや。

なほこれに附隨していふべきことも多いが、最早送られた紙がなくなつたから、以上を以て擱筆することにする。

—昭和二三・二〇・八—

- (一) 大崎學報 第九十二號 (三三頁)
- (二) 傳教大師全集 第三卷 (六六一、六八三頁)
- (三) 敬光 山家正統學則 卷下 (近世佛教集說本二七頁)
- (四) 前田慧雲 天台宗大要 (全集第二、二二頁)
- (五) 烏地大等 天台教學史 (五一四頁)
- (六) 上杉文秀 日本天台史 (五〇五頁、七二二頁)
- (七) 日滿 日滿抄 (日蓮宗々學全書興門集二〇四頁)
- (八) 日隆 本門弘經抄 第百二卷 (日隆聖人全集第十一卷六頁)
- (九) 日修 眞流正傳抄 卷四本 (日蓮宗々學全書本妙法華宗部二三二頁)
- (一〇) 日導 祖書綱要刪略 (日蓮宗全書本二〇一二頁、一四六頁等々)
- (一一) 大崎學報 前掲號 (四八頁)
- (一二) 同 前 (六五頁)
- (一三) 二帖抄見聞 卷中 (天台宗全書本二〇七頁)
- (一四) 御書抄 卷二十五 (日蓮宗全書本下卷一五八〇頁)

「立正觀抄」に對する疑議に就いて



- (一五) 天台宗名目類聚抄 卷一 (天台宗全書本七五頁)
- (一六) 尊舜 摩訶止觀見聞 卷一 (大日本佛教全書本一八頁)
- (一七) 烏智良 圓頓法印尊海 (日蓮聖人研究第一卷四八八頁)
- (一八) 大崎學報 前掲號 (五三頁)
- (一九) 山川智應 日蓮聖人傳十講 (五九二頁)
- (二〇) 同 人 長瀧智大 本化聖典大辭林 (中卷一五五七頁)
- (二一) 同 人 三大秘法概説 (四七頁)
- (二二) 日潮 本化別頭佛祖統紀 (日蓮宗全書本上卷二六五・六頁)
- (二三) 同 書 (同 本上卷一九八頁)
- (二四) 同 書 (同 本上卷二〇一頁)
- (二五) 日向 金鋼集 十卷及附錄 (日蓮宗々學全書乾坤二冊)
- (二六) 日潮 前掲書 (同本上卷一九八頁)
- (二七) 同 書 (同本上卷二六六頁)
- (二八) 日興 富士一跡門徒存知事 (日蓮宗々學全書興尊全集八八頁)
- (二九) 日常 本尊聖教錄 (日蓮宗々學全書上聖部一八三頁)
- (三〇) 日祐 本尊聖教錄 (同 前 四〇四頁)
- (三一) 日金 日什門徒建立由緒 (日蓮宗々學全書顯本法華宗部一〇四頁)
- (三二) 稻田海素 日蓮聖人全集 卷二 (一七三五頁)

- (三三) 高祖遺文錄 (縮刷一〇六八頁、類纂一五九七頁)
- (三四) 同 書 (縮刷一〇六九頁、類纂一五九九頁)
- (三五) 日住 本尊抄見聞 寫本身延文庫藏 (日蓮宗全書本御書抄卷中一五八〇頁冠註)
- (三六) 尊舜 前掲 書 (前同本一六・七頁)
- (三七) 同 書 (同本一八・九頁)
- (三八) 大崎學報 前掲號 (五二頁)
- (三九) 定珍 日本大師先德明匠記 (國書刊行會續々群書類從卷十二)
- (四〇) 烏智良 前掲 書 (前同本四八七頁)
- (四一) 同 書 (同本四八七・八頁)
- (四二) 師鍊 元亨釋書 卷七 (新訂增補國史大系第卅一卷一一二頁)
- (四三) 忠尋 法華略義見聞 卷中 (大日本佛教全書本、四〇頁)
- (四四) 同 書 (同本 同 頁)
- (四五) 同 書 (同本 四一頁)
- (四六) 同 書 (同本 同 頁)
- (四七) 同 書 (同本 七〇頁)
- (四八) 忠尋 法華文句要義聞書 第七 (前同本二〇一・二頁)
- (四九) 忠尋 漢光類聚 第一卷 (大日本佛教全書本四・五頁)
- (五〇) 同 書 第三卷 (同本八〇頁)

「立正觀抄」に對する疑議に就いて



- (五一) 同 書 第四卷 (同本一〇九・一一〇・一一一頁)  
(五二) 山川智應 日蓮聖人研究 卷一 (一三〇頁)  
(五三) 御子左冷泉系圖 (國書刊行會本系圖綜覽第二冊一九七頁)  
(五四) 同 書 (同本一九八頁)  
(五五) 望月信亨 佛教大年表 各宗派系譜日本天台宗所收  
(五六) 島智良 前 揭 書 (前同本四九六・七頁)  
(五七) 同 書 (同 本四九五・六頁)  
(五八) 日大 日大直兼台當問答記 (日蓮宗々學全書興門集二二七頁)  
(五九) 尊舜 前 揭 書 (前同本一八頁)  
(六〇) 成運以下系圖 慧檀兩流血脈・先德明匠記・御子左冷泉系圖 參取  
(六一) 尊舜 前 揭 書 (前同本一八頁)  
(六二) 慧心 枕雙紙 (大日本佛教全書一乘要決外十四部一〇六頁以下)  
(六三) 同 書 (同本一二五頁)  
(六四) 同 書 (同本一〇八・九頁)

(追記) 本篇は、「尊舜見聞」の『栗田口心賀ノ義ニ云ク』を、二十九年前よりの所案の如く、靜明の義を心賀が繼承せるもの故に、然か書けりとの見地より考究せしも、こはまた『栗田口・心賀ノ義ニ云ク』にて、靜明及び心賀の義とも解することも可能である。或は此の方が眞をより多く得てゐるかも知れぬ。一一・二六)

# 優陀那輝師の淨顯義淨評に就て

小林 是 恭

## 一、緒 言

優陀那和尚は其著本尊廣辨及略辨に於て淨顯、義淨等の信仰を記して「眞言」の徒と評し、其所授の本尊問答抄を以て「權實相對」の書であつて、「本迹相對」の御書ではないといつてゐるのである。即ち聖祖の本尊義を、自ら解釋し給ふたと稱せらるゝ本尊問答抄は、一は其所授の人から觀て、一は所舉の經証から見て、一は所説の文面から見て、此の抄は聖祖の本意を盡し給ふたものではないとするのである。輝師の所示に従つて、彼の抄を觀、淨顯・義淨を考へれば、義淨等は清澄の住人であつて、未だ聖祖の弟子とはならなかつたのである。而も彼の山は、今日既に新義眞言宗に屬してゐる如くに、聖祖の當時の宗旨のいかんはともかく、今日迄遂に一度も本化の道場とはならなかつた。是れ畢竟淨顯義淨等が、本化の教徒とならなかつたからで、若し、彼等が眞に聖祖に歸依してゐたのであつたら、彼の山をも改轉せしめたであらうし、又彼等自身本化の弟子として許されたであらふ。然るに其事のなかつた事は、全く彼等が終生密徒で終つたからで、そふした者に教へ給ふ本尊義であるから、聖意を盡し給はぬのである。然し此は輝師の所見を肯定しての觀察であり、結論であつて、私は輝師の所見に疑なきを得ぬのである。以下些か所見の程を記して、賢者の教示を乞はんと欲するものである。



## 二、淨顯等への賜書に就て

淨顯等に與へ給ふた本尊問答抄が、輝師の謂ふ如くであるか否かを考ふる爲めには、先づ淨顯等の信仰が、果して輝師の觀る如くであつたか、淨顯等と聖祖との關係が、如何であつたか、淨顯等の爲人がいかであつたか、等を考へて見ねばならぬ。然しこふした事を考へる爲めには、更に淨顯等への賜書を吟味せねばならない。そこで今日傳へられてる遺文によるに

一、(宛名に淨顯義)  
善無畏三藏抄、(縮冊六九七、以)  
報恩抄、(一四)  
華果成就書、(二四)の三書である。

二、(義淨宛)  
義淨房書、(九六五)の一書である。然し右の外に「淨顯房」宛と考へらるゝものは、本尊問答抄であ

る。それは同抄に、「貴邊は地頭のいかりし時義淨房ともに清澄寺を出て於はせし人なれば」(一七八)とある。此の

「貴邊」とは、報恩抄(〇一五)の「各々二人は日蓮が幼少の師匠にて於はします、……日蓮が景信にあだまれて清澄山

をいでしに、をひてしのび出られたりしは……」とある一人で、それは明に淨顯房なのである。故に本尊問答抄には、

宛名を記してないが、淨顯への授與であることは明である。次に報恩抄送狀がある。それには「宛名」を「清澄御房」

としてあつて、誰をいふのか分明でない。然し同送狀には(一二五)「御まへと義淨房と二人……」とあるから、是れ復

淨顯房を指すこと明である。かくして見ると、淨顯への賜書は前記の二書があるのである。然し報恩抄送狀は、宛名

は「清澄御房」(淨顯)一人であるが、實は義淨へも賜つたものであることは、前掲の文によるも、報恩抄の宛名の「奉

送安房國東條郡清澄山淨顯房義城(祖文には、淨城)房本」によるも明である。又本尊問答抄は淨顯が主になつて

彼の書に示された本尊義は、報恩抄と共に授與された本尊(報恩抄送狀に出づ)に關する教示であるから、矢張義淨と共に授與

されたものと拜すべきではないかと思ふ。こふして來ると、淨顯一人だけの授與書はなく、義淨へのみ一通の賜書がある。而してその書には、特に淨顯と共通なるべしと觀得るものがない。次に「清澄寺大衆中書」(七三)がある。本書は宛名に「安房國清澄寺大衆中」とあつて、特定の人に賜つたものがない。その事は本書の追申(七四)に「虚空藏の御前にと、大衆ごとによみきかせ給へ」とあるによつて益々明である。然しいかなる文書でも、必ず其を與ふる中心者がある。聖祖の消息文は、特定の人を目標とし給ふものが多いが、今の書は、稍一般性を帯びるものとして、他の個人宛のとは異なる。であるにかゝらず、矢張その中心者がある様である。此の事は大衆には中心があるからで、其中心者が自ら代表的な意味になるのである。そこでかの書に中心を求むると、矢張淨顯、義淨ではないかと思ふ。といふのは彼の書の首めに、各人への書籍借用と、其携帯とを記された後に「淨顯御房義城等には申給ふべし」といふ文がある。此の文は、其前の事に就て、特に兩人に傳へられたのであらう。即ち聖祖の意を奉じて、書籍の借用集收到に從ふことゝ、それを無事身延へ届けることである。それが一つである。今一つは、此の文は更に下の「日蓮が度々殺害せられんとし」以下、本書に示し給ふ説示の中心對告衆の如くである。よつて此の文は所謂「結前生後」の格である。こふして觀ると、本書の中心對告者は、矢張淨顯、義淨でなければならぬ事になる。清澄寺の者、及淨顯、義淨を相手としての賜書は、以上であるやうである。そこで今一度解り易く示と。

- 一、(宛名に淨顯義淨とあるもの) 善無畏三藏抄、報恩抄、華果成就書、
- 二、(内容より淨顯義淨と推し得るもの) 報恩抄送狀、本尊問答抄、
- 三、(淨顯義淨を中心とし、ての賜書と思ふもの) 清澄寺大衆中書、
- 四、(義淨宛のもの) 義淨房書、



である。猶清澄關係の御書として、先輩の示す所によれば「當世念佛者無間地獄事」(五〇)「聖密房書」(二七)(以上二書の立正大學長著日蓮聖人の生涯、二八〇頁)及「佐渡御勘氣抄」(七〇)(類聚遺文の御消息文對告目錄)等がある。此の三書が擧げらるゝ所以は、念佛無間事は、其端書に「安房國長狹郡東條花房郷於蓮華寺對淨圓房一日連阿闍梨註之、文永元年<sup>甲子</sup>九月二十二日」(錄外考文四—全集本二七九頁—には西條郷とす。西條が正しいと思ふ、善無畏三藏抄六四九往見)とあるからで、聖密書は卷末の追申(六五)に「これは大事の法門なりこくうざう菩薩にまいりて、つねによみ拜せ給べし」とあるからで、佐渡御勘氣抄は文末に(二七)「道善の御房にもかう申きかせまいらせ給べし、領家の尼御前へも御ふみと存じ候へども……」とあるによるのであらう。これによれば以上の三書中「佐渡御勘氣抄」には宛名がないから不明だが、他の二書は何れもある特定の人に授與されたもので、共に清澄に關係ありと見らるゝのである。聖密房の傳記は明かでないが、上掲の文に、虚空藏菩薩とあることは、清澄寺の本尊たる虚空藏菩薩を意味する限り、彼は清澄關係の人とせねばならぬ。次に淨圓房の傳記も明でないが、「建長五年四月二十八日安房國東條郷清澄寺道善房持佛堂の南面にして、淨圓房と申者茲に少々大衆に……」(清澄寺大衆とあるによるも、又花房の蓮華寺は、古來清澄の末寺ともいはれてゐるから、若し淨圓房が蓮華寺の主僧であつたとすれば、清澄とは深い關係の人の様である。佐渡御勘氣抄が清澄方面の人へ與へられたものであらうとは、前記の文でも察せらるゝが、猶文中に「日蓮は日本國東夷東條安房國海邊の梅陀羅が子也」(清澄關係の書にはこの様な文多し)とあることも一証となし得やう。然し授與者は全く不明で、唯だ道善のことがあり、領家のこともあるから、文中の「各々なげかせ」とは、或は淨顯義淨をいふのではないかと想像してみる迄である。この様に三書を見て來ると、前に記した善無畏三藏抄以下の七書と、此の三書とは幾分の關係がある様である。猶前記の諸御書の外に今一書、法華題目抄がある。本書も宛名がないから何人へ賜つたのか明でないが、文末に「文永三年丙寅正月六日於清澄寺未時書畢」(五九)(大時本遺文に

は、未時を末寺とし、從つて、文を於三清澄寺末寺一書畢とす、然し末は未の、寺）とある。これによれば、明に法華題目抄は時の誤りであらう、猶之の事は拙筆日蓮聖人遺文全集講義第七上の如し

清澄での御執筆である。そこで本書の授與者が何人であるか、同書中からは發見し難い。唯だ女人成佛の事が多く記されてゐるから、女性へのものではないかとの想像からであらうか、古人は聖祖の「御伯母」とか、光日尼とか、民部少輔行光妻へとかいつてゐる（高祖遺文錄）然しその何れもが確証あつての事ではない。中には道善ではないか（前記解題の說）といふのもある。此の道善説は清澄とあることから考へついたのであらうが、本書所説の女人成佛の事からすれば、少し距離がある様だ。又聖祖が清澄に居らるゝのであるから、道善とは面談し得る筈で、特に文書になさる事もなからう。要するに本書の授與者は不明であるが、清澄での執筆である點に於て、前記の諸御書とは異つた意味に於て注意を要するものと思ふ。

私は以上十一通の御書を清澄關係の御書としたのであるが、猶清澄方面に關係ある類例御書として、新尼御前御返事（一〇）以下六書を擧げてゐる人（前記清水）があるが、私の唯今の論題には直接關係せぬから略する。又清澄方面の事を傳ふるゝものには種々振舞抄（一一）もあるが、前同様之を略する。そこで上記の諸御書は、一往清澄の信仰を上に、その動靜を理解する上に、多少とも關係ありと思ふのである。よつて、此等の御書を中心として私の論題を進めやうと思ふ。

### 三、前記御書の眞蹟存否及御執筆年次

前記の御書十一通を清澄關係の書としたのであるが、今御眞蹟の存否を検すと大略次の如くなる様である。

身延の日意上人の「大聖人御筆目錄」（山川氏著日蓮聖人研究）（第二、五一頁所掲）には「報恩抄二卷」と「聖密房書」との外に「清澄寺



大衆中書」(彼の書には御消息とし、其下に)の三書が傳へられてゐることを示してゐる。(同書には日意自身所持のものとして、報恩抄送狀を示すが、之は寫本ではない)大本遺文録には右三書は、共に「甲斐國身延山」(同本)に眞蹟の存在することを記し、「本尊問答抄」は「駿河岩本實相寺」(同本)に、眞蹟を傳ふことを記してゐる。然し他の七篇に就ては、眞蹟の所在を記さぬのはその不明をいふものである。所が縮冊遺文録では、延山所藏の前記三書に就ては、報恩抄の斷篇が他に所在することを示すだけで、他は所在を記さぬ。是は明治の初期、延山の炎上で前記御書を皆失つたからである。然して「本尊問答抄」に就ては、「岩本實相寺に傳ふる中老僧日源の寫本と、富士日興の親寫本とによつて校訂した」事を記してゐる。此によると、大本遺文のいふ實相寺のことは、日源の寫本をいふのだと思はれる。縮冊は法華題目抄の斷篇が、存することを示してゐるが、他の御書に就ては、大本遺文同様眞蹟の所在を傳へぬのは、矢張不明であるからである。その他の類纂遺文も、日蓮宗全集本も、法華題目抄及報恩抄に、御眞蹟の斷篇の傳ふことを記すが、他は縮冊等と同様である。但類纂は、本尊問答抄に何等いふことなく、全集本には實相寺本の奥書を附記し、又興師の奥書を示してゐるのが異なるのである。これによると、前記十一通の御書中、今日其斷篇なりと止むるものは、法華題目抄と、報恩抄だけである。従つて此の兩書だけは疑ひもなく聖筆である。本尊問答抄は聖筆の一篇でもない様であるが、興師の親寫といへ、源師の筆といへ、何れも我祖の直門であつて、源師の如きは其親寫の年代からしても、明に聖筆を底本としたと思はれるから、本書も亦何等疑ふべき餘地はないと思ふ。そこで今上記の十一通書に就て一往御執筆年次を見やうと思ふ。

當世念佛者無間地獄事	法華題目抄	善無畏三藏抄	佐渡御勘氣抄	義淨房書	清澄寺大衆中書	報恩抄	同送狀	聖密房書	華果成就書	本章問答抄
卷首、文永元年九月廿二日	卷末、文永三年正月六日	卷末、文永七年	目次、文永八年卷末、十月	卷末、文永十年五月廿八日	目次、建治二年正月十一日卷末、正月十一日	卷末、建治二年七月廿一日	卷末、七月廿六日	目次、建治三年正月卷末、建治三年丁丑	卷末、文永元年卯月日	卷末、弘安元年九月二十日
同 上	同 上	同 上	目次、同上卷末、十月日	同 上	同 上	同 上	同 上	目次、十二月ナシ卷末、紀年欠	同 上	目次、弘安元年九月(九)月卷末、紀年欠
同 上	同 上	同 上	縮冊ニ同	同 上	同 上	同 上	同 上	目次、弘安元年九月月廿日卷末、弘安元年九月日	同 上	同 上
同 上	同 上	同 上	同 上	同 上	同 上	同 上	同 上	卷末、建治三年	同 上	同 上
同 上	同 上	同 上	縮冊ニ同	同 上	卷末 同上	同 上	同 上	紀年欠	同 上	同 上
五〇五	五八三	六九七	七〇一	九六五	一、三七〇	一、四五一	一、五一一	一、六五九	一、七二四	一、七九四



前記によつて、卷首又は卷末に御執筆の年次のあるものは、當世念佛者無間地獄事、題目抄、義淨房書、報恩抄、華果成就書、及び善無畏抄の六書である。その中善無畏抄には、「月日」はないが年號だけはあるから、大體御執筆の頃が推せられる。その他の御書は、年號の記載はなく、單に月日だけのものもある。又本尊問答抄は、縮冊では卷末に紀年を欠くが、其目次には紀年を記してゐるのである。これは全集本によれば、源師本には紀年もないが、補本として對照した朝師本に「弘安元年九月日」とあるから加へたといふ。それで問答抄の著作年次は明になるが、他の本に「九月二十日」とするは、何によつたか。類纂は大略大本遺文に依る様であるから、結極大本遺文が何によつて「二十日」としたかである。こふして來ると、佐渡御勘氣抄、清澄寺大衆書、報恩抄送狀、聖密房書の四書だけが、他に依つて御執筆年次を定めなければならない。報恩抄送狀が、報恩抄との關係上、建治二年の作で、同書末の七月二十六日の記によつて、之を建治二年七月二十六日とするに異存はないと思ふ。次に佐渡御勘氣抄は其の首めに「九月十二日に御勘氣を蒙て、今年十月十日佐渡の國へまかり候也」の記によつて、文永八年とするに差支はない。次に清澄寺大衆中書であるが、古人(抄健)には佐渡からの書とした人もあるが、文中に「如是眞言師蜂起之故申之」といひ、「今年は殊に佛法の邪正たださるべき年歟」(七〇三)とあるは、報恩抄送狀の「内々人の申候しは、宗論やあらずんと申せしゆへに」と同一事であらふ。果して然りとすれば、大衆中書は、矢張建治二年正月十一日の書となすべきである。終りに聖密房書であるが、縮冊、全集、普及の三本共に、其書末に年紀がないのに、大本及類纂本だけに建治三年とある。是は古の本にそふしたものがあつたので、大本はそれを依用したのであらう。然して他の書が、其目次に、建治三年とするは大本に従ひ、十二月とするも、或は大本により、或は他に見る所あつて削除したのであらう。而して此の書に就ては、その所記の内容から年次を思考すべきものを發見せぬ。

以上一往御眞蹟の有無、並に御執筆年次を検したのだが、御執筆年次は、前記の各本皆同一であつて、其間著しき相異を發見せぬ。然しそれは此等の諸御書の所示の教義、其他に關する内容的検討を加へてのものではなく、唯一往諸先輩の編年示を觀たまでのものである。

#### 四、前記御書に對する私見

前記十一通の書、今日猶御眞蹟の一部なりとも存する、法華題目抄、報恩抄の二抄は、何等疑問を挿むべきものがないと思ふ。本尊問答抄は御眞筆を止めぬとはいへ、前記の事から見て、又疑ふ餘地のないものと思ふ。報恩抄送狀は、報恩抄に示し給ふ(一五〇〇)様に、聖祖自ら道善房の死去を弔給ふべく出發し給はぬとすれば、當然使者を遣し給ふべく、其使者に托し給ふべき文書が有るべき事でもあるから、彼の送狀は、そのものとして見ても當然の文書であり、又彼の書中別に疑を入るゝ餘地のないものと思ふ。而も報恩抄の意とよく合するものでもある。であるから、私は彼の送狀は、或は文字に少しの増減は(全集本三、一九七七頁冠註往見)あるかも知り難く、文字の讀み方に相異等はあらうが(例は縮冊には「嵩もりの頂」とあり、大本には「山ノ高ミ森」とある。)矢張御眞筆と思ふのである。次に當世念佛者無間地獄事も御眞筆と思ふ。(拙著日蓮聖人遺文全集)更に善無畏三藏抄であるが、本書と類似の名稱を有する「善無畏抄」(一三四二、建治元年の部にのる、但し講義七上)とは別である。本抄は御眞蹟を傳へぬが、私は内容等から、別に疑を懷き得ぬから、矢張御眞筆と思ふ。されば、當世念佛者無間地獄事、法華題目抄、善無畏三藏抄、報恩抄、同送狀、本尊問答抄の六書に就ては聖祖の御眞蹟なりと信するのである。然し他の五書には幾分の考ふべきものがある。

第一佐渡御勘氣抄(自七〇一至七〇二)である。本抄の初めに「九月十二日に御勘氣を蒙て、今年十月十日佐渡國へまかり



候也」とあるが、此は佐渡着ではなく、佐渡への出發でなければならぬ。といふのは、寺泊御書（六九）には「今月（十月也）十日起相州愛京郡依智郷」とある。これによれば御勘氣抄の文は、五人土籠御書の「今月七日さどの國へまかるなり」とある如く、「今年十月十日佐渡國へ行く」の意でなければならぬ。従つて本書は、佐後のものではなく、御出發當時のものでなければならぬ。次に本書中に「日蓮は日本國東夷東條安房國海邊の梅陀羅が子也」とある。聖祖が故郷房州方面へ賜つた御文書には、よく、この様な文字が記されてゐる。例せば善無畏三藏抄には「日蓮は安房國東條郷清澄山の住人也」（六四）とか、「日蓮は安房國東條片海の石中の賤民が子也」（六四）とある如く、又新尼御前御返事に「日蓮は一閭浮提の内日本國安房國東條郷に始て此正法を弘通し始たり」（一〇）とある。其所で善無畏抄及新尼抄共にいかにも自然の書き方であるが、御勘氣抄の文はそれに比して少しく奇に涉る様である。然しだからといつて此れが後人の筆だと速断は出来ない。其所で私は本書は寺泊御書の前に移すべきでないかと思ふのと、故郷の記述が、他の抄にあるのに比して、少しく奇異の感じがする、といふだけを述べるのである。だが、此れを以て偽作よばはりをするものではない。

第二に義淨房書（自九六五至九六六）である、淨顯義淨の二人は、報恩抄、（一五）本尊問答抄（一八）によるも、善無畏三藏抄の宛名からするも、殆ど異體同心の如く觀られてゐる。然して、淨顯房へは單獨に賜つた書を傳へぬが、義淨のみに本書がある。是は現存文書を中心とするからで、不傳書、紛失書中に、或は淨顯單獨の賜書があつたかも知れぬ。故に義淨單獨の書だからといつて、此を疑ふことは出来ぬが、一往思考さるべき點はある。次に所示の教義であるが、彼の書は、大體天台大師所弘の法は、十界互具百界千如一念三千の法で、それは摩訶止觀所明の法である、といふこと、日蓮所弘の法は、壽量品の事の一念三千の三大祕法であるといふにある。即ち天台所弘の法と、聖祖所弘の法

とを要示されたものである。而も其の三大秘法は壽量品の「一心欲見佛不自惜身命」の文によるものである。而して此文の「心」とは天台の解釋によれば「一月三星心果清淨」の義であり、日蓮に於ては「一心欲見佛」の五字は、そのまゝ「妙法蓮華經」の五字である。故に經文は「此五字を弘通せんには不自惜身命」たるべしといふのである。然して此の五字即ち一心欲見佛とは、吾等がそのまゝ無作三身の佛だといふことである。此の義を得るは「天台傳教にも越へ龍樹迦葉にも勝れ」るのであるとある。本書に於て第一に注意すべきは、其教義が我が國中古天台の思想を取入れてることである。次に、聖祖の弘め給ふ法を示す文中に「其故は壽量品の事の一念三千の三大秘法を成就せる事此經文（一心欲見佛不自惜身命の文をさす）なり可秘々々」とある。此所に「事の一念三千の三大秘法」といふ語がある。祖文中「三大秘法」の成語のあるは今の文の外には、三大秘法抄（二〇）の文中に二ヶ所あるのみの様である。古來の所説によれば、三秘開顯は佐後である。今御眞蹟所存の御書を拜するに、本尊と題目とは本尊抄に明し給ふ所であるが、戒壇の事は法華取要抄（四二）にその名を示すも未だ之を説き給ふてはゐない。現存遺文中、本尊と題目とに就ては、此を説き給ふ事頗る多いが、戒壇のことは誠に少い。本尊抄に戒壇の事なきは明で、報恩抄にすら其名あつて其説がない、（一五）唯だ之あるは三大秘法抄のみである。然し彼の抄には眞偽の論ある世人のよく知る所である。この様に三大秘法は聖祖の教義の最重要事であつて聖祖の御文書にも此を要視し給ふるのである。従つて古來から彼の本尊抄送狀に示し給ふ所の如く、又報恩抄送狀にある如く、何れも至深の注意を促し給ふたとなす所のものである。さて今此の書に「三大秘法」とあるに就て考へて見やう。三大秘法といふことは、聖祖門下の後の者は、一様にそれは本尊、題目、戒壇の三であることを承知してゐる。然し御在世の當時の者は明かではない。聖祖から何らかの方法によつて、教示を仰がねば解らぬことである。然るに今「事の一念三千の三大秘法」とのみあつて、それがいかなるもの



で、いかなる内容のものか少しも説いてない。それであるから此の「三大秘法」の成語は、彼義淨の既に知る所であり、其何ものが三秘であり、それがいかなる意味のものであるかを大略承知してゐるものでなければならぬ。然らざれば此の様な成語は全然意味をなさぬ。處が義淨は果して聖祖の三大秘法を知つてゐたらうか。報恩抄（一五）に、天台、傳教等未弘の法として「本尊、題目、戒壇」の名が示されてゐる。而して彼義淨（淨顯も）に興へ給へる現存御書中、三秘を説き給ふものは、全く此の報恩抄一篇である。此の報恩抄及その送狀と共に遣はされたる本尊に就て、更に質問を發して答釋を願ひ出た結果、授興されたのが本尊問答抄である。此の事からすれば義淨は當時（本書は文月二十八日）未だ三大秘法なぞいふ成語はもとより、何ものが三秘で、それがいかなる意味を有するか等の深意を了解してゐなかつたと思ふのである。又報恩抄によるに、彼の抄には未だ三大秘法の依文が示されてない。又法華取要抄同様である。だのに今抄に之が示されてゐる。誠に奇とすべきではないか。其他幾多の疑を擧げ得るが、要するに、本抄には三大秘法とは何かといふ説明が少しもない。（是二）義淨等へ與へられた書中、御眞筆を傳ふるものでは、報恩抄にのみ本尊戒壇、題目の正像未弘を明し、幾分の説明はあるが、三秘の依文指示がない。即ち報恩抄との關係が考へられぬ。（是二）本抄の如き指示は、既に三大秘法を大體了解してゐる者に示すべきもので然らざる者には意味をなさぬ。然るに義淨は其所迄致つてなかつたばかりでなく、他の有力な弟子達等も猶よく了解してなかつたであらうと思はれる。文永十年四月の本尊抄にすら、三大秘法の成語なく、戒壇の説明がない。然るに僅か一ヶ月後の本書に「三大秘法」の成語あり、而も義淨が三大秘法を既知してゐるとは考へられぬ。（是三）眞蹟所在の御書中、本尊、戒壇、題目の三名の見ゆるのは法華取要抄が最初であつて、其れ以前の書には三名を一具に舉示し給ふものがない。然るに義淨が既に此を知るとは思はれぬ。（是四）本書は口傳書相傳書の類であつて、其所に示す「可秘々々」の意は、本尊抄送狀（九

五七)の「當身の大事」「秘<sub>レ</sub>之見<sub>レ</sub>無<sub>二</sub>者<sub>一</sub>所<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>開<sub>二</sub>拓<sub>一</sub>之願歟」「迹塵勿<sub>レ</sub>讀<sub>レ</sub>之」との戒告とは其意異なる。即ち本尊抄の意は、慎重であれ、熟慮せよ、誰れにでも讀ますといふことはするな、といふ意である。所が本書の意は、全く唯授一人の意で、所謂秘密相傳の意である。又本書の今の句は、報恩抄送狀(一五二)の「又此文は隨分大事の大事どもかきて候ぞ、詮なからん人々にきかせなばあしかりぬべく候」とあるのとも異なる。此の文は、本尊抄送狀と其意を同じふするが、本書の「可秘々々」とは異なるのである。此の様に本書は全く秘傳書、口傳書の類で、聖祖が、本尊抄又は報恩抄を重視し給ふものとは異なる。従つて、聖祖が、特に義淨の爲に、かゝる秘書を授與し給ふとは思はれぬ。(是五)本書の思想は中古天台の口傳法門と通するものである。是の様な思想は、五大部を初め、眞蹟を傳ふる御文書中に餘り見ぬ思想である。(是六)又本書中に「就中傳教大師は天台の後身にて渡らせ給へども、人の不審を晴さんとや思食けん、大唐へ決をつかはし給事多し」とある。これは傳教の入唐還學を記すのであるが、文に「大唐へ決をつかはし」とは何を意味するだらう。私は之は唐決をさすのだと思ふ。唐決とは、後世の天台徒が盛に使用した事で、彼の修禪寺決もその一なのである。されば此の文は明に後の口傳法門を基礎として、綴られたものでなければならぬ。(是七)以上大略七ヶの疑問を擧げたが、私は此れによつて、本書が果して聖筆なりやを疑ふものである。尤も第六、七の兩條に就ては、更に説明を要すると思ふが、他日を期することにする。

第三に清澄寺大衆中書(自一三七〇至一三七四)である。此の書は前書の如くではないが、些か所見を述べて更に考へて見たと思ふ。本抄は書籍の集收、虚空藏菩薩の靈驗による自解佛乘と其報恩、並に清澄寺大衆への警告との三段からなつてゐる。其中先づ第一に、本書の初めに「抑企<sub>二</sub>參詣<sub>一</sub>候ば」とある「參詣」の文字である。この文字は聖祖の御草庵を訪問する、又は御住所に參堂するといふ意以上に、信仰的意を以て登詣する感じをもつ語である。即ち今日普



通にいふ參詣の意たる「參拜往詣」と同一意である。聖祖が「來れ」の意をかくいはれたのか否か明でないが、私には此の語は、身延が相當の構を保持した時、或は一山の靈場たることを示さんとする時に使用さるゝ語の如く思はれるのである。御草庵當時の身延が過ぎて、次の諸山對立的な狀勢が顯れつゝある時の身延が想像さるゝのである。參詣の文字は獨り本文だけではなく、他にもその文字の使はれてる御書がある。四條書（一九）に「今此所も如此佛菩薩の住給功德聚之砌也……然るを毎年度々の御參詣には無始の罪障も定て今生一世に消滅すべきか」とある。又南條兵衛七郎書（二〇）には「彼月氏の靈鷲山は本朝此身延の嶺也、參詣遙に中絶せり、急々に可企來臨是にて待入候べし」とある。又同書の端書に「是の所勞難儀のよし聞候いそぎ療治をいたされ候て、可有御參詣候」とある。以上兩書共に御眞蹟を傳へず、而も共に身延靈山を示してゐるのである。所が眞蹟を傳ふる忘持經書（一三五）には「然後尋入深洞一見二庵室法華經讀誦音響青天一、一乘談義言聞山中」とある。彼此相比して、誠に隔りがあるではないか。私は此の參詣の文字は、奈何も聖祖當時の身延にはまだ幾分の隔りがある様に思はれるのである。猶聖典大辭林に、清澄から身延へ學生が送られてゐる様だ、との推測に、此の參詣の文字が思考されてゐる如くだが、私はそれは果してどうかと思ふ。

次に、本書の追申に「このふみは、さど殿と、すけあさり御房と、虚空藏の御前にして、大衆ごとによみきかせ給へ」（さど殿のを、さどの助の阿闍梨と讀）とある。此の文は佐渡殿即日向上人と、助阿闍梨とが、虚空藏菩薩の前で一山の大家に讀み聞かせよ、といふのである。所が、此の文は、報恩抄送狀の文と全く反對である。報恩抄は、日向上人に持參せしめられたと傳ふのである。（諸傳記略）其の日向に持たされた報恩抄送狀には、前記の注意、即ち「詮なき」人に聞かせては悪いとの事の後に「設さなくとも、あまたになり候はゞ、ほかさまにもきこえ候なば、御ため、

又このため、安穩ならず候はんか。御まへと義淨房と二人、此御房をよみてとして、嵩もりの頂にて二三遍、又故道善御房の御はかにて一遍よませさせ給ては、此御房にあづけさせ給て、つねに御聽聞候へ。たび／＼になり候ならば、心づかせ給事候なむ」とある、に比して著しい相異である。送狀の文意は詮ない人には聞かすな。多くの人が知る様になつては、自然外部にも漏れることになる。そふなつては貴殿等の爲めにも、是の法門の爲にも、安穩でなからうと思ふ。されば汝等二人は此の御房を讀手として、嵩もりの頂で二三遍、道善御房の御墓で一遍だけ讀んで、後は此の御房に領けて時々聽聞せよ」といふのである。此は當時の清澄の情勢を考慮されたからであらうのに、此の送狀から七ヶ月前の大衆中書には、同一日向上人をして、堂々と大衆の前で披露せよとは餘りの違ひ方である。それも此の書が報恩抄以後ならばともかく、前であるだけに、より一層奇異の思がするのである。尤も此の書には、清澄一山の者は、日蓮の恩を忘れてはならぬ（一二三）事が記されてるから、追申の如く示され、報恩抄は道善といふ個人を對照とするから、との考がないでもない。いかにも尤の様だが、送狀に示さるゝ程の注意深い聖祖が、本書では餘りに明け放しであることが、何としても通じ兼ねるのである。清澄の様子は、送狀のが眞であるとなると、本書のは疑はざるを得ず、本書の情勢を眞とすれば彼の送狀を疑はねばならぬ。然し私は送狀のが眞であると思ふ。第三に書籍の集收及宗論の事である。此の事は報恩抄送狀にも類似の事があり、特に「宗論」の文字が使はれてゐる。だから別に疑もない様だが、彼の送狀には、書籍集收到、淨顯義淨等が關係してゐる様には見えない。即ち送狀には、他の弟子達がそれに奔走してゐることは記されてるが、それは寧ろ、その事を淨顯等に通じて、聖祖の身延を發足し給はぬ理由にされてゐるのであつて、淨顯等に集收を命ぜられてゐるのではない。又宗論のことも噂さ（確實）として傳へられた（淨顯）のである。然るに此の送狀よりも七ヶ月前の本書に、その事がある。その爲めに書籍の集收借用となつてゐるのである。



而も其所には明に「眞言師蜂起」とあるのである。兼知未萌の聖人であり、文應の時既に内外の亂を豫言し給ふ聖祖だから、七ヶ月前に其の情勢を察し給ふに不思議はないとも考へられる。然し報恩抄送狀の稍急々の筆致からすれば、本書の今の事は何となく、そぐはぬ氣がする。以上三點即ち一は參詣の文字に就て、二は追申の文に就て、三は本書の首にある圖書集收及宗論に就て、本書が報恩抄送狀と異なる點、並に身延靈山の思想が想起さる點からは是の書を不審したのである。猶景信の暴惡の記事も、報恩抄(一五)、本尊問答抄(一八)、新尼書(九三)等の記事よりは、具體的なものとして要視すべき事の要である。然し本書にのみこの様な具體的記事があつて、他の文書には唯だ「地頭のいかり」(問答抄)、「景信に怨まれ」(報恩抄)とのみである。是の相異の故に、大衆中書を疑ふことよりは、或は其事件の唯一の具體的記事として、重視すべきものかも知れない。かくして見ると、私は本書の眞偽はともかく、少くとも前記の三點だけは何とか考へて見ねばならぬ事ではないかと思ふ。此の意味に於て本書は注意を要するものと思ふ。

第四に聖密房書(自一六五九至一六六五)である。本書は前にも記す如く、卷末の追申によつて、聖密房が、清澄關係の人であらうと想像されるだけで、文中には何等そふした意味のものを見出さぬ。本書は善無畏を中心としての眞言破が主旨であるが、其の破邪の意氣の頗る弱きものがある。即ち文に「問云小法師一人此惡言をはく如何、答云日蓮は此人々、(弘法慈覺等)を難するにはあらず、但不審するばかりなり」(一六三)といひ、「上の問答等は、當時は世すえになりて人の智淺く慢心高ゆへに用る事はなくとも、聖人賢人なども出たらん時は、子細もやあらんすらん、不便にをもひまいらずれば、目安に注せり。御ひまにはならはせ給べし」(一六五)と。いかにも弱い語調である。之を開目抄、報恩抄等の破折に比するに、非常な相異である。開目抄の天馬空を行くの慨あるに比し、報恩抄の碎いて猶止まざるに對して、いかにも弱々しい思がする。これが聖祖の語調であり、意氣であるであらうか、(是)又眞言の印眞言の事に對して、

法華經の二乗作佛が同じく事であることを説いて、「二乗作佛の事法をばとかすと申して、劣る印眞言をとける事法をば、勝たりと申は……」と示してある。二乗作佛は確に事實であるに相違ない。然しそれは眞言の所謂事ではない。然るに今文の如き説明は共に事たる語に於て、一であつても、彼の事に對すべく、此の様な事を以て其勝劣を論ぜられた御書は、他に餘りない様に思ふ。報恩抄にもこふした語法での比較勝劣の説はない。而も「法華經には印眞言なけれども二乗作佛劫國名號、久遠實成と申きばの事あり」(一六二)とあつて、二乗作佛、久遠實成共に事としてあるのである。これは共に事實である點に於て事ではあるが、法門的事とは異なるのである。(是二)次に本書には「久遠實成は一切の佛の本地譬へば大海は久遠實成、魚鳥は千二百餘尊なり。久遠實成なくば千二百餘尊はうきくさの根なきがごとし……」(一六三)とある。是は天台の所謂開會の法門とか、圓頓義齊の意を、そのまゝ開述顯本の場合に迄押進めたものである。此れに似たことが善無畏三藏抄にある。即ち「佛には常平等の時は一切諸佛は差別なけれども、常差別の時は各々に十方世界に土をしめて有緣無緣を分ち給ふ」(六四)と。此れによれば本書の今文は其常平等なるものゝ一面である。所で彼の抄は常差別面を立脚とし、而も其上に釋尊の三德有緣を明して吾等の歸着を示されてゐる。然るに、本抄では全く反對で、今の文の次に「天台宗の人々この事を辨へずして眞言師にたばらかされたり」とある。即ち眞言の千二百餘尊は、皆久遠實成の中のものであるのに、それを忘れた天台の學徒は、久遠實成の外の千二百餘尊に合掌敬心してるといふのである。聖祖は釋尊と大日とを同視することはいかぬとされた。報恩抄では大日は南の下座の者だ(一四七九)といはれ、善無畏三藏抄(七四六)には「大日如來は釋尊の分身也」とある。この様に、常に峻嚴な別を以て教を起て給ふ聖祖が、常平等的な今の言あるは、其義甚だ弱く、あまりに妥協的だといはねばならぬ。尤も今文の下には眞言等を破し給ふてはゐるが、其思想的立脚が前掲の如くであるから、其義も弱く、從つて前に掲



げた「問云」の文の如き語勢となり、意氣となるのであると思はれる。(是三)以上の外更に考へられ得る事もないではないが、少時以上に由るも、本書は思考さるべき御書であると思ふ。而もこふした御書の追申に「これは大事の法門なり」と記してあるのである。これによれば、聖祖の破折は唯だ「不審」を吐露するに過ぎず、後の賢人のためにいふものであることになる。終りに本書中には柿本人丸の歌として、後世の歌人が尊重した「ほのぼのとあかしのうらのあさぎりにしまかくれゆくふねをしぞをもう」の一首を示し、「今の人、歌よめりと申て」この歌を擧ぐとも、人は信用せぬといふ事がある(六一)これに似たことが、法華大綱抄(續集五五)に出てゐる。柿本人丸の此の歌が、いつ頃から歌の父母(今の文には紀貫之等がそふいつたとあるが)として、一般的に重視されたか明でないが、或は歌道にも口傳秘事を貴ぶ様になつた頃のものではないかと思ふ。私は歌道には全く門外であるが、此の事は或は本書を考察する有力なるものとなるかも知れぬと思ふ。是れも亦本書に就ての一思案と思ふ。以上四條茲に讀者の高教を仰ぐ。

さてかく書いて來ると、讀者中には、先の清澄大衆中書も、今の書も、共に延山日意師の錄にあり、而も聖筆とされてゐるではないか、といふであらう。いかにもそふだ。そこで問題は意師の筆になるものが凡て延山所傳の御眞蹟を擧げたのか、或は他からの傳寫をも記したのか、其邊の事も研究を要することだが、私はまだそこ迄進んでいない。だから、今は私の愚見を吐露するに止むるもので、若し意師の所傳が凡て御眞蹟であることが明になれば、私の疑問は一切解散される事で、従つて、前記の二書は、そのまゝ御眞撰として拜さるゝのみか、私はその觀點を改むるであらう。されば私は一往私の所見として此所に記すに止める。

第五に華果成就書(二四)である。此の書は、報恩抄拜讀の報告に、答へ給ふものであるかに思はれる。而して其中には、暗に道善房を安立行菩薩となすものがある。即ち「日蓮は草木の如く師匠は大地の如し、彼ノ地涌の菩薩の之首四

人にてまします、一名上行乃至四名安立行菩薩云末法には上行出世し給はゞ、安立行菩薩も出世せさせ給べき歟」とあるが、それである。然し安立行は、上行の化導を助くるもの、或は俱に精進するものである。然るに道善房はそふではなかつた。されば今の抄の末に(一七)「經云示衆有三毒」又現邪見相「我弟子如是方便度衆生」云々と。是れ明に道善房を以て、權者となすものである。然るに、本尊問答鈔(一八)には道善の死後を明して「地獄まではおおはせじ、又生死をはなるゝ事はあるべしとおぼへず、中有にやたゞよひましますらむとなげかし」とある。今の書とは全く異なる。而も問答鈔は、本書よりは後の御書である。安立行なるべしとされ、道善の行爲は權者の所爲とさるゝ聖祖が、奈何して問答鈔の如き實感的思想が述べらるゝであらう。一人で二種 of 思想を同時に明すとは、聖祖の場合には特に考へられぬことである。なる程一往權者實者としての會通はつく。然し聖祖の眞の御思想は何れであつたらう。又此の書を拜し、本尊問答鈔をも手にした淨顯等は、それをいかに解釋したであらう。こふ思ふと、矢張本書は疑はるゝものを有する。

以上五書、之を要するに、佐渡御勘氣鈔は、疑ふといふよりは其編年を改むべきでないかと思はれ、清澄大衆及聖密書は、意師の所傳が御眞蹟を傳ふるものである限り、御親撰として拜せらるべきである。かくして、残りの義淨房書と、華果成就書は、何としても疑ひなきを得ぬと思ふのである。かくいつたからとて私は徒らに御書を偽作呼ばはりするものではない。私は研究の途次にあるのであつて、此が結論ではない。唯だ私の疑問をそのまゝ提示して大方の示教を求むるのである。



## 五、淨顯等の信仰又爲人

上來十一通の御書に就て検討する所あつたが、その中淨顯等の事を比較的よく傳ふるものは、報恩鈔及び本尊問答鈔の兩書である。他の文書は兩書程ではない。其所で、先づ清澄一山の信仰が何であつたか、を檢せねばならぬが、それは既に清水、山川兩學匠によつて明にされてゐるのである。(清水學長には、双槩學報、及前記の書に、山川氏のは同氏の日蓮聖人研究第一卷)故に此所に駄足を加ふる事はない様である。要は、聖祖當時の清澄は、寺としては天台法華宗に屬してゐたのである。然し道善房は、安心を彌陀念佛に置いたのである。この事は善無畏三藏鈔(六四九以下)、報恩鈔(一五)、本尊問答鈔(一七)の所示によつて明である。即ち道善房は、文永元年十一月十四日西條華房の蓮華寺で聖祖に會はれた時は、彌陀佛を五體迄造立した程の「念佛者」であつた。然し聖祖の強折を受けられた師は、その後徐々に信仰も變つて、文永七年の頃には、反て釋尊像を造る迄になつたのである。(善無畏三藏鈔、六四九以下)然し其後は又退轉し、聖祖の佐渡流罪中は遂に一度も慰問し給はなかつたのである。(報恩抄一、五〇〇)その後も同様であつた様で、建治二年の夏死去し給ふ迄、遂に不決定であつたのである。(報恩抄)聖祖によれば、道善房は「愚痴」(六四九)の人であり、「臆病」(一五)で、「清澄をはなれ」(同上)いとされた人である。而も東條景信を恐れ、圓智、實城の恐迫(一五)に應じた人である。がそれ等の人々が幸に早く死んだので道善房の信仰も幾分聖祖へ傾いたのではあらうが、周圍の事情は猶道善房に斷固たる決心を促さしめなかつたのではないかと思ふ。彼の新尼御前御返事(九三)に示し給ふ事に省察するに、領家の尼が本尊を授與されなかつたのは、全く其信不決定からである。然して其領家は、聖祖と至深の關係があつたのであるし、又清澄とも深縁があつたと思はれるのである。其尼の信不決定が、矢張道善に影響し、清澄一山に關係したと思ふのである。然し其の新尼が

本尊を頂いてるのは、其信仰がやゝ確かだと見られたからである。こふした事情が、文永十二年頃の清澄の概勢でなかつたかと思ふ。即ち文永元年頃迄は全くの念佛的安心者の山であつたが、爾後漸次に變化して（法華題目抄著述當時は聖祖は清澄にあられた、同抄末紀）文永七年頃には法華信仰の曙光が見えて來た。それも東條景信既に死し、圓智、實成等の有力者も、

有力な支援者たる景信を失つて、其勢力が次第に失墜したか、或は死んだかしたので、山の情勢も大分明るくなつたのであらう。所が文永八年聖祖の流罪となつたので、彼等は一は自營的にも、他は聖祖を以て法華經の行者ならず

（開目抄は此の暗迷を破するためである）とする意からも、再び逆轉したのではないかと思ふ。是れ即ち道善房が佐渡へ慰勞のたよりを

せなかつた（一五）理由であらう。又佐渡御勘氣鈔（七〇）に「領家の尼御前へも御ふみと存候へども、先かゝる身のふみなれば、なつかしやと、おぼさざるらんと申ぬると」あるのだと思ふ。こふした一大事の爲めに、非常な刺激を受

けて退轉したのではあるが、聖祖が無事歸倉されたので、亦復情勢の變化を來したのであらうと思ふ。そうして建治二年道善房の死後、淨顯が一山の中心者となつたのではないかと推する。淨顯が一山の主になつたのは、何も道善の死後でなく、その前であつたかも知れぬ。それはともかく、淨顯等の時が來た様でも、一山は猶聖祖の教に従つたのではない。それは前掲の報恩鈔送狀の文に照して明である。即ち文永八年から急に旗色を盛りかへした念佛信者も、聖祖の歸倉によつて再び弱勢となり、反對に淨顯等の勢が出て來たとはいへ、未だ一山を指導する迄にはならなかつた。否反對者の勢力は、容易に輕視するを許さぬものがあつたと思はれる。此れが建治二年頃の清澄の情勢だと思ふ。

さて次に、淨顯、義淨等であるが、兩者は聖祖の先輩ではあるが、聖祖の意に同じで、東條との事件には、聖祖を追ふて下山したのである。この事は、彼等が其信仰的にも聖祖に依つた事を意味するので、聖祖が「天下第一の法華



經の奉公なり、後生は疑をはすべからず」(一五)といはるゝ所のものである。されば淨顯義淨の兩師は、早く既に法華經の信者であつたのである。この事からすれば、彼の文永元年花房での道善房對聖祖の面會も、道善其後の信仰の變化も、彼等の力があつたのではなからうかと想ふ。かくして見ると、彼等兩人は、其勇氣に於て、其純信的な點に於て、遙に道善に勝るものがあつたのである。此れ又聖祖が彼等に本尊を授與し給ふた所以である。若し彼等の信仰が不純であつたら、領家の尼の如くに(九三)、一谷入道の如くに(八一)容易に本尊は授與されぬのである。此の一事を以てするも、淨顯等の信仰の程が解る。又其思想も報恩鈔を通じて、彼等が其以前に所有した教養の程も、窺知し得るのである。而も報恩鈔を賜つた彼等は、更に其思想を深めた事と思ふのである。而して其思想は、無論聖祖の思想である。

## 六、輝師の論評に就て

上記によつて、淨顯等の信仰、思想の程が大體了解されると思ふ。其所で、輝師が彼等を以て、眞言徒とし、密徒とすることが、東台兩密何れの意であつても、等しく淨顯等の思想信仰ではないことが解る。即ち輝師の斷定は失當である。次に本尊問答鈔が、權實判の御書だといふことである。なる程彼の書には壽量神力兩品の文は示してない。然し引文がないから迹門的だとは獨斷である。而も其意、淨顯等を密徒とする前提に出づるをや。彼の書には所示の本尊義は日蓮の「私義」ではなく、釋尊天台の指南であるとある。然るに師は「私義」を「聖意をつくさざる」の意とするは全く當を得ざるものである(この事大崎學報九〇號、淺井要麟氏の所指の如し)。一體本尊問答鈔は、本尊義を説明し給ふ以外の部分は、文に長短はあり、説に具略はあるが、報恩抄と殆ど同一である。試に左に表示しやう。

問 答 鈔

- 1797 問云弘法大師以下  
 1798 又慈覺大師以下  
 " 智証大師以下  
 1799 「答夫」以下妙樂の事  
 " 「日本國」以下  
 1861 末の、「然に日蓮」以下  
 1804 「柳人王」以下  
 1807 「故道善」以下  
 1807 「此御本尊」以下

報 恩 鈔

- 1451 及<sup>1471</sup>の意に同じ、  
 1472 慈覺大師以下に、  
 1473 智証大師以下  
 1459 「付法藏」以下<sup>1466</sup>末四行迄  
 1466 末四行<sup>1471</sup>迄、及眞言破の要、  
 1452 「かくの如く」以下  
 1496 「人王」以下  
 1500 の「故道善」以下  
 1509 三秘所示以下

右の如く兩鈔を對照するに、其所明に於て、其取材に於て、其論理に於て全く同一である。唯だ前にもいふ如く、文に長短あり、説述に具略前後あるに過ぎない。故に兩鈔は全く軌を一にするものであつて、兩鈔間の所明に甲乙はないのである。されば報恩鈔を以て人本尊、聖意顯發の書、本尊問答鈔を以て法本尊聖意未顯、權實判の書とすべき理由が成立せぬのである。唯だ本尊義の説述舉証に、迹門の文、涅槃經及天台の法華三昧の文が示されて、壽量神力



の文のないのは、所謂權實相對の故でもなく、淨顯等が密徒だからでもない。全く彼の鈔に示し給ふ意を証するに足るからである。かく觀されば彼の鈔の全篇は通じ得ぬのである。

次に淨顯等が、本化の徒とならず、清澄をも改轉せしめなかつた事をいふであらう。然しそれは聖祖當時の事情を、其後の狀態から考へるからで、一宗として獨立した時、即ち宗團的意識の成立時のまゝを、未成立時の當時に當てはめることが失當なのである。聖祖は、慈覺、智証を破された。弘法大師を強折された。法然、善導は破された。然し淨顯等に「清澄御房」たる事を止めよとはいはれぬ。此の一事、以て當時の凡てを解決すると思ふのである。淨顯等は、慈覺等によつて混亂され墮落され、謗法化された天台宗からは離れやう。然し傳教大師の意志のまゝの法華宗に復歸しやうとしたであらう。此れが報恩鈔の示す所でもある。故に彼等は、聖祖から天台傳教未弘の法ありとは示された。然しそれは内鑒冷然であつて、聖祖のいはるゝのが、眞の傳教の本意であるから、その様に清澄を純化しやうと努めたであらうが、それ以上、此を所謂本化妙宗の寺にしやうとは考へなかつたであらうと思ふ。此の點は、聖祖の御意志をつきとめて行けば、當然日蓮宗が成立せねばならぬが、聖祖の當時にあつては其所迄進んでゐない。又信徒の多くもそふ迄考へ及んでゐなかつたらうと思ふ。淨顯等は確かにそふであつたと思ふのである。此の事は、又興ふる者と、受け取る者との氣持、意氣の差でもあり、當時の者と、後の者との觀方、考へ方、進み方の差でもある。であるから、是等を考慮せずに、其後の事情から、初めの情勢を速斷してはならない。而も傳ふる所では、聖祖の法衣は天台等の凡僧型であつたといふではないか。それだけでも、淨顯等がいかに聖祖を觀たか、其山をいかにしやうと考へたかが解らう。故に寺の改宗や、自身の轉衣の有無を以て、直に當時の人々を斷定してはならぬのである。尤も淨顯は、後日仲と稱したとの傳説があるが、私は信ぜぬ。

要之淨顯に對する輝師の論評は當を得ぬといふことで、寧ろ吾等は、御書があるがまゝに受取つて、彼は純信な人であり、大事の大尊を授與された人であり、三大秘法の（報恩抄をさす）教示にあづかつた人である、ことを知らねばならぬ。従つて本尊問答鈔も、初めから、成心的な意志で拜すべきではない、と思ふのである。

かくいふと、然らば聖祖の本尊の主體如何の質問が出るであらふ。それは今の問題ではない。私は輝師の如き觀方をする事がよくないといふたのであつて、今輝師の本尊説を論評し、進んで聖祖の本尊義を説かんとするものではない。然し私のいふ事によつて、輝師の本尊の立論に影響あるは當然である。然しそれが輝師の本尊説の根本に觸れるか否かは別個の問題である。そふした事は今の議ではない。

## 七、結 語

單篇にまとめる心算であつたが、思はず長くなつてしまつた。其所論に意のつくさぬ事が多々あると思ふ。特に御書に就ての私見は、研究の道程にあるだけに、甚だ意の通ぜざるものあるばかりか、反て聖筆を汚すものなきやを思ふのである。謹で大方の示教を乞ふ。

猶淨顯等の信仰以下の項には、一々祖文を引用する筈であつたが、與へられた紙數も遂に超過したので、唯だ縮冊頁數を記すに止めた。讀者の諒恕を乞ふ。

（昭和十三、七、）



## 『妙法寺記』並にその原本に就て

鹽 田 義 遜

妙法寺記は甲斐の郷土史料の白眉で、甲斐の史料としては餘りにも有名である。先づ順序上一往その解説を述ぶるならば、最初の版本たる文化版の跋に

妙法寺古記録二卷所傳<sub>レ</sub>於<sub>二</sub>甲斐國都留郡木立村妙法寺<sub>一</sub>也。村在<sub>二</sub>富士北麓吉田邑西、坂東路十許里<sub>一</sub>、俗呼<sub>二</sub>西方八村<sub>一</sub>之二也。日蓮宗之古道場、而今尙存云、此記起<sub>二</sub>於文正元年<sub>一</sub>、終<sub>二</sub>於永祿四年<sub>一</sub>九十六年間、甲駿越及坂東諸國之事蹟、可<sub>レ</sub>徵者最多、乃至而共益<sub>二</sub>於考古之學者<sub>一</sub>。不<sub>レ</sub>爲<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>多豈不<sub>レ</sub>喜乎。

とある如く、古來小立村一體を勝山といふより、地名に則りて又一名勝山記といひ、寺名に依て妙法寺記と呼んだのであらう。現行する諸本の内容から見れば、單なる地名と寺名との相違ばかりでなく、自ら内容にも多少別の意味があると思はれる筋もある。

何となれば妙法寺記又は勝山記なるものは、少なくとも二つの觀點から見られる内容を有して居る。一つは妙法寺の記録と見ると、二には妙法寺に傳へられた記録と見るのである。即ち前者は日蓮宗中日隆を派祖とする八品派、即

ち本門法華宗に屬し、靜岡沼津在岡之宮光長寺の末で、本縣東山梨郡休息村立正寺と共に、宗祖の直弟中老和泉阿闍梨日法を開山とする妙法寺の記録、即ち妙法寺日記、又は妙法寺史を意味する記録の意である。後者は妙法寺に傳へられた或種の記録の意とも見られるのである。

以上の兩點から見らるゝ様に妙法寺記又は勝山記は、現存の諸本何れも卷首を缺損して居ることは、甲斐叢書の第八に載する「妙法寺年録」の最初に『前裂損』とあるに依ても明である如く、勝山の淺間神社所藏本も卷首がなく、又妙法寺所藏の横帖（長五寸、幅六寸）本も最初を缺損して居るので不明である。その内容は佛教中心の記録であり、謂はゞ一種の佛教年表である點から見て、恐らく欽明天皇十三年（AD 五五二）佛教渡來以來或はより以前の記録の様に思はれる。従つて本記録は佛教中心の年録で、それに天變地天等の重大事を記録したもので、爾來永祿四年（AD 一五六一）川中島合戦に及ぶ約千年間の記録である。而して妙法寺は永仁三年（AD 一二九五）の草創であるから、妙法寺の記録としてはそれ已來約二百六十年の分となるのである。これ二つの觀點から見られると述べた所以である。

## 二

然らば妙法寺記とは何れの内容を意味するかといふに、今の所謂妙法寺記の名は、後に全寺歴代の何人に依てか上述約千年間中、妙法寺創立後六十餘年後の文正元年（AD 一四六六）より、永祿四年までの九十六年間分が分割されて、妙法寺記と名づけられ、上下二卷に分冊別行せられ、後文化十五年東都松屋主人源與清に依て刊行せらるに至つたのであらう。

又本記録が妙法寺草創の永仁三年以來でなく、又八品派の開祖日隆が永享元年（AD 一四二九）八品分派以來でもな



く、文正元年を以てしたことは、妙法寺記上巻の最初に

文正元 丙戌閏十月廿五日

甲州東郡久速立正寺開山先師日朝上人御死去未尅、御供の弟子七十人導師は御弟子の内本蓮寺玉藏坊。（「叢書」

八二七）

とあるに依るに、今の文に立正寺開山日朝とあるは、これ休息立正寺第七世の本果日朝で、師は先に駿州岡之宮光長寺東之房に在つたが、應永廿六年立正寺に來り、後永享七年京都本能寺に八品の派祖日隆を訪ひ、互に八品所顯本迹勝劣の義を論じ、肝膽相照し道契頓に熟し、長錄・寛正の頃立正寺に在て盛に本迹勝劣の義を唱へ、西隆東朝と呼ばれたのであつた。然るに當時岡之宮休息は第二祖日乘以來兩山一寺の格にあつた故に、日朝の勝劣義に風靡せられ、妙法寺もその配下にあつたのである。休息に於ても今日日朝を中興と呼ぶが、異端勝劣義の開山の意である。かく東國八品派祖日朝の遷化を以て一時期を劃すのと、又妙法寺記跋に

此記起於文正元年、終於永祿四年九十六年間、甲駿越及坂東諸國之事蹟可<sub>レ</sub>徵者最多

といふ記事の内容からの郷土史料とを傳へる故に、妙法寺の記録中より文正以後が別出せられ、後に上下二卷として刊行せられたのであらう。現に同寺に同様の内容より成る二卷の草本が保存せられて居るが、是等が傳寫せられて刊行せらるゝに至つたのであらう。

因に「甲斐志料集成」（七、三）本は東郡を當郡に、又久速を久遠に作つて居るが、久速は休息の普通で立正寺は今の立正寺で、岡之宮・小立と共に日法の開山で日朝以來八品派に屬したのであるが、中頃天正十九年十三世日定の時に身延に屬し、爾來今日に及んで居るが、八品派では後に藤木に立正寺を立てゝ、休息の立正寺に代へて居る。

斯の如く妙法寺記には前述の如く、内容から見ても兩様の本があるが、更に續群書類聚第八百七十八卷の雜部二十八に掲載する「甲斐國妙法寺記」本がある。それは前述の上卷を文正元年〔享祿五年、下卷を天文二年〔永祿四年とする上下二卷の前に、更に單に「妙法寺記」として曆應元年（AD 一三三八）〔寛正六乙酉（AD 一四六五）に至る、百廿八年間の記事が添加せられて居る。然るに「甲斐叢書」の所依たる勝山淺間神社本は、最後の寛正元年庚辰より三年壬午に至る三年を脱し

長祿元、二、三（寛正元、二、三）四、五、六乙酉改元（叢書八一七）

となつて居るが、妙法寺所藏本は此點の脱落がなく、又同本が天文十七年以下十三年間を闕くに對し、神社本が僅に永祿の三、四兩年を闕くに徴しても、妙法寺本が恐らく最古本かと思はれる。併しその點は更に後日の研究を期したい。

然らば第三本は何故に曆應元年以來の記録を收めたかといへば、それは矢張曆應元年よりした別行本のあつた事が想像せられるのである。何となれば曆應年代を見れば

曆應元、

二、常州發向

三、

四、本院治十年、光長寺第二日上人御遷化（叢書八二六）

とある如く、開山の日法の遷化を以て一期とした分け方に依つたものである。随つて常州發向とは妙法寺の當主の常州行を記したのかも知れぬ。又日法を光長寺第二祖とするは宗祖を初祖とする例に依つたのはいふ迄もない。斯く第三



書が日法の遷化を以て分割したことは、第二書が中興の日朝の遷化を以て劃したのから見ても肯かれる。併し此の第二第三の兩書は、何れが先かは不明であるが、二卷本は文化十五年刊行であり、第三の曆應以降本が奥書に

文政九年孟秋上幹 江戸蓮堂小林峽源正與校書、干註子之寓居。

とあるに依るに、文化十五年改元して文政となつた故に九年後校合である。又文化本の源與清と、文政本の源正與とも或は父子の關係かとも見られるが、當時斯様の兩様の別行本のあつたことは想像が出来る。且つ第三本は二卷本の刊行後に出来たことは、第三本が妙法寺記と上巻と下巻の三部から成立つて居る點からも明かである。

### 三

以下現行の諸本に就て見るに第一本としては

一、妙法寺 所藏本

寫本

一帖（縦五寸、横六寸、横帖大和綴、四十五紙）

二、淺間神社 所藏本

寫本

一帖

三、甲斐叢書、第八

昭和十年版

の三本あるが、その他前二書の傳寫本は廣瀬廣一氏等が所藏する所である。第二本としては

一、妙法寺 所藏本

寫本

二卷

二、文化十五年版

二卷（木版）

三、續史籍集覽、第一

村崎融弼所藏本

明治廿六年版

四、信濃史料叢書、第五

大正三年版

五、甲斐志料集成、第七

昭和八年版

以上の五本があり。第三本としては

○續々群書類従（第三十輯上） 昭和七年刊

の一本があるのみである。今上掲三本の紙数の相違を且く甲斐叢書本に就て見るに

第一本	自二五一頁 至二九四頁	二十二枚 (AD 五五二) 一〇一〇年間
第二本	自二七一頁 至二九四頁	十二枚 (AD 一四六六) 九六年間
第三本	自二七六頁 至二九四頁	十四枚 (AD 一三三八) 一二四年間

右の如く第一本の千年の記録は、第二本の約百年間の記録と粗ぼ同一紙数なる點から見て、中興の日朝遷化頃から次第に記録が詳になつたことが觀取されるのである。随つて文正頃以前と以後とは廣略の別のあることは、以前の記録は前述の如く妙法寺に傳へられた記録であり、以後の記録は全く妙法寺の記録であり年録であることは、記録の内容から見ても明かである。即ち前者は寫傳であつて勿論其の内容に相當重要な點もあるが、後の妙法寺の記録として書いたものとは、その態度とその性質とを異にしたものといはねばならぬ。これ文正以後が妙法寺記として單獨に刊行せられた所以である。

今第一本の妙法寺所藏本の文正以後と、第二本の妙法寺所藏本とを比較して見ても、同一記事であり乍ら第一本の記事の方が餘程簡潔に書かれて居る。第二本は云はゞ少し引き延して書いた觀がある。殊に妙法寺所藏の第一本は天文十七年 (AD 一五四八) まで、以下十餘年間の記事は見えないが、若しこれを省略したものとすれば、淺間神社本の方が古いことになるのであるが、記事の簡潔なる點から見れば反て逆に考へられるのである。従つて此等兩書の新古の



問題は、記事の内容その他種々の角度から、充分に研究した上でないと判明しない。

孰れにしても第一本は古傳の寫傳を中心とし、その記事に習つて次第に新事實を書き傳へたもので、その新事實の記録の分が正しく妙法寺記といふ名に相當するのである。上來の寫傳の分迄を一緒にした甲斐叢書の如く「妙法寺年録」といふか、また古來の別稱の如く「勝山記」と稱するが適當である。

然らば第三本と第二本と相違は如何といふに、即ち第三本の曆應元年から寛正六年に至る、一百二十九年間の記事は見様では、前と殆ど同一態度を以て同一程度に記録したとも見られるのである。此に於てか文正以前の分は果して何時、何人が何に依て寫傳せられたかゞ問題である。此に就ては本書の研究すべき點は全く第二本又は第三本と第一本と聯絡點にあるべきである。

#### 四

此に於てか且らく文正以下を第二本、曆應以下を第三本とし、それ以前の恐らく傳寫と見るべき分を第一本とすれば、第二本と第三本とは前述の如く記事に廣略の別があり、第三本中の文正以前と第一本の記述の態度の相違は殆ど見出し得ないのである。先づ第一本中宗門關係の記事を求むれば、

貞應元、後堀河院義仁治二十二年八十二代、日蓮大聖人御誕生二月十六日

文永三、如來滅後二千三百四十歲

弘安五、日蓮大聖人遷化十月十三日、同六月十二日洪水

永仁(元)平左衛(門)入道同子息三人共に打るゝ也

#### 延慶四、光長寺開山日春聖人御遷化

以上が所謂第一本の分の宗門關係の記事であるが、就中文永三年は佛滅二千二百十五年に當り、今の二千三百四十年とあるは、宗祖所依の佛滅年代と百二十五年の相違がある。更に此の他に注意すべきは

嘉元(元)今上院後二條治七年九十一代(叢書<sup>二六</sup><sub>六</sub>)

の記事である。今上院とあるは全く奇怪で、それに就ては廣瀬廣一氏の手譯本も矢張此の點に不審を抱き、

今上院とあるに依り、案ずるに本書の原本、當代の年祿を用ひしならん。

と冠註朱書して居るが、第三本たる群書類従本が曆應元年前後を以て、妙法寺記と區劃したことから考ふるに、第三本の初に

曆應四、本院治十年光長寺第二日法上人御遷化(叢書<sup>二六</sup><sub>七</sub>)

とあるが、日法の遷化に就ては日潮の別頭統紀は、此年八十歳の入滅(全書本<sup>三四</sup><sub>八</sub>)といひ、日因の御物語聽聞鈔佳跡上には全年八十三歳(富士宗學要集<sup>疏釋部二</sup><sub>一〇六</sub>)とするが、若し前説に依れば嘉元元年は日法聖人五十二歳であり、後説に依れば四十五歳の時に當るのである。且つ上述の諸點の重點たる

一、嘉元元年を今上院と記すること、

二、第三本の群書類従本が日法遷化を以て分割すること、

三、宗祖を日蓮大聖人と書し、光長寺の開山日春聖人の遷化を記入せること、

是等の諸點を綜合して妙法寺記の原本は恐らく日法聖人に依て書かれたものと推斷するものである。即ち日法聖人が依憑すべき原本から傳寫され、或は誰人かの傳寫せるものを相承し、それにその後の出來事を前記録に準じて次第



に記入し來つたが、偶々曆應四年遷化せられ、且つそれが妙法寺に傳へられ、歴代の住持がその後を書き繼ぎ來つたものが、妙法寺記として後世に傳へらるゝに至つたのであらう。

而して群書類従本又は曆應本と、文化版の文正本との相違を生じたのは、前にも述べた如く文正以前の記事が、大體最初からの記事と同一程度の内容を以て書かれたこと、即ち日法聖人が傳寫されたらうと思はれる部分と、同一の態度を以て書かれたこと、且つ此の筆者が傳寫された日法聖人かと思推せらるゝのと、文正後に日朝聖人が遷化せられて、その記事以後従前の偶然的年代記の書繼ぎの態度を全然革め、妙法寺を中心として甲駿越乃至東國地方の記事を多く掲載するに至つて、従前の妙法寺に傳はつた記録でなく、全く妙法寺の記録となつた故に、その紙數に於ても約九分の一の年間に、十倍もの記録を見るに至つたのである。故に文正以後を妙法寺記として別行するに至つたのであらう。かくの如く日朝聖人遷化後記録の態度の革まつたのは、日法聖人の所持本が妙法寺に傳はり、日朝聖人在世の頃までは従來と同様の態度を以て書き繼がれたが、日朝聖人の遷化後偶然誰人かゞ態度を革めたのが俑を爲して、今日の如き妙法寺記が出来たのであらう。且つ最初に「甲州東郡久速立正寺開山先師日朝聖人」とあるに依れば、日朝聖人の弟子中の誰かであり、連文に「弟子七十人」とある中の一人であつたらうが、誰かは不明である。

## 五

上來の記事に依て妙法寺記の初の方は、粗ぼ日法聖人の傳寫かと想像せられるし、又中間は妙法寺の住僧、後分の所謂妙法寺記の方は日朝聖人の弟子等、妙法寺の住僧に依て次第に書き繼がれたのであらう。その中殊に吉田、久速（叢書二八久速は久速の誤か）身延、小石澤（和）等の寺院關係の記事に就ては、折を得て研究を進めたいと思ふ。

要するに後の分は大體郷土史の史料が本書の價值であつて、此の點はそれ／＼専門の研究を俟つものである。

併し乍ら今此に研究せんとするのは、日法聖人寫傳と思はるゝ原本に就てである。前にも述べた様にその内容は、佛教の傳來を起點とする佛教文化史を中心として、天變地天と重なる治亂興亡の記事である。故にその中心記事からして佛者の手になつたことゝ、佛者に依て筆錄相傳し來つたことは、その所在が妙法寺である點からも動かぬ點である。更に然る所以を物語るのは、群書類從本の文政九年の奥書には

記錄中如<sub>レ</sub>與<sub>レ</sub>へ、雲與<sub>レ</sub>雪、賈與<sub>レ</sub>買、光與<sub>レ</sub>石、充與<sub>レ</sub>宛、處與<sub>レ</sub>所、當與<sub>レ</sub>常、賢與<sub>レ</sub>賀、陳與<sub>レ</sub>陣、年與<sub>レ</sub>事、結與<sub>レ</sub>談、逼與<sub>レ</sub>逗、遣與<sub>レ</sub>遣、乘與<sub>レ</sub>憲、繩與<sub>レ</sub>綱、貞與<sub>レ</sub>眞、餽與<sub>レ</sub>餓、鋪與<sub>レ</sub>敷、訛與<sub>レ</sub>訛之類、雖<sub>レ</sub>魯魚可<sub>レ</sub>疑亦有<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>疑、悉從<sub>レ</sub>原本<sub>レ</sub>而不<sub>レ</sub>改治刻刷印公<sub>レ</sub>諸世<sub>レ</sub>、管見旁加<sub>レ</sub>朱圈<sub>レ</sub>、以正<sub>レ</sub>後之君子<sub>レ</sub>焉（三〇輯上三五）

等と寫傳本の字様に就て述べて居るが當字誤字は筆者に依て逸れざる所であるから、全く「雖<sub>レ</sub>魯魚可<sub>レ</sub>疑亦有<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>疑」といふ如くである。然るに文化本の跋には

亦字體升作<sub>レ</sub>牛、被作<sub>レ</sub>皮、管作<sub>レ</sub>官者省字也。候作<sub>レ</sub>フ、外作<sub>レ</sub>イ省略字也。或石訓<sub>レ</sub>加多之、痘訓<sub>レ</sub>毛、劣訓<sub>レ</sub>萬久、捌訓<sub>レ</sub>左八九等古訓、而益<sub>レ</sub>於考古學者

とある省字、略字、古訓であるが、この中最後の古訓は自らその時代的特長を有するもので、古訓に依てその時代を知る手懸となるのである。若し省字略字はこれ今日の如く活版術の發達せざる時に在ては、悉くが總て筆寫に依つたのであるから、何時しか省字略字の間に一定の約束が生じて、省字略字に依て筆者の勞を幾分なり省かんとしたものである。併し乍ら右の文に掲げたのは、概ね一般的に共通するものであるが、「甲斐叢書」本の妙法寺年錄に菩薩をササ（三五三）に作る獨特の略字は、これ佛者の約束であるから此の點が、我等をして佛者の寫傳と斷定せしめた點



である。

然らばその原本に就ては、日法聖人四十五乃至五十歳時代の記事に、前述の如く「今上院」の文字のあつたことは、廣瀬氏所持本に「原本は當代の年録」との註に依て、日法聖人と思推せらるのであるが、然らば日法聖人は果して誰人の筆録に依られたかゞ問題である。

## 六

由來日法聖人は日蓮聖人の弟子中、最上位の六老僧に次ぐ、十八中老僧の筆頭であり傳は別頭統記第十一に見ゆるが文に

高祖身延隱棲之間、溫<sub>レ</sub>席扇<sub>レ</sub>床、具竭<sub>二</sub>孝恩<sub>一</sub>矣

とある如く常に側近に侍して給侍相勤め、且つ彫刻に秀で曾て身延山に於て百尺の檜を得て、百年の後似像を残さんとして、宗祖の聽許を得て等身の像三軀を刻み、身延、池上、比企に安置し、又殘木を以て一軀を作り、後常在日朝妙光寺を創立之を安置し、又宗祖滅後中山、小湊、那瀬妙法寺、濱法華寺、京妙顯寺、休息立正寺の像は皆その作に拘はると傳へる。何れにもせよ日法は身延常在給侍の點から見て、今の年録の原本は恐らく、日蓮聖人の御所持本よりの寫傳にはあらざるかと思はれるのである。

然らば日蓮聖人の御所持本に右様の年録がありしや否やといふに、日蓮聖人は有名には註法華經十卷、それは遊學中諸經論釋の要文を經典に記入し、常にこれを所持して居られたのみならず、その他重要な經論釋の拔書も座右に置かれて、御述作御消息も書かれたのであるが、佐渡御流罪に當つては十月十二日龍口法難の折、松葉ヶ谷の御草庵に於

て御召取の折には種々御振舞鈔に

平の左衛門尉が一の郎従、少輔房と申す者はしりよりて、日蓮が懷中せる法華經の第五ノ卷を取り出して、おもてを三度さいなみて、さんさんとうちちらす(九一)

とある如く、註法華經も此の始末であつた故に、文永九年三月佐渡より弟子檀那宛の佐渡御書には

外典鈔、文句二、玄、四ノ本末、勘文宣旨等これへの人々もちてわたらせ給へ、(八二)

外典ノ書、貞觀政要すべて外典の物語、八宗の相傳等此等がなくしては、消息もかゝれ候はぬに、かまへてかまへて給候べし。(八三)

とある如く、此の中に見ゆる如き外典の書、外典の物語等も集められて居り、随つて是等の中に、最初寫傳の妙法寺記の如き外典書のあつたことは想像に難くない。而して此等に就ては身延山歴代の聖教目錄(山川博士「日蓮聖人研究」第二<sup>五九</sup>、身延山史六八)並に永仁七年(AD一二九九)の中山の初祖富木常忍の「常修院本尊聖教事」や又康永三年(AD三四四)中山三祖日祐の「本尊聖教錄」(日蓮宗々學全書、上聖部<sup>一八三</sup>四〇四)等を見れば、御眞蹟並にその寫傳等と共に外傳書並拔書等が相當保存せられたことは明かである。

先づ其内中山の祐師の本尊聖教錄には、十七の大綱要文等の下に

兩朝略年代記

一帖

紹運圖

一帖

王代記

一紙(日蓮宗々學全書、上聖部<sup>四二</sup>)

又三十四の外典の下に

『妙法寺記』並にその原本に就て



『妙法寺記』並にその原本に就て

帝年錄 三帖

唐年代記 一帖

私漢年代記 六帖(全上四三)

等の書名が見え。身延に於ては十一代日朝聖人の靈寶目錄に

日本佛法次第事(第七箱)、(身延山史七〇)

王代抄(第五箱)、(全上七一)

等が見え十二代日意の大聖人御筆目錄(日蓮聖人研究、第二〇二五)にも同様に兩書を掲げ、第廿一代日乾の靈寶目錄には、御眞蹟の本末並に破損箇所等を綿密に記し、明治八年不慮の回録に身延山珍藏の御眞蹟の悉く烏有に歸して知る由のない今日、その内容の一斑を知り得る重要な記録であるが、それに依れば日本國佛法渡次第事に就ては

都テ大和國高 此間文字損失

敏達天皇孫

皇子

聽衆一百人沙彌一百口文

已上廿五紙

表裏共御筆也、但奥

十五紙ノ分裏ニ有之

初十紙ハ表ニ斗出ス(全上五三)

とあるに依れば、本書でないことは明かである。若し王代抄に就ては

一、王代抄裏、御筆也、十五紙（全上五三）

とあり、又廿九代日筵の目録には王代抄はなく、漢土日域佛法事一卷（全上五五）<sup>八</sup>が加へられて居るが、此等は今日何れも傳らぬ故にその内容を知るべきではない。恐らく是等の中王代抄、帝年錄等の如きものが、今の妙法寺記の寫傳の源をなすかに思推せらるゝのである。前述の如く日法は身延時代の常隨給侍の一人であつた故に、折を得て是等の年錄を傳寫し、又は六老僧等の傳寫本を相承して所持したことも、あるべからざることではない。

## 七

上述の如く妙法寺年錄の原本に就ては、今日の文獻上判然とこれを斷定し得ぬことは甚だ遺憾であるが、併し上述の如き考方も必ずしも無暴の推論では無からうと思ふ。今此の事實を反證するために、日蓮聖人御遺文中同様の記事に就て、その研究を進めて見るも一方法と信ずる。

日蓮聖人の遺文は現存するもの實に四百數十篇に及び、日蓮聖人御遺文の靈長閣版（縮刷）に悉く編年體に編輯せられて居るが、立正安國と日本の柱を以て任じた聖人の著作、並に御消息には常に上代よりの皇國治亂の歴史的事實を指摘し、蒙古來の國難に對し精神動員を絶叫せられたのである。就中

祈　禱　鈔　（文永九年）　縮刷　八九四

曾谷入道殿許御書　（全十二年）　全　一〇九六

撰　時　鈔　（建治元年）　全　一一九八



三三藏祈雨事	(全 年)	縮刷一二五四
神國王御書	(全 年)	全 一三四九
報 恩 鈔	(建治二年)	全 一四五五
下山御消息	(全 三年)	全 一五五五
本尊問答鈔	(弘安元年)	全 一七九四

等は就中皇國の治亂に就て述べられたものである。

以上の中にも祈禱鈔の如きは、承久の亂に就て詳説して

承久三年辛巳四月十九日、京夷亂時、爲關東調伏、依隱岐法皇宣旨、被始行御修法十五壇之秘法、乃至五月二十一日武藏守殿カ(東)海道より上洛、甲斐源氏は(東)山道を上る。武部殿、北陸道を上り給ふ、乃至七月十一日本院隱岐國へ被<sub>レ</sub>流給、中院阿波國へ被<sub>レ</sub>流給ひ、第三院佐渡國へ被<sub>レ</sub>流給ふ。九〇

等と記して、吾妻鏡二十五(古典全集五、五三)の記事と全く合致するのである。而して右の中年代を最も廣く擧げたのは神國王御書で、神世十二代に筆を起し、

第一の王は神武天皇此<sub>レ</sub>はひこなきの御子也、乃至

第十四は仲哀天皇ハハ幡御父也

第十五は神功皇后ハハ幡御母也

第十六は應神天皇、仲哀神功御子今八幡大菩薩也、乃至

第二十九代は宣化天皇也。此時までは月支漢土には佛法ありしかども、日本國にはいまだわたらず。

第三十代は欽明天皇此の皇は第二十七代の繼體の御嫡子也、治三十二年。此の皇の治十三年壬申十月十三日辛酉百濟國の聖明皇金銅の釋迦佛を渡し奉る。今日本國の上下萬人一同に阿彌陀佛と申此也。乃至欽明・敏達・用明の三代三十年は崇給事なし。其間の事さまざまなりといへども、其時の天變地天は今の代にこそにて候へども、今は亦其の代にもにるべくもなき變天也。

第三十三代 崇峻天皇の御宇より佛法我朝に崇られて

第三十四代 推古天皇の御宇に盛にひろまりき。此時三論宗と成實宗と申宗始て渡候き、乃至

人王三十六代 皇極天皇の御宇に禪宗わたる。

人王四十代 天武(天皇)御宇に法相宗わたる。

人王四十四代 元正天皇の御宇に大日經わたる。

人王四十五代に聖武天皇御宇に華嚴宗を弘通せさせ給。

人王四十六代 孝謙天皇御宇に律宗と法華宗わたる。しかりといへども唯律宗計弘て天台法華宗は弘通なし。

人王五十代に最澄と申す聖人あり法華宗を我と見出て(中略) 同き御宇に空海と申人、漢土にわたりて眞言宗をならう。しかりといへどもいまだ此の御代には歸朝なし。

人王第五十一代に平城天皇の御宇に歸朝あり。

五十二代の嵯峨天皇の御宇に(中略)傳教大師御入滅の一年の後也。

人王五十四代 仁明天皇の御宇に圓仁和尙漢土にわたりて重て法華眞言の二宗をならいわたす。

人王五十五代 文德天皇の御宇に(金蘇二經疏を造り)大日經義釋に竝べて眞言宗三部とがうし(中略)



人王八十一代をば安徳天皇と申す（中略）

人王八十二代は隠岐ノ法皇と申高倉の第三の天子、文治元年丙午御即位、

八十三代には阿波ノ院、隠岐ノ法皇長子、建仁二年に位に繼給。

八十四代には佐渡ノ院隠岐ノ法皇第二ノ王子、承久三年辛巳二月二十六日に王位につき給。同シき七月に佐渡の島にう

つされ給。（一三四九  
五三）

と以上の如く約廿一代に亘つて、相等重要點に就てのみ記述せられて居るのである。

# 八

以下且く皇位のみを中心として神國王御書と妙法寺年録とを對照して見やう。

（皇位）

（神國王御書）

（妙法寺年録）

二九代 欽明天皇

三〇

？

三〇代 敏達天皇

（三一）

？

三一代 用明天皇

（三二）

三〇

三二代 崇峻天皇

三三

三〇

三三代 推古天皇

△三四

三四

三三代 舒明天皇

（三五）

三五

三五代 皇極天皇

△三六

三六 舒明

◎四〇代	天武天皇	△四〇	四〇
○四四代	元正天皇	四四	四五
○四五代	聖武天皇	四五	四六
○四六代	孝謙天皇	四六	—
◎五〇代	桓武天皇	△五〇	五〇
○五一代	平城天皇	五一	五〇
○五二代	嵯峨天皇	五二	五〇
◎五四代	仁明天皇	△五四	五四
◎五五代	文德天皇	△五五	五五
○八一代	安德天皇	八一	七八
○八二代	後鳥羽院	八二 隱岐 法皇	七九
○八三代	土御門院	八三 阿波院	—
○八四代	順德天皇	八四 佐渡院	八一

以上の如く三つが一致するのは◎印の天武、桓武、仁明、文徳の四代である。随つて遺文と年録とが一致するのは右の外△印の推古、皇極のみで都合六代あるが、歴代と遺文と合致するのは◎印の十三代である。

斯の如く年録と遺文とは歴代の御順位に就ては甚だ不一致であるが、年録が數回の傳寫と三十代、五十代の如く判然記入なき如き無關心で書かれたことも想像に難くない。孰れにしても此の點からでは宗祖の王代記等と年録との一



致は見出し難く、随つて年録は必ずしも宗祖の年代記の傳寫か否かも疑はれることになるのである。勿論當時歴代の御順位も決定的でなかつた故に、異説が無いことも斷定し得ぬのである。併し乍ら神國王御書に

前時の天變地天は今の代にこそにて候へども、今は亦其代にはにるべきもなき變天也<sup>一三</sup>  
五〇

とあるのは、年録の記事と關係最も深いのである。故に年録は宗祖のと同じ記録でないにしても、少なくとも別の系統のものではなく、宗祖の御所持本中神國王御書等の依らざる、他の年代録であつたとも想像出来るのである。要するに上述の如き結論は、二卷本以上妙法寺年録全體として

一、日蓮聖人を始め日蓮宗の一貫せる記事の存すること

二、日法の草創する木立の妙法寺傳來の古記録なること

三、日法の遷化よりの異本の存すること

四、立正寺、光長寺、妙法寺が勝劣に轉派せる時本果日朝の遷化を劃し妙法寺記二卷本として別行せること

五、宗祖と日法聖人と妙法寺と不可分の關係にあること

六、ササ菩薩等の如き佛教者慣用の略字を用ゐしこと

是等を綜合して、妙法寺記の原本は宗祖の王代記等の寫傳本の連續に依る記録と斷定せざるを得ぬのである。

随つて郷土史料としての武田氏等を中心とした吟味は一般郷土史家の批判に俟つのであるが、佛教關係就中宗門關係の記事に就ては久速を久遠と作る如き類は、此の以外になしとは斷定出来ぬが、それ等の點の研究摘出に就ては、他日を期することにする。最後に大方の是正を俟つ次第である。

# 本宗重要教判としての教觀 相對と種脫相對とに就いて

中 谷 良 英

## 一

本宗所用の教判は、其基本的・總括的・特種的なる五綱五義判を始め、五重教相・四重興廢・三重配當・五重三段（四種三段）等いづれも各個特種の意義の下に發生したものであり、幾多先師によつて其重要性を理論附けられて居り、且つ教判相互に關聯があるので、隨つて此等各種教相に就いて輕重を論ずることは勿論慎むべきであり、筆者亦それを敢へてするものではないが、今且らく觀點を「本宗の教學は内外の教學全般の中、如何なる位置にありや、其價值如何」を判定するといふ立場に於て眺める時は、先づ五重教相を的指すべきである。而して此教相中、古來最も力說重要視され來つたのは權實・本迹・教觀の謂ゆる後の三教相であるが、此中權實判は吾祖を待つまでもなく天台・妙樂・傳教等の諸師殆んど之を盡せるに近く、本迹・教觀の二者に至つては彼に其名ありと雖も、吾祖及び本宗所用のそれに及ばざるもの、或は名同うして其義齊しからざるものがある。此故に吾宗に在つては天台等と異なる所ある本迹・教



觀の異同を的確ならしむると共に、之を轉用して以て同一法華經に依據する二家の異同を辨別簡擇する爲の重要教判となし來つたのであるが、普通は本迹相對の本の重に教觀の義を包含せしめて、台當迹本の勝劣を判じて來た爲に、教觀相對よりは寧ろ、本迹相對の名目が一般的には知られて居り、且つ此本迹判は本宗に於ける分派の最も主なる學的論争の殆んど凡てをこゝに藏してゐる意味に於て、またあまりにも多く知られてゐる。然るに權實判を究盡せんとすれば須く本迹判に精通せずしては其義弱く、復た本迹判を徹底して知らんとせば勢ひ教觀判に精通せずんば叶はないので、かく見て來ると、五重教相中教義教理的に最も根本なる重は最後の教觀相對であり、此重を究めずして本化教學の甚深なる、又宗旨三秘の法體の尊無過上なるを究竟して顯はすに由ない。これ分別して教觀相對を捉へ來つた所以である。

## 二

然るに古來右五重教相の第五教觀判に代ふるに種脫相對を以てする向がある。富士一派及び故清水梁山師等がそれである。田中智學居士も第五を種脫相對又は教觀相對と、何れを用ひても差つかへないかの如くに言はれてゐる。此種脫判を五重教相の第五重に入れると否とは以下の辯に譲るとして、兎に角種脫相對なる教判は、佛在世（八年の法華經）と佛滅後殊に末法今時とは謂ゆる「一向純圓の時」であり、而も其れでゐて「彼は脫、此は種」と異りあるを判ずる重要教判であり、本宗が末法下種を標榜して妙法五字を而強毒之する折伏立宗・獨自題目宗を開創せし所以を闡明する爲の本化別頭の重要教判たるは何人も異議ない所である。乃ち此處に教觀相對に併せて議せんとする所以である。

今當に教觀相對について述べんとするについて先づ天台等による教觀の一般的意義を明にすれば、教は教相・教義・教解で、觀は觀心・觀道・觀行の謂ひ、即ち客觀的學理的重位と主觀的實踐體驗的重位との分別によつて兩者の異同を見るべきである。(妙玄會本一之上廿三右、同上六十一右籤同上二右籤、參照)されば天台は玄義に妙を釋するの下にも、其三絕の文に

如迹中ノ先施方便之教ヲ大教不得起（起レハ本地ノ大教不得興ルコトヲ、今本地ノ教興レハ迹中ノ大教即絶。絶ニ於迹ノ大功由本ノ大ニ、將レ絶ニ迹ノ大ヲ名ニ於本ノ大ニ。故ニ言レ絶ト也。又本ノ大教若シ興レハ觀心ノ之妙不得起。今入レ觀妙寂ナレハ言語道斷本ノ教即絶ス。絶ハ由於觀ニ、將レ此絶ノ名ニ於觀妙ニ。爲レ顯ニ此義故ニ以レ絶ヲ爲レ妙ト。）（玄籤會本二上七五右）

といひ、其迹本二妙の如きは之を觀心絶妙に望むれば猶是れ所絶であり教相の分齊で、之を行者心性の具徳に結皈照了するのでなかつたら、謂ゆる徒に他の寶を數ふると異なき所から、特に主觀的觀心絶妙に結んだのである。故に荊溪も同釋籤に

（昔）教ト與ニ本迹ニ及以ヒ觀心ト展轉ノ相絶ス乃至徒ニ引ニ遠近ニ未了ニ觀心ニ遠近ハ自レ彼レ、於レ我ニ何爲。如ニ貧ノ數ヲ寶、此之謂也。

と釋してゐる。又彼の本迹十妙を明し終つて觀心の十妙を明すにも天台は

佛ノ如衆生ノ如一如ニ無三一如ニ、佛既觀心ヲ得ニ此本妙ヲ、迹用廣大不レ可ニ稱說ス。我如如ニ佛如ニ亦當ニ觀心ヲ出此大利云云（妙玄會本七下廿九左玄）



といひ、本迹二門高廣の利益化事を收めて我一心一念の具徳に結皈觀達するに非ずんば利益なき旨を明してゐる。即ち天台の教觀は上述の如く客觀的教解と主觀的實踐體驗との別なることが知られる。而して今吾祖のそれはどうか。吾家にも天台のいへる昔迹本觀の四重興廢があり、之教觀の相對をいふのであるが、彼れとの異同はどうか。

四

今且く優陀那輝師の謂ゆる祖書中最もよく教觀の別を見るに堪えたりといふ灌頂鈔の御文によれば、

此(壽)品(肝)要者、明(釋)尊(無)作(三)身(欲)令(レ)增(進)弟(子)三(身)乃(至)此(三)身(雖)無(始)本(覺)三(身)且(立)五(百)塵(點)

劫(成佛)三(身)即(三)世(常)住(ナリ)。今(弟)子(始)覺(三)身(亦)如(レ)我(顯)可(レ)成(三)世(常)住(無)作(也)。次(此)品(觀)心(者)妙(法)一(心)

之(如)來(壽)量(品)故(我)等(凡)夫(一)念(一)念(即)如(來)久(遠)本(壽)本(地)無(作)三(身)本(極)法(身)本(因)本(果)如(來)也。(縮一〇二八)

これによればいかに本覺三身常住無作を詮するも、之を客觀的の教理として談じてゐる間は教門教相で、之を正しく自己身心の上に照了體得するの行法行相に於て觀心と名くること知るべきである。これ上の天台の教觀分別と同意と言へる。然るに本尊鈔には其題號に「如來滅後五百歲始觀心本尊鈔」といひ、其送狀に「觀心法門」といひ、其他觀心の義相を明し、殊に事の觀體を的示して之を己心に結皈されたる當家立觀の正法則であるが、而も其謂ゆる事觀の正體四十五字文段を指して次下直に

迹門十四品未說之於法華經內時機未熟故歟。此本門肝心於南經五字佛猶文殊藥王等不付囑之、何況其已下乎、但召地涌千界說八品付囑之(九四〇)

とあつて、此四十五字事觀の法體が本門の肝心であり、又別付の正體妙法五字で、末法に於ける教行證の依據在處な

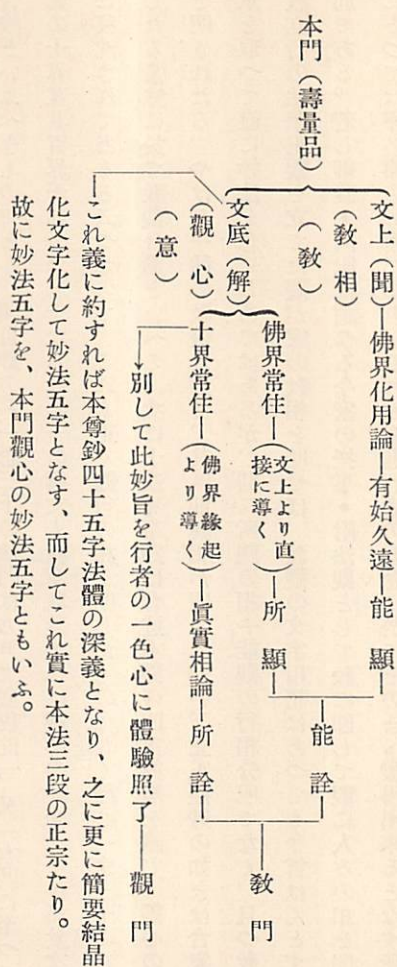
るのみならず、謂ゆる五重三段の第五本法三段（文底三段とも觀心三段とも法界三段とも云ふ）の正宗一品二半の法體となつてゐて、在世靈山大會が釋尊の顯本に即して己心の顯本に持込み、眞實の斷證を得たる依據在處となつてゐるから、此鈔の教觀分別は灌頂鈔の如くに簡單に教觀分別をなすことは出来ないの、觀に即して教、教に即して觀、和尚の語を借れば教觀合論といふべきものである。開目鈔の「一念三千の法門は乃至文底秘沈」、又「本門に至つて始成正覺を破れば至乃眞の十界互具百界千如一念三千なるべし」の御文も斷章取義すれば觀心の一念三千は壽量文底に至つて極成し、それに秘沈されてゐると云つたので、これも正しく觀行の相を明したものでなく觀心一念三千の在處依據を學的に示解説したる意味に於て教觀合論といへる。次に十法界事鈔は昔述本觀の四重興廢を論じ、觀心の義に約して本門深勝の旨を明したる、やはり一種の教觀合論で、其區別異相が明ではない。立正觀鈔の如きは台家の一心三觀傳於一言の相承を取つて直に妙法を念ぜしめてはあるが、別に所觀の相や能觀の行相分明でなく、且つ教劣觀勝の邪觀に對して依教立行の法華正觀を立てた觀が家の教相を明せば、教觀の文字用語はあつても今言はんとする教觀相對の意とは自ら別である。若し御義・向記は謂ゆる今家の托事・附法觀として教に即して觀に入るの相を明してはあるが、而も初心にとつては寧ろ事の妙解であり、それが唱題行者の當念に於てそのまゝ發得出來るとなす所に此鈔の教觀一共即教入觀の相ありといはれやう。

## 五

此外にも尙教觀に關する御書は多いが、今且らく以上の諸御書を通觀して祖書に於ける教觀の意義を考へるに、灌頂鈔の如くに行と教とはつきり分別してあるのと、或は觀心の意義に本門（教）による所詮の深理、本門（教）肝



心の妙旨をそのまゝ包含したまへる場合があることが解る。換言すれば信行體驗の外に本法三段の正宗たる文底一品二半の深義をそのまゝ觀心大教といひ、觀心の依據在處たるに約して觀心の重といふことがある。されば教觀の意義は直に通途いふ如き、吾人の心性に結皈する行法としての三種觀法をばかり觀とし、客觀的教解分別を教とするのと全同でないことが考へられる。畢竟今謂ゆる教觀相對とは換言すれば本門の文上（隨他本門）文底（隨自本門）判とも言ふべきで、即ち左圖。



兩重教觀の中、上段の上・底、聞・解、教・意の分別による教觀判を指すのである。何となれば、台當の異同はこの上底の一重全體にかゝるものであり、天台未盡の境智は實に此文底のすべてに涉るが故である。随つて本化独自の教學一般の眞に最上の地位と價值とを有する所以も亦此文底の深義を究むるに存するものである。而して此文底を觀心

といふは、それ全體が上にも一言した如く在世の衆が聞に即して深く其旨を了し、己心の顯本にまで信解し味識した（具には下段の如）る所の法門であるから、其意味で觀心といふので、かゝる意味での觀心は、行の觀心の外にその觀行所依の理・觀心の法相までも含めて觀心といひ、教相はそれへ導きそれを詮顯する重に名けるのである。而して謂ふ所の種脫相對とは、實に此教觀判即ち上底判の文底觀心の重に於て論すべきものである。

## 六

然らば其種脫判とは其意詳に言はゞ如何、又五重教相の第五を教觀とせず直に種脫とするはなぜ不可であるかといふに、今謂ゆる種脫判は前述の如く在末種脫の異相を判じて彼脫・此種、彼は一品二半・此は但五字となすことは聖文明白なれば後人の毫も疑義ない所であるが、それを法體の上の優劣にまでも及ぼすか否かについては古來相當論議せられ、富士一派や上述清水梁山師などは法體にも優劣ありとするのである。然るに之を其第一の典據たる本尊鈔に就いて窺うに、其五重三段の第五本法三段の下に、

自<sub>二</sub>一品二半<sub>一</sub>（底）<sub>（文）</sub>之外、名<sub>二</sub>小乘教邪教未得道教覆相教<sub>一</sub>、論<sub>二</sub>其機<sub>一</sub>德薄・垢重・幼稚・貧窮・孤露<sub>二</sub>同<sub>二</sub>禽獸<sub>一</sub>也。爾

前迹門ノ圓教<sub>（スラウ）</sub>尙非<sub>二</sub>佛因<sub>一</sub>云云（九四二）

と正宗一品二半（其實義は四十五）の最勝を的示し、次に二門一經末法の時機を正對告となす旨を明してその中に

本門ノ序正流通俱<sub>ニ</sub>以<sub>ニ</sub>末法之始<sub>一</sub>爲<sub>レ</sub>詮<sub>二</sub>。在世<sub>一</sub>本門ノ末法之始<sub>一</sub>・同<sub>二</sub>能圓也<sub>一</sub>、但<sub>レ</sub>彼<sub>ハ</sub>脫<sub>ハ</sub>此<sub>ハ</sub>種也。彼<sub>ハ</sub>一品二半<sub>ハ</sub>此<sub>ハ</sub>但題目<sub>ノ</sub>五字也。（九四二）

と、謂ゆる在末種脫品要相對をなされてゐるが、毫も法體の勝劣は述べられてゐないばかりか、明に「一同能圓」と



て、能圓の時機なることを示してかへつて其法體を同也と示されてゐる。のみならず此下に本門の肝要・内證の壽量品をば餘人に付囑せずして、本化地涌を召し特に末法の時機の爲に神力品に結要して御付囑あつたこと、随つて其神力結要の法とは是好良藥の妙法であり壽量品の肝要たる名體宗用教の南無妙法蓮華經であることを示されてゐる。

さて在・世・脫・益の本門とは言ふまでもなく文底觀心の重でなければならぬ。文上の如きは單に佛界の化用で所化に於ては尙これ他の實たるに過ぎぬ。故に文上に脫益を論ずることは斷じて其義を成じないのである。されば上の文の「在世・本門」も文上に即せる文底・本門の意であり、此故に方めて「彼脫此種」ともいへるのである。仍つて彼脫益の本門とはそのまゝ本門の肝要であり、内證の壽量品で、それが第五重本法三段の正宗であり、其實義を的示せば四十五字事一體三法となることの關係を知るべく、而してそれをば又是好良藥の妙法といひ、神力結要の經體即下種の法體壽量の肝要五玄具足の南○經といへることも知るべきである。かく前後一貫して拜し來れば脫の一品二半と種の五字七字とは、其間毫も法體の勝劣を示されたる理由根據を見出し得ないので、「一同能圓也」のそのまゝに拜して法體同を信解すべきであり、彼脫の本法三段の下に「自一品二半之外名小邪末覆等」と述べて文底一品二半の絶對價值を的示闡明せる聖語は、彼と體同にして卷舒の關係なる種の五字にもそのまゝ通用する聖意であることを知るべきである。故に種脫判は、唯在世の本門（この本門の語は上底一共す）は脫益（久遠下種・中間熟・今番本門に來つて文上に即して文底證入脫益）末法今時は下種の時なれば、卷ける五字と舒すべし一品二半（文底）と、そこに所修所持の相の異はあるが故に、品要用捨を論ずべきではあるが、法體の優劣を論ずるの義は斷じて存しない。故に壽量品御義に

當品は末法の要法に非る歟。其故は此品は在世の脫益なり。題目の五字計り當今の下種なり乃至下種を以て末法の詮となす。

と仰せられたるも、これを以て法體の取捨勝劣に關せしむるは全く其義がない、唯上述の品要種脫の用捨を示されて今時下種の時機には脫益の機に逗する舒べた當品はその要法ではなく、それを擣籥和合せる五字七字こそ其の要法であるとして、品と要との相について用捨を判じ給へるに外ならぬ。随つてこゝに法體の優劣を論ぜんとするが如きは誤りである。種脫判とは實にかくの如き意義を有するものである。

## 七

此故に種脫判は教觀相對の觀の重にあるのでこれを以て五重教相の第五に配するとせんか、五重教相本來の意義と合致しないばかりか、上述の如く「彼脫此種彼一品二半此題目五字」の文のみに捉はれて、或派の義の如く本門を以て、脫益の劣法教相也と判じ、妙法五字のみが文底觀心の要法だとして偏に其勝を誇るとせば、謂ゆる在世の衆は壽量品の座に眞の脫は得られずに終つたこととなる。何となれば文上文底を教觀とするは是なるも、これを脫種と分別せば、文上の如きは上にも言へる如く唯能化の化用妙事のみで直接に十界常住眞實相が顯はれてゐないから、それに終るとせば結局天台の法華經觀を出でず、本門を開いて又迹の理に皈る迹面本裏に墮することになるので、もしそうとすれば「眞實の斷證は壽量一品を開きし時（聞に即し證入）に限る」の金言も又上の「一品二半の外小邪未覆等」の聖語も殆んど無意義となり、かくて本迹相對までが其意義をなさぬことになる。故に第五重は必ず須く教觀相對といふべく、此教觀相對は在滅得道の依止・種脫二法の在處を詮顯する教相で、換言すれば第四重本門の正宗一品二半の上に立つる義判である。これによつてこそ五重教相の意味する「内外教學一般の中に、吾家の教學は如何なる地位價值を有するや」の義が明瞭となり、五重展轉從淺至深して本門觀心最勝の意義顯はるゝと共に、その觀心大教の重に宗旨教學の





切を開顯したる法界至上の重であり、換言すれば本佛久修業所得の甚深祕奥の境界を的指せるもので、在世在座の會衆が文上顯説の聞に卽して密に其絶對の境智に信解悟了味識證入し得たる重である。而してこれがそのまゝ是好良藥の妙法一大秘法として別付の正體とはなつてゐるのである。久成本佛釋尊の本因本果を別にして下種の妙法五字はあり得ない。若し然らばその一大秘法から別開する三秘中の本尊に豈に日蓮本佛義などを立て、これをしも觀心の本尊也下種の本尊也とすることそれ自體教觀種脱の兩判に於いて義に明ならざるに由るといはねばならぬ。加之教行證の三義約從の義に暗く、或は人情と義學を混淆して偏に愈々祖文を歪曲するに對しては、眞正學人の最も戒心すべき所である。

(昭和十三年聖滅會)



# 日蓮聖人遺文に於ける國神勸請義

望 月 歡 厚

## 一、緒 言

此の論は「日蓮聖人大曼荼羅に於ける國神勸請の座配」（大崎學報第九十二號所載）のつゞきとして起草した。讀者の併せ讀まんことを希望して緒言に代へる。

## 二、遺 文 の 列 示

二神勸請義を求むべく煩雜を顧みず關係遺文を年次を遂うて列舉しその意義を研討して見る。蓋し勸請意義を求むべき基礎であるからである。

（一）垂迹法門（康元年）神明は正直の者の頭に住給也、……今時の垂迹和光は是皆本地釋迦如來の化身也。（文）

此書には「大明神」の語もあるが未だ二神の名を出してゐない。一班的に神佛の本迹觀であつて、佛教一般の舊説を繼紹したに過ぎない。（遺文二七四、南都奏狀、山門奏狀等參照）又正直の頭に住むの思想は聖人の前後を通じて換らざるところで、「戒法門」（二七）に五戒を以て「萬物之母萬神之父」とすると相通じ、神を以て正とし徳と

するものである。この書、偽書の説あるも勸請義に關しては特別の意義を有たない。

- (2) 「立正安國論廣本」(文應元年三六七年) 法然聖人選擇現在也、以諸佛諸經法華經教主釋尊諸菩薩諸天天照大神正八幡等載捨閉閣拋之惡言其文顯然也。因茲聖人去國、善神捨所、天下飢渴世上疫病等。(文)(眞蹟在東京本圀寺)

遺文に於ける二神の名はこの書を以て最初とするやうである。但し廣本にのみあつて「安國論」(三八九)には「以諸佛諸經諸菩薩諸天等」載「捨閉閣拋」其文顯然也」となつてゐる。略本と廣本との成立問題と關聯して論ぜらるべきであるが、廣本を弘安年中の再治とすれば二神を出せるは當然のことであり、廣本を草案本とすればこの書を以て二神の最初とする。この點は後の再論に譲つて、所載の意を案ずれば、連文に「所詮國土泰平天下安穩自一人至萬民所好也所樂也、早止一闢提之施一切謗法之根……」の文によりて、二神を日本國家の守護、若くは正法法華擁護の神とするのである。

- (3) 「行者佛天守護鈔」(弘長二年四三〇年) 法華經をたもつ人をば、釋迦多寶十方の諸佛梵天帝釋日月四天龍神、日本守護天照大神八幡大菩薩、人の眼を於しむがごとく……守り於ぼしめし……(文)

此書は法華持者の守護をいふのであるが、二神に特に日本守護の四字を置きたるに注目すべきである。安國論廣本を弘安の再治とすれば、二神の名はこの書を最初とし且つ二神の神格を決定した最初である。併しこの書にも系年に異説があつて、錄外十五には文永元年に系けてある。しかし次の月水書も文永元年に系年すれば、全年全月全日のこの書を以て最初とするに防げない。但し遺文錄の系年に依れば弘長三年の持妙法華問答鈔(四七五)に八幡大菩薩、松尾大明神の名が出てゐるが、系年に就ては建治二年說、弘安三年說があつて決定的でない。大旨にさしたる關係がないから略して引かない。行者守護鈔は既に伊豆流罪中教機時國鈔の後であるから二神守護の思



想も決して不合理とは考へられない。

- (4) 「月水書」(文永元年四八三) 日本國は神國也、此國の習として佛菩薩の垂迹不思議に經論にあひにぬ(る)事も多く侍る……此由を知らざる智者共、神は鬼神なれば敬ふべからずなど申す強義を申て多く檀那を損ずる事ありと見て候也。(文)」

已下に此の國に生れたるもの神明に背くべからざる由を述べてゐる。垂迹云々は神佛の關係を述べたものではあるが明に本迹をいはない。此由を知らざる智者共とは、念佛の徒を指すことは、念佛者追放宣狀事(二七四)に南都奏狀を引いて「一葦如靈神事、右我朝本是神國也、百王承彼苗裔四海仰其加護、而專修之輩永不別神明、不論權化實類、不恐宗廟祖社、若憑神明墮魔界云云」等とあるによつて明である。聖人が法然の徒の神は鬼神也の説に同ぜずして「至權化垂迹者既是大聖也」の南都北嶺の舊義に隨つたことも明である。然るに我門の後輩が二神の所屬を論じて〇〇界に屬したのは祖意を失つた説である。この書に二神の名は出さないが「神國也」の語に聖人の國神觀を見るべきである。

- (5) 「六郎恒長御消息」(文永元年五一五) 三千餘社の大小の神祇も釋尊の御子息也、全非阿彌陀佛子也。(文)」

譬喻品の今此三界の文を釋して日本國の一切は釋迦の子也と釋し、阿彌陀に對して釋尊本師を主張したのであつて、二神の名を出さず、又二神の勸請義を論じたのではない。但し一般的に佛神本迹の舊説の土台に立つことは勿論である。

- (6) 「女人成佛鈔」(文永二年五三一)」

此書に慧心僧都の加茂參籠とその時の明神御託宣とを載せてゐる。即ち法華經守護の加茂明神である。

(7)〔聖愚問答鈔(文永四年  
五五四)〕

然るを日本は神國として伊奘諾伊奘冊尊此國を作り天照大神垂迹御坐して御裳濯河の流れ久して今にたえず。豈此國に生を受けて此邪義を用ゆべきや。(文)

又、二所三島熊野羽黑天照太神八幡大菩薩此等の名を一遍も唱ん人は、……無間には於つとも往生すべからずと云云。(文)

前文は法然の禮拜雜行を破する文、次文は唱名雜行を破する文である。神國、垂迹等の文によつて月水書の對念佛破と全同であつて佛神本迹義が顯れてゐる。但し二神の名は行者佛天守護鈔に次ぐものである。然しこの書は系年と俱に眞僞に異論あつて一定でない。諸神の順列に注意を要するものがある。所載の意義は日本守護の善神としてある。

(8)〔安國論御勘由來(文永五年  
六〇五)〕

故叡山守護天照大神正八幡宮山王七社國中守護諸大善神不<sub>レ</sub>衰<sub>二</sub>法味<sub>一</sub>失<sub>二</sub>威光<sub>一</sub>捨<sub>二</sub>國土<sub>一</sub>去了。(文)〔眞蹟在正中山〕

眞蹟現存の御書としては安國論廣本を除いてはこの書を以て二神所載の最初とする。此書は法然大日の念禪に對して枝山の「法華眞言」を以て正法として神佛の法味とし、これを以て國土守護の正法とする。故に「佛神彌作<sub>二</sub>瞋恚<sub>一</sub>破<sub>二</sub>壞國土<sub>一</sub>事無<sub>レ</sub>疑者也」とも「爲<sub>レ</sub>國爲<sub>レ</sub>法爲<sub>レ</sub>人」ともいはれてゐる。枝山守護の二神と記載されたるのも此の意によるもので、日本守護といふ(3)行者守護鈔(前出)と同意である。次の(9)宿屋書には明に日本守護とあるを照合すべきである。又善神捨國については、後來聖人門下の大なる異義とはなつたが、正直の頭に神宿るといふ一般的意義(垂迹法門一二八)「法華經の行者日本國に有るならば其所に栖み給べし」(60)諫曉八幡鈔二〇四〇(11)〔法門可申書六三一同意〕特殊的信仰から見、特に日本國の本尊建立の國土、閻浮廣布の根源たる國



土開顯の意義よりすれば、捨國を強調するは國土警覺の聖意であると斷するに躊躇しない。

(9)〔宿屋入道許御狀(文永五年 六〇七)〕念佛宗與禪宗等有御歸依之故、日本守護諸大善神作眞患所起災也。(文)

前文(8)御勘由來は法然大日を擧げ、この書はその所弘の念禪二宗を出す、彼には叡山守護といひ、是には日本守護といひ、彼には二神の名を出し、これにはたゞ諸大善神といふ。彼此比較して聖意の同じきを知るべきである。

(10)〔與北條時宗書(文永五年 六〇七)〕

此書眞偽の論はあるが、一乘擁護の神明とし、日本を神國とし、法華經を以て食とし、正直を以て力とするを神としてゐる。但し二神の名を出さず一般的に「天神七代地神五代神神其外諸天善神」とある。別段論すべき點を見ない。尙この書已下十通は常に同一價值に於て考へられるのであるが、與平左衛門尉賴綱書(六一〇)には「宜蒙善神之擁護者也」とあり、與北條彌源太書(六一一)には「天照大神八幡大菩薩等放此國故自大蒙古國牒狀來歟」とある。但し已下の諸寺諸僧に與へられた七通には神明に關する記載がないのが注目される。

(11) 法門可被申様之事(文永六年 六三一) 日本一州上下萬人一人もなく謗法なれば、大梵天王帝桓竝天照大神等、隣國の聖

人に仰せつけられて謗法をためさんとせらるゝか。例せば國民たりし清盛入道王法をかたぶけたてまつり、結局は山王大佛殿をやきはらいしかば、天照大神正八幡山王等よりきさせ給て、源賴義が末賴朝に仰下て平家をほろぼされて國土安穩なりき、……世間の上下萬人云、八幡大菩薩は正直の頂にやどり給、別のすみかなし等云云。世間に正直の人なければ大菩薩のすみかまします。又佛法の中に法華經計こそ正直の御經にては於はしませ。法華經の行者なければ大菩薩の御すみか於はせざるか。但日本國には日蓮一人計こそ世間出世正直の者にては候へ……もししからば八幡大菩薩は日蓮が頂をはなれさせ給てはいづれの人の頂にかすみ給はん。(文)(眞蹟在中山)

此鈔には日本守護、正法守護、法華經行者守護の義が主流をなしてゐる。(8)御勘由來(六〇五)の下に述べた如く、捨國は日本守護の反顯的強調である。又世出二道に涉つて正直の頂に棲む八幡大菩薩觀は聖人に於ては一貫して變らざる神觀である。

- (12)〔善無畏三藏鈔(文永七年六四二)〕、天照大神正八幡宮等は我國の本主也、迹化の後神と顯れさせ給ふ。此神にそむく人此國の主となるべからず。されば天照大神を鏡にうつし奉りて内侍所と號す。八幡大菩薩に勅使有て物申あはさせ給き。(文)

日本國の本主としての二神を垂迹神とせられてゐる。この文段は釋尊の三徳を主張する中の主徳の段下である。

- (13)〔眞言七重勝劣(文永七年六五九)〕天照大神爲一座、八幡大菩薩爲第二座、是より已下の神は三千二百三十二社也(文)神の次第を明したのである。社數については餘所の御書には三千一百三十二社とある。(一二七・一九三・二〇三・二〇五七)三千二百三十二社とあるは此書だけのやうである。

- (14)〔秋元殿御返事(文永八年六六七)〕正月は妙の一字のまつり天照大神を歳之神とす。(文)

天照太神を主神とし、次には「梵天帝釋日月四天王等」を列してゐる。歳神としての義は三十番神思想と關係あるものとも考へられる。

- (15)〔四條金吾女房御書(文永八年六七二)〕天照大神は玉をそさのをのみことにさづけて玉の如くの子をまふけたり。然間日の神我子となづけたり。さてこそ正哉吾勝とは名けたれ。(文)

此書には例話として國神を出したのではあるが又、日月—蓮華—日蓮—天照—日神の神秘的關聯の暗示のあるによつて神秘的因縁釋の最初をこの御書に置き得るであらう。



(16)〔月滿御前御書(文永八年 六七二)〕此國の主八幡大菩薩は卯月八日にうまれさせ給ふ。娑婆世界の教主釋尊も又卯月八日に御誕生なりき。今の童女又月は替れども八日に生まれ給ふ、釋尊八幡のうまれ替りとや申さん、日蓮は凡夫なれば能くは知ず、……念頃に十羅刹女天照太神等にも申て候。(文)

前書は懷胎の報によつて符を與へ、今書は安産を聞いて喜を敍べてゐる。前書に例話的に太神の名を出し、今書には八幡を主として同じく神秘的な説示を爲してゐる。然し後段に太神を擧げたのによつて、神の次第はあつても二神について同様に考へてゐられたことは明である。即ち國神として更に神秘的因縁的意義が加へられて來たのである。

(17)〔一昨日御書(文永八年 六八八)〕是偏爲身不述之、爲君爲佛爲神爲一切衆生所令言上<sub>レ</sub>也。(文)  
特に爲神の一句は(9)(10)等の日本守護の諸大善神と相應し、正しくは天八の二神を指すものである。

(18)〔此經難持十三箇秘訣(文永八年 六九六)〕佛者本地神者垂迹故。(文)  
一般的に佛本神迹をいふのみ。

(19)〔開目鈔(文永九年 七五四)〕天照大神正八幡山王等諸守護の諸大善神も法味をなめざるか、國中を去り給かの故に。惡鬼便を得て國すでに破れなんとす。(文)

又、(七七四)〔諸天等の守護神は佛前の御誓言あり、法華經の行者にはさる(獲)になりとも……(文)(眞蹟焼失)〕前文は日本國家守護の善神として二神山王等を擧げたれども、次の文よりすればその守護神は即ち法華正法の行者を守護する諸大善神である。聖人に於ては國神たると正法守護の善神たるとは同一義であるのである。

(20)〔眞言諸宗違目(文永九年 八五八)〕如是大惡梵釋猶難防欺、何況日本守護○神也。(文)

梵釋と國神との大小を相對してゐる。しかし國神即行者守護なる點は、次の「必假心固神守即強」と引くによつて明である。

- (21)〔如來滅後五百歲始觀心本尊鈔（文永九年九四八）〕此時地涌千界出現、本門釋尊爲脇士、一閻浮提第一本尊可立此國。（文）（眞蹟在中山）

引文に止めてその意義の檢討は後章に譲る。

- (22)〔諸法實相鈔（文永十年九六〇）〕釋迦佛多寶佛十方の諸佛菩薩、天神七代地神五代の神々、鬼子母神十羅刹女、四大天王梵天帝釋閻魔法王、………（文）

行者守護の諸佛諸神を列ねたのであるが、諸神の列次が他と異つてゐる。多くは梵天帝釋日月四天の成句を爲し、その次下到天八の二神等國神を列してゐる。又「鬼子母神十羅刹女」と併せ出した御書はこの書の外、經王書（九八六）日女御前御返事（一六二五）に二例あり、下山消息（一五八七）には逆に「十羅刹女鬼子母神」とある。その他は殆んど十羅刹女のみを出すやうである。日女鈔（一七三〇）を參照せよ。

- (23)〔顯佛未來記（文永十年九七五）〕諸天善神竝地涌千界等菩薩守護法華行者、此人得守護之力以本門本尊妙法蓮華經五字令廣宣流布於閻浮提。（文）

前引本尊鈔と全同の意義を有し、加ふるに諸天善神の守護を明瞭に表はしてゐる。後論に譲る。

- (24)〔彌源太殿御返事（文永二年一〇三四）〕日蓮は日本國の中には安州のものなり。總じて彼國は天照大神のすみそめ給し國なりといへり。かしこにして日本國をさぐり出し給ふ。あはの國御くりやなり。しかも此國の一切衆生の慈父悲母なり。かゝるいみじき國なれば定て故ぞ候らん。いかなる宿習にてや候らん。日蓮又彼國に生れたり。第一の果報



なるなり。(文)」

(15)の四條書、(16)の月滿書に見えたる神祕的因縁釋はこの書に來つて更に明瞭に本因縁の解釋を遂げ來つて日本―日蓮―天照の關係に於て本尊鈔・顯佛記等に顯れたる本國土と結合さるべきものとなつた。即ち是れを本因縁的解釋と呼ぶべきものであらう。法華取要鈔の一篇の旨趣は又この一貫の理路の中に收めらるべきである。

(25)「異體同心事(文永二年 一〇五五) 一一に承りて日天にも大神にも申上て候ぞ。(文)」

(26)「四條金吾殿女房御返事(文永二年 一〇八二) 釋迦佛法華經日天の御まへに申上候。(文)(眞蹟斷片)」

(27)「富木殿御返事(文永二年 一〇八七) 此帷をきて日天の御前にして此子細を申上ば、定めて釋梵諸天しろしめすべし。(文)

(眞蹟在中山)」

上引の三文中の(25)は年次について異論あるも文永一一より一二、建治元年頃の御書とするに(26)(27)の二書と類同するに差支はない。三書は要するに日天の信仰である。(24)彌源太書の天照太神の本因縁に約する神觀と、後に明瞭なる撰時鈔の日天、神國王書の日神、報恩鈔の天照―日本―日種の信仰と比較するとき文永九年の本尊鈔より次第に本因縁的、本國土的、國神觀の次第に明瞭なるを見出すことが出来るであらう。今上引の三書を日天信仰の方面よりする擡頭と見たいのである。委説は後に譲る。尙次引の新尼書も比較すべきである。

(28)「新尼御前御返事(文永二年 一〇九二) 安房國東條郷邊國なれども日本國の中心のごとし。其故は天照大神跡を垂れ給へり。……日蓮一闍浮提の内日本國安房國東條郡に始て此の正法を弘通し始たり。(文)」

安房東條と聖人、天照太神と東條との因縁は正法弘通の本國土としての「第一本尊可立此國」(本尊鈔)「佛法必可出自東土日本」(顯佛記)「本門三法門建立之」(取要鈔)といふ所以である。

(29) 「兄弟鈔」(文永一二年) 應神天王と申す今の八幡大菩薩これなり。(文) (眞蹟散在玉澤池上等) 池上兄弟への教訓として、二皇子の例話が擧げられてゐる。

(30) 「撰時鈔」(建治元年) 日本國と申は天照大神の日天にてましますゆへなり。(文) (眞蹟在玉澤) 慈覺の日輪を射るの夢を破して、日本―日天―天照―日種の本因縁信仰を披瀝されてゐる。即ち日本守護の太神である。

(31) 「高橋入道御返事」(建治元年) 隱岐法皇は人王八十二代神武よりは二千餘年、天照大神入かわらせ給て人王とならせ給。(文)

又、(一二八五) 「日本國の王となる人は天照大神の御魂の入かわらせ給王也。(文)」守護といはんよりは國の主としての大神である。

(32) 「乙御前御消息」(建治元年) 利生あるならば、今の八幡大菩薩といははるるやうにいはうべし。(文) 八幡大菩薩の利生顯著を祝はれた文意である。正八幡は當代に於ては、大神を除いては尤も威光勢力強盛の神とせられてゐる。

(33) 「神國王御書」(建治元年) 地神五代の第一は天照大神伊勢大神宮日神是也。(文)

又(一三四九)、「第十六は應神天皇仲哀神功御子今の八幡大菩薩也。(文) (眞蹟在京妙顯寺)」

右二文は説明以外に意義はないが「日の神」の語に注意を要する。撰時鈔(一二三三)と同意である。

又(一三五三)、「神と申は、又國々の國主等の崩去し給へるを生身のごとくあがめ給う。此又國王國人のための父母也主君也師匠也、片時もそむかば國安穩なるべからず。(文)」



又(一三五四)、「其上神は又第一天照大神、第二八幡大菩薩、第三は山王等の三千餘社、晝夜に我國をまほり朝夕に國家を見そなわし給……其上八幡大菩薩は殊に天王守護の大願あり。(文)」

又(一三六二)、「天照大神の内侍所も八幡大菩薩の百王守護の御ちかいもいかで叶はせ給べき。(文)」

已上の三文何れも日本守護の二神を出す意趣である。但し大神を國家の本主神とし、大菩薩を殊に國王守護の神とする。國家の主神と國王守護の神明とに分つのである。此書全體の旨趣は我國土を正法流布佛神守護の國となし、それにも拘らず王法に盛衰ある源由を究めて正法に違背するに在りとする。然れどもその究極の所詮は聖人の法華經の行者なるを顯し、佛神の必ず守護あるべきを促されたのであるから、その間の推論は要するに正法守護の神佛たるを顯すにある。故に「三界の諸王は皆此の釋迦佛より分ち給ひて諸國の惣領別領等の主となし給へり」(一三五三)の大小分別は所詮の旨趣ではなくて能詮の論道である。本體的論述ではあるが、目的論旨ではない。此點種々御振舞鈔諫曉八幡鈔等と同致の御書として拜すべきである。併し本因縁的解釋としての神觀と背馳するものではない。

(34) 「種々御振舞御書(建治二年一三八六) 天照大神正八幡宮の僧について、日本國のたすかるべき事を御計のあるかとをわらべきに。(文)」

これは日本守護の神明としての文である。

又(一三九二)、「八幡大菩薩に最後に申べき事ありとて馬よりさしをりて高聲に申やう。いかに八幡大菩薩はまことの神か……まづ天照大神正八幡こそ……(文)」

この段は法華經守護の大菩薩としての文である。

又(一四〇四)、「天照大神正八幡などと申は此國には重すけれども梵釋日月四天に對すれば〇神ぞかし。(文)」梵釋等と對比して大小を判じてゐる。これは佛神本迹説と殊り、法華經會座の列衆の高下(是二)大小中邊の國の差別に伴ふ上下(是二)の區別である。然しながらこの區別は本迹説と同じく何等か特殊の所論を強調する時常に用ひらるゝところである。この書及神國王書の如き、神明の大小を分ちこれによつて行者の守護若くは日本守護を要請せんとするのである。

又(一四〇四)、「天照大神正八幡宮も頭をかたづけ、(文)」

法華正法行者の守護を促す文意である。

又(一四〇七)、「隱岐法皇は天子也、權大夫殿は民ぞかし。子の親をあだまをば天照大神うけ給なんや。所從が主君を敵とせんをば正八幡は御用あるべしや。(文)」

大義を明にし日本守護の本義を説く、この書成立について議論の存するあるも、その二神觀は神國王書、諫曉八幡鈔等と同系に屬し、特殊の所顯を必要とするが故に、その論述に神の大小を云云するのである。

(35) 「光日房御書(建治二年一四一六) 梵天帝釋日月四天はいかになり給ぬるやらん。天照大神正八幡宮はこの國にをはせぬか。(文)」

法華行者守護と日本守護とを兼含した文意であつて、御振舞鈔の如く大小等の價值分別はない。

(36) 「南條殿御返事(建治二年一四三六) 八幡大菩薩は日本第十六の王。本地は靈山淨土に法華經をとかせ給ひし教主釋尊なり。(文) (眞蹟在大石寺)」

本迹説にして正法守護を兼含する。但し大小上下の觀念がないから在滅相對の本迹といふべきであらう。回向功



德鈔に「我滅度後の末法の中に於て大明神と顯れて衆生を利益すべし。……されは明神と申すは諸佛如來の御神也」といふと同一意義であらう。

(37)〔報恩鈔(建治二年 一四九一)〕神をば天照という、國をば日本という。又教主釋尊をば日種と申す。(文)(眞蹟燒亡)

前に(30)撰時鈔を引けり、今この鈔を引く前後相映すべし。

(38)〔四信五品抄(建治三年 一五四三)〕天照大神正八幡等久住守護神失力、梵帝四天去國已爲成亡國。(文)(眞蹟在正中山)

日本久住の守護神としての二神は梵釋に超えてゐるのである。「佛法漸廢王法次第衰」と説く聖人は、やがて王佛冥合、廣宣流布を確信する聖人であると知らば、「失力」、「去國」は一旦の警策であることは勿論である。

(39)〔四條金吾殿御返事(建治三年 一五四七)〕天照大神正八幡山王等に一一に御いのりありき。(文)

眞言天台僧等の承久の祈禱を敍した文である。

(40)〔下山御消息(建治三年 一五六四)〕今生には守護國土の天照大神正八幡等にすてられ。(文)

又(一五六九)、「此國既に梵釋日月四天王等の諸天にも捨てられ、守護の諸天善神も還て大怨敵となり。(文)」

又(一五七五)、「御起請文を見るに梵釋四天天照大神正八幡等を書のせたてまつる。(文)」

又(一五八八)、「日本守護の天照大神正八幡等もいかでかかゝる國をばたすけ給べき……日本國の諸神ども四天王にいましめられてやあるらん。(文)」

上掲の四文、その骨子は守護國土の二神である。第二は梵釋も亦守護日本の神である。但し第四文の如く大小その威神力を異にすと考へられる。併し第三文の貞永式目の起請文を出して聖人が特に起請文になき天照大神を擧げて、二所・三島・天満等を略されたのは、當代の鎌倉武家等の過誤を訂正し、日本最高の神として天照大神を尊崇

された眞意を知らなければならぬ。又「梵天帝釋四大天王」について「日本六十餘州大小神祇」を勸請せる式目の敍列は當代の常識的順序であつて、聖人も亦恒にこの敍列を取られたが、必ず「日月二天」を四天王の上に添加勸請された聖人の意圖は、又撰時報恩等の御書に顯著なる、日本の特質を顯し以て王佛の冥合を表顯せらるゝにありと考察される。

(41)〔賴基陳狀(建治三年 一六一四)〕天照大神正八幡百王百代の御誓やぶれて……天照大神正八幡も力及給はず。(文)

梵釋との大小觀、二神の日本守護、正法治國、王佛の盛衰が說かれてゐる。

(42)〔彌三郎殿御返事(建治三年 一六二〇)〕今此三界……此文の意は今此日本國は釋迦佛の御領也。天照大神八幡大菩薩神武

天皇等の一切の神國主竝に萬民までも釋迦佛の御所領の内。(文)

慈悲救護の釋迦は精神的救済主である。これを以て不忠といひ、不遜といふ非難ありとせば、あまりの狹量である。況んやこの書は彌陀の無縁を主張するを眼目とするに於てをやである。次文に「日本國にすみながら」云云の文によつても聖人の眞意大忠にあるは明瞭であらう。

(43)〔日女御前御返事(建治三年 一六二五)〕されば首題の五字は中央にかかり、四大天王は寶塔の四方に坐し。釋迦多寶本化

の四菩薩肩を竝べ、普賢文殊等舍利弗目連等坐を屈し、日天月天第六天の魔王龍王阿修羅、其外不動愛染は南北の二方に陳を取り。惡逆の達多愚癡の龍女一座をはり。三千世界の人の壽命を奪ふ惡鬼たる鬼子母神十羅刹女等。加之日本國の守護神たる天照大神八幡大菩薩天神七代地神五代の神々。總じて大小神祇等體の神つらなる其餘の用の神豈にもるべきや。……此等の佛菩薩大聖等總じて序品列坐の二界八番の雜衆等一人もれず。此御本尊の中に住し給ひ、妙法五字の光明にてらされて本有の尊形となる是を本尊とは申也。(文)



直接本尊中の國神を説明せる御書として第一に推さねばならぬ御書である。よつて委細に考察して見るに、冒頭の「首題の五字は中央にかゝり」は中尊を標高し第一に掲げたのであるが、第二句に「四大天王は寶塔の四方に坐し」とあるは、大に他と趣を異にする。寧ろ第三句已下に在るべきであるのに、中尊に續いて第二句に据えたのは四大天王は釋迦多寶等の十界諸尊の勸請と別趣あるを思はしめる。第三句已下佛界、本化、迹化、二乘、天龍、修羅を順次これを列ね、「其外不動愛染は」の一句は稍意趣を別にし、次で地獄の提婆、畜生の龍王を列し、更に餓鬼界たるべき鬼十二神を出す、地獄畜生餓鬼の列次の不順なるは鬼十二神の本尊上の位置の不順なると照合して勸請意趣に別意あるを思はしむる。最後に「日本國の守護神たる天照大神八幡大菩薩」を出すは、山川師もいはるゝ如く、十界勸請の外に明に「日本國守護」の勸請意趣を有するものである。本書列尊の中にその勸請意趣を明示されたのは國神のみである。鬼十二神の「三千世界の人の壽命を奪ふ」とあるは勸請意趣ではない。たゞ列衆の中に人界を欠くが故に「加之」の以下を以てこれに充てると考へられないこともないが、「其外」「加之」の簡別の語は不動愛染・天八兩神の勸請に別趣あるものを見るべきであらう。人界は二界八番中に攝在するのであらう。本尊全體が悉く本有尊形として妙法光明裏の本佛體なることは勿論であつて、この義を以て二神の國神としての勸請義を無視せんとするは誤りである。

- (44) 「三澤鈔」(建治四年一七〇六)神は所從なり法華經は主君なり八幡大菩薩の百王のちかいもやぶれて。(文)(眞蹟在京妙覺寺)
- (33) 神國王書(一三五三)、(34) 振舞鈔(一四〇四)等と同例にして、「法華經」に釋迦佛を置換へ得る文意であらう。併しこの鈔も神佛の參詣の前後を指摘して信仰の有無を責められた御書であるから意義に於ては特例に屬するものである。

(45)〔檀越某御返事〕(弘安元年 一七一八) 願くは法華經のゆへに國主にあだまれて今度生死をはなれ候ばや。天照大神正八幡日月帝釋梵天等の佛前の御ちかい今度心み候ばや。(文)(眞蹟正中山)

諸神の順位が常に梵天帝釋日月四天天照大神八幡大菩薩とある排列に殊るのは、前文の「國主にあだまれ」の文に對應して國神として先づ天八二神を列したのであらう。「佛前の誓」は、法華正法守護の義を表はしてゐるのである。

(46)〔窪尼御前御返事〕(弘安元年 一七二七) 日蓮はいやしけれども經は梵天帝釋日月四天天照大神八幡大菩薩のまほらせ給御經なれば。(文)(眞蹟上半分在保田妙本寺)

正法守護の諸神として排列の順序は一般例である。

(47)〔日女品々供養〕(弘安元年 一七三一) 三代の國王は心には佛法釋迦如來を信じまいらせ給ひてありしかども、外には國の禮にまかせて天照大神熊野山等を仰ぎまいらせさせ給ひしかども。(下略)(眞蹟斷片京本能寺)

國神として天照大神熊野權現を出すも、神佛の信を比較して信仰を勸進するを目的としてゐる。よつて神佛の輕重が稍強く表現されてゐる。

(48)〔治病大小權實違目〕(弘安元年 二一〇一) 王始て天照大神等の神を國々に崇めしかば疫病やみぬ。故に崇神天皇と申(文)(眞蹟在正中山)

弘安五年説もあるが今は弘安元年に従つて系年する。

(49)〔千日尼御前御返事〕(弘安元年 一七五五) 月氏漢土日本國のふるき神たちも皆其座につらなり給し神々なり。天照大神八幡大菩薩熊野すずか等の日本國の神々もあらそひ給べからず。(文)(眞蹟佐渡妙宣寺)



法華の最第一なることは如來の金言にして、その聽衆たる諸聖諸天の齊しく聽くところなりとの文意である。日本守護の神々を又同時に正法擁護の神なりとするのである。

(50)〔妙法比丘尼御返事（弘安元年一七七四）〕此日本國の一切衆生のためには釋迦佛は主なり師なり親なり。(文)〔

今此三界皆是我有の說意である。(33)神國王書の下往考。

又(一七七六)、「天照大神正八幡等の天神地祇十方の三寶にすてられ奉りて。(文)〔

又(一七七七)、「かゝる大科ある故に、天照大神正八幡等の天神地祇釋迦多寶十方の諸佛一同に大にとがめさせ給故に。(文)〔

二文は神佛俱に日本を守護し給ふ、正法を失ふが故に神佛の守を失ひ、又は戒責を蒙るとする。故に第一文は一般的意義であり第二第三の二文、即ち國家守護を當文の意義としなければならない。神佛の排列も此意からなされてゐる。

(51)〔日眼女造立釋迦佛御供養事（弘安二年一八三〇）〕御守書てまいらせ候。三界主釋尊一體三寸木像造立檀那日眼女……法

華經壽量品云或說己身或說佗身等云云。東方の善德佛中央の大日如來十方の諸佛過去の七佛三世の諸佛。上行菩薩等文殊師利舍利弗等。大梵天王第六天の魔王釋提桓因王日月天明星天北斗七星八萬四千の無量の諸星。阿修羅王天神地神山神海神宅神里神。一切世間の國々の主とある人。何れか教主釋尊ならざる。天照大神八幡大菩薩も其本地は教主釋尊也。例せば釋尊は天の一月諸佛菩薩等は萬水に浮る影なり。釋尊一體を造立する人は十方世界の諸佛を作り奉る人なり。……日本國と申は女人の國と申國也。天照大神と申せし女神のつきいだし給る島也。(文)〔この書は上に於ける二神の説明としては(48)日女鈔(一六二五)に次で直接的である。御守とは一種の漫茶羅で

あつたであらうことは疑へない。その勸請に於て佛、菩薩、二乘、諸天、修羅、神、人王の次第によつてゐる。

天照大神八幡大菩薩はその列順に於て稍別趣あるは文言によつて又明瞭である。然れども一括してその「本地は釋尊也」は一同に冠する意であることも確である。たゞ「何れか教主釋尊ならざる」と一度總括して更に二神の本迹を説けるは、二神の勸請意趣が前來の諸尊と殊りあるを表示されたのであると考ふるに無理はあるまい。殊に日眼女との關係に於てあるとは云へ、天照大神を特出して「日本國と申は女人の國」云云とある聖意は何等かの底意あるものと推察されるのである。故にこの書を以て本迹説のみによる十界羅列なりと論斷するは未だ祖意を得たるものではない。日女鈔の「本尊の光明」に同被すると此の書の「一月萬影」とは法體的一般的説明であつて、二神の特殊的因縁的勸請意趣は日女鈔の「加之」とこの書の特記と同義を成すものである。

(52)〔曾谷殿御返事（弘安二年一八七〇）〕天照大神はたましいをうしなつてうちごをまほらず。八幡大菩薩は威力よはくして國を守護せず、けつくは佗國の物とならむとす。（文）

又（一八七二）、〔今梵天帝釋日月四天天照大神八幡大菩薩、日本國の三千一百三十二社の大小のじんぎは過去の輪陀王のごとし（文）〕

前文は正法の味を嘗めずして、國神去るの意にして國家守護の二神、後文は輪陀王に比して正法行者守護の意である。聖人に於ては結句二意は一に歸するのである。

(53)〔聖人御難事（弘安二年一八七五）〕去建長五年太歲癸丑四月二十八日に、安房國長狹郡之内東條の郷今は郡也。天照大神の御くりや右大將家の立始給日本第二のみくりや、今は日本第一なり。此郡の内清澄寺と申寺諸佛坊の持佛堂の南面にして午時に此法門申はじめて今に二十七年弘安二年太歲己卯なり。（文）



又(一八七七)、「設い大鬼神のつける人なりとも日蓮をば梵釋日月四天等天照大神の守護し給ゆへにばつしがたかるべしと存給べし。(文)(眞蹟正中山)」

已上の二文は(24)彌源太書、(28)新尼書、(30)撰時抄等々の本因縁を説き、佛法西漸を説く御書と一連のものと考察すべし。

(54)〔中興入道御消息(弘安二年一九二三) 日蓮はいやしけれども所持の法華經を釋迦多寶十方の諸佛梵天帝釋日月四天龍神

天照大神八幡大菩薩、人の眼を眩(惜)しむがごとく……まほり於もんじ給ふゆへに。(文)〕

(52) 聖人御難事(一八七七)と同例。

(55)〔秋元御書(弘安三年一九三三) 天照大神正八幡に被捨給て。(文)〕

國神としての二神である。

(56)〔慈覺大師事(弘安三年一九四二) しかれば此等の人人は釋迦多寶十方の諸佛の大怨敵、梵しやく日月四天天照大神正八

幡大菩薩の御讎敵なりと見候ぞ。(文)(眞蹟正中山)〕

正法守護の神明である。

(57)〔上野殿母御前御返事(弘安三年一九九九) 此經を持つ人をば、いかでか天照大神八幡大菩薩富士千眼大菩薩すてさせ給

べきとたのもしき事也。(文)(眞蹟小泉、北山)〕

正法行者守護としてあるが、上野殿の所在地の關係を以て「富士千眼」を掲げ、淺間を特に「千眼」として帝釋に關係づけた點が注目される。

(58)〔四條金吾許御文(弘安五年二〇一一) 八幡大菩薩をば世間の智者愚者大體は阿彌陀佛の化身と申候ぞ……其實には釋迦

佛にて於はしまし候ぞ……我朝の守護神……八幡大菩薩の御誓は、月氏にては法華經を説て正直捨方便とならせ給ひ、日本國にしては正直の頂にやどらんと誓給ふ。……されば八幡大菩薩は不正直をにくみて天にのぼり給とも、法華經の行者を見ては争か其影をばをしみ給べき。(文)

國神義、本迹義、正法守護等の諸義が顯れ、神天上の義を論じて正法の存する處には神亦在りとせられてゐる。八幡宮の焼失に因みて書かれた御書で、天照大神の御名は出してゐない。

(59)〔智妙房御返事(弘安三年 二〇一六) 八幡大菩薩は……釋迦佛の化身と申事はたれの人かあらそいをなすべき。(文)(眞蹟正中山)〕

前引(57)四條書と同例八幡宮炎上に因んで神天上を説き、彌陀化身説を破し、正法守護を主張するものである。

(60)〔諫曉八幡鈔(弘安三年 二〇二一)(眞蹟在大石寺)〕

この書は前引の(58)智妙房御返事、(57)四條書と三書同趣、鎌倉八幡宮炎上に因つて、共に同年十二月、正法守護の八幡大菩薩なるを明にした御書である。全文を通讀する要があるから引文を略した。たゞ二三注意すべき點を舉ぐれば伊勢大神宮の名を一所に出して日本最高神として八幡宮の上位なるを明瞭にせられたこと。(二〇三〇)(是二)「八幡大菩薩は正法を力として王法を守護し給ける也」(二〇三二)の言が聖人の國神觀なること(是二)。八幡諫曉の義を説いて(二〇三三已下)大願成就にあるを示し(是三)。本迹觀が同體説にまで進みて從來の佛本神迹説已上にあるやに思はるゝ點(二〇三九)が此書も前引の智妙房御返事、四條書と同様である(是四)。三書俱に釋迦八幡の降誕入滅の月日の因縁を説ける(是五)。最後に佛法西漸を説いてその根本として「教主釋尊何ぞ八幡大菩薩と現じ給はざらんや」(二〇四〇)といへる(是六)。これ等の全體を通じて聖人の神觀が大國小國・大神小神



等の比較によつて國神を下すの意は決してそのまゝに受取るべきではなく、佛法西漸の國日本の最高神としてその大願成就を起請された底意を知悉しなければなるまい。所謂付文と元意とを明め眞意を誤る莫らんことを希ふものである。

(61)〔曾谷二郎入道殿御報(弘安四年二〇六〇) 天照大神八幡大菩薩爭守護此國。(文)〕

この外續集にも二三の御文がある。新池書(七)、八幡宮造營事(八〇)、現世無間御書(一五八)等である。但だ今は慧日天照御書(九四)の「釋迦佛の御名をば幼稚にては日種という。長大後異名をば慧日という。此國をば日本という。主をば天照申」の一文を上げ、(37)報恩鈔(一四九一)と同意であることを指摘するに止めやう。

### 三、教義的分野より

御遺文の個々について解説し、大體の國神觀を述べたが、更に二三の觀點から綜合的に考察して見たい。

(イ) 御書に於ける二神の初出

二神の御名の御書上に出づる最初を、(2)安國論廣本、(3)行者佛天守護鈔、(7)聖愚問答鈔の系年或は其他に異論あるを除いては、(8)安國論御勘由來の文永五年に置くを確實とする。これは全年の蒙古腰狀と關聯して大に意義が認められるが、根本的には宗祖の大廟社參の事實と併せ考へなければならぬ問題でもある。八幡社頭の諫曉は遺文によりて證明せられ、化導記等にも出てゐるが、大廟社參は別頭高僧傳已前にはあまり明瞭ではない。しかしこれによつて開宗已前にその事實無しと斷定し得ないことは勿論であり、社參の有無によつて宗祖の大神尊崇の事實を否定し得ないことも明瞭である。しかし史的に若くは教義的に研究すべき或ものを残すであらう。少くとも二神御名の初出

を確實にすることは宗祖の神觀の基礎を一層確實になし得るであらう。但し正元元年の念佛者追放宣狀事（二七五）に山門奏狀の「一向專修黨類向背神明不當事」に「所謂伊勢大神宮八幡加茂日吉春日等皆是釋迦藥師彌陀觀音等之示現也」の文を出すを數ふれば尙早期に御名を發見するのであるが、これは宗祖の御文ではないから區別するが妥當であらう。しかし當代の神觀として（40）下山御消息の下に論じた武家の國神觀と比較して興味がある。

（ロ） 彌陀本地説に對する本迹説

宗祖の神佛本迹説は、多くは彌陀本地説に對する釋迦本地説であつて、神に對してその本迹體用を主張するが正意ではない。特に文永五年御勘由來以前のそれは法然破の爲めに主張せられたる釋尊本地説である。（5）（58）等即ち彌陀に對する釋尊であつて、神に對する釋尊を主張するを目的としたのではない。この間の區別は大に必要である。又念佛者の神明否定に對して大に日本神國説を主張したのは（2）（4）（7）、法然に對する舊佛教徒に同じてはゐるが、（二七四參照）同時に宗祖が神國説を強調するところ、釋尊本地説を主張する眞意が彌陀對破にありといふことが證せられやう。但しこの意義に於て又この時代に於ては、應身釋迦に對する本迹觀であると考へるを至當とする。「正直の頭に宿る」云云の語は次第に變化して又一種の本迹説をなした。法華經—正直の關聯に於ける法身釋迦の意義をなしたのである。即ち正法正義の顯現を神明とする本迹説であつて、體用本迹觀として、前の彌陀本地説若くは釋尊本地説の在滅本迹觀と區別して考ふべきである。

（ハ） 善神拾國の意義

（8）安國論御勘由來の下に述べた如く、聖人の眞意は日本守護の反顯的強調に在る。安國論に於て「去國捨所」とある語が文永五年の御勘由來には、牒狀到來によつて威光失墜、國土捨了の確定となり、次第に國神の守護國家を強



調して弘安の夕に到るまで増と強訴を續けられたのである。

(二) 守護の意義

日本守護、正法守護(法華經守護)、法華行者守護、叡山守護等の表現が用ひられてゐるが、用語の不同はあるが、その相違は横の約従の相違か、或は縦の史的理由によつたので、聖人の眞意若くは目的に於ては同一であり同趣である。(3)(9)(52)(54)(58)等々照合。

(ホ) 因縁釋と本體釋

本迹觀に體用、在滅の二相對があること前述の如しであるが、兩者共に本體的解釋と見るべきである。即ち神の本質的説明、神格の本體的位置を規定するものである。しかしながら在滅相對或は在末相對の場合は應身佛を本地と考ふる所謂久近本迹に屬するものである。若し宗祖に於ける本體的解釋とせば、體用本迹相對して三身相即佛、本覺本地佛と相對して本迹をいふので法身格に對する本迹であるべきである。前述の如く宗祖の初頭に於ける本迹説は多くは彌陀對破の在滅本迹釋に外ならないものであるが、後來の解釋は同じく本迹の釋を用ひるも體用本迹に約する邊が強い。この二の本迹説は宗祖の御書上に初より終りまで一貫して發見し得るものであるが、これを以て直に宗祖の國神勸請の意義なりとするは早計である。それは從來の本迹觀の踏襲か或は一般的基礎的説述としてあつて決して宗祖の獨自のものでもなく、従つて又宗祖の國神勸請の意義でもない。舊來の本迹説を脱化した宗祖獨自の本迹説がある。これが即ち國神勸請の意義であつて、本因縁的信仰が即ちそれであると信ずる。一往は本迹釋と因縁釋と對立するものではあるが、宗祖の本因縁的解釋は即ち高次的本迹釋であるところに國神勸請の眞意義は發見されるであらう。

#### 四、歴史的觀點より

文永五年の頃より蒙古牒狀に伴ふ捨國の強調は、六年の法門可申に至つて弟子への特別書とはいへ謗國の呵責が御勘山來以上である。茲に宗祖の舊來の對法然の神國說、若くは在滅本迹說に變化を生ずる轉機がある。次で文永七八年の(15)四條書、(16)月滿書に見ゆる日神觀を兆として、佐渡流罪本地開顯本法宣揚の壇場を経て、(24)彌源太書に具體的因縁釋が明にされたのである。即ち文永十一年の(24)彌源太書に次で全年の(25)異體同心書、十二年の(26)四條書、(27)富木書、(28)新尼書等、佐渡顯正に續く文永十二年の御書は皆この發表である。これを開目、本尊兩鈔及び(23)顯佛記、法華取要鈔と連關して考ふるとき一貫の思想信仰の連鎖としか考へられない。佐渡より延山の初に涉る、顯正的發表は正く宗祖の國神觀の發表であると考へられる。他の理由によつて條件づけられないものである。換言すれば時代的條件、人的條件、教義的條件等々によつて説明の上に特殊を要する點の少しも無い純粹顯正であるといへる。故にこの間の御書を中心として勸請意義を決定するが尤も妥當である。況んや曼荼羅圖に隨伴してこの時に正しく説明解釋が施さるべきであるからである。曼荼羅の圖出に於ては圖樣構想構圖について實際的具體的問題として弘安に至つて一切が決定されたことは當然であるが、思想若くは解說として御遺文上の發表は、實際的圖出曼荼羅に先行するは當然である。又これが反面宗祖の曼荼羅上の圖様に年代的變化はあつても、本來二神の勸請位置は要請されたる特別位置の存したことを證明するものである。この點は曩に大崎學報誌上に指摘しておいた如くである。即ち文永八九年より十一年頃の御遺文上の二神の説明が、曼荼羅上に於ては遅れて弘安に到つてその勸請位置が決定されたのである。加之この思想解釋は建治弘安を通して(30)撰時鈔、(37)報恩鈔、(53)聖人御難事等



重要御書の大綱であることは特に注目される。

建治元年の(33)神國王書より「日の神」等の語はあるが、一面神の大小、上下、主従等を強言して、やゝ舊來に異るものがあるやうである。建治二年の(34)振舞抄、弘安三年の(60)諫曉八幡抄等がその一聯に屬する。九月元使を刎ね、十一月九州探題北條實政を派した、建治元年の末頃は、日本神家存亡を賭した秋であつた。聖人が、日本守護の善神に強訴し諫曉し來るは決して唐突のことではない。しかしながらこれを以て文永七八年より文永の終までの國神觀と背馳するものではない。たゞ文永末の顯正的態度と建治に入つて一面を流るゝ反顯的態度との相違に過ぎないのであらう。

## 五、文獻的見地より

大まかに五大部を中心として考察して見るに(2)立正安國論は且く廣本によるに二神の名を出し、念禪の神祇輕視を呵責せられ、(19)開目抄には二神を日本守護行者守護の善神と崇められてゐる。(30)撰時抄、(37)報恩抄の二抄に至つては明瞭に本因緣的解釋に於て完全に一致する。これを(21)本尊鈔の「可立此國」の國と併考へるに、國神は即ち本尊建立の國土の最高守護の二神として勸請されたといふことに疑義はない。其他の諸御書も五大部に湊合せしめ、本尊鈔に朝宗せしむるに於て、大曼荼羅に圖出せる二神勸請の意義は明らかではあるまいか。

彼の(43)日女鈔、(51)日眼女鈔の二書は直接的に大曼荼羅勸請の相を説明せる御書として或は五大部中心の勸請意義と合致せざるやに感ぜらるゝも、その條下に説明せる如く二書共に二神の勸請意義に別趣あるを示すもので、寧ろ二神の座配勸請に於ては特殊の表現を以て本佛十界體用本迹の説以外に本因緣的二神勸請の意義を明にしてゐること

は二書の下の解説を見られたい。況んや本尊鈔等五大部に對してこの二書を以て是非を決せんとするが如きは文獻的にも教義的にも又史的觀點よりするも不能の事に屬する。

之を要するに御書上に於て、やゝ不一致と感ぜらるゝ二神觀も究極するところ、大漫荼羅坐配に現れたる宗祖の圖顯せんとせられたる意義と全同であると信ずる。

(執筆中身邊多忙の事情と手痛の爲め本論後半段は全く草忙の筆、説明欠略、文意不通、幸に諒とせられんを希ふ。)

(昭和十三年十一月廿四日)



法主即管長制度確立讃辭

祖廟中心制度の現在と將來

鹽 出 孝 潤

身延を宗門の中心とすることが大聖人の御聖意であることは、御遺文の上にも歴史的事實の上にも既に明瞭である。それが滅後ある行懸りの爲め、諸山は外に向つて分張するに努め、中心に聚ることの出来ない事情に置かれた爲め、各山競ふて「我山尊し」と説き、果ては分裂の觀を呈するに至つた。明治の初期に於て、管長設置といふ政治的統制の必要上、舊稱一致派の諸山は一宗の下に集まつたが、それは行懸りの儘で寄合世帯を作つたに過ぎなかつた。心ある人々は御聖意に鑑み、且つ宗門の將來を思ふて中心確立の運動を起したが、無慘にも改革の叫びは因襲の勢力に壓倒された。而もそれには宗門の滅亡を思はしめる如き、醜い大紛擾を伴ふてゐた。然るに今回は、さういふ紛亂を繰返すことなく、祖廟中心制度の確立を告げたのは、眞に宗門の一大慶幸である。無論有

力なる耆宿の積年の苦心不斷の唱導が、この時運を促したに相違ないが、宗門の輿論が之に斂節共鳴したのは、實に尊むべき進歩であつた。殊に身延山側の諸機關が、一山の私情を忘れ門末の特權を抛つて、欣然即應された襟度に對しては敬意を表せざるを得ない。要するに、時が來たのだ。

この時の力に乗つて、更に大なる時を造らねばならぬ。

教學上の専門語に、從一出多從多歸一といふ語がある。一元より萬法を演繹し、萬法は一元に歸納する意である。この語は宇宙の活動運行をも説明すべき、哲學的意義を有つてゐる。今ま之を國家の上に見るに、我國の如きは一元の天皇より發せられる皇道が、萬民に施され、萬民よりする忠誠の赤心が、天皇の一元に集る。この關係が、不斷に活潑に持續する處に、健全にして鞏固なる國家の存在がある。明治維新によりて、一君萬民の體制が復古確立し、從一出多、從多歸一の關係が、緊密圓滑に行はれた結果として、今や、新東亞建設の一大使命を果し得る國運を將來したのである。身延と宗門の關係も、亦た從一出多、從多歸一でなくてはならぬ。身延の教令は、直ちに全宗門に行はれ、全宗門の信仰歸敬は、常に一身延に集中してこそ、宗運の發展伸張を期することが出来る。

去る九月十一日、初代の法主即管長として、望月日謙大僧正猊下御入山の儀を行はれた時、私は宗祖御廟前に感想を告白して、



身延は全宗門の起點であり、また終點である。

と言つた。身延は全宗門に號令する起點となり、全宗門は身延に力を集中する終點となる意味で、畢竟、從一出多從多歸一の關係と同意趣である。宗門は之を制度組織の上に、完全に實現しなくてはならぬ。

現行宗規第四條 管長ハ、總本山久遠寺住職タル人、政府ノ認可ヲ得テ其職ニ就クモノトス。

これが祖廟中心を理想する、法主即管長制度の條文である。無論宗門の歴史的一區劃をなす根本法規であつて、光華燦然たる金文字であるが、この條文の胎藏する精神を具現する宗則は、未だ整備されてない。頭だけはあるが胴體はまだ付てゐない。今後實際制度の制定に着手するのであるが、其處に多少の支障困難が伏在することが豫想される。それは宗門全體が從來の行懸りを捨て、中心確立を要望したのでなく、現在の宗門形態は依然として、昔日の行懸りを固持する情勢が多分に存在してゐる。

會て、宗會席上で云つた如く、新らしき二階を古屋の上に乗せた世に謂ふお神樂普請の如きもので、變則的の建築である。（併し變則でも斯う仕なくては間に合はぬのである）此上は新二階と下の古屋とを通ずる梯子段を設けるのであるが、それには下屋の一部を改造せねばならぬ。そこに多少の支障と困難が伴ふけれども、可成埃りを立てないで出來るだけ便利にする外はあるまい。唯だ

改造の程度については大に工夫を要する點である。宗内一部には大改造論者もあると聞くが、大改造を施すならば寧ろ全部新築する方がよい。唯だ現在宗門は之を許さぬ事情もあることを思ひ、可及的理想に近い制度の樹立に努力すべきである。

法主即管長制度に宿る中心確立の精神を飽迄尊重し、今後あらゆる機會にこれが強化擴充を計り以て宗門の自覺を促し、完全に従一出多従多歸一の宗門を實現して、宗祖の御聖意に副ひ奉る日の、一日も速かならんことを念願して已まぬ。

## 法國冥合の現證

柴 田 一 能

### 一、新制度の將來と豫兆

祖廟中心制度の確立に對する慶讃の辭並に感想の一端は、教報七月號「中心制度確立奉告大慶典



記念號」の誌上に禿筆を馳せた通りで、大方讀者の電覽を得たことを蔭ながら光榮と存じて居つた處、又々棲神編輯局から「法主即管長記念號」に何か感想を寄稿せよとの、有りがたい仰せを蒙つたのであるが、既に盛大な奉告大慶典も無事に済み、十月お會式月の二十六日午前十時より、宗務院樓上の大廣間に登壇を築いて、漢口陷落祈願の國禱會を修行する機會を以て、新制度によつて選舉當選せられた新管長としての望月法主猥下並に新總監鹽出孝潤師の就任祝賀の宴が開かれる豫定であつた所、武漢三鎮の攻略に向つた皇軍の快速部隊は、文字通り早や漢口の一部に入城したと云ふニュースが入つた騒ぎに、當日俄かに立看板を貼りかへて「漢口入城祝賀會」と早替りをさせたなどは、是亦快速的臨機の所置であると感服した。併し東京府下三百の寺院並に近縣本山や有志寺院等無慮五百の大衆が、雲の如く集まつたのは、近年稀に見る所であると、風評された程の盛會であつたので、新管長大導師の下に嚴修された國禱會の木劍の音にも膏が乗り、讀誦の聲にも潑刺たる生氣が漲つて居つた。特に目立つたのは大本山池上本門寺酒井貫主を始め近縣各本山の貫主方が、總動員の姿でズラリと座を並べられた光景は、全く空前の事であつて、法主即管長制度充實の將來に何物をか齎らすべき自然法爾の前兆ではあるまいかと、第六感に響いたのである。

## 二、新制度議決の瞬間を追懷して

「法主即管長」といふ標語を強調して、宗門人の注意を此の一點に集注せしめ、明治廿一年の諮問

總會當時に於ける颱風的——爆彈的スローガンであつた「廢本合末」に引火させないやうにと、人に知れぬ苦心焦慮は、恐らく當局首脳部以外には知る人としてはなかりけりであつたらうと思ふ。苦心は決して無駄ではなかつた。第三十三宗會議場は「法主即管長論」「管長即法主論」との論戦で火花を散らせ、合末も廢本などといふ怖ろしい機雷には觸れないで、ゲンムと軌道に乗つて行つた。増田議長満堂の空氣が法主即管長論者に有利なりと看るや、機敏とや言はん、老巧とや名けん、管長即法主論者に一言容喙の遑さへ與へず、電光石火の採決「原案賛成絶對多數」と宣告した。吉倉議員の満場總起立玄題三唱の緊急動議に、反對論者も我を忘れて起立し、聲高く唱和した風景は全く人間業ではないと感ぜられた。冷靜に立還つて之を考へて見ると、是亦新制度強化の前途に一種の暗示を與へるかの如く感ぜられたのである。

### 三、根本的宗門機構の再建

現行宗門の機構は本末制度であつて、總大五山に三十九箇本山、總計四十四箇本山の配下に三千六百の末寺を分轄しつゝあつて、法制上の祖廟中心は成立したとは言へ、内容に於ては何等の變革もなく新味も何もないのである。祖廟を中心とする身延は同時に宗門の中心となり、祖山は宗門に解放されたが三千の末寺を分擔して居る四大本山と三十九箇本山は舊態依然として存續して居るの



である。宗門唯一の總本山とは言ひながら、實はその末寺たる五百餘箇寺に擁立されて居る一本山に過ぎなかつたのが、茲に一躍全宗門の身延となつたのは可いが、同時に是迄の五百有餘の末寺は何うなるのか、本末制の上に立つてゐる以上、本山には末寺がなければならず、末寺には又本山がなければならぬ。勢の然らしむる所、怖いから恐ろしいからと云つて百年河清を俟つてゐる譯には行かない。祖廟中心制の内容充實を計ると共に自餘の四十三本山の發展をも遂げ云云といふ慶讃の辭を寄せた大徳もあつたようであるが、果して兩立するであらうか。明治維新以後に於ける日本帝國の隆々たる、文化的發展は、一に徳川氏の太政奉還、——大小名の藩籍奉還の結果に歸せねばならぬ事實を見れば、奚に宗門新制度の行くべき道を示唆されてゐるではないか。斯る根本機構から再建して掛らねば、眞實大宗門としての進展は到底實現することは不可能と信するのである。世界的日本長期建設の途上にある日本國民——別して末法應時の救世教を擁しつゝある宗門人は、本山末寺俱に深刻なる自己檢討を行ひ、切角樹立せる法主即管長の時代適應の新制度をして看板倒れに委せてはならない。

#### 四、祖廟の備整と奉仕會の責務

以上は主として新制度の完成に向つて宗門人の執るべき精神的覺悟態度に關する卑見であるが、

第二には斯の如く全宗門人の精神的統一の目標たるべき身延西谷祖廟の改修備整の事業であつて、時局の然らしむる所、僅かに岡山縣下道俗の祖廟參道改修、大阪府下道俗の常經殿新築の分擔に止り、而も之が實行は今次事變の終結を竣ねばならぬ停頓の狀勢に餘儀なくせられて居る始末で、祖廟奉仕會の前面に横はる幾多實行上の難關を想へば、實以て氣も遠くなるやうに感せられるのであるが、如何なる障礙が起らうとも乗りかゝつた以上碼頭の岸壁に着くまでは進航を繼續せねばならぬ。

## 五、歴史的最後の門末會と其成果

折柄配達し來つた教學新聞を見ると去る九月十日に亘つて第十三回臨時門末議會が總本山舊書院で開かれ、新制度に伴ふ同山々規の改正に就て慎重審議が行はれた模様で、豫而宗務院當局と山務當局との間に煉り上げた「總本山久遠寺護持規則綱領」が提出され、殆んど無修正で通過したとの報道を得た。同規則は十五箇條より成り、(一)總本山、(二)久遠寺住職、(三)會議、(四)山務役員、(五)會計の五要項に關する規定である。一寸目新らしく感せられるのは「祖山會」の新設であつて、久遠寺住職は祖山會の協賛を経て山規を施行することゝなり、該會は祖山會議員を以て組織し久遠寺住職之を任命すとあつて、末寺中から互選せられた者、宗會議員中から互選せられ



た者及び宗門に功績ある者から特選され、任期は四年となつて居る。つまり是迄の門末會に代り一般宗門的となり、従つて従來の常置會も同様擴大した畑から擧げられる順序となり、是迄の執事長は「總務」と改稱し、宗機參議會で銓衡した候補者中から、管長の任命で披擢されることとなり、歳入歳出豫算も祖山會の協賛を経ることに改正されて居る。要するに過渡的便法に外ならぬ感のもので、深く時局に顧みる所あつて、暫くこの程度で我慢をしやうと云ふ、漸進主義の方針で行くのだとあれば、我亦多くを言はんやである。人は制度に動かされ、規則に支配されるが、制度や規則を活かし若くは殺すのも亦人である。他律的规定である限り制度規則は死んで居る。自律的精神魂魄から發した規律でなければ眞に自己を制し、他を律することは出来ないであらう。

## 六、祖廟中心の完成と切なる祈り

宗祖の御在山と同様、此後九箇年在職の保障を護られた新法主即管長たる望月日謙大僧正は、必ず爲す有るべく期待を懸けられつゝある鹽出新總監の補佐と相俟て、祖廟中心の完成を目指して倍々加餐自重せられむことを爲法爲國切望惘願の至りである。

漢口廣東攻略後の皇軍は更に新段階に向つて躍進を續行しつゝある。東亞建設の明朝なる前途は、日一日と光明に照らされつゝある。伏して願くは斯の如き洋々たる正義國家の進展に連れて正法護國を宗とする我が宗風の大々的に宣揚せんことを……南無妙法蓮華經。

# 給仕精神の高揚

堀 龍 惇

今回宗門多年の懸案であつた「祖廟中心制度」が確立し、祖道こゝに復古して法光いよく輝きを増したことは宗門の爲め、將たまた祖山の爲め、誠に慶祝に堪えない次第である。

然しながら、この祖廟中心の制度は先般の記念大慶典を以て終りを告げたのではない。唯その基礎が出来て、その第一步を踏出したと言ふまでである。故に完成はこれからであつて、その使命は、將來の宗門を背負つて立つ諸君の雙肩にかゝつて居るものと言ふべきである。

今しばらく「祖廟中心」に就て「制度」と「精神」との兩方面から考へて見やう。

先づ制度の方面から言ふならば、今回祖廟中心制度の名によつて實現されたものは何であるかと言へば、唯一つ「法主即管長」の制度のみである。

固より「法主即管長」の制度は、祖廟中心制度に於ける基本的制度であつて、守塔の聖職にある法主が取りも直さず一宗統理の管長になるといふ、これは萬劫ゆるがす可ざる鐵則であるが、この



實現のみを以て直ちに、祖廟中心制度が完成したものゝ如く思推するは餘りにも淺慮であり、理想が無さすぎるものと言ふべきである。

そこで次の問題は何かと言へば、目下鋭意調査研究中であるが、「身延經濟の宗門への開放——換言すれば身延の宗門直營——」と言ふことである。

これは他の制度や規則と異り、直ちに宗門の消長隆夷に關する重大問題であつて、立法技術の上から言つても、實際經營の方法から言つても、容易ならざる難事業であつて、一つ誤れば、收拾すべからざる結果に陷るの恐れがあると同時に、その方法宜きを得たならば、宗門の經濟はこゝに一變して有力なものとなるのである。

よつて祖廟中心制度第二段の仕事として着手されてゐるのであるが、當局としては、身延山當局と慎重熟議し、調査の上にも調査を遂げ、研究の上にも研究を積み、宗門劃期的制度の樹立完成を期すべく、誠心誠意ひたすら佛祖の御加護を念じて事に當つて居る次第である。

續いては諸制度の改廢である。現在宗門に行はれてゐる諸制度は、明治初年以來、各門流合議制度時代の遺物がかなり尠くない。實例を擧げるとは控えて置くが、これ等はいづれも過渡時代に於ける妥協的制度が多く、當然早晚改められねばならぬものである。況や祖廟中心制度の確立した今日に於ては猶更である。その他にもまだこの「祖廟中心制度」を名實俱に完璧ならしむべく、改

廢若しくは新設さるべきものが多々ある事と思ふ。これ等もまた速かに改め、徐々を要すべきものは時を俟つて之を改め、新設すべきものは慎重の研究を遂げて之を新設し、この劃期的制度を彌が上にも光輝あらしめ、祖風を顯揚して宗門の興隆發展を期したいと考へて居る。

是の如くして、内、宗門を擧げて悉く祖廟中心制度の完成を見たらば、今度は、外、他派日蓮門下の融合歸一を策せねばならない。

顯本と言ひ、富士門流と言ひ、將たまた不受不施流といふも、悉くこれ大聖人の御門下ならざるはな。

よし分立には相當の理由がありとするも、兄弟牆に關ぐことは決して祖意にかなふ所以ではない。惟ふに分立の理由は、感情や意見の衝突か、教義解釋の相違か、事に當つての態度の對立かであつて、祖師に對して叛旗を翻へしたものでは決してない。故に更に高所に立つて、祖師に還元するの雅量を持つたならば、必ずや門下の合流は絶對に不可能でない筈である。またそうなるべきが當然であると俱に、我々は進んでその機運を開くことを心掛けねばならぬ。

「祖廟」は單稱日蓮宗だけの祖廟ではない。祖師の流れを汲むもの悉くの祖廟である。既に富士門流に於ては、波木井氏と意見を異にして身延を去つたが、祖廟に奉仕し得ざるを哀み、富士門流歴代の墓は皆、身延の御廟へ向けて建て、ひそかに祖廟奉仕の衷情を披瀝して居ると言はれ、明治初



年、一宗一管長制の始めて布かれた時には、各派合流して管長を定め、單稱日蓮宗は大いに譲つて、越後本成寺（後の法華宗）の日琳上人を推舉した歴史を持ち、更に大正年代には、本多日生師、田中智學氏等が肝煎となつて八派の合流を策し、統一閣に講習會まで開いた事があるではないか。

出來ないのではない、爲さぬのである。それも畢竟「時」であらうが、世は正に全體主義、統制の時代となり、現に祖廟中心制度まで確立して時が來てゐるではないか。今正しく是れ其時である。蓋し祖廟中心制度は、門下各派が齊しく祖廟に歸嚮し、統合の實を擧げた時に始めて完璧を見たといふべきである。それまでは我等は決して苟安に心を許してはならない。

然し更に進んで考へるならば、大聖人の御理想は「四海歸妙」であり「事壇建立」である。僅かな現在の門下だけ一致する事が最後の目的ではない。世界中を妙法に歸依せしめ、世界中を擧げて祖師の教へを奉ずるやうにせなければならぬのである。故に進んでは祖廟をして單に現在の日蓮門下だけの祖廟にとどめず、世界人類全體の歸依信仰の中心とまでせなければならぬのである。

他の宗教や宗旨は、個人教化を目的とし、對機說法を能としてゐるが、我が日蓮宗は、國を擧げ、世界を擧げ、人類を擧げて歸依せしめねばならぬ大理想、大信念、大誓願に生くるものである。これを忘れたならば日蓮門下でもなく、また日蓮宗の存在價值は無いと言つて宜い。

故に一應は門下が例外なく結束一致して祖廟に朝宗する事が、祖廟中心制度の完成であるが、再應進んでは、大聖人の雄大なる御理想を實現して、今日の祖廟をして、世界人類歸依信仰の中心とまでする事が、徹底した意味に於ての祖廟中心制度の完成と言ふべきである。

諸君及び、將來宗門を背負つて立つ後世者に絶大の期待をかくる所以實に茲に存するのである。

次に精神的方面を言ふならば、「祖廟中心の根本精神」は抑も何か。私は簡単に答へる。曰く「給仕の精神」即ちこれである。

そしてその「給仕の精神」の中には當然の要素として、最も深い「反省懺悔の心」と、最も熱烈なる「求道精進の努力」と、最も勝れたる「忍難堪苦の覺悟」と、最も弘き「慈悲救済の誓願」とがなければならぬ。

私はかりに之を「給仕精神の四要素」と名ける。この四要素が一も缺けたならば、給仕精神の完全なる發揚は出來ないと同時に、謙虛なる給仕精神がなかつたならば、懺悔も、求道も、忍難も、求済も出來ないので、互ひに相表裏し、互ひに主伴となるべきものである。

まづ法華經に就て見やう。涌出品には釋尊が本化大士の徳を讃えてかう言つて居られる。

「是の諸の大菩薩は、無數劫より來た佛の智慧を修習せり。……常に頭陀の事を行じて靜かなる所



を志樂し、大衆の憤闘を捨て、所説多きを願はず、是の如き諸子等、我が道法を學習して、晝夜に常に精進す。佛道を求むるを以ての故に、娑婆世界の下方の宮中に在て住す。志念力堅固にして常に智慧を勤求し、種々の妙法を説て其心畏る所なし。」

また彌勒菩薩はかう言つてゐる。

「是の諸の菩薩等は、志固くして怯弱なく、無量劫より來た、而も菩薩の道を行ぜり。難問答に巧みにして其心畏るゝ所なく、忍辱の心決定せり」

常に頭陀を行じ、大衆の憤闘を捨て、所説多きを願はざるものは深き反省懺悔の生活ではないか。晝夜に精進して佛道を求むるものは強き求道精進の修行ではないか。忍辱の心決定して畏れなきものは是れ勝れたる忍難堪苦の實踐ではないか。志固くして怯弱なく菩薩の道を行じて種々に妙法を説くものは是れ弘き慈悲救済の誓願ではないか。實に本化の大士は、この内徳を具して本佛に仕へたのである。則ち「給仕精神」とは、この本化大士の具有せられし内徳を我等の内徳とし、本化大士の本佛に仕へし懇懃謙虛の精神に則らんとするものであつて、これ本化別頭の最高道徳であり、本化獨特の生活規範であり、それが直ちに本化宗教の眞面容なのである。

故に例を他にとるまでもなく、大聖人の御生活御生涯そのものが、この四要素を具足した、給仕精神の完全なる發揚だつたのである。

則ち建長五年の朝より弘安第五の夕べに至るまで、語默迹作生涯を通じての常說法、これ慈悲救濟の誓願によるものではないか。四難具さに嘗めて撓まざるもの、これ忍難堪苦の實踐ではないか。日本第一の智者たらんと願ひを内外の典籍にひそめ、孜々として諸宗の淵底を探り佛意を究めんとせしものはれ熱烈なる求道精進の修行ではないか。難に處しては過去の宿罪を減すと觀せしもの、是れ深き反省懺悔の生活ではないか。

この四要素あつて始めて、あの身延の靜かなる生活、あの崇高なる本佛給仕の本領相を發揮することが出來たのである。

もつとも大聖人の御精神としては、弘通そのものがすでに、本佛への給仕には違ひないが、給仕生活としての本領を全面的に發揮したものは何と言つても身延に於ける九ヶ年の御生活であつた。そして、身延に於ける大聖人の御心境を最もよく吐露して居らるゝのが有名な「身延山御書」であるが、その中に於て大聖人は、樂法梵志等の説話を藉り來つて求道の容易ならざる事を示し、御自身の實生活と思ひくらべ、筆を結んで「佛になる道は師に仕ふるに過ぎず」と仰せられた。大聖人の身延に於ける御生活は實に「師に仕る」の生活、即ち「本佛給仕」の御生活だつたのである。誠に尊き極みと申すべきである。

されば、門下またこれにならうて祖師に仕え、六老僧はみづから耕して奉仕し、中山の日高上人



は具さに八役を勤めて千日給仕の素願を果し、滅後に及んでは老僧以下それ〴〵庵を結んで祖廟に仕え、輪次守塔の制廢されては身延山主が専らその聖職に任じ、現に朝夕勤經の折、また重大法要の節、法主みづから茶湯靈膳を供へ奉る儀の傳つてゐるのは、誠に深さいはれに依るものと言はねばならぬ。

尊いかな給仕の精神！——大聖人はすでにみづから實踐して範を示し、更に「成佛の直路たゞ師に仕るに在り」と仰せられた。

然しこの崇高なる精神は、一に深き反省懺悔と、熱烈なる求道の精神と、強き忍難の覺悟と、限りなき慈悲救済の誓願とより發する事は前述の通りである。故に我等は深く内徳を整え、而してこの精神を高揚することを心掛けねばならぬ。

そして、祖廟中心の根本精神は實にこの「給仕の精神」に基くものである事を識らねばならぬ。若し謬つて單なる政治的施設と思つたならば、これ淺識謗法であり、逆路伽耶陀である。

惟ふに精神は本であつて、制度は末である。即ち「佛法は體の如く世間は影の如し」である。精神が正しく確立しなかつたならば百千の制度も畢竟徒勞で、やがて土崩瓦解しなければならぬ。この祖廟中心制度をして益々光輝あらしめ、進んで完璧を期する事は、一に舉宗一致、如何にこの精神にめざめ、如何にこの精神を高揚するかに在る。

我等固より驚駭に鞭ち、この精神を高揚に努めると同時に、一日も速かにその完璧を期する事に努力する覺悟であるが、然し實際問題として、前途には猶ほ幾多の困難があり、しかも、他派門下の合同から、進んで四海歸妙・事壇建立の曉を期するに至つては、前程頗る遼遠と言はねばならぬ。

切に次代の宗門を荷ふ諸君、及び將來後進の人々の、力強き自覺と、撓まざる努力とを期待し熱望してやまぬ次第である。

## 宗政復古に當り青年學徒の奮起を望む

柴 田 顥 秀

桃栗三年柿八年と云ふから、植えた本人が必ず喰べ得るとは限らないが、その美しい果實は必ず縁ある者が頂戴するに違ひない。

本宗の先師先哲に依つて幾度か企劃され幾度か失敗に終つた祖廟中心制度が、事變下の本年を以



て確立し宗門多年の宿願たる身延山法主永代管長の實現を見るに至り、吾が宗政が始めて祖廟中心の大義を存し名實共に全きを得て、今や祖山は全宗門を統一強化する根本樞軸となつた、祖山がこの一切開放の壯舉を斷行したことは將に宗門の維新祖山の黎明を告げたものである。既に祖山は斯くも遠大雄渾なる大理想の實現に向て猛然として蹶起したのであるから、是非其美味しい果實の収獲を期さなければならぬ。吾等は幸にも宿縁深厚にしてこの光榮に浴するを得た、眞に感激感謝に堪えざると俱に新に使命の重且つ大なるを痛感せざるを得ないのである。

然しながら獅子の乳は琉璃瓶に非ずして之を貯れば則ち裂け、萬鈞の鼎を擧げて荷ふに一葉の舟を以てすれば顛趾して溺れざるは幾ど希なりと古人が云はれてゐるが、文をしてその質に伴はしめんとすることは頗る至難のことである。

祖廟中心制度もその主眼とするところは眞に身延山をして高祖大聖人の御遺言遊ばされた如く、日蓮が弟子檀那全體のものであることを御門下の緇素悉くが明瞭に認識され、自誓自發して給仕行法の奉仕を盡され、弟子檀方としての眞面目を遺憾なく發揮されんことである。折角制度が立派に確立されても之を徹底せしめ具體化するには、その多くは永き將來に涉つて、堅忍不拔の努力を必要とする。若しその運用に至つては毫末も遺憾の點があつてはならない。立派な制度を以て自由自在に活現せんとする、それは結局人材法器に待たなければならぬ。大法の隆夷はその人に存す、

獅子の乳を盛るべき器、萬鈞の鼎を荷ふべき舟にして不幸その當を得ざれば、その結果は思ひ半に過ぐるものがあらう。

聖語に、魚の卵は多し魚となるは少し、出家するものは多し、然れども眞の僧侶となるは稀なり。と仰せられたるを思ひ合すとき、最も痛切に感ずることは、桃栗以上の歳月を経なければ結實しない宗門育英の充實である。今や宗門は大旱に雲霓を望むよりも龍兒鳳孫を期待することはより以上に甚だしい。

常に大事に當つて電激の如くに腦裡を去來するものは先師先徳の懿徳を追慕する至情である。上に於ける朝意傳の三師、中世に當る重乾遠の三師、近くは明治維新宗門中興の薩鑑修の三師方が、宗門史上に残された偉蹟法勳は今改めて喋々を要するまでもないが、特に今範を近き先哲に需むれば實に充治園の學風と、薩鑑兩上人の道風徳香を私淑して息まないものである。兩上人の道徳、學問、事業等は更なり、就中今日の吾等が竊かに需めんとするものはその大運動の淵底をなしたるあの強き堅き本化別頭の道念である。

この話は大事に臨まれた兩上人の心境と覺悟を傳へられて餘りにも多く人口に膾炙されてゐるが、明治四年の頃、東京に於て外人ブルベツキが基督教に依つて吾が佛教に對し盛んに猛撃を浴せたまき、或る日、日薩上人は當時下總の内山に居られた日鑑上人の許に一書を寄せられた。その一節に



曰く 平素の所學今以て用ゆべし、誓つて身を以て教門の犠牲となすべし。と日鑑上人は一見直ちに下總を出立された。別離を惜しむ門下生一同に向はれ、馬上より意氣昂然として、「今度己れは生きて歸ることはないぞ、みんなよく學問しろよ」と唯一言云はれたのみであつたと云ふ。

東京に於て兩上人が會見されたとき言寒著に涉らず、日薩上人は唐突に、どうしよう、と聞かれた。日鑑上人は、死ぬのよ、と答へられた。それに應じて日薩上人は、そうだ、と詰られた。どうしよう、死ぬのよ、そうだ、この悲痛なる不惜身命の三語が、兩上人をして各宗を率ひてブルベツキ退治に大捷を博し更に進んで明治維新の難關を突破して、宗門をして今日あらしめたる中興の大業を完成されたと云はれてゐる。宜なるかな、その道念の動かざること山嶽より重く、聲譽の流れて塞らざること大海も及ばず。

噫、日薩日鑑兩先徳の残されたるこの三言は。今猶吾等後學の箴砭規矩として深く心肝に染みて貴さを禁じ得ない。深草の元政上人は、縦ひ一切の書を讀み一切の事に通ずとも若し菩提心なくんば愚者の深信にして欺かざる如かず、知辯あつて道心なきもの動もすれば法を破し人を壞すと。

宗門維新の幕は切つて落された。祖山の靈峰は黎明を告げてゐる。

奮起せよ宗門の青年學徒！そして獅子窟中悉く獅子となり梅檀林下純ら是れ梅檀ならんことを祈つて息まないものである。

# 卽身成佛研究序説

室 住 一 妙

一

卽身成佛といふのは、いふまでもなく、我々のこの現實の肉身のまゝに佛となるといふ事である。抑も佛陀とは大自覺者卽ち絶對的理想人格を意味するのである。換言せば、自己及世界、主觀客觀時間空間の一切にわたつて、正しく覺知することであるから、現在の肉身にまつはる生死輪廻てふ自然界の因果律的制約を超越した解脱の境地である。然しかういふ境地がこの現實の下劣な我等の身心に體現できようとは、とても常識では考へられないであらう。さり乍ら佛教の尊さ、有り難さはそこに無ければならぬ。苦のまゝに諦めさせ、闇のまゝに迷はしめ、そのまゝそれでよいとせば、それは下劣無慈悲な所謂アキラメであつて、覺悟のアキラメではない。地獄の底からでも奮ひ起たしめ、畜生も餓鬼も光りを浴びて淨め、卽身成佛せしめるところに、佛陀の恩徳が尊いのであり、大慈悲のはたらいた所以なのである。

だが果してそれは今、現實してゐるかどうか。

そんなお伽噺みたやうなことは、昔の時代ではともかく科學萬能・人間本位の現代・世界大戦亂の今日、餘りにも馬鹿げた空想的な閑話題ではないか、といふ者があるかも知れぬ。卽身成佛の研究などとは、現下の狀勢では全く



時世に對して迂遠極まるやうに思はれる。所謂認識不足を自ら曝らすがやうである。が然し、かういふ時勢であればこそ、又かういふ尊い課題に對してこそ、茲に大いに研究の必要があるのである。

## 二

私は本誌前號に「純粹宗學の理念とその展開」の中に於て、純粹とはもとより直接に具體的問題を扱ふとは限らぬが、却て何よりも深刻にその本質問題を扱ふものであることを主張した。即ち純粹宗學の理念は、そのあるべき絶對理想に向つてはたらく精神であるから、實例として内外兩向の展開を見て、而も究まる所、一の中樞的本質課題を得るに到つた。そしてそれが眞實である以上は、あらゆる讀者諸賢にも、俱にその研鑽を願ふところがあつたが、然し、遺憾ながら不文微誠の故か、其の後何等の反響にも接してゐないのである。然し、自らは責任上幾分の成果を見て頂き度いと存じて、再び本誌上に尊い紙幅を惠まれしを幸ひ、大方の批判を希ふ次第である。

## 三

人と生れ來て、醉生夢死はし度くない。さり乍ら單なる學問道樂、知識の偏重も憂の種となるであらう。まして現代は科學時代である。その科學研究の領域方法も非常に廣大複雑である。人生百般の知識經驗研究はこれから古今東西に亘りいよく、尨大多岐を極めて行くであらう。限りある人生にして限りなき問題が横はる。今日ありて明日は保し難き無常迅速の世に處して、果して何を爲すべきか。何を爲し得ようか。大きな矛盾ではないか。然し我々はこの矛盾を恐れまい。人生は謎であるとしても、矛盾であるとしても、却て我々は進んでその矛盾に直面し、その謎をその

まうけいれて解決に當り度いと思ふ。その限り、どうしても一の覺悟を以て出發せねばならぬ。

まづ我々は、自らを環る切實な現實に目をそゞぎ、直視することだ。

生きてゐる第一の自意識には全問題を包容してゐる。我々が生きてゐる限り無意識的にも、無限の時間空間にたゞなり、無盡の聯關にはたらかされてゐる。我々はこゝに現代文化の恩寵に浴しつゝ、一層その嚴確さを痛感してゐる。我々はすでに個人ではない。勿論個人があつて國家があるのでもない。苟もどんな山間僻地にめばえた一草一木すらも、それは民族の、國家社會の歴史的大きな生命なのである。知るも知らぬも、民族として國家として、すでに大きな歴史的運命に支配されてゐる。ある使命のもとにはたらかされてゐる。今日こそ切實に痛感される今日である。新聞にラヂオに現に見聞してゐる。親子兄弟を親戚を友人を知己を……等でなく、この自身をすぐ捧げねばならぬ所の歴史的必然・社會的必然がある。民族の血の當然がある。否その緊急さがある。

四百餘州を吹きわたる我が御稜威のあらしは世界維新の黎明を告げてゐる。是非善惡を問はぬ。論議も思惑も許されぬ。それは現實必至の大きな動きである。かう見るのは、決して大きな時潮に只イージーに便乗したゆゑではなく、それが今如實にある事態であることを見出してゐる。全く朝に夕にラヂオの電波にのつて耳朵をうつ世界の微細なニュースの波動は、我々のみならず、世界すべての人々の一喜一憂をなしてゐる。丁度あの荒浪のたゞ中に、板子一枚で翻弄される水夫たちの感ずる激しい感傷は、もつと痛切に世紀の動搖として、世界すべての人々の心胸をゆすぶつてゐるのである。戦争か平和かそれに拘らず、政治に經濟に思想に産業に文化に等々無限多様の波がめまぐるしい交響をなしてゐる。民族を通して世界に、現實の刹那を通して永遠にはたらきかけてゐる。それを今、我々は現實事態の一リズムに見たのだ。聞いたのだ。然し考へねばならぬ、悟らねばならぬ。



私は今、偶然か必然か、この世紀の激動の渦にとり残された一の微生物である。かすかな生命である。それに今真理の一斷片を究明しようとしてゐる一學究には、焰々ともへる火として愛がある。真理への愛がある。それが純なれば純なるほど、大きな自覺への憧憬が強ければ強いほど、痛切にこの根本問題の本質的究明を求めてゐるのである。それは單なる個人の安心立命的なことではなく、人生一般・世界一般の問題ともなり得る。その根本が深ければ深いほど世界永遠の生命問題となるのである。ともすれば時流に棹さすこと、銃前銃後の事務に没頭すること乃至それにかゝはりをもつことのみが緊急なのではない。高い天上の星をみつめて孤舟のゆくへを測り定めること、理想と信念の上から國家百般の事態を回轉せしむべきことが、或はより切要なこととなるのではないか。

現在の世界狀勢は全く無條約の中に、道義よりも政策をとる。政策よりも實力に俟つとされる。然し道義とか信義とかは、たとひ一種の政策だとしても、その政策や實力を導くべき、否死生を超ゆべき理想が、第一義諦が求められねばならぬ。一度第一義が輝くとき、全世界がたとひ焦土とならうとも、ノアの洪水に浸されようとも、永遠の生命はかゞやくではないか。眞の自覺、永遠の光、萬邦協和の大道を求めぬのでは、千萬億の大軍も無名の軍となり、不靈の私闘となり畢らう。幾千億の犠牲も浪費犬死となるではないか。戦線一兵の損傷も尊い犠牲、一發の硝薬一頭の犬馬も意義あらしめるには、萬邦協和の道、永遠の眞理が自覺されねばならぬ。斯の大自然、それこそ、我が國が現に拂ひつゝある幾多の犠牲と更に將に來らんとする世界大戰に對して、永遠の生命をふき入れる息となるのである。死か生か、全か無か、闇か光か。今はたゞその大自然に俟つのみである。

## 四

往昔、釋尊の説かれた寓話がある。

どこからか飛び來つた毒箭は、ある若者に中つた。醫者はかけよつて抜かうとするのに、その男はをしとどめて、訊くのである。箭の形や色や材料やその出所、製法やその他種々のことを尋ね問うてからにしようといふ。それは、箭の毒が全身にまはり、命危くなるにも係らず、生死無常、人生の解脱に益なき學者の閑葛藤を巧みにも痛く誠にられたのである。

學究には數多の課題あり、研究範圍もある。それを單なる興味とか職業意識とか、流行眞似とかで以て左右し便乘してはいけない。我々は民族であらうが、國家であらうが、人間であらうが、一個の個人を殺しては何ものでもない。生々流轉の血は、無常迅速の風の中に消えなるとする燈火に似てゐる。民族のため、國家のため、世界人類のために、その燈明はいよ／＼明かに正大に掲げられねばならぬ。無始劫來の無明の闇をせ負ひ、永恒輪回の淵に臨んでゐる生命を尊ばう。暴風の燈を護らう。毒箭を抜く緊急さで、解脱へ、自覺へとすべてが向はねばならぬ。あらゆる學問も宗教も生活も戦争も産業も文化も、「それへ」でなくてはならぬ。また、「それより」でなくてはならぬ。

更にいへば眞の解脱上の自覺でなくては何ともいへないことである。現實的諸樣態の全生活が現在あるがまゝのありやうで濟まされるものではない。が眞の解脱上の自覺の光から照らされた世界のそれではなくては何の意義もない。よし自覺とはいへ、「凡夫の自覺」「我は久遠の凡夫なり」てふ自覺では是、相對的部分的である。絶對的全體的に向ふ向上傾向として前解脱の意味での價值はあり得ても、自他ともに一切が照らさるべき究竟の光ではない。従てすべての世俗的文化・生活・事業に於て、正に第一義的解脱との緊切なる生命聯關をもたぬ放恣な研究や課題やその存在を許されぬものである。いはゞ、絶對的統制、自覺的統制を要する。かの所謂官僚的權勢からの統制や、世俗的情實や流行の追隨ではない。「解脱への學究」であるにしても、「解脱よりの教學」であるにしても、たしかに、こ



の絶對的解脱境の第一義諦との生命聯關に於てのみ意義があるのである。

## 五

然らば、その解脱境とは何か、第一義諦とは何かといふ問題となるが、之は簡単に説明し得ぬは勿論ながら、ともかく、それが目的企圖としての把握を確かめてをかねばならぬ。

解脱とは、生死しつゝある現實生命に即して現實的諸制約の繫縛を解脱することである。その表現自體、矛盾的であるが、矛盾と考へる考へ方がすでにとらはれてゐやしないか、といふことは、すでに無常迅速に流轉しつゝある自己の肉體的心理的存在を凝視し内省するとき、直ちに解決されようと思ふ。故に現實の主觀乃至これに連關する客觀界を認識し、そこにありやうの深さに徹しつゝ、さらに永劫普遍の問題を解くべき極地に立つことが、解脱的境地に到るといへるのである。第一義諦とはその極地に立つた自覺の光源であり、光被の世界である。普通の科學、或は哲學とか形而上學なるものが、目ざすのは推し進めて考へれば、自意識的光をたよりてこの第一義諦へ向ふのである。故にその生命聯關をば、普遍妥當性、必然性當然性等といふのであらうが、之なくては學の學たる所以をも失ふこととなる。宗教一般、佛教一般等の教學の性格としては、確かにこの第一義諦・解脱的自覺の境地の體驗實證に連關するものである。それ故にいかなるさゝやかなる學究も、この本質的聯關を生かす限りは、その課題も生き、成果もみるのである。然らずんば、さきの毒箭の形象由來を尋究する内に、自ら毒に斃死する愚人と簡ばぬこととならう。

## 六

そこである論者はいふ。

その解脱的境地とかは何處に在るのか。第一義諦とは一體何ものなのか。やはりそれらは一種の觀念ではないか。理想ではないか。然らば非實在である。そんなものをつかまうとするのは幻影を追ふものだ。天上の星をつかまうすると同然、痴人の躍に過ぎまい。天上の星は或は方向の指示とならう。理想は憧憬的となり、何等かの基準とはならうが、然し到達できるものではない。又到達できるものはすでに理想ではない。今日の理想は明日の理想ではない。かう考へてこそ理想が、現實の我々には意義があるが、それを急に、直接に把握するとか、實現するとかは、まるでかのどこかの天文學者が、星を觀測して歩いてゐて、溝に陥ちたといふ話を再びやるのだ。迂闊極まるそんな理想論は、たとへ必要があるにしても、刻下の急務ではあるまいか。平和になつてから、世の中が落ちついてから、ゆつくり、研究もし、發表もするがよい。

之に答へよう。

解脱とは單なる觀念ではない。我々が日常想念してゐる泡沫のやうな存在ではない。考へる葦とか云はれた人間の葉末に宿つた露滴ではない。正しい觀念である。全一的に大觀し、信念することのできる境地である。我れ自らを世界を、三世通觀して永遠を觀念できる境地、正しく深く徹底できる境地を云ふ。自然的制約を超え、社會的歴史的歪曲を脱した境地を解脱といふ。眞理とは觀念といへば觀念だが、それはどうでもいふ、或はどうでもなる觀念ではなくして、却て、それとは反對に、どこでも、いつでも、どうしてもそうならねばならぬ法則性原理性を謂ふ。

自覺も觀念であるが、どうにでもなるやうな、その場限りの、いふ加減な思ひつきではない。全くそれらと矛盾的に、どうしてもそうあるべき道理を體達し、絶對的に妥當した、すでに證明をも超えた境地である。眞理も、自覺も、解脱も、それはどうでもなるやうな考へ、思ひつきや想像ではない。幻影でも空想でもない。感傷の黄昏に見出され



た星ではなくして、幻影と現實、夢と醒覺、死と生等、を判つ所の太陽である。今現に我々は大地に足して立つ生物である。かくの如く生き、また考へてゐる我々も、深く省みるとき、此の生それ自身、この世界それ自身が、また夢なのではないか、泡沫なのではないのか。「是は醉生でない、夢死でない。眞實なり。」と宇宙的に目を醒ました境地に立つこと、それは實に「どうでもいゝ」ではすまされぬ事だ。頭燃を拂ひ、毒箭を抜く緊急至極、生死一大事の問題である。生死、生死々々とめまぐるしい回轉を永恒につゞけていく、歴史的社會的生の車輪の齒にきざまれていかねばならぬ運命から、脱却し、超躍する。それがたとひ不可能事としても、無殘な鐵の齒と齒の廻轉り合ふ一瞬時、(ギリット車輪の齒にくだかれる運命とも知らずに)雲の間にきらめく月や星をながめ暮らして慰められるやうなそんな生易しいことではないではないか。

「生死事大無常迅速」

「出づる息は入る息をまつことなし。」

「臨終の事を習うて後ちに他事をならふべし。」とは古聖の金言。

「三界無常猶如火宅衆苦充滿甚可怖畏常有生老病死憂患如是等火熾然不息」何たる痛切眞實な人生觀であらう。

「如來ハ已ニ三界ノ火宅ヲ離レ、寂然トシテ閑居シ、林野ニ安處セリ。今此ノ三界ハ皆是レ我が有ナリ。其ノ中ノ衆生ハ悉ク是レ吾ガ子ナリ。而モ今、此ノ處ハ諸ノ患難多シ。唯ダ我一人ノミ能ク救護ヲ爲ス。」何たる大きな慈悲であらう。絶對的な解脱であらう。また我々にとつては無上の福音であらう。

「我ハ無病無老無死無憂感無穢汚ナル無上安穩ノ涅槃ヲ求メテ之ヲ得、而シテ知ヲ生ジ、見ヲ生ジタリ。我が解脱ハ不動ナリ。生已ニ盡キ、梵行已ニ立チ、所作已ニ辨ジ、更ニ後有ヲ受ケズト如實ニ知リタレバナリ。」

「有ヲ破スル法王、世ニ出現シタマフ」

「今世後世、實ノ如ク之ヲ知ル。我ハ是レ一切知者、一切見者、知道者、開道者、説道者ナリ。」何といふ絶對的な自覺であらう。

「衆生ニ佛知見ヲ開カシメ清淨ナルコトヲ得セシメント欲スルガ故ニ世ニ出現シタマフ。衆生ニ佛知見ヲ示サント欲スルガ故ニ世ニ出現シタマフ。衆生ヲシテ佛知見ヲ悟ラシメント欲スルガ故ニ世ニ出現シタマフ。衆生ヲシテ佛知見ノ道ニ入ラシメント欲スルガ故ニ世ニ出現シタマフ。舍利弗、是ヲ諸佛ハ一大事ノ因縁ヲ以テノ故ニ世ニ出現シタマフト爲ヅク。」

「毎ニ自ラ是ノ念ヲ作ス。何ヲ以テカ衆生ヲシテ無上道ニ入り、速カニ佛身ヲ成就スルコトヲ得セシメント。」何たる尊嚴無比な慈願であらう。人類の精神的太陽でなくて何であらう。然らばこの大自覺の太陽のかどやくときこそ世界に意義がある。戦争も、平和も、靈も肉も、産業も政治も文化も眞の價值があるのである。

「世間虚仮唯佛是真」とは聖徳太子の御言葉、單なる讃辭ではなくして、人類に良心の健全なる限り、眞理と理想への熱意のつゞく限り、眞實の絶叫なのである。「篤敬三寶」、「皈命三寶」は切實必至の行動である。

## 七

又ある論者はいはう。

なるほど、釋迦はさう云はれたであらう。自覺者であらう。また我々もさうあり度いは山々である。然しそれは望むべくして達し得られぬ理想である。たとひ達し得られても、一人あつて二人三人とは無いではないか。人間は人間で



よろしい。凡夫は凡夫でよろしい。「吾は久遠の凡夫なり」「我は底下の衆生、煩惱具足の身」であるから、凡夫たるの自覺、人間としての安心立命が大事である。之が人間的宗教である。

又ある者は主張する。

我々は大日本・神國の民である。凡夫ではない。只の人間ではない。日子である、神である。光輝ある皇國の大御寶である。現人神の御爲めにつかへまつること、天壤無窮の皇運を扶翼したてまつることより外に何の自覺が要るか。何の教が必要か。我々は亡國インドの宗教的影響を脱却すべきだ。今は火急の事態、皇國の本務を遂行する爲めにも煩はしい宗教的異分子を拭ひ去り、淨めつくすことが急を要する。この現實に皇國の本務を盡すことのみが、我々の解脱への道でなければならぬ。それ以外はすべて閑葛藤であり、戯論であり、國賊である。

# 八

私は今、これらに對して答へる。

實際、火急の本務はやむを得ない。否、やむを得ぬ所ではなく、進んで悦び勇んで立つべきだ。それが皇國の本務としては民族のため、祖國のため、延いては東洋永遠の平和のために、世界文化の圓融のために起つべきである。今起つたのである。「即身成佛研究序説」を提げて起つたのは唯だ／＼その爲めである。我々がいふ解脱とは逃避的境地ではない。個人的安心立命ではない。人間は人間でよいといふのは自慰的な退嬰的なむしろ子供だましの宗教であつてあの絶大な慈悲公明な宣言をなされた佛教の眞髓では斷じてない。生きとし生ける者、すべての衆生の根源を衝き、徹底した救済を果すのが、全世界永遠にわたる佛陀釋尊の本願である。

なるほど火急は火急でも、そこになほ輕重本末がある。本務とは云つても末梢的眼前の時務のみではない筈。明日、明年、百年の大計樹立こそ一層慎重に心せねばならぬ。實際また刻下の急、戰より急はない。その急にしても武力戰・經濟戰・外交戰、それに思想戰があるが、就中、明日以降層一層の重要性を認められ來つたのが思想戰である。その思想戰にもいろ／＼な意味を見出さなくてはならぬ。第一は武力戰のための思想、即ち忠君愛國的信念にまで高め、鍛鍊するもの、世に所謂國體明微の思想體系である。第二に文化的思想戰であらうか。思想に對する思想、即ち經濟外交内治等諸方面にわたつて積極的にはたらく創意の思想、それがまた外に向つては、共產主義・無政府主義・自由主義・民主主義其他諸のイズムを批判し克服し開顯していくべき、公明正大な世界の光りとなり、悦びとなる所の思想である。それは單に自國の傳統を守り、それに踞踏するやうな小さい日本主義ではない。また支配され、服従し追隨し阿附することのみ事とする、小さい國民主義であつてはならぬ。第三は精神的思想戰。日本はたしかに神國であるが、日本國民のみの神國ではない。神は天照と申せば、全世界光被の天命を有する。天壤無窮の皇運は斷じて極東の防波堤的命運ではない。畏くも、仰せ渡された勅語を拜さねばならぬ。「舊來ノ陋習ヲ破リ、天地ノ皇道ニ本ヅクベシ。」「知識ヲ世界ニ求メ大イニ皇基ヲ振起スベシ。」とは正に 明治大帝の天地神明に誓はせ給うた御宣言である。皈依すべきに皈依し、護持すべきを護持する。之が天地正大の公道である。一切衆生を自覺せしめ、安樂せしむる、釋尊の本願に國土を捧げてこそ、眞に大日本の大をなす所以である。

之は思想といふよりむしろ精神信仰である。精神力、信仰信念の絶對的公明正大こそ天地を感動せしむる道である。即ち武力の神に通ずる道は至誠である。文化の神に通ずるも亦至誠である。神に通ぜぬ武力は暴力、神に發せぬ文化は墮落である。それ故に勢をかりてたとひ全世界を征服しても、至誠なく、天地正大の神威を仰がず、佛法を奉ぜぬ



限りは、秦の始皇の亞流となる。我が皇運は斷じてそれではない。天壤無窮の皇運は絶対的解脱境の根源から發する。それ故に神武の威力を現する。又絶対的自覺の光を仰ぐ。それ故に天照の光被に浴し得るのである。

釋尊はなるほど、インドに生れ給うたことは確かであらう。我々と同じく人間である。人間である以上、その自覺は人間としての自覺に即し、そして絶対的自覺永遠の解脱境に達せられたのである。故にその教説はインド地域に限られた眞理ではない。人間には勿論生物國土自然宇宙に遍滿してはたらく生命的大自覺である。それ故に三千年前御入滅とともに消え去る光りではない。人間が自己を深く求める限り、衆生を廣く利益しようと念ずる限り、世界を眞に救はうと努める限り、佛教は益々眞の光輝を放ち、愈々その權威は發揚するであらう。

釋尊の教説は八萬四千とも稱されるほど無盡多岐の法門であるが、詮する所は、所謂法輪を轉ずること即ち、一切衆生を化して絶対眞理を自覺せしめ、光りかざやく眞理の王國を建設することに外ならぬのである。この大地に永遠の光、眞實の悦をもたらさうとされたのである。

「一切衆生ヲ化シテ皆佛道ニ入ラシメントス。昔ノ所願ノ如キ今已ニ満足シヌ。」「我が滅度ノ後ニ於テ斯ノ經ヲ受持スベシ。是ノ人佛道ニ於テ決定シテ疑有ルコト無ケン。」

是れが佛教の眞髓である。あらゆる時代、あらゆる社會に即して之を實現すべく念願し、努力すること、之が佛教徒の本務であり、我が皇國無上の使命でなくてはならぬ。

## 九

蓋し、佛教史上三千年、日蓮聖人ほど、全佛教をこの見地から、しつかり把握され、絶大の努力をそゝがれた方は

少いであらう。

「彼々の經々と法華經と勝劣淺深成佛不成佛を判ぜんとき、爾前迹門の擇尊なりと、ものの數ならず。いかに況んや等覺の菩薩をや。まして權宗の者どもをや。」とまで喝破された絶對的教權主義の核心は、實に大覺世尊の絶對的生命の潑刺たる血脈よりあふれたものである。あの熱血悲涙の御生涯は唯だその爲めであつた。四格言も、立正安國も國體開顯も、五綱も三秘も要するに是に皈結するのである。

「歲月矢の如し」と、我々が怠けてゐる時も、睡つてゐる間でも、知らず／＼のうちに日月歳星はぐんぐ／＼とめぐつてゐる。七百年の昔「佛法必ず東土の日本より出づべきなり。」と云はれた言葉は、今や全く昨日今日の現實的ニユースに見ることとなつたではないか。

「一天四海皆歸妙法乃至大地を的とするなるべし。」の御言葉も、いつどういふ事が沸き起つて事實となる事か、その時こそ我々の怠慢は恐るべきものとならう。我々教徒はこの赫々たる金文を拜して慄然と畏れねばならぬ。目を醒まさねばならぬ。

今日のこの世界大動亂は何をもの語るか。諸天の催促によるか、どうか。神秘的なことは今問はぬにしても、上述の如く現在最も必要なものが何であるか。百年の大計とまで云はぬにしても十年の小計を考へ見るとき、必ずしも求め易いことではなからう。萬人が萬人同様直ちには納得できないにしても、ともかく我日本の全力を盡して火急に求めねばならぬものは、眞實の平和への道、萬邦協和への大道である。その道の發見、大自覺である。絶對眞理の大自覺によつてのみ、國體明徴も、世界平和も、東亞經綸の大策も解決できる。さし迫つて來るべき世界大戰はもつと／＼深刻とならう。武力にしる、財力にしる、思想にしる、もつと／＼恐しいこととならう。眞理への意志、眞理への愛、



正義への皈依、佛法のための戦にこそ一切をさへて行く限り、最後の勝利は我らの手に皈す。

「日蓮が弟子等は臆病にては叶ふべからず。」「日蓮を敬ふとも惡しく敬はざる國亡ぶべし。」

我々は佛陀大覺世尊の本弟子、日蓮聖人の末弟に列るものは、今までなし來り、今なほなしつゝあるすべてを抛つて佛祖の本懷に直參せねばならぬ。然らずして強權の前に屈し、俗流に流され、追從也合以て一時を糊塗するは、「寧喪身命不匿教者」の金言に背くもので、城者破城の者となる。

今こそ日蓮聖人の眞の大教は發動されねばならぬ。神聖の教權を仰がう。純粹の權威に服さうではないか。

# 一〇

現に宗祖日蓮の命脈をうけつぎ來つた筈の宗團が在る。七百年、短からぬ歲月、嚴たる宗旨の確立、相續もあつた筈。宗團には正しく、その目的と方法との具體的提唱實踐があつた筈。

現行日蓮宗法規第一條には、

「諸佛出世ノ本懷最爲第一ノ法華經ニ根據シ、宗祖日蓮釋迦所立ノ宗ヲ開キ、本教ノ妙旨三大秘法(本尊題目戒壇)ヲ宣布シ、末法ノ機緣ニ之ヲ奉持セシメ、以テ即身成佛ノ妙悟ヲ得セシムルヲ教旨トス。」とある。

なるほど、明確な條文、疑ひない信仰である。だが然し、之が現實社會に國家に果して少しでも實現されてゐるかどうか。宗旨を宣傳してゐる人々は數多いであらう。講學研究にいそしむ人も少くない。教育養成にたづさはる人々も隨分とある。古來高僧碩學の頭腦をしぼり、東奔西走して築きなされた宗團はこゝに現在してゐる。現に年々幾十萬の豫算を費し、幾萬の人を動員して、今果して何事を爲し、何事を獲來つたのか。量ではなく質的に、深く内省する

とき、幻滅の悲哀といふか、現實の爲態を見て、我々はつくぐと嘆ぜざるを得ないではないか。

## 一一

抑も宗團は、個人社會國家の眞淨化を目ざして働き、即身成佛、淨佛國土、立正安國へと推進し、教導する主體である筈。主體である以上、自らまつ先に實證的に立正安國、即身成佛の宗團であり、その個人がなくてはならぬ。果していかに。過ぎ去つた史的事蹟は今且くさしをいても現實的とはいかに。成佛とは、前にも述べた如く、生ける人格が絶對的自覺の境地に到達したのをいふ。解脫の心境に飛躍することである。必ずしも三十二相八十二種好云の諸條件は神話的な化粧として、さほど必須條件ではないにしても、成佛が所謂退嬰的なアキラメや、獨暴的なサトリを意味するものであつては、それは全く大して有難い教ではないであらう。それでは俗諺の、「知らぬが佛」とか、「死人を佛様」といふと同斷、以ての外の迷妄であり、邪見である。佛教の眞實の意味は目ざめたもの、自覺・大覺、正覺が佛である。我々は眞實の佛を求める以上、敢えて現實の世界、現實の國家、現實の宗團乃至は現實の自己自身を、正視し直視するものだ。然らば現實の宗團はいかにあるか。現在の我々は何を爲すべきかを求める。

## 一二

論者はいはう。

宗旨の木領は立正安國である。即身成佛は個人的で宗祖の本懷とはいへない。國家とともに成佛するのが我々の願業でなくてはならぬ。従て、個人の成佛を願ふより、布教宣傳を宗是として一日も早く、一國を教化して、王佛冥合



の曙を期すべくてある。

今答へよう。

若し個人だけの成佛といふものが假りにありとせば、それは我々が問題にしてゐる佛ではない。それは佛敎學の所謂佛ではなくして辟支佛である。また個人と國家といふものが、離れゝゝのものであり得ぬことはすでに佛敎一般の定説である筈。立正安國と即身成佛とは、然かく矛盾的對立では決してない。立正安國の中心こそ即身成佛であり、基礎こそ即身成佛でなくてはならぬ。見よ、立正安國論の結文に明確ではないか。

汝早改信仰寸心速皈實乘一善 然則三界皆佛國也 佛國夫衰乎 十方悉寶土也 寶土何壞 國無衰微土無破壞  
身是安全心是禪定 此詞此言可信可崇。」

「改信仰寸心」に個人的觀念の信仰に國土成佛の規模を托され、國土成佛の實相の中に、個人身心の安全を保證せしめられてゐる。而も個人的信仰（正信）の樹立の必須條件として、本論の前段に重疊破折されたのは、念佛往生的なアキラメ信仰、野狐禪的獨善的サトリそのものである。私かに聖意を案するに、即身成佛（個人的信仰安心）は立正安國の基調をなしてゐる。三界佛國十方寶土、即ち安國は、立正（即身成佛）の原因からもたらされた結果である。立正安國の本因本果をば現實社會的に究明せられたのが、立正安國論の結構であると拜する。

但し、立正とは個人信仰を意味されてゐるが、それは個人完了ではなく、個人社會國家一體としての個人で、個人出發である。要するに即身成佛の實證（はたらき）あつてこそ立正安國が現實するのである。また即身成佛がないならば、何が立正であり、何が安國であるかさへも、その自覺がないではないか。

然らば、「信仰ノ寸心ヲ改メテ實乘ノ一善ニ皈ス」とは如何にすることか。これも我々宗徒には一般に分り過ぎて

ゐるほどであらう。

所謂唱題成佛・受持成佛・信心成佛と稱される。唱題とは初心よりの行についての立言で、その主體的態度は信心である。受持とは初心後心の信心相續とその擴充である。要するに、即身成佛は題目に對する絶對の信心、皈依によつて佛果を成ずるといふ立て前である。

### 一三

我々は深く省みよう。我々は信仰々々とは口癖に云ふ所であるが、實際我々は宗祖の教へられるやうになしてゐるのか。宗祖のやうにやつてゐるのかどうか。信心第一と稱し乍ら、日々夜々に營むところ果して何が第一となつてゐるか。唱題成佛となるほど日夜に題目は他人の迷惑になるほど唱へてゐる。然し果して成佛の實がどこに擧つてゐるか。我々の内心に省みよう。我々の宗團を觀察しよう。實際我々は何を措いても、この事態の核心を究明すべきではないか。

いかに成佛の實ありや。どこに安國の證ありや。あるとせばいかに。どこにないとせばいかに。何故にないのか。若しも即身成佛の實なしとせば、それは、成佛の眞因たる信心、受持が眞實でない爲めであるか。或は又、信じてゐる所の妙法そのものに成佛の種子がない爲めであるか。何れかである。信心不徹底は我等の方の責任であり、又所信の妙法に利益の實がないならば、それは唱導された宗祖の責任である。即ち宗祖は有因無果の邪宗門の宗祖となる。かの往年、鎌倉街頭に絶叫された四格言はそのまゝ、地獄・天魔・亡國・國賊と自ら浴びる格言とならねばならぬ。我々の信心不實は、自ら成佛得脱の否定はをろか宗祖にこれほどの疑惑を投げかけまじき恐さへあるのである。それ



に反して、我々の眞實の信心（純粹徹底の信心）によつて、宗祖の眞面目は顯はれ来る。たとへ、宗祖が虚偽者であつても、虚偽者なりと證明できよう。大いにその邪法邪宗門を責め撃つことができる。眞か偽か、實か虚か、正か邪か、信心の徹底によつてのみ、即身成佛・立正安國の問題は解決できる。

#### 一四

純粹宗學の根本方針は當然、之を目ざしてゐなくてはならぬ筈であるが、然し現在のところ、確たる方法、目的、課題等も甚だ曖昧模糊たるやうに認めざるを得ぬ。従て宗門の根本安心に至ると申論乙駁、宗門行動は泥合戦か支離滅裂。之が果して即身成佛を宣傳する宗門であらうか。立正安國が布教できようか。今や非常時は急迫してゐる。皇國日本は未曾有の聖戰を遂行してゐる。國民精神總動員！政府の命令一下、宗教家佛教徒二束三文にたがねられて活動してゐる。念佛も、題目も、彌宜も釋子も、ともに銃後の任務を授けられてゐる。だが然し、少くも佛教家殊に我が宗徒は、事變の眞相聖戰の意義を把握してゐるかどうか。その眞相・眞意義をつかまらずに權勢の下、その命令に盲従するだけで精一杯なのではなからうか。批判の遑も許されず、さりとて意見の持ち合せもない。たとひ、あつても進言の氣魄はない。また、たゞ今國策戰に參じ防共思想戰に狩り立てられつゝあるについて見ても、教家一般は何ものを目ざしてゐるのか。かの唯物主義か、獨裁主義か、はた又共產制度か、そも／＼何を正とし、何を是として標準を立ててゐるのか。皇道精神の何ものを持てゐるのか。佛教精神の何をもつてゐるのか。いかなる大乘的を實踐してゐるのか。單に政府の命令からだといふだけでなく、軍機・策戰の必要からでなく、民族的政治的方便でなくして、若しも教家にとつて觀念的優秀な學問あり、修養があり得たならば、もつと高度の理想が立て得ぬのか。道義に目ざ

めぬのか。方法がないのか。思想戦上、やうやくにして識者間に般若の智劍の要求を訴へて來たにしても、それは近い將來一層痛切な點となるであらう。

かの往生淨土の念佛宗の王法爲本とかいふのは全くの矛盾、ゴマカシである。禪宗の態度も教權の實なきもの。眞言密教の護摩の焰は却て興國の邪魔ではないか。解脱を即身に體し、大覺を肉身に開かうとする我宗徒は、眞正の菩提心を奮起して立たねばならぬ。眞正の菩提心の發動するところ、時勢權力に迎合した態度はとることできぬ。世界の動亂を前にして半睡の古き概念遊戲に没頭できない筈である。

今こそ純粹宗學のみの有つ精銳なる白刃を天日の下に揮つて、即成の實證を開顯すべき秋である。

## 一五

世界中すべてのものが即身成佛を目ざすべきである。況んや、その本家本元の我宗に於てをや。即成に向つて邁進するとき、宗門の精氣旺盛し、國家も安泰に興隆する。今この目標に精進せぬからして、あらゆる部面が混沌濛々として衰微し、慢性的重患となる。

布教々々といふが、口先だけの布教では人はをどらぬものである。布教には第一權威が必要だ、絶對の權威に本づく確信だ。確信のない布教、權威のない布教は自體矛盾である。權威ぶつた布教や、裏腹の宣傳は笑止千萬の藝に過ぎぬ。即身成佛とは究竟の確信であり、絶對の權威である。布教も宣傳も要らず、即身成佛は論より證據に、一切を解決していく。幾多の宗論など、口角泡を飛ばしても、口舌三寸の勝利で終るのでは、戲論となり畢る。即身成佛は實に證據中の實證である。即身成佛者が一人でもあれば立正安國も四海歸妙も着々と進展していくことは確である。



一六

この未曾有の時局に際して、我々は眞に何をなすべきであるか。

それは即身成佛によつて明確となる。「天晴レヌレバ地明カナリ。法華ヲ識ル者ハ世法ヲ得ベキカ。」とあるやうに。戦争が始つた。金が要る。物質必要。それ梵鐘も献納せよ。献金取次の托鉢もやらう。敵國降伏の大祈禱會。戦傷病者の慰問もせねばならぬ。戦死者には葬儀、葬儀にも神式と佛式とで争はねばならぬ、占領地域には若干の宣撫班の派遣等々。さかんに多忙を極めてゐる。それ故か、目は少しも内に向けられてゐない現在である。

だが然し、何かの機みで、内心に向けられたらどうであらう。佛教徒として考へたら。そもこの事變の勃發、その最深の原因はたしかに佛教徒の怠慢ではなかつたか。それは今ともかくとして、すぐ次に來るべき高度の對支文化工作、對世界の思想戰への準備。第二第三の排佛棄釋、いよく深刻とならう。佛陀釋尊を排斥されてどこに神聖があるか。宗祖の御遺文を不敬よばはりされ、法界獨一無比尊重の本尊中勸請の國神を批議されつゝ、どこに立正があるのか。之は實に我々宗徒全般の責任であると思ふ。その上、神官・神道學者の攻勢も猛烈とならうが、さりとて、單なる思ひつきの神佛妥協的思想では神佛への冒瀆である。こね合はせの神佛習合の教學では、神道者は勿論國民を僞瞞することとならう。また怪しい神憑りのやうな神道論や國神信仰では識者の物笑ひとならう。これらに對して宗祖は何と仰せられるか。神を批判し、佛を論議して、同異勝劣を決せんとする、第一我々にその權能があるのか。愚劣な俗吏の前や、サーベルピストルの前に腰をぬかすほどの者どもが、却つてやり度がる事である。敢て神佛の本迹同異を眞に知らんと欲せば、「神と成るべし」、「佛となるべし」だ。

我々は今、非常も非常、内外絶大な危機に生きてゐる。何といふ深刻な雄大な歴史の一點に立つたのだらう。本佛釋尊の告勅、宗祖の法命をつがうとする者である以上、この今日一日の生命は、重責も重責、一大重責をせをうて生きてゐるのである。何を以てか、「世尊ノ勅ノ如ク、當ニ具サニ奉行スベシ。」と申し得られよう。

なるほど、宗制の改革も緊急、布教も必要だ。國內布教も、國外宣傳も多忙とならう。學問の研究も大切だ。然し乍ら、何よりも緊急で須要の一大事は、宗命に對する覺悟である。自信確信である。正大な信念、堅確な信力である。但しその正大も堅確も單に個人的な觀念的なそれでは何の用にも足らぬことはいふまでもない。國家的に世界的に宇宙的に正大であり、堅確でなくてはならぬ。でなくては、とても、さしせまつてゐる内憂外患に對し得ぬであらう。現代では、まさに佛教の眞偽が問はれてゐるのである。眞價である以上、學問的理論で證明することは埒明かぬ。雄辯廣舌で煙にまくことも、手品のやうな奇蹟を示すことでもない。佛教での眞價は、佛教の究極目的を實現することである。即ち人間が佛となること。而もすでに出來上つたのを示すよりも、現實的に、その人間が此の佛といふやうにである。然る以上何の排佛があらう。何の論争が要らう。戦争があらう。

天にはたゞ一つの太陽が輝いてゐるではないか。そのやうに世界中、大自覺の光明を仰ぐであらう。地には眞理によりて統治します聖皇にいだかれて、萬邦協和百姓昭明も、立正安國婆娑即寂光も自づから運り來る勢とならう。

## 一八

扱て如上私は甚だ縷々冗々と、現時局下の各方面から、「即身成佛」の切要を論及し來つた。従つて、この即身成



佛は佛教の究極目的であるだけに、輕々に論議し得べくもない事であらうが、いかなる困難があらうとも、現實社會國家世界が深刻に要求してゐることであり、歴史的當然からの課題である以上、閑却できないものである。一般宗教家も佛教徒・佛教學者もひとしく之に努力せねばならぬが、特に吾宗徒は舉つて之を目的として信行し、學者は専ら之に精銳なる頭腦を集約し、究盡していかねばならぬ。毒の箭を抜くやうに、親が子を水火の中から救ひ出すやうにはげまねばならぬのである。單なる理論的考證や、概念遊戲や、法義的莊嚴の追はないのである。宗派的執情や獨善的慳悋やを一擲して、現實國土世界の靈活のために、人類救濟解脫のためになす本質的聖業として覺悟するものである。

それ故に今の標題も、とかく論議的意味にとられ易い即身成佛論の研究とはせずして、即身成佛の因果並に實證に關する研究との意圖から、「即身成佛研究」の序説とした所以である。

## 一九

斯の研究に際して我々が今立つ場合は、いふまでもなく純粹宗學である。或ものは難じていふかも知れない。純粹宗學的立場といへば、それは古臭い教權宗學ではないか。現在の學界の趨勢に逆行するものではないか。眞の公正嚴密を欠くものであらう。現代は宜しくまづ、文獻批判の方法によらねばならぬ、といふであらう。

然し、我々は敢えて批判文獻の方法は公正ではないといふのではないが、それはなほ、餘程注意しないと末梢的になり易く、また迂遠になり易い。そもそも、その文獻を批判する場合でも、又いかなる資料によつてそれを生かす場合にでも、主觀的にはたらく睿智はどこから得るか。人間の常識的範圍に踰踏した觀念で見たり、測定したり、判定

することには、そこにすでに大いなる疑惑があるのである。成佛の意圖、佛陀への自覺がそこに一層要求される。かうなるとまた循環論法に陥つて二進も三進も進めなくならうが、幸ひ、我々は、吾が日蓮聖人の學的態度、その信仰的態度、その實踐的態度に於て、全く一貫した睿智・絶對的自覺の閃きを認める。而もそれが一生を通じて果された事業成果に見るならば、その歴史的社會的關聯のうちに、我々はむしろ神秘的な天命を感得せざるを得ないのである。それは只今、論證の限りではないが、ともかく純粹宗學はかうした偉大な人格性、我々の目的するに格好な先驅者であり、指導者である人格性に出發すべく立つものである。日蓮聖人自身も亦かうした配慮確信決意から出發されたる以上、現在の我々はまづ、公正さを學ぶ意味からしても、嚴密さを鍛鍊する意味からしても、現在の諸佛教學者との研究方法態度以上に、純粹宗學的立場が一層徹底してゐると信ずる。我々はこゝでも亦主張する。斯の研究は、單なる人間的に踞踏した頭腦のもてあそべる理論を求めてゐるものではない。有限なる此の人間理性を極度に淨化し、鍛鍊し、徹底して、神性化し、佛陀化し、絶對的睿智、大自覺を成ぜんとするものである。むしろ、執らはれた常識的識域を突破してすゝむ所に我々の熱意が集注する。さきにも觸れたやうに、日蓮聖人ほど佛陀の本懷を、大義名分的に現實的に主張し發揚された方はない。従つて即身成佛・立正安國・娑婆即寂光の大師は、三國佛教史上、大聖人を最中の最とするのである。

それ故に、「即身成佛」の研究に於ては、先づ第一に日蓮宗純粹宗學の關門から入らねばならぬと信ずる。

## 二〇

また論者はいふであらう。佛教を學ぶには何より先きに、宗派の經典とか宗祖派祖を研究するよりも、第一の教主



釋尊の歴史性から始めねばならぬ。即ち、根本佛教より研究すべきであると。

一往の道理である。よく考へて見よう。直接に釋尊に接するには、いふまでもなく時代國土風俗等非常の懸隔があること、文獻的にはその確實を期し難い諸の困難があるが、之は現代聖世の恩澤、學界の業績からして、かなりの道は開拓されてゐる。

が然し私は、前節の諸理由は、必ずしも、我々が日本人であるといふ意味でなく、宗派的感情からでもなく、我々自身の公正嚴密なる態度を鍛へるといふ意味からして、あえて根本佛教的釋尊研究をも第二次にさし控へ先づ純粹學の立場に立たうとする。但し當然、純粹宗學中樞問題の進み赴くところ、溯源的には必ず、根本佛教的佛陀の史實、成道の始終、内證的心境等に關する研究が求められるであらう。のみならず、宗學的理念の發動には、その補助的研究領域として、根本佛教は勿論、諸大乘教の成佛論、佛身論、淨土論、人生觀、世界觀、宇宙觀等の研究も要求される。特に眞言密教における即身成佛義、その教相・事相等より中古天台等の論題的研究等、廣範圍の研究には欠くべからざるものではあるが、それはその必要に應じてとり上げて遅くはないと思ふ。

以上の如く、あくまでも研究のための研究ではない。さりとて名利權勢等の爲めにするものでは勿論ない。眞理のための研究ではあるが、その眞理も成佛のための眞理である。

絶對的自覺をば、この現實的我に於て體達せんとする熱意が、研究の態度方法範圍等一切を規定すべき力である。

## 二一

なほ附け加へて、近世乃至現代の宗學界に於ける趨勢を論じ、即身成佛論の研究業績を吟味し批判した方が、如上

の趣意をば明確する便宜でもあらうが、然しさて緊急とも謂へない。で私は、序説は此れ位に止めて、次に本論として、日蓮聖人の全教學から見た「即身成佛」なるものを究明し、そこに理論的・實證的乃至は生命的な教權の根源をさぐらうと思ふ。さらにそこからあらゆる弟子檀那への教誡、現在未來への聖慮、或は日本と世界との聯關、或は聖人と教主釋尊との本質的血脈等、根本教學全般の組織と體系を企圖できようと思ふ。我々信者行者學者は、その分野に當り、實際上の活きた教示利導を仰ぐに足ることとなつて、始めて純粹宗學的意圖はその緒に着くのである。申すまでもなく、之は一人一家の私功を競うてなすべきでなく、虚心淡懷、恭謙熱誠、互に切磋琢磨し大法の興隆活現を祈りつゝ、成就することである。

仍て謹んで、本文中多大の蕪辭非禮を咎めず、その切要する意圖を汲み、教導に吝ならざらむことを希ふ次第である。



## 御遺文にあらわれたる下種思想（前號續）

武 田 海 正

### 2 末法時代に生れる人々

佛教では教祖釋尊の入滅から數へて二千年以後の世の中を末法と稱してゐる。末法とは五濁の惡世であつて人々皆諍ひを事とし佛教の中でも法華經を本意としない教は御利益がなくなると云ふ恐ろしい世の中である。時代は法華經の大白法廣宣流布の時代であるといふ立場から全人類を分類すると、法華經を信ずる人と、法華經を謗る人と、法華經を信じもしなければ謗りもしない人の三種になる。

漠然と法華經を信じた人といへば縁あつて法華經を見たり聞いたり讀んだりして信じてゐる人は誰でもその中に含まれるのであるが、宗乘として法華經を信ずる人といふ場合は特に聖人の教化にあひ、又は御遺文を見聞し、或はその門流信者の説教によつて法華經を如法に信ずる順縁の人々に限定される。この順縁の人々は法師品によると過去世に十萬億の佛を供養し、法華經弘通の大願を立てゝ自ら進んで人間と生れて來たのである。涌出品によればこの世で法華經を信じ法華經を弘める人は前世には本化地涌の菩薩であつたのである。地涌の菩薩として過去遠々劫の昔から

法華經を信じ、法華經を弘めて來たのであり、又この世に生れて來たのも法華經を信じ法華經を弘める爲に生れてきたのである。だから順縁の人々にとつては法華經を信じ法華經を弘めることは出世の本懷であり、生涯の目的であり、日々の生活の基調でもあるわけである。

法華經が有難いといふことをきいてねたんだり謗つたりする人は過去遠々劫の間、佛の覺りから遠い迷信邪教を信じてゐたからその熱情が今世に生れてきてもこびりついてゐて、その惡縁の爲に法華經をそしめるのである。法華經の譬喩品によれば彼等は法華經をそしつた罪によつて一度は墮獄しなければならぬ。しかし不輕菩薩を惡口した人々が千劫の間、墮獄して再び法華經によつて救はれたやうに、いつかは必ず法華經によつて救はれるのである。それから次の法華經を信じもしなければ謗りもしない無宗教の連中は一番困りものである。彼等は縁なき衆生度し難しでどうしようもないのである。現今の社會にはこのどうしようもない連中が一番多いのではなからうか。

有史以來世界第一の寶典たる法華經をみもせず、きもせず、讀もせず、信じもしない不幸な人々が社會にあふれてゐるのだ。彼等は自らの運命をかこち、生活苦に喘いでその苦海からのがれようとしては又迷信邪教へはまりこんで行くのである。科學全盛時代といはれる今日なほ家相、人相、手相、墓相、日の吉凶七曜九星二十八宿、姓名判斷類似宗教などの迷信邪教が跳梁跋扈するのは彼等の懷がめあてなのである。彼等は法華經の太陽の光を背にして闇の中に色々な迷信の映畫をみせつけられて布著をしぼられてゐるのに氣がつかない。たまに眞正の法華經の行者がゐてそれは迷信だからよせなどといふと、切角の信仰をぶちこわすといつてくつかゝる。こゝが大事なところだ。見思未斷の凡夫元品の無明をおこすこれ始なり。これは日蓮の挑發によるといはれたのはこゝである。全々法華經に無關心では救はれない。わざ／＼法華經を謗らせて救ふといふのである。



信ぜずばせめてのことに謗れかし

よこれぬ衣のあらはれもせず

どうせ信じないのなら謗つた方がよい。謗ることによつて根本惡が發動する。根本の惡心とは元品の無明であるから、等覺の菩薩が妙覺位にのぼる時に始て斷ずる最後の迷ひである。その最後の根本の迷ひを挑發して斷破するのである。法華經を謗つた罪によつて一度は墮獄するであらう。しかしそのおかげで將來必ず法華經の爲に救はれるといふのはかういふわけである。

法を謗ればどうして墮獄するのであらう。それは法は本佛の心であり、智慧であり、生命だからである。また法は一切衆生を佛にする佛種だからである。そういふ尊貴無上の法を誹謗するから一番重罪人のおちる無間地獄へゆくのである。無間地獄などといふとそんなものはない。死んでから何があるものかなどといふ人があるかもしれない。しかしそんな人こそ未來を信じない。久遠の生命を信じない。恐ろしい謗法者の仲間なのである。

本當の法華經の信者なら本佛の實在を信じ、本佛は久遠の昔から、今なほ現に働き給ふことを信じ、本佛の心は法華經本門壽量品文底秘沈の一大秘法なることを信じ、一切衆生は法華經の久遠の生命を信じて作佛することを疑はない。

この久遠の生命を信じない者は自ら作佛できないばかりでなく、自分以外の一切の人間を成佛せしめないといふ大罪惡を作つてゐるのである。彼は久遠の生命を信じないから未來の存在を信じない。明日を信じない。未來を信じないから生きてゐるうちに思ふ存分享樂しようとする。自分さへよければ他人などはどうなつてもかまわん。今日さへうまく過ぐせば明日などどうなつてもよい。私利私欲に走つて社會の爲など露程も考へない。さう云ふ人はどれくら

お他人へ迷惑をかけるかわからない。自分が惡道へ迷ひこむばかりでなく連の人を皆迷界へ誘惑する。自分が法華經を信じないばかりでなく他人へもすゝめて法華經をすてさせる。法華經は佛になる種である。その佛の種をすてれば誰も佛になる事はできない。だから法華經を謗するものは十界の佛種を斷滅する惡人であるといはれるのである。

取要抄云 末法に於ては大小權實顯密共に教のみあつて得道なし。一閻浮提みな謗法となりおわんぬ。逆縁の爲にはたゞ妙法蓮華經の五字に限る。例せば不輕品の如し。我が門弟は順縁、日本國は逆縁なり。(一〇四二)

本尊抄云 此の時地涌の菩薩、始めて世に出現し、たゞ妙法蓮華經の五字をもつて幼稚に服せしむ。因謗墮惡、必因得益とはこれなり。(九四七)

日向記云 我等衆生五百塵點の下種の珠を失ひて五道六道に輪廻し貧人となる。(五一)

當體義抄云 佛說云若人不信毀謗此經則斷一切世間佛種乃至其人命終入阿鼻獄(九九九)

忘持經事云 久遠下種の人は良藥を忘れ五百塵點を送り、三途の嶮地に顛倒せり。(一三八四)

日向記云 此經を謗する者は十界の佛種を斷するなり(三五)

### 3 本 佛 背 反 の 大 衆

末法時代には法華經を信する者と、信しない者と、そのどちらにもつかない中間階級の者と三種類がある様であるけれども、久遠以來今日のまでの機類と比較すれば何れも最劣機の鈍根である。等しく久遠下種をうけてゐながら今まで流轉してきたのであるから、さうはめたものではない。

正像時代の人を本已有善といひ、末法時代の人を本未有善といふ場合も末法の人とは本來下種がなかつたのだと解釋



してはならない。下種の有無によつて本已有善と本未有善を區別してはならぬ。本未有善といふのはたゞ過去に發心下種を被る程の善い因縁がなかつたのであつて、久遠の下種は十界平等に被つたのである。本因の下種は平等であつたが久遠の昔から今日までくる中間色々な惡因縁にたぶらかされたのである。その惡縁のおかげで長い間流轉をつづけ遂に久遠下種も、あつたのかなかつたのかさへ忘れはてしまつたのである。だから機情の立場から本未有善といふのである。

下種を忘れ本心を失つてしまつたのは自ら好き好んで忘失したのではない。中間の強盛なる惡縁に迷はされて惡道におちたのである。その惡縁といふのは鎌倉時代には念佛、禪、眞言、律等の他宗であつた。今日は唯物思想と迷信邪教をさすのであるから、宗教家たる者は何をおいても教の邪正を明にしなければならぬ。災難と迫害は恐るゝに足らない。宗教家の最も恐るべきものは迷信邪教である。天災は現世だけであるが邪教の惡縁にあへば未來永恒惡道におちるからである。

自らよこしまにふる雨はあらじ

風こそ夜半のまどはうつらめ

久遠下種を忘れたり、十界の佛種を斷じたりする人はまた本佛背反の重罪を犯してゐるのである。謗法といつてもたゞ法だけを誹謗するものと思つてはならない。妙法は本佛のさとりの内容であるから、本佛の叡智であり、その慈悲の結晶である。さういふ本法を信じないのであるから、佛智を疑ふものであり、本佛に背くものであるといふのである。

佛の明智を疑ふのはその人に根本無明があるからである。無明とは佛の心を疑ふ根本の惡心である。佛の心は明る

い。光があふれてゐる。百千萬の日月よりも明るい、光明無量である。無明とはその反對で明るさがないのだからまづくらである。闇である。迷へる人の心は闇である。闇であるから佛の明智を疑ひ、佛の明智をそしめる者は佛の大化にそむくことになるのであるから、本佛背反の罪におちるのである。

また佛の明智は普通、法の名によつてあらはされる。だから法は佛の内容であり、心であり、生命である。その法を疑ひ、その法をそしめる者は佛の心に反し、佛の生命を傷つけるものでなくて何であらう。父本佛のいのちを斷つものは、子としては親殺しの重罪犯人でなければならぬ。

壽量品によれば失心、不失心の子供達はみな父に解毒濟を下さいとお願した。その請に應じて父は子供達へみな平等に父自ら慈愛の手で作つた良藥を與へたのである。然るに不失心の子はそれをのんだが失心の子はそれをのまなかつた。藥をのんだ子はみな病氣が癒つて元氣になつたが、のまなかつた連中は七轉八倒の苦みをつづけてゐた。

してみると久遠の昔、全法界の人々はみんな佛の教化を懇請した。そこで佛はその請に應じて十界へ平等に妙覺の種子を與へたのであつた。それなのに惡縁にたぶらかされた人々はその久遠の下種を忘れてしまつて、無量劫の長い間、苦海に身を沈めてゐたのである。彼等は父の考へた良藥をのまなかつたのであるから、佛の心を疑ふものであり、佛にそむく不孝の子であるといはれてもしかたがない。かやうな佛智疑惑と、本佛背反の重罪によつて、末法の人々は久遠以來今日まで流轉をつづけなければならなかつたのである。

開目抄云 久遠大通の者の三五の塵をふるは惡知識にあふゆへなり。(一八六)

忘持經事云 今の眞言宗、念佛宗、禪宗、律宗などの學者は佛陀の本意を忘れ失ひ、未來無數劫をへて阿鼻の火坑に沈淪せん。(一三八四)



御義云 無明とは疑惑謗法なり。(三九)

又、法華經は一切衆生の父なり。この父に背く故に流轉の凡夫となる。釋尊は一切衆生の父なり。この佛に背く故に備さに諸道をめぐるなり。(三九)

#### 4 懺悔と自覺

私共の過去をたづねるならば佛にそむいたり、法をそしつたり、その外久遠以來今日まであらゆる罪惡をつみ重ねてきたに相違ない。五戒、十戒、五百戒などの無量の諸戒を破つた上に、無數の法華經をそしり、その行者を迫害してきたのであらう。こういう無始以來の罪障を數へるならば盡未際救はれさうもない、この罪人は一體どうしたら救はれるのであらうか。

さういふ常識で考へては救はれさうもない人間をすくふのが宗教である。その人間を救ふにはその人間と同じ様な身と心と境遇とを有しながら、その人間より以上の力を持つてゐなければならぬ。古來の宗教的人物はみな人間と生れてゐながら、我は神の使であるとか、我は神の子であるとか、我は佛の使であるとか、我は菩薩の生れかほりだとか宣言してゐる事によつても人間以上の力を必要とする事が明であらう。キリストは神の子であるといひ、マホメツトは神の使であるといひ、釋迦は本覺佛の應現であるといひ、天台は藥王菩薩の再誕であるといひ、宗祖は地涌の生れかほりであるといはれてゐる。

人間にはなやみと悶へがある。精神と肉體の矛盾になやみ、理想と現實の矛盾に心をいためない人があるだらうか。この靈肉の矛盾になやみ、理想と現實の矛盾を意識する心はまことに尊い心である。その心こそ現實的の肉體的の罪

を懺悔する心となり、また精神的の理想的の超人的實在者を求める心となるのである。たゞ一つの心が二方面へ同時に働き出すところに秘密がある。人間的な罪惡を知ればしる程、超人間的な力にたよりたい心がわいてくる。超人間的な力にたよる心はそのまゝ超人間的力の持主になりたいといふ意志活動へまで進んでゆくのである。日蓮聖人でも人性に對する省察が、自己にまで深められた時、自らの過去における謗法罪を懺悔しないでは居られなかつた。滅罪抄に

過去の謗法我身にある事疑なし。此罪を今生に消さずば未來爭でか地獄の苦をば免るべき（一〇一三）

佐渡御書に

日蓮またかく責らるゝも先業なきに非ず。不輕品云、其罪畢已等云云。不輕菩薩の無量の謗法の者に罵詈擲せられしも先業の所感なるべし。何に況や日蓮今生には貧窮下賤の者と生れ、旃陀羅が家より出たり。又過去の謗法を案ずるに誰かする勝意比丘が魂にもや。大天が神にもや。不輕々毀の流類か。失心の餘殘なるか。五千上慢の眷屬なるか。大通第三の餘流にもやあるらん。宿業はかりがたし。日蓮も過去の種子已に謗法の者なれば今生に念佛者にて數年が間法華經の行者をみては未有一人得者千中無一等と笑ひし也。今謗法の醉さめてみれば酒に酔る者父母を打つて悦びしが醉さめて後歎しが如し。歎けどもかひなし。此罪消がたし。何に況んや過去の謗法の心中にそみけんをや。（八三〇）

開目抄に

我無始よりこのかた惡王と生れて法華經の行者の衣食田畠等を奮ひとりし事かづをしらず。當世日本國の諸人の法華經の山寺を倒すが如し。又法華經の行者の頸を刎こと其數をしらず。今日蓮強盛に國土の謗法を責れば此の大難



の來るは過去の重罪の今生の護法に招出せるなるや（八一七）

等と懺悔されてゐるのにみても明かである。これが敬虔なる佛子としての態度なのではなからうか。

この謗法に對する反省と懺悔とは永遠に救はれる契機である。なぜかといへばその謗法を反省させるもの、懺悔させるものは久遠下種の本覺心だからである。すでに謗法の罪を懺悔してゐる人の意識には本覺心が働いてゐる。もし本覺心が働いてゐるとすればその人は謗法懺悔の當初すでに救はれてゐるのだ。それは長い過去の間には自分も法をそしつた事があるなあと反省する時にはもう久遠の生命を信じてゐるのだから、謗法懺悔の一刹那に本覺佛の體內へ攝取されるのである。はやその時は愚かな自分も本佛果海中に安住して、永遠不滅の生命につながつてゐるのだと覺ることができるのである。この自覺によつて罪惡の身が直ちに久種近脫の上機にのぼるのである。久種近脫とは久遠下種を被つて近世に脱益を得たる六萬恒沙の地涌の菩薩のことであるから、久種近脫の上機にのぼるといへば、何も知らない我等凡夫が自分も本化地涌の流類であつたと氣づいて自覺することである。

日蓮聖人はすでに青年時代にその大自覺に入つて居たのであつた。しかしその自覺發表にはあくまで用意周到であつた。精神的には自覺してゐても具體的に社會的に肉體的に體驗しないうちは發表しなかつた。承久亂の原因と八宗分裂の元意を材料に國家を諷曉し、建國の理想と如來出世の本懷經を右手に當時の上下萬人に向つて折伏聖戰の火蓋を切つた。忍難弘通の日はつづいた。法華經の豫言は一一實現した。日蓮聖人は法華經の一文々が自己によつて體現されつゝある事を信じて感涙にむせん。予この記文を拜して兩眼瀧の如く一身悦を徧す（一一二二）と叫んだ。

こゝに謗法の罪人は一躍して久遠の生命の中へ甦へり、我こそは地涌千界の上首上行の再誕であるといふの臆するところもなく宣言せられた。

實相抄云 地涌の菩薩のさきがけ日蓮一人也。(九六〇)

賴基陳狀云 日蓮聖人は三界の主、一切衆生の父母、釋迦如來の御使、上行菩薩にて御座候(一六二三)

報宗仲書云 斯人行世間の五の文字の中の人の文字をば誰かと思食す。上行菩薩の再誕の人なるべし(一九二五)

教行證御書云 已に地涌の大菩薩上行出させ給ぬ。結要の大法亦弘らせ給べし。(一二二五)

本化上行の自覺を有する人の唱へ出す題目の聲は世界人類を救済する末法下種の天鼓の響となつて萬年の未來までもひびいてゆく。

## 5 地 涌 の 菩 薩

日蓮聖人の上行自覺こそは萬年救護の實證である。もし聖人が如來使の自覺にたつて開教しなかつたならば、末法の大衆は盡未際救ひの聲をきく事ができなかつたであらう。幸ひなるかな、佛使上行は再誕遊ばした。文底留種たる結要の大法は弘まつた。

この大法の力によつて流轉の凡夫は直ちに久種近脱の上機に騰る事ができるようになつた。罪惡のかたまりであつた苦の私共は今や永遠に救はれるのだ。この事實は末法の人間一同が法華値遇の大縁を過去遠々劫の昔から結んであつた事を證するものでなくて何であらう。それではどんな善い因縁をつんだおかげで今日法華經の信者になつたのであらう。

經典によれば久遠の始に法華經の下種をうけてから今日まで地涌の菩薩として修行したり、十萬億の佛を供養したり諸佛のみ前で末法惡世に生れて法華經を弘めます。などと誓願をたてたりしてきたのである。この世に生れて法華



經を信する人々は過去の世の中では皆本地地涌の菩薩であつた。本化の菩薩といへば久遠の昔、本覺佛の教化にあつて妙法を修行し、すでに佛の位にあつたが本佛の行化をたすけるために壽量顯本の直前始めて菩薩となつて涌現せられた人々なのである。さういふ高貴の佛菩薩がこの末代の世を警醒せんが爲に自らすすんで現代社會に人間と生れてくるのである。だから法華經の信者たる者は人生の目的は何ぞやなどと迷ふ必要はない。もう生れぬ前から人生の目的は確定してゐる。

法華經を信する程のものは老若男女の差別なくみな法華弘通の陣頭にたつて進まねばならぬ。その外に人生の目的はないのだ。

今現に法華經の信者なら誰でもその過去世は地涌の菩薩であつたにちがひない。地涌の菩薩であつたとすればその本地は皆日蓮聖人と同格でなければならぬ。してみると聖人が唱へる題目と同じ様に誰が唱へる題目でも末法下種となるわけである。それでよいのだらうか。

これは決して日蓮聖人を人間並に引き下ろしたものと考へてはならない。正しい信仰は人間を罪人に引きおろすところにあるのではない。人間が罪障のかたまりであるかのようにとくのは人間の本地は本來神であり、菩薩であり、佛であるといふ事をさとらせる爲に、まづ正しい信仰を得てゐない以前の自己を否定させる爲なのである。あなたの本地は地涌の菩薩であつたといふのは、あなたは法華經を信じなかつた以前の自分を強く反省し懺悔してゐるといふ見地からさういふのである。だからあなたは地涌の菩薩であるといふ事は日蓮聖人を人間並に引きおろした事を意味しないで、むしろ日蓮聖人と同じ地位に皆さんが昇つた事を意味するのである。丁度それは寶塔品の說法の時一會の大衆が釋迦多寶二佛並座の崇高なお姿を拜んで自分たちも空中へのぼりたいと思つた時、佛の神通力で靈山の大衆一同

すうと空中へ引きあげられた様なものである。多寶如來の誓願によれば在世だけではなくて末法でもどこでも法華經をとくところには寶塔が涌现する事になつてゐる。末法の寶塔は久遠下種をさとつて、自分もあの地涌の菩薩の流類であつたと信仰をさゝげるところにあらはれる。寶塔はどこにある等とさがさなくともよい。やがて法華經を信する自分自身が寶塔であつたと氣づくであらう。自分の佛性は久滅度の多寶如來であつた。久滅度といふから久しい以前より眠つてゐたのである。それが今日玄題の響をきいて覺醒したのである。迷信邪教の癡醉劑をかゞせられて長い間眠らせてゐたのが、今はからずも妙法の良藥にあつて覺醒する事ができたのである。

實相抄云 日蓮と同意ならば地涌の菩薩たらんか。地涌の菩薩に定まりなば釋尊久遠の弟子たる事に疑や。經云 我從久遠來教化是等衆とは是也。末法にして妙法蓮華經の五字を弘めん者は男女は嫌ふべからず。皆地涌の菩薩の出現に非ずんば唱へがたき題目也。(九六一)

千日尼書云 法華經には過去に十萬億の佛を供養せる人こそ今生には退せぬとわみへて候 (一七六〇)

阿佛房御書云 末法に入つて法華經を持つ男女のすがたより外には寶塔なきなり。若然者貴賤上下をえらばず南無妙法蓮華經と唱る者は我身寶塔にして我身又多寶如來也。(八二五)

かうした有難い自覺を得たならば今度はその法悦を他にわたかねばならない。自分が救はれると同時に他人をも救つてゆくが菩薩行である。自分さへ救はれれば他人はどうなつてもかまはないといふのでは菩薩ではない。それは聲聞か緣覺であらう。法華經の信者だと自らなれる程の人は少なくとも地涌の自覺に達してゐる筈であるから菩薩行をしなければならぬ。菩薩行といへばたいへん六づかしいものゝ様であるが、末法の菩薩行はその形式は極めて簡明である。しかしその精神まで安直であると思つてはならない。その形式はたゞ題目を唱へるだけであるから三歳の子供



にもできる。しかしその精神は常に本覺佛の實在を信じて、あらゆる社會の人々を神と敬ひ佛と崇めてつきあつてゆかなければならないのであるから容易ではない。

その實踐的軌範は不輕品に説かれてゐる。不輕菩薩はどんなに恥かしめられても堪忍してその人々を一心に拜禮しつづけた。それだのに社會の人々は彼の不輕菩薩を杖でうち刀できらうとした。今だつて法華經の精神を本當に正直にとくならばきつと迫害がくるであらう。日蓮聖人の生涯は殆んど迫害史であつたではないか。どんな迫害がこようと法華經の精神を精神として題目を唱へてゆくのが私共の人生の目的である。たゞ題目を唱へただけでそれが自行となり、化他行となつてゐるのである。唱へられた題目は聲となつて他人の耳朵から入りその人の八識心田の中へ下種される。その覺種はその時すぐ芽をださんでもいつか必ず芽をふいて、その人の心の中から育ちあがり内部から自分の佛菩薩なる事をさとらせるであらう。この修行經過が末法下種といはれるものである。だから末法下種は始め日蓮聖人によつて唱導され、その教團人は男女を問はず皆實行しなければならぬ菩薩行なのである。又少しでも他人を教化する力があるならば一文一句でも法華經の有難度いわれを語らねばならない。それは法華經の信者たる者の勤めであり天職である。勤めといふよりも法華經を信すれば他人を教化する力量が自然にわいてきて弘めないでは居られなくなるのである。それは信仰の心の中にお釋迦様や日蓮聖人の魂が働いてゐるからである。信徒たる者はかうした有難度い心地に住してすみよき世界建設の爲に命がけて戦はねばならない。縦ひどんな迫害がきても退いてはならぬ。その迫害にまけて改宗したり、法華經の反對者と妥協したりするならば無間大城の底におちて出る時期は永久にこないであらう。だから法華經をそしめる者をつつけたならば容赦なくこれを折伏しなければならぬ。それがその人に對する最上の禮儀であり、最大の敬意を表した事になるのである。もしさうした事をしないで謗法者をみても默認す

るならばそれこそ自他共に與同罪として墮獄しなければならぬのである。

御義云 南無妙法蓮華經は自行化他にわたるなり。(八二)

松野殿御返事云 過去の不輕菩薩は一切衆生に佛性あり。法華經を持たば必ず成佛すべし。彼を輕んじては佛を輕んずる事になるべしとて禮拜の行を立てさせ給ひし也。(一五二四)

經文の如くならば隨力演説もあるべきか。(一五三二)

秋元抄云 法華經の敵をみてせめ罵り國主にも申さず。人を恐れて默止するならば必無間大城に墮べし(一九三九)

## 6 末法下種の種子

久遠下種已來の世々番々の種熟脱は今番の壽量品に來つて一まづ大團圓となつた。こゝで失心不失心の上根上機はみな脱益を得た。しかし余の失心者は今番靈山の教化にももれ、正像にももれて末法の未來まで流浪の旅をつづけた。この久遠の流浪者を救はんが爲に教主釋尊は遙かに末法を鑒み給ひ壽量文底に久遠の本種を留めておかれた。そうして遠く末法の大衆を教化する爲にこの文底留種の一大秘法を神力品では四句の要法に結んで上行等の地涌菩薩に付屬せられたのである。

この一大秘法は本覺佛が無始久遠の昔證得せられた事行の南無妙法蓮華經である。この本法は單なる經典の名でもないし實相の理でもない。本佛久證の妙法であるから本佛の妙智であり妙慧であり無縁の慈悲である。いかに眞理運動が盛んに行れても人類救済の妙法とはならない。眞理とは火が熱い。氷は冷たいといふ様なものでそれを活用しなければなんにもならない。その眞理を活用するところに價值があるのである。久證の本法はすでに本覺者が久遠の大



古宇宙の眞理を體得活用して價值としての妙法を久種とし、文底留種とし末法下種の要法とせられたのである。眞理そのまゝの理體なら毒藥の様なものである。その毒を調合して良藥とするのが良醫のつとめである。末法下種の覺種は本佛が久遠の始に大慈悲のみ手をもつて複製された是好良藥である。

久遠下種の種子は本佛久證の妙覺の種子であつた。久遠下種が妙覺種ならば三世十方の分身の諸佛の下種の法もみな一列平等に妙覺種でなければならぬ。經典にも十方佛土の中には唯一乘の法のみありとあるから、宇宙法界には妙法佛種より外には何もものもないのである。全法界の諸佛如來の下種法がみな妙覺種であるならばその諸佛についてある菩薩や神々の教法もみな悉く妙法一佛乘より外にはない筈である。迹佛迹化の教法さへ妙法一乘によつて統一されてゐるのだから本覺佛久遠の弟子たる本化の菩薩の行法が妙覺種である事はいふまでもないであらう。

末法下種は地涌の菩薩によつて行はれるのであるから、本化地涌の行法が妙覺種とすれば末法下種の要法は色もかはらぬ妙覺種でなければならぬ。かうしてみると久遠下種の種子と末法下種の種子は同じ一秘の覺種である。たゞ異るところはその形式だけであつて法體は全同なのである。形式が異るといふのは久遠下種は本佛の久證そのまゝの覺種であるのに對して、末法下種のそれはその種子が久遠以來世々番々熟脫等の効果を收め、壽量文底留種となり、神力別付の要法となり、末法應現の日蓮聖人によつて弘宣せられたといふ教相上の相違である。

これによつてみれば本門脫益の本果と末法下種の本因佛種も形式的には違つてゐてもその法體は同一であるといはねばならない。それは今年と來年は時間的には違つてゐても米の種をまけば米が實り、豆をまけば豆が實る様なものである。種子と果實は同じものであるといふ事は佛因佛果の上でも同様である。たゞ在末相對した時に教相の上では文上文底の異りがあり、教益の上では種脫の相違があるといふだけである。要するに久遠の本法と、本門の脫益と、

末法下種の題目はその實體全く同じである。久遠中間末法の三世にわたつて本佛迹佛本化迹化の自行化他の一切の教法はみな同一本法の妙覺種によつて統一されるのである。

しからばその妙覺種とはいかなるものであらうかと云へば、その形式は極めて簡易なる南無妙法蓮華經の聲にすぎない。けれどもその内容は全法界のあらゆる行法を包含して一つも餘すところがない。

その妙題の聲をきいて信仰の心を起せばその人の心田に入つた一大秘法の妙覺種は自然に生長して三大秘法の妙行と進展する。これはその人の努力によるのではなくて題目そのものに本來具有してゐる如來秘密神通の力によるのである。一度でも玄題の聲が耳朶から心田にひびくと、その題目に性として具有してゐる神秘力によつてその人は心の内部から自己の本覺心にめざめるのである。その本覺心に醒めた人は心に本覺佛の實在を信じ、口に題目を唱へ、身に菩薩行を行はないでは居られなくなる。さういふ正しい信仰者の心の中には生きた釋迦佛、生きた日蓮聖人の魂が入りかはり給ふて、その人の口唇をかりて唱へ出す題目なのであるから、一文不知の人々の唱へる題目でも末法下種の妙覺種となつて空中に地上にひろまつてゆくのである。

實相抄云 釋迦佛多寶佛、未來日本國の一切衆生のために留めおき給ふ處の妙法蓮華經也。(九六二)

日向記云 この題目の五字は五百塵點劫より已來證得し玉へる法體なり。(六四)

教行證御書云 本門の肝心壽量品の南無妙法蓮華經を以つて下種となす。(一一一五)

本尊抄云 久種を以つて下種となす。——在世の本門と末法の初とは一同の純圓なり。但し彼は脱此は種なり。

(九四二)

日向記云 三世の諸佛の業とは南無妙法蓮華經これなり。(五四)



實相抄云　日蓮もしや六萬恒沙の地涌の菩薩の眷屬にもやあるらん。南無妙法蓮華經と唱へて日本國の男女をみちびかんと思へばなり。（九六四）

最蓮房御返事云　我等末法濁世に生を大日本國にうけ忝も諸佛出世の本懷たる南無妙法蓮華經を口に唱へ心に信じ身に持ち手に翫ぶ事これ偏に過去の宿習なるか（八三七）

【完】

## 對支布教と我徒の用意

結　城　瑞　光

佛　法　西　漸

月は西より出て東を照し、日は東より出て西を照す。佛法も又以て是の如し。正像には西より東に向ひ、末法には東より西に往く。妙樂云く、豈中國に法を失ふて之を四維に求るに非ず乎等云云……（顯佛未來記）

戰禍に護る人さへ無い支那の古寺の裡で、携行の御妙判を拜讀する時、佛法西漸の豫識は正に今實現するの時期ではあるまいかと全身を絞る様な感激が湧いてくるのである。

支那の佛法は已に亡んで仕舞つたと云つてもよい程無力なものになつてゐる。傳道を使命とすべき僧侶は、民衆の

信憑を離れて獨善的な所行に満足し、寺塔は徒らに莊嚴の煙りに暗く僅かに一部の佛教居士に依つて佛法の社會性を見るのみである。此の落莫たる現時の支那佛教界を蘇生さす爲には眞に救済力を有する大乘佛教と之が指導に任ずる聖者とを渴仰して止まぬ状態である。

斯の絶好の機會に於て大乘佛教の發展地たる日本の眞佛教を唐土に移して、支那國土の開顯と民衆の救済を行ふとは日本佛教徒の佛勅應答の淨行であると思ふ。

今日の情勢から推して考へると、六百五十餘年前祖命を受けて遠く異境に外人布教せられた日持上人の壯行は、唯敬歎瞻仰の外は無い。然し爾來上人の先驅殉教に繼いで海外傳道に骨を埋めた者は何人あらうか、思へば慨嘆に堪へない次第である。

佛法西漸の時期に際會した本化の門下は日持上人の後囑を拜して死身弘法の覺悟を持つて對支布教に進出しなければならぬ筈である。

### 支那布教への關心

踴躍する日本の宗教界、肩々相摩する内地の佛教界、互ひに喘ぎながら島國根性で凝結した習慣は折角海外傳道に進出しても常に其對告衆は在外の日本人であつて、外人に對する積極的な布教活動は行はないのである。此の態度は佛教の本質からしても改めねばならぬ誤謬で今後は大いに對外人の布教を昌んにしなければならないのである。

從來海外布教と云へば兎角歐米を對象とする聯想が邪魔をして一番近接した外國の支那に對しては過去の戰爭史や民族の文化史的方面から輕視する一種の僻があることは事實で、斯うした自己優越感に浸つてゐる間に對支理解は懸



絶され、その間隙に乗じて第三國が經濟に教化に利權を伸張して來ることになるのである。

人口大約四億八千萬を有し天產物資の豊富な隣邦支那を布教の對象とせず今日に至つて排日抗日の清算の爲に莫大な犠牲を拂ふことは平素の關心が足りなかつたと云つても過言では無く、殊に容共抗日の精神的運動に依つて國を誤り東洋の平和を亂したことは日本宗教家として佛法西漸の豫識があるに對しても申譯の無い結果と云はねばならぬのである。

這時事變の勃發は天祐神助ともいふべき理由を各方面から首肯し得られる。即ち東洋に於ける我邦の存在意義を確立すると共に世界各國が日本の正義公道に三嘆し日本を頼むにあらざれば世界の平和を望むことは難いと自覺させる爲である。日本國家の興隆に力ある我佛教は國威顯揚と共に迷へる支那民衆を救ふべく斷乎たる決心を以て積極的に進出しなければならない。勿論對告衆は支那人で従前の様な日本人相手の教會建設であつてはならない。要するに従來の稀薄な對支觀念を根本からは正して「現在の支那を日本佛教の力で救済する」といふ大目的を樹立しなければ廣い意味に於ける日本佛教徒の國策參與は不可能なことになり終るのである。況や直接當面の責任ある本化門下は此際重大な覺悟を披瀝しなければならない。

支那に於ける外國宗教運動が如何に重大な影響を與へてゐるかに就て基督教の發展情勢を日本佛教徒の參考として通觀する必要がある。

### 在 支 基 督 教 情 勢

宣教師の傳道は夫れ自體としては神の限らない恩寵を惱める人々に施すといふ神聖な宗教の宣布に過ぎないのであ

るが、宣教師の進出する背後から常に宣教師の母國たる國家が利權獲得に乗り出てくる事を見逃すことはできない。基督教が支那へ入つたのは舊教が西曆六四〇年唐の太宗頃でベルシヤの僧阿羅本が長安で舊教を弘めたのが最初である。新教は西曆一八〇七年英人ロバート・モリソンが南洋へ來て傳道を開始して支那へ渡つたものが最初である。兩教の不屈な傳道が今日の盛況を來すに至つたものであるが最も特筆すべきことは布教の自由を捷ち得たことである。それは新教が渡つて三十五年後の道光二十二年南京條約による布教の公認で、之あるために英米佛等の諸國が今日支那に於ける潤い地盤を得て歐米依存の聲を擧げさせる基本をなしたものである。兩教の在支發展情勢を一覽して見よう。

舊教は蒙古を加へて二十大教區百二十小教區に分つて外人宣教師二、六三六。支人宣教師一、八二二。外人修士五七四。支人修士六八九。外女人修士二、一二〇。支女人修士三、六二六。教會數約一萬五千。信徒數二、九三四、一七五。教育事業は大學二。中學高級一〇三、初級四五〇（高級は六年制、初級は四年制）生徒數二五、三九四。小學校三、八三三、生徒數一五五、二八〇。貧兒學校及托兒所一一、八二七。兒童數二三二、七七五。職業學校七八九。生徒數不明。社會事業としては醫院二三六。患者九〇、四五二。施療所一、〇〇二。施療患者數九、八六四、五二七。癩病院九。收容患者一、二四〇。養老院二三六。收容數六、三三一。孤兒院四一五。收容兒童二七、八六八。給食嬰兒童七三、二二七。此外各種の社會事業を施設し相當の成績を擧げてゐる。

新教は何れ劣らぬ設備に全力を盡してゐる。

教育事業に於ては大學一〇、高等專門學校一一、學生合計六、六九六。中學二六九、生徒數四七、九四〇。小學校一、〇〇〇以上で生徒數約一五〇、〇〇〇以上外に盲啞學校九等がある。



社會事業では醫院二三、患者三、九四二、六〇四。癩病院二、收容患者一、七二二。孤兒院六〇。貧不具養老救濟機關一〇、收容者不詳。(以上上海前田牧師の厚意と中華全國教勢統計一九三七年版參照)

之等を國民政府の直接關係に屬する教育、社會各方面の事業と比較すれば教育に於て大學だけが十分の一であるが中學も小學も約半分であり、社會事業に至つては全つて政府が基督教の足許にも及ばぬ有様である。

更に之に對して支那在來の各宗教團體の社會的施設を見る時唯餘りにも無力無活動であると云ふ他はないので、佛教の如きは僧侶七十萬も居ながら僅かに佛教學校の二三を經營し、社會事業は僧侶の手には殆どなく熱心な居士等によつて淨業社、世界佛教居士林等の微々たる存在を知るのみである。日本佛教に至つては御断にならない程度である。斯程までに發展した基督教が眞實支那に對し救済指導の本領を遂げ得るかといふ點を考へて見たいと思ふ。

### 事變と在支基督教の動向

在基督教兩教の傳道者に比例して信徒數が少いやうに思はれるが信徒の内容實質が知識階級であり、有産階級が多いのを知る時其の勢力は侮るべからざるものがある。元來支那民衆は八割近くまで農民で無學なものが多く、基督教信徒の指導者の立場に誘引されることは首肯し得られるところである。今次事變が誘發された原因が西洋崇拜、歐米依存にあることは全般の悉知するところで、國家の心臓ともいふべき國民政府の最高幹部は大多數歐米大學出身の連中であり、基督教信者である。蔣介石自身が宋美齡の誘引で基督教になつたなどは悲慘な滑稽であり、支那に取つては破滅の救世主信仰と云はねばならない。下之を習ふで若い學生生徒が設備の良い基督教系の學校を選んで新進振りを發揮して歐米讚美、日本排撃を指導するため一般庶民も之に附隨して躍るのだから遣り切れたものではないのであ

る。彼等のこうした蔭に得意然たる顔をしてゐるものは誰であらうか、それは教育、社會事業を看板にする宣教師達で強いては東洋平和攪亂の許すべからざる罪人であると云はねばならないことになるのである。

實に彼等が宗教宣布を理由として支那各地に細胞組織を作り歐米諸國の勢力を伸張する傀儡となり、常に國際スバイの暗躍、政治的運動の黒幕になつてゐることは明である。蘇州の宣教師フキツチャーが事變の爲に紐育に歸へり、イヴニング・ポスト紙上に發表した記事などは其の一端であるが、全貌を知るに足るものである、曰く「十數年前から學生を煽動して抗日運動を激發させたことが今日の悲惨な戰敗を喫させたのだから支那に對しては洵に申譯けないことである」と率直に自白をしてゐるのを見て彼等の行動が充分に解るのである。

宣教師等は六ヶ年に一度一ヶ年間歸省を許される。其間自己の經驗と意見とを巡廻講演で發表する、謬つた觀察と自國本位の宣傳を鵜呑みにする國民の誤解が産む日支觀は非常に危険なものであると云はねばならない。茲に於て支那に於ける基督教の對策には充分な警戒と指導とをしなければ獨り支那の滅亡を來すのみならず東洋平和攪亂の罪を受けねばならぬことになるのである。否既に其の反應は現實に醜態を暴露してゐるではないか。

## 日本宗教の進出

個人主義に慣れ迷信に生活を誤る支那の宗教、天帝の愛に國を賣る支那民衆、彼等を救済して東洋和平を招來する聖者は誰であらうか。實際支那民衆は永い間苛求に嘖まれて相互扶助の觀念に乏しくなつてゐるし、進んで強力なる國家を造らうとしても結局は軍閥の搾取に任せねばならぬ破目を自覺してゐるから個人主義に萎縮するのも當然である。従つて宗教的信念も利己的に趨るが若し安心した國家が出現すれば元來が大人的な民族だけに相當社會性が發揮



されるところ。安心した國家建造とは支那をして本然の支那の姿に復還させることで、單なる親日運動の強制に依つて實現するものでなく、支那人自身が中國の有する立場を明確に認識すれば必然的に現れる國家なのである。即ち新時代に適應した中國の建造は今次事變の産んだ天與の恩恵で實に聖戰といふ字句が適切に該當するのである。

此の聖戰の意義を宣揚するのが日本宗教家の分擔すべき一大義務であり一大榮光であると信ずるものである。

然らば日本宗教家は如何にして進出すべきかといふ方法論が問題になつてくる。滿州や北支に見る様な教會所設立を先驅とすると云ふに然らずで對内地人布教が目的でない限り直接支那民衆に教線を張らねばならない。それには布教者それ自體が支那化して行かねばならない。本當に支那を救ふといふ信念があるなら和魂中才で無ければ効果は擧がらない。而も最初から自宗の教義宣布を表面にしたのでは支那人が寄り附き難い。日本も知らない、宗教の社會性も御存知ない民衆に日本流の宣傳を眞向から行ふことは遠慮するより寧ろ害を及ぼすことにもなる。

此際は日本國を知らせることに通佛教的な立場であつて欲しい。勿論自己の宗教は其中に自ら光を放すことにはなるが茲暫らくは民衆宣撫の第一線に立つて日本の宗教家は斯くも民衆指導に實踐窮行するといふ強い慨念を持たせることが肝要である。同時に日本宗教家と民衆の握手に支那の宗教家が沈黙して居られぬやうに之又指導と援助をすれば日本宗教の支那進出が一層の迫力を持つて結實することになるのである。

### 我 宗 の 對 支 進 出

暴支膺懲の聖戰に對して國民精神總動員が決定した。我宗に於ては望月管長以下宗門縉素一統の強固な團結は所謂宗門の動員となつて内には銑後の護りを全ふし、外には從軍僧、皇軍慰問使の派遣となり、更に特筆すべきは前例の

ない宣撫教化使の選拔であつた。

北支に於ける開教所、日語學校等の開設に對して中支方面は僅かに南京寺一ヶ所のみ、然も私が従軍を命ぜられて既に一ヶ年、省みて慚愧に堪えぬ次第であるが、幸ひにして宗門當局の對支觀念と方針とが國策の遂行に協力して、眼前の形式に囚れず、軍の民衆宣撫工作の完成に後記の青年僧を其の一員に採用を願ひ、現在血塗になつて救済指導に活動を續けさせてゐるのである。こうした經驗と熱心な者でなければ將來の對支布教が起きるものではない。徒らに法衣を纏ふて布施を待つが如き態度では到底宗門の大責任を果すことができない。

宗門派遣の宣撫員中には新聞の發行、學校の經營、難民の救済又は寺廟の復活、民衆の指導等に或者は兼任或者は萬能の活躍然も何時突發するや計られぬ敗殘兵の襲撃防禦、討伐行動等全く内地では考へられぬやうな危険と複雑な役目である。この人々に宗門の將來を期待してゐるが又一面心身の疲勞、途上の變化等實に心配の種はあるが大部分が宗門發展の素地を造るものと深く信じてゐる。

近時南支に戰線が擴大して全支一杯に日本の國力と主張とを示すことになつて來た。此の秋、立正安國の祖意を承けて國土を護る我黨の士は奮つて支那に進出し、戰時は勿論戰後に來る支那指導者として不惜身命の布教に給仕すべきである。此稿を終るに當り現在中支に於て活躍の宗門人の芳名を録する。

#### ○軍部特務部關係

河田行誠	外山寛郎	町田堯順	丹羽	豐	長瀬慧昭
小崎龍雄	百武一虎	五藤鳳山	中川義敬	宇佐美鍊昌	
山崎一夫	笠原一夫	佐野藏治	初山康夫	結城瑞光	



○從軍僧

小野瀬 大勝 阿蘇品 淨溫 森 明禎 木内 要英

○中支布教監督

末藤 辨孝 助員 後藤 良康

擲筆に當り「若先國土を安んじて現當を祈らんと欲せば速に情慮を廻し急で對治を加へよ」と祖訓を三唱して邪想中國の迷夢を覺醒せしめ、以て東洋の和平、四表の靜謐を祈らんとするものである。

(一三、一〇、一三)

## 文學些言

齋藤 要輪

下君、お便り拜見致しました。教學方面の私見を陳すべきには、締切が餘り切迫してゐます故、取りあへず隨想の二三を申上て失禮させて頂きます。

火野葦平の『麥と兵隊』はお讀みになりましたか。身延から出征されてゐる加藤鍊明師の書かれた陣歿英靈の木碑が達筆であることのあたりから筆を起して、徐州の戦ひを目のあたりに叙述した近來の快著、改造社の宣傳を割引い

ても、かの『大地』以來の興趣は充分のやうです。續いて三部作を完成するといふのですが、著者がその身を戦塵の眞唯中に置き、いのちを彈雨の危ふきに曝しつゝ、毎日これを最後ぞと手記の頁を重ねたところ、まさに全身を以て彫りつけたスリルは、ぐんぐんと讀者へ食ひ入つて、おそらく今時の戦争文學をリードするものであらうなどと言はれてゐます。

出征した歌人達の現地詠は、このやうに華々しいデビュウは持たないにしても、その質と量とに於て、いづれ出版の曉、相當の喧傳を得ることでありませう。短歌では殊に著しい現象ですが、おしなべてリアリズムの勝利です。身を以て當處しなければ、わが想念の確乎たる裏づけは果し得ませんから、そこで國策的に文士從軍の舉もあつたわけですが、とに角も戦争が單なるチャンバラの平面描寫から救はれようことは想像されるところです。リアリズムと言つても、バルザック風の逞しさでなくて、これも亦國產です。玉井伍長は兵隊の赤い糞に嘆き、争はれぬ民族的親しさを支那兵に對して考へ、東朝への林芙美子の報告には、白く呆けた綿畑のことが書いてありました。それにしててもこのやうにして、全身心を以て現實の攝取體驗に赴いた文學が、それが單に頭腦のみを驅使創作せしめた作品などよりも、もつと自然に、もつと深く讀者のたましひへ迫つて來るのは當然のことでありませう。そこには必然に筆者のエスプリが燃え、沁々とベーツスが滲み、ひたすらなる眞實が、寂びもしをりも、ものゝあはれをも提げて餘すところがないのです。

X

わが日蓮聖人の御遺文に於ても、慥にその事は明瞭であるやうです。例へば開目鈔に據つてみませう。

日蓮といひし者は去年九月十二日子丑の時に頸はねられぬ。此は魂魄佐渡の國にいたりて返る年の二月雪中にしる



して有縁の弟子へをくれば、をそろしくてをそろしからず。見ん人いかにをぢぬらむ。此は釋迦多寶十方の諸佛の未來日本國當世をうつし給ふ明鏡なり。かたみとも見るべし。

現身既に龍口の波打際に斬られ終つたと思へば、今に斯く生き續くることさへ不思議、寒飢交々の中に、言々肺腑を衝いでゐる文字。二乗作佛久遠實成の法門から本師釋尊の開顯へ、快刀亂麻を斷つ理性の透徹に傾聽するならば、その間或は血涙流涕の情緒を看過するなきやと私は危ぶむのであります。法門の事は扱ても開目抄に於て寔に私らの心搏つものは、聖祖が至信行道のその姿でありました。

今末法の始め二百餘年なり。況滅度後のしるしに鬭諍の序ついでとなるべきゆゑに、非理を前まへとして濁世のしるしに召し合せられずして流罪乃至壽いもちにも及ぼんとするなり。されば日蓮が法華經の智解は天台傳教にも千萬が一分も及ぶ事なけれども、難を忍び慈悲のすぐれたる事はをそれをもいだきぬべし。定んで天の御計ひにもあづかるべしと存すれども一分のしるしもなし。いよいよ重科に沈む。還て此事を計りみれば我身の法華經の行者にあらざるか。又諸天善神等の此國をすてゝ去り給へるか、かたがた疑はし。

といふところから疑ひを吾が行法に懸けて沈潛幾省慮。つひに過去の宿習を質たづして般泥洹經の文に即し、或被輕且等云々法華經に云く輕賤憎嫉等云々二十餘年が間の輕慢せらる。或は形狀醜陋又云く衣服不足は予が身也。飲食麤疎は予が身也。求財不利は予が身也。或遭王難等此經文疑ふべしや。法華經に云く數數見擯出、此經文に云く種種等云々。斯由護法功德力故等者摩訶止觀の第五に云く散善微弱不能令ナハルハハレハム令レ止觀ニテ健病不レ虧ケ動ス生死輪ヲ等云々。又云く三障四魔紛然トシテ競起等云々。我無始よりこのかた惡王と生れて法華經の行者の衣食田畑等を奪ひとりせしこと數知らず。當世日本國の諸人の法華經の山寺を倒すがごとし。又法華經の行者の頸を刎

ること其數を知らず。此等の重罪はたせるもあり未だ果さざるもあるらん。果すも餘殘いまだ盡きず。生死を離るゝ時は必ず此重罪を消しはてゝ出離すべし。功德は淺輕なり此等の罪は深重なり、權經を行ぜしには此重罪いまだ起らず。鐵を熱に甚う鍛はざれば疵隠れて見えす、度々せむれば疵あらはる。麻子をしぼるに強くせめざれば油少きが如し。今日運強盛に國土の謗法を責むれば、此大難の來たるは過去の重罪の今生の護法と招き出せるなるべし。等と開釋の悲痛なるものを經て、

我並びに我弟子、諸難ありとも疑ふ心なくば自然に佛界にいたるべし。天の加護なき事を疑はざれ、現世の安穩ならざる事をなげかざれ。

と戒告せられる、實にその體驗の切なるものを以て、再讀三讀、ひしひしと胸迫るおもひがするのですし、從つて又、法華經の行者、末法の唱導師と仰がねば居られないのであります。

×

ひとり開目鈔に止らず、聖祖の遺された教へが殆ど日記文證の體式を裏づけてゐること、委細には遺文全集へ往見の如くであります。身を以て佛教を行じた——といふ點にも、文學としての御遺文に、凝視せねばならないものがありませう。而も經典それ自身が、平板な理論の輯合ではなくて、いづれもが釋尊並びにその弟子達の行狀を連ねての立體的表現にあるのですから、佛門下に於ける我々としては、喋々たる教説の口誦受賣りに終止せず、もつと明快に私らの實際は如何様に聖教を行じ取つたか、取りつゝあるかの開顯に赴いていゝと思はれるのであります。私らの修行は、未だ未だ聖教の机上的理解に止まつてゐる傾向が多過ぎるのではありませんか。理論には出世間をかつぎ出し、實行は多分に世間的にまみれ切つてゐるのではありませんか。教のみあつて行證なし——といふのでは、聖教



と雖も益々時代人心からは遠離してしまひ、つひには吾れも亦「去曆昨食」たることを免れ得なくなつてしまひます。そこで私らに於ける緊要事は、聖祖の時代とは遙かに下つて來た今、電子やエーテルの衝動を掴み、マルクスやレーニンの洗禮を受け、肉食違犯が通常事ともなつてゐる境遇に於て、如何にして聖教は我らの實踐に叶ふかを、確乎と思索し體驗して、新鮮なる記録に齎らすべきことであります。實際、軒高く今も構へられてゐるところのあの法蘭殿堂の中に於て、聖教はどのやうにして眞實に行はれてゐるのであらうか、そこに如何やうにして世人が化益されてゐるのであらうか等、私らは痛切にそれを知りたいと思ふことがあります。それが空念佛式の教説や報告書等でなく、魄力生々しいボルタージュであるなら、それはどんなにか私らを示唆し啓示することでありませう。然るに現代に佛徒のいのちを懸けた修行體驗の記録は乏しくて、やゝもすると法燈の暗い影のみが暴露されるばかりであるのですから、これは益々反宗教の波を高めてゆくばかりであります。抗日容共の支那へ長期建設の苦行をさへ荷負ふの時、ついでに嚴として法華經の修行も展開されて欲しいと思ひます。

×

先頃、或る大學の外國文學に席を置く學生達が、いづれも作家を志望してその先輩を訪ねた事に就いての隨想が見えました。いづれの職へ就かうにも関で以てがんじがらめになつてゐる文科の門などでは、戰爭化なればこそ殊更に生きる問題は深刻なものやうです。それは又、限られた寺院數の中で因縁情實の呪縛に窒息しさうな目に遭つてゐる青年僧侶なども同様なことでせう。文學では食つて行けない——にしても、然し僧侶としては佛敎の護持傳道を天職としてゐます。且つは自らの向上が随つて吾がたもつ聖敎の位置をも、より輝かしめるものであることを思へば、良心は是非にも讀書修養を要求して來ることでありませう。單己無眷屬の本來に悲しくも市井に落魄した吾れながら、

その時にこそ輝く菩薩行が孕まれてゐるのではありませんか。斯くて信行不退轉であるところに、たゞ足りないのは文筆表現のすべです。一管のペンよく吾が生命を久遠ならしめるといふのに、敢て筆執れぬことです。乃ち『綴方教室』の豊田正子がよき指導に伸び立つてゐるやうに、私ら信行の同士に於ても、もつと注意して文筆の練磨が考へらるべきではないでせうか。文は天資にも依りますけれども、よき教導に啓發されることも多いのでした。宗門に大學教育まで者はれてゐながら、この時代に未だ一人の文筆の士も世間に行じ出でぬといふ事實は、それを育成する何人も居なかつたといふことばかりでなく、敢て鋭出するお互の力行も今までには無かつたといふことにもなりませう。折柄、宗門人の出征も多く、又種々の任務で戦地へ往來される人々も多いやうですから、それらの人々が率先して夫々に生命罩めた非常體驗の記録を發表して下さつたなら、それだけでも何ら宗教を持たぬ人々の文學と異なるものを樹立して下さるに違ひありません。(その發表機關たるべく、宗門には幾多の雜誌が待機してゐるやうです。) 文が習はれてもそれが實用には役立たぬとならば、多年の教育も甚だ心細いものではありませんか。短歌などに關心を持つ人でも、常に趣味的な歌作りなどばかりやつてゐて現實把握の出詠に鍛へられない者は、つひに吾が生命の直接の表現は果せずにしまふやうです。私らに於ける諸々の文學形態は、もつともつと各自の信行表白の精銳なる武器であつてもいい筈です。生白い遊戯の如くに文學が弄ばれてゐるのみでしたら、それは狂言綺語として、却つて無くもがなのこと、「文は人なり」と言へば、わが個性の表白を省みて、顧つて自らを鞭うつのですが、それ故に閑居不善を愉しむ場合、眞實をその生命とする文學は、或はその人々から敬遠されるであります。さればこそ一層と、文學は我々お互に活潑な行動を持つべきであると思ひます。



## 立正治國論を拜讀して

中 澤 要 實

立正治國論は久遠成院日親上人の製る所なることは宗門人周知の所であるが、この立正治國論を讀み、この書

を通して上人一代の弘法的精神を拜する時、宗祖日蓮大聖人の親炙し奉ると同様なる感銘を受くるものである。

宗祖直授の法華經氣魄は日親上人の全身に溢つてゐたのであらう。宗祖の再來、當時に於て今日蓮と云ふ稱を與へる事あるとしたならば日親上人の如き人を指すべきである。恐らく自他共に任じ得るものであらう。何故ならば立正治國論獻上そのものは日蓮大聖人の立正安國論獻上と同一形式を辿つたものであるからである。同時に日蓮の再來てふ自覺にもとづくものである。宗祖日蓮大聖人は「死ぬ程のことありてこそ佛になり候らめ」と教へ

られた所謂不惜身命的護法の實行者、色讀家であつたのである。

時は足利と北條の相違こそあれ、後花園院の永享十一年足利源義教公にこの立正治國論を上呈せられ直諫遊ばされた所がそれが爲に重なる迫害にあつたのを思へば丁度宗祖の立正安國論の獻上があの一一代苦難迫害の歴史を作つたのと同様である。然ればその様式も宗祖の安國論に相似と云ふべきか。法華の正法行はれず邪法はびこりるが故に善神他方に移ると

然則聞守護善神、惡謗國<sub>ヲ</sub>而移<sub>ニ</sub>他方<sub>ニ</sub>住持<sub>ノ</sub>聖人<sub>ハ</sub>恐毀家<sub>ニ</sub>去<sub>レ</sub>所

とのべられ更に

分<sup>テ</sup>爲<sup>レ</sup>二先明<sup>ニ</sup>權實之差別<sup>ニ</sup>而以顯<sup>シ</sup>諸師之迷惑<sup>ニ</sup>次<sup>ニ</sup>定<sup>ニ</sup>諸宗<sup>ノ</sup>謗法<sup>ヲ</sup>而以明<sup>テ</sup>善神之捨去<sup>一</sup>

法華一乘の法が釋尊出世の本懷であり、諸經の王であり、諸佛より二乗はおろか畜生まで救済さるゝ所の大經王であるとなし法華實教たることを説示されておるのである。諸

師の迷惑の中で眞言の弘法が法華經を第三の戲論と破し、慈覺が理同事勝を唱へて眞言に憑依せし雜亂天台を叱し、淨土宗の法然の千中無一雜修難行、捨閉闍拋と法華經をあつかひしを叱し、禪宗の教外別傳、不立文字、十二分教總<sup>テ</sup>是閑文字と唱へし、正法誹謗を破折しておらるゝ點は宗祖の安國論と類似形式をとつておらるゝものである。されど此處に宗祖より更に歩をすすめておらるゝ點は眞言の弘法に對する徹底的破折である。殊に破折にあたり八幡大菩薩の御託宣を引いて

御託宣<sup>ニ</sup>云<sup>ク</sup>以<sup>テ</sup>正直之人之頂<sup>ニ</sup>爲<sup>レ</sup>栖<sup>ニ</sup>以<sup>テ</sup>詔曲之人心<sup>ニ</sup>不<sup>レ</sup>稟<sup>云</sup>

とのべられてゐる。然して更にこの正直之人の頂には神

は栖み給ふと宜ぶる八幡大菩薩の正直と云ふ精神は何處にあるかと云へば法華經である。その證明として大隅八幡宮の石體の文を引證して説明しておられる。

昔<sup>ハ</sup>在<sup>ニ</sup>靈鷲山<sup>ニ</sup>說<sup>ニ</sup>妙法華經<sup>ヲ</sup>今<sup>ニ</sup>在<sup>ニ</sup>正官<sup>ノ</sup>中<sup>ニ</sup>示<sup>ニ</sup>現<sup>メ</sup>大菩薩<sup>一</sup>云云

と宗祖の安國論文上に説き現されなかつた點を明瞭にこれを摘出して眞言破折に及んだ事は安國論の本意の徹底とも見るべきであらう。弘法が第三戲論と法華經を破せし言、正八幡大菩薩の御精神にも反するものである。

いづれにしても汝早<sup>ク</sup>改<sup>メ</sup>信仰之寸心<sup>ヲ</sup>忽<sup>ニ</sup>歸<sup>ニ</sup>實乘<sup>ノ</sup>之一善<sup>一</sup>と捨邪歸正を勧められてゐる點、全く安國論の縮圖たるの感を深ふるものである。吾等日蓮門下たるものは、該書を時の足利源義教將軍に呈して諫められた日親上人の多難迫害の不惜身命的護法精神を眞に學ぶべきではなからうか。法華經の貴さは何んと云ふても色讀であり體驗である。今親師滅して四百五十年を迎ひ、更に追憶を深めるものは法華經の色讀的姿である。迫害重疊そ



の悲慘は如説修行抄の

縦ひ頸を鋸にて引き切り、胴をば稜錐を以て突き、足にて鋸を打ちて錐を以てもむとも命の通はん程は南無妙法蓮華經と唱へ云云

と仰せ遊ばされた。それにも勝る苦難であつたのである。親師の義教公に對する忠を竭し智を盡しての諫めは、却つて怒りを買ひ、迫害を生むに至つたのである。義教公の云く

「吾は法華經の行者は諸天擁護すと云ふ事を聞いてゐる。今日親を捕へて試さんと思ふ」

と、これが爲に投獄せられ、呵責は尋常一樣ではなかつたのである。就師の立正治國論摘注自序には當時の様子をかくのべてゐる。

其呵責不<sup>レ</sup>一或<sup>ハ</sup>炎天積<sup>テ</sup>薪多<sup>シ</sup>之或<sup>ハ</sup>寒夜縛<sup>テ</sup>木笞<sup>ケ</sup>之或<sup>ハ</sup>設浴蒸<sup>シ</sup>之或<sup>ハ</sup>盛<sup>シ</sup>水逼<sup>シ</sup>口或以<sup>テ</sup>串刺<sup>シ</sup>陰或<sup>ハ</sup>燒<sup>シ</sup>鐵著<sup>シ</sup>脇然<sup>ル</sup>師未<sup>レ</sup>爲<sup>シ</sup>苦烏公愈<sup>テ</sup>瞋以<sup>テ</sup>鐵拔<sup>シ</sup>舌活火燒<sup>シ</sup>錫冠<sup>シ</sup>頭

頭

と誠に慘であり酷であつたのである。然るに師尙怨む色もなく其の志氣は卓爾として上人の志氣を奪ふ事は出来なかつたのである。本化門下と云ふ活模範は日親上人の御身の上に拜する事が出来るのである。嗚呼偉なる哉、

壯なる哉！ かゝる法華經的氣魄を享け繼續するもの幾人あるであらうか。今や世は昭和の聖代、國家は非常時局内憂外患、吾等國民一人一人の上に負はされてゐる。宗門は立正報國を掲げて、去る日の立正大師號の勅謚拜戴昭和六年の畏くも 今上陛下より勅額拜戴の感激に答へ奉らんとしてゐる。事變終熄の曉は吾が宗祖の大理想たる四海歸妙の大運動の礎である立正安國をめざして、立正治國所謂「治め」「治まる」事は其の後に對する任務であり、行動でなければならぬと思ふ。今日の報國の運動は治國の運動へ進展しなければならぬ。これによつて安國理想の實現を見ることが出来るのである。

されど安國、治國、報國のこの三者を比較して考ふる時、吾人は國に對する日蓮が弟子の如何に思想的變遷の

甚しきかを痛感するものである。何ぜならば安國は國家萬年の理想であり、治國は國家施政の指導原理であり、報國は國民的義務である。故に前二者は國家爲政者に對する指導的立場にあり、後者は爲政者に對する被指導的言語であり、衆生むしろ被支配者たる民衆への國民的義務鼓吹の役割を演ずるものである。現在の吾が門下には支配者の前捧の役割を知る以外に何等指導的原理はないのではなからうか。畏くも今上陛下から立正大師と勅諡遊ばされた眞義がわからないのであらう。大師と諡られた聖上の眞義は、日蓮は立正て眞理の把持者であつて精神界の指導者であると云ふ意味合からされたものである。報國の言葉は國民的義務を説く上に最も必要であり、時宜を得たものであらう事は今更言を待たない。偉大なる宗教と云ふからには教化の指導方針は民衆のみを云ふのでない。宇宙人類が對象でなければならぬ。支配、被支配を通じなければならぬ。其處に佛者のわれ三界の大導師の言が生れるのである。故に安國の理

想建設の爲には報國と同時に治國の精神を持たねばならぬ。其處に報國の眞義が徹底されるのである。その招來する所必ずや迫害あり、苦難の道は展開する、その時始めて不自惜身命の覺悟が生れ、實行しなければならぬ。本化門下の實際的運動の精神此處に始まるのである。かくの如き姿にて立たんとする本化の弟子何處にかある。經文の所謂

自謂<sub>レ</sub>行眞道<sub>一</sub> 輕賤人間者 貪著利養<sub>二</sub>故 與<sub>二</sub>白衣<sub>一</sub>說法 爲<sub>二</sub>世所<sub>一</sub>恭敬<sub>一</sub> 如<sub>二</sub>六通羅漢<sub>一</sub>

の如き姿の人こそ時代の要求する寵兒である。されど人類永遠の善美の眞理は消え行くのである。

我是世尊使 處衆無所畏 我當善說法

の本化の英雄は生れざるか、親師追憶され讃美さるゝとも骨董價値的崇拜たらしめたくない。第二の親師、日蓮の再來てふ自覺に立たれん事を。國家興隆の非常時、東洋永遠の平和確立の時、眞に宗教的英雄を待望してやまないのである。



## 歴史の一環を擔ふもの

塚 本 龍 晟

且て祖山に學んでゐた頃の同級生達で、小野智好君（現在鈴木）中澤要實君、櫻榮鍊靜君などがこの棲神にそれぞれ働いてゐたやうに思ふ。以上の諸君は同級生とはいひ乍ら皆私より二ツ三ツ以上の年齢だつた。而も小野君は主席で、中澤君これに亞ぐといふ秀才で、成績からいつても年齢からいつても私など齒がたゝなかつた。私と同年輩の連中は、幡野勝造、渡邊義勇、成澤存朗、それに今は、本山に居る渡邊義照、同君は、私等の連中では大人しい方の本山でもあつた。それに現在、信行道場に頑張つてゐる長谷寛慶等であつた。昭和三四年頃のことどもを秋の夜長に想ひ起すと、いろいろ懷舊の情に堪えぬものがある。そして中等部も満足に仕とげず、三年半

ばで退學し、『彼奴は一體どうしてゐるだらう、英語だけは一寸いけたやうだつたが』と少々ばかり同級生たちの記憶を思ひはかつて、昨年、今は蘇州特務機關情報部にゐる宇佐美鍊昌君の熱情にほだされて、『碧葉』の手傳ひを少しばかりしたのが事の起りとなつて、熊谷海善君に、何か書けと注文されたのも盡きせぬ因縁と、有難く感じた次第である。我々祖山の同人中ではこの『棲神』に筆を執るものは名譽組である。さればこそ、過去二十年もの間、『棲神』誌上に名を連らねた人々は、卒業者中僅かなパーセンテージであることはいふまでもない。想へば自分が貴重なこの誌上を汚すことは、何といふ幸運であることか。

私が熊谷君から原稿用紙を受取つたのは、六月下旬であつた。以來七月八月と、都會の寺院には最も忙しい時季にも拘はらず、何かとてつもない論文でもものしたいやうに考へ『回教と日蓮主義』とか『大陸の宗教としての本宗』とか『現今寺院の實狀と徒弟制度』とか恐ろしいやうなテーマを按じて見たが、こんなこけおどしの文章は次回にゆづることにして、今は、お目見得程度で、熊谷君の好意を謝するつもりである。

私がふだん書いてる文章は自分ながら俗臭粉々たるもので、とうてい、この光輝ある『棲神』に印刷されるものとは、凡そ縁遠い代物である。大聖人今日世にましまさば、屹度『法師の皮を着たる畜生也』と一喝されること必定で、内心忸怩たるものを禁じ得ない。

漢口へ、漢口へ、皇軍將兵のかけ聲が、すぐ其處のやうに感じられる。東洋平和の尊い礎石となる忠勇なる人々、然も、身近かな、半田清も、小崎龍雄も、宇佐美鍊昌も支那の土を踏んでゐるのに、自分一人のんべんなら

りと甘い境遇にはる苦い感懷を味はつて居るのは、甚だ申譯ないことゝ思はれる。然し又、これは、大きな時の配置なのだ。この配置を無理に破つてはならぬ。自分も又、歴史の一環を擔ふものである。といふ考へまでは容易に行きつくのであるが、扱て如何にしてこの與へられた歴史の一環を擔ふべきかといふことに就いては、仲々回答が得られない。

お坊さんといふカストは、その昔し指導階級として尊敬と生活とが惠まれてゐた。それが明治維新を機として、コベルニクスの轉回を餘儀なくされて、形式的には兎に角、實質的には、社會制度的に、寧ろ從屬的な存在にすら没落した。われわれの悲劇はこゝに始まつたのであつた。今日この例を端的に上げれば支那事變によつて促されて出來上つた佛教聯合會の動きが、明白に物語つてくれる。お坊さん（われわれもかく呼ばれる）達の立上りの悪いこと、禪かつぎのそれに似て、一から十まで内務省の指令、各縣、學務當局のかけ聲によつて、左右をき



よときよと眺め廻してゐる圖は、大聖人が、種々振舞鈔の中で平左衛門を叱咤されて『あら面白や平左衛門が物に狂ふを見よ』と仰せられた時もかくやと思はれ、全く情けない。献金運動、國策線上のマラソンも、在家社會事業團體の驥尾に附し、殘飯ばかりあさつてゐる姿は、あさましい。各宗上層部は、それぞれ、確乎たる方針の下に行つてゐる仕事であるかも知れぬが、我が宗門だけは、あの自主的精神のない托鉢などとは別な方法を採用出来ないものかと考へる。われわれ、若いものからいへば、上層部の権力者は、協力とか、統制とかいふ言葉をはき違へてゐるんぢやないかと思はれる。協力、統制といふことは、他人の風下に立つといふことではないと考へられる。過る日佛聯委員會の席上で、戦死者の戒名に殉の字を入れることを淨土眞宗が提議したのを、各宗とも一も二もなく賛成し協和の精神を發揮したのは、表面上頗る美談の如く見えたが、われわれは宗門の立場として、一應疑義を狭んでよいのではないかと不満に感

じたのであつた。然るところ、數日を出ずして、清水立正大學長が教學新聞紙上に於て、殉を排斥され、これに替ふるに忠を以てせよと叫ばれたのは、事の成否は別として、大聖人の氣魄が感ぜられて有難い極みであつた。それにしても、宗から出てゐる委員諸師は、全く老ひ込んだのではないかと疑はれるのである。かうした時世にこそ、大聖人の積極的御人格の一面を具現して、他宗派をリードすべきではなからうか。

去る六月、宗門多年の懸案たる祖廟中心制度が、確立し、即日曠古の大慶典を奉行する幸福を有し得たのは、等しく感激に堪えないところである。然し、この慶事にしても、一部上層部の努力手腕ばかりで實現したのではない。歴史の力であり、時世の歸趨であることにより以上の實感が伴ふのである。大聖人の御言葉に仰げば『時のしからしむるに非ずや』である。然るを、これを自分等の手柄の如く誤算して、能事終りたるかの如く考へることは、萬々なきことを信じたものである。キリスト

教に於ける團結、回教發展の問題に、頭を回らすと、門宗に於ける八派合同は誰の目にも必須の事業たることを疑ふ餘地がない。然も現下の如き超非常時に際して、これに對する、懇談會さへ設けられないのが不思議に思はれる。然も祖山によつて統一せられてゐる我が日蓮宗がこれがイニシヤチウを取るべきことはいふまでもないことである。力の時代に於て、分裂區々たるものが指導權を把握することは覺束かない。況んや、大聖人の指導原理たる『先づ國家を祈りて須く佛法を立つべし』の御本意には猶遼遠の感をまぬがれないのである。國家を祈るといふことは大聖人以來宗門の生命である。この生命を枯渴して宗門はあり得ない。潑刺たる躍動こそ希望して止まぬものである。躍動なく形骸化された献金、物資節約が一體何の宗門の足し、國家の爲めになるだらうか。凡そ今日ほど宗門人のやり口が形骸化し、形式化し、被支配的、被指導的であつた事が宗門史上に且つてあつたであらうか。かくいへば高德、先輩のお叱りを受ける

か知らぬが、これが社會人の目に寫る宗門の實狀であるとするれば、どうであらう。こゝに於て私は、漸く興へられた歴史の一環を如何にして擔ふべきかの端緒を得たのであるが、その前に是非共行ふべきことは、宗門行政制度の革新である。例へば宗門に於ける人的要素の如きも極めて重大な問題である。年々歳々宗門學校卒業者に對する宗門のやり方は、果して能率的であらうか、護法愛宗の念に乏しいものはなからうか。刻苦して折角結實した祖廟中心制度もかゝる點から又々破綻を招來しないとは誰が保證出來ようか。意義ある祖廟中心制度をして跛行的たらしめざるには、徒らに宗門當局が官僚化して、世紀の息吹きに鈍感であつていふ法はない。全宗門はれ神經と化し、普く社會事象を敏感にキャッチして、大聖人の御本意をして、世紀の大宗教たらしめんとすることこそ、門下の最大理想でなければならぬ。以上書いて見ると、大言壯語に似て甚だ氣恥しい。けれどもかうした考へは、若いものゝ誰れもが持つてゐる



のではないかと思ふ。それを、カイゼルのものはカイゼルに返せ式に、若いものゝ考へは、若いものにまかせて置いて果していいものであらうか。今日、西園寺老公は若い近衛文麿の魂を愛し、ドイツはヒトラーの明日あるを猶期待し、イタリーは國家の前途を青年外相チアノに

ゆだねてゐる。ひとり宗門が、若いゼネレーションを虐たげてよいといふ理屈はあり得ない。  
更けて行く秋、燈下の下に宗門の因襲を心に惱みつゝ、空ろな気持ちで書籍をめくる、若い學徒を想ひ浮べると惻々として悲哀が迫つて來る。

## 陣中隨想錄

小崎龍雄

戦地へ來てから一層内地に於て國民精神總動員が強固化されて來たと云ふ知らせを、誰からの便にも受けとることが出來、我々前線に在るものは何が無し身内の血が緊張するを覺へるのである。感激！我々を朝に夕に動かして行くもの其は凡てが感激の一語に包まれてしまふのではなからうか。云ひ知れぬ感激、その中に我々は既

に明日を約束してしまふのである。こんな簡單なことゝ一往誰かは笑ふかも知れないが、戦地では難しいことや理屈は一切抜きである。感激の人生とは戦時の生活をそのまゝに表現して居る言葉であらう。

○

上海の陣中では學友や、知人とも相當會ふことが出來

お互に無事を祝し合つたものである。分けて半田清君や高野教誓君、保科正雄君、矢野寅吉君等は私が直接歡呼の聲で送つた人達だからまさかこんな所で會はうと豫期してゐなかつただけに喜びよりも、驚きの方が大きかつた。鈴木智久師は〇〇の殘敵掃蕩で戦傷されて兵站病院

の一隅でお會ひしたのである。非常に家の事を心配されてゐたが、私は既に内地を發つ時から濱松のお母さんが亡くなられて居るのを知つてはゐたがどうしても傷つたお姿を見た時に云ひ切ることが出来なかつた。それから結城瑞光先生と二人で病舎の屋上で慰問講演をしてお別れして來たのであるが、病院を出てからも鈴木師の白衣の姿が眼の中に残つてゐて、わけもなく哭けて仕方がなかつた。其の外古屋是聞君、望月本修君、林松太郎君とも語り會ふことが出来、しばし此等の人とはなつかしい山の話に興ずることを得たのである。

大場鎮、廟行鎮、揚行鎮、吳淞クリーク、江灣鎮、北

停車場附近等の激の跡は暇の有る度に出かけて行つては見學と共に心から英靈の追弔をし、散華や香を供へたのであるが、散華だけは珍しいので同行の勇士達も、非常に悦んだりしてくれて私は尙更嬉しく疲れた足を我慢して、次々と回向してまはつて來た。

先日某地で戦死された野田少尉の部隊葬を頼まれ、事變前は中學校であつた其の廣場で告別式を行つたのであるが、「こんな前線で衣を着けた坊さんに葬式をしてもらつて有難い」と石井部隊長に云はれ却つて自分の方が戦死者の英靈に對し御回向できこれに過ぎた光榮は無いと應へてからなほ色々と佛教のことなど語り合つて歸つたが、是は上海の新公園で行はれた第三艦隊大慰靈祭の時よりも自分一人だつただけに感慨深いものがあり、其の後遺族（夫人）から丁重な禮狀を受けた時は僧侶になつてゐたことを此の時ほどつく／＼有難く感じたことはなかつた。その外僧侶であつた爲めに話がうまく進んだり、信用してくれたり、又津田部隊長とか、軍司令部



の參謀とかにも易々と面會ができた、上海市長蘇錫文や、政府の要人達にも幾度か招待されたりして所謂大人の扱ひを受け、陣中に愉快な時間を所有することが出来た幸は生涯忘却されるものではないであらう。

## ○

愈々前線に行く朝、アスターハウスの宿舎を出て外を見ると空には未だ星が薄い影を残して居り遙か東の方をみつめて居る中、腹の底がだんだんと熱くなつて來る様な氣がして、俗に云ふ觀念の臍を決めたとはこんな感じかなと考へたりした。其程現在住んで居る蚌埠(ばんぶ)は遠い感じがしたのである。南京から揚子江を渡つて津浦線に來ると貨物列車の上は兵隊で一杯だ、何の兵士もくく除州陷落を目ざして緊張してゐるので顔相がまるで變つてゐる様に見える。敗殘兵や、土匪が横行すると云ふので話をして居る間も銃は離せない。私のやうに山の生活ばかりして、明け暮れ讀經と讀書と云つたやうな比較的靜かな暮しをして來たものは急劇な生活の轉移に對

して普段なら相當大きい精神的な動搖もあつたに相違ないが今は至つて氣分がさはやかで鈴なりのやうになつてゐる兵隊さんに内地の話などをしながらまる一日がかりで目的地に到着することが出来た。

## ○

當地へ來てからの仕事に就ては多く語ることを許されない。其は宣撫班が中支に於ては解消されて、特務機關が設置され今までの仕事は其一部分となり任務が擴大されて來たからである。陣中日誌に書いたやうなすばらしいことは暫くおいて、難民や子供達相手のことでもほんの少しばかりタツチして見よう。先づ支那へ來て驚いたことと感心したことは、醉人の姿を街の如何なる處へ行つても見ないこと、婦女子に對して特別の注意を拂はないこと、苦力に至るまで裸體を見せないことで、これは百人千人と使用して見ても分るが苦力等に至るまで人の前では決して裸にならない、況して一般の者は餘程苦しい生活の、其も極く幼少の者を除く外は裸になつてゐる者

がない。それから言葉が廣東語、福建語、上海語、北京語等とまるで相違し、地方に於ても少しく異なるのだから實に弱る。然し大體北京語が標準語になつてゐるから知識人なら何處へ云つても大體通するらしく、言葉と云へば日本軍の占領地域に在つては日本化した支那語が随分用ひられてゐるが、此の傾向は將來益々増加して行くことと思ふ。一例を挙げれば很好（大層いゝこと）と云ふところを、很好でなあ、と云つた具合で一寸面白い。また一般に支那人は文字を知らないものが多く苦力等に至つては筆談はとても通じない。先日も警士を採用すべく試験をしたところ自分の名前さへ書けないものが十四、五人も居たのだから愈々もつて驚かざるを得なかつた。水の悪いのは天然だから仕方がないが衛生觀念の無いことは想像以上で、言語に絶する。と云つたところで大陸支那人がのんびりして居るのだから細かいことなどは一々氣にかけてゐたのでは始まらないのかも知れない。食物は世界一と豪語し自他共に許してゐるだけあつ

て實に甘い、然し其も上海あたりの有名な飯店に行かなければ話の種になつてはくれない。江北地方はまんとうと云つて麥粉で出來たパンに似たものを常食としてゐて時たま米の飯にありついたと思へばそれこそ箸にも何にもかゝらないボロ／＼のを食はせる。酒は老酒とか、高粱酒とか獨特なものがあつたものではないやうに聞いている。こんな事ばかり書いてゐても仕方が無いから本來の道に歸つてみよう。

# ○

支那の佛教は既に存在の價値を失つて居り、日本佛教と比べて見た時に完全に大乘的色彩を失なつて居る。であるから我々が積極的に爲すべきことは此等中華の佛教徒に對し生彩ある大乘の道を注入すべきことで、これに依つて眞に彼等を甦らせねばならない。

其で日本宗教の大陸進出の指導方針としては、先づ教化の對照を支那民衆に置き、同時に支那僧侶の資質強化に努めて支那に於ける佛教の地位向上を計り、誤れる征



服感や、安價な優越感を一掃して衆に率先して日華の提携の先驅者たるの覺悟を以て邁進しなければならぬ。

たゞに姑息な名譽心にのみ捕はれてゐるならば我が日本佛教は大陸進出の價値なきものであり、再び孤島本國に退去すべき運命に逢着せねばならないであらう。

其と共に大陸に勇飛せんと志するものは先づ支那に對

## 改造か創造か

既に語られた諸君の御意見を拜聽するに、何等か、口では言得ぬ事が語られてゐた。口では言ひ得ぬ事が、諸君の眼で否諸君の態度で而も明に語られてゐた。それは一體何か、……………二十世紀の神話である。われわれの世紀が創造した神話である。諸君、周知の如く、現今の創造的努力は、全體性へと、ひたぶるなる歩みを、續てゐる。われわれが、地平線上仄かに知覺した世界に

する認識を深め確實なる足跡を印することが出来るやうに用意してあらねばならないことは勿論である。

公務多端。二、三分づつの僅かの暇をぬすみ書き綴つたもの故御判讀を賜はれば幸甚至極、では遙かに各位の御健勝を禱る。

## 岡 部 科

就て、新しき心臓を形作る爲に、あらゆる手段を盡し、われわれが、望むまゝにこの世界を分解し、かくて混沌たる状態から秩序あるNOTIONに迄變形せんとするのだ。

諸君、既に過去りし二十世紀の三分の一世紀を回顧し給へ。われわれは、一つの強固なる壁に突き當つた、ナチオールの聲は街に喧しく、幾多の小市民的打開策が試みられたるにもかゝらず、そこに生じたものは、實に虚

無主義であり青年のデカタンスであつた。イズムが現れて又去り、危機はわれわれの頭上に迄掲げられた。かゝる危機は何に由來するか、若し茲に文化的なるグルニドが發見されたとするならば、正に夫は近代人の悲劇である。今吾人は、自明なる理を掲ぐる攝理を嘆くのである。即ち近代人が、一つの世界を等閑視せし事に由來したのである。一つの世界を等閑視する事に依て、勿論他のもう一つの世界は華なる展開をなした。吾人が稱して近代文明と言ふものが之だ。だが近代文明に就て、私は喋々として語る必要を持たない。われわれが生れ、われわれが教育され、そして現在われわれが此前に立つて居る世界之が近代文明である。然し、最早……否……一九〇〇年に於て、正確に言ふならば「近代の世期」は終つたのだ。彼のオスワルド・スベングラが有名な著書「西洋の没落」に於て、既にわれわれが、新生か死かの一大歧路に立つて居る事を明瞭に指摘した。然らば、近代文明は如何にして没落するのか、如何なる原因に依て没落し行くか、今われわれは、この事をつきとめる事に依つて、われわれ自身の中に、仄かに知覺した、新しきモラルの誕生を祝さうと思ふ。

蓋し近代の全ての思想は内在の思想であつた。換言す

るならば、人間の思想であつた。既に多くの人々に依つて語られし如く、人間が尺度となり、かくて計られた思想であつた。噫！私はもつと詳しく語るふ。この五尺の機身と五十年の命と、かくも僅少なる時空しか有しない人間にビントを合せんとする思想であつた。エデンの花園に於て、アダムとイヴが智慧の果を食たのが、人間の原罪であるならば、人間の知識を以て思索する近代人の巨大なる罪惡と不遜とを憶ふべきである。是は何を意味するのか、正に近代人の無信仰を表明するものである。そこに尙何等かの信仰があつたとすれば、夫は絶対的不確實に對する信仰であつた。絶対的なものへの信仰を消失した時代は將に滅亡の歴史をたどるであらふ。

今やわれわれはプラトンの聲に和して、斯く近代文明を皮肉つてもよいであらふ。即ち人間が萬物の尺度であつて、而も何故豚は萬物の尺度とならないか、豚こそ萬物の尺度ではないか、夫は明に個人否個物が近代文明の尺度である事を意味する。かくてそこに形成されるものは閉ぢられた宇宙であり、それは時間的世界である。それが如何に長くあつても、所詮それは長き時間の連續であつて、永遠とは本質的に異なるものである。近代人の思考によれば、この時間的世界のみが眞であつて、中世人が憧憬れ



たあの世界は誤謬であつた。吾は正しく彼は誤であつた。然し、この正しき我が、正しき時間、何と物悲しきものであらう。「西洋の没落」近代文化は、何故に没落するのか。然しこの間は誤つてゐる。實は近代文化はその頭朝から没落しつつあつたのだ。近代文化と俱に同時没落し行く眼が、この没落し行く文化を見誤つたのだ。われわれの先輩たる學者の眼は誤つてゐた。シュライエル・マッハーにしろ、リツケルにしろ、彼等がその生涯を傾けて成した仕事は、近代の「慧」を最少限度に評價したことに過ぎる。然し「慧」を少く評價することは「慧」を少くする事ではない。「慧」は少く評價されつつ、而も増大しつつあつたのである。と云ふのは近代には慧を極むべき何物もなかつたのである。つまり永遠がなかつたのだ。私は一個の宗教を例して説明しよう。

近代に日蓮宗はなかつた。倒さまに立てられたる日蓮的信仰の歪曲せられた變影があつたけれど。如何に顛倒せる敬稱が用ひられし事か、曰く、人間日蓮、英雄僧日蓮、國聖日蓮、改革者日蓮等々、然し上人は斷じて、かゝる人間的敬稱に値するものではない、永遠より來り給ふて常にわれわれの間を歩み給ふ偉大なるメシアである。私はシタルクなる眼をもつて現宗門を覗こう。私は先

づ六世紀をさかのぼり。平安公卿文化のロマンチックな眠より醒めた鎌倉の朝を見よう。

諸君、夕には夕の倫理あり、朝には朝の倫理がある。萌え出る事が春に生くる正當な生方であるならば、冬に枯れ朽る事も亦自然の倫理である。暮れ行かんとする薄暮を朝に迄もどさんとするは、正に痴人の夢か、來る可き朝の爲には、平安末期のロマンチエストも安なる眠に入らねばならなかつた。今しボードレエルの言葉を借りるならば「汝等恥もなく寝よ」と叫ばれなければならぬ。噫、物悲しき世紀の終末、この世紀末に於て、凡人共を率る理想人と全人類の死刑執行者たる深淵人との和解すべからざる鬭争が行るのだ、前者には、時機を辨へざる不遜があり、後者には背教者のながす涙の眞實がある。君よ耳を興へよ！ 全人類への死刑宣告者は、實に日蓮であつた。來る可き朝への、平安人に對する死刑執行者であつた。時機を辨ざる小人どもが夕を朝に還元せんとして喚き。有益なる社會事業にいそしむ者。——極樂寺良觀——生佛良觀、慈善者良觀、社會事業家良觀、乃至獻金募集者良觀、○○機敵納者良觀、彼のあらゆる試は休息に就かんとする終末の民をして、晝へと馳り立てた。なれど暮れ行かんとする薄暮は寂漠として聲なく地平線

下に没したのである。

かくて星霜一變、識者言を發たば一言にして非常時を云ふ、正に然り、○○の國と謗法の國とが干戈を交ふるに至つては、之をしも非常時と云はずして何ぞや、かゝる超非常時局に、徒らに俗的流行を追ふに究々とし、かけ聲高き現教團の總動員は、軍部への献金として具現し、その結果は、如何なりしか、一部軍部の識者をして眞に宗教家の天職を疑念せしめ、他になすあらんと迄皮肉られた。○○機献納に際しては、紙上あのブ様な臭聞を専らにする等、如何に、現日蓮教團に、かつての良觀的色彩の濃厚なりや、今し良觀この世にありしならば、鎌倉教線に「痴人良觀」と顰蹙せられし良觀は、江戸の仇を長崎で、かつての日蓮の徒は遂に我が下に來れりと快心の微笑をたゞへる事であらふ。かゝるアンチ教祖性の蔓延はさることながら。

## 波木井書に於ける良の方の管見

難 波 智 龍

### 一、緒 言

波木井書に於ける良の方の管見

曰く僧風教育制度、參議制度、○○○○制度、制度の完備、形式の完璧を期するを以て、その内在的精神を忘る、かくて既成文明と共にその没落を運命するのか、珍香薫し、錦紫衣の「古へ、古へ」の憧憬は、諸君徒らなる復古主義は、正に青年の進歩をはぐむ反動主義だ。本化上行日蓮大聖人の身延御入山の御懐が、かゝる顛倒的なる、否アンチ教祖性の豊かな一見經る末輩の輩出にあつたのか！ 然しながら、われわれは、われわれの世紀は、既に／＼、遙か地平線上仄かなるコスモスを知覺した、かゝる宇宙への飛躍に於て、諸君、正に祖廟は、眞の祖廟中心は、かゝるコスモスへの一つの偉大なるホース・パアーでなくてはならぬ、かくして最後に叫ばれるもの、それは、危機宗學の提唱と云ふ事である。(學院主催秋季辯論大會に於て)

嘗て淨土門の友松師が彼の家の指方立相の淨土觀を否



定したに端を發し、淨土一門に波亂を巻き起した最中、當時發行の「宗教研究」誌上當家の一學者が當家にも指方立相の淨土有りと成して、波木井書等、就中良方の御書を引用して此を論じて居られた事を記憶して居る。

それ以來時日は経過して今日に至るが、昨年春、吾が祖山學院に於て講演例會の課題として松木部長先生より「波木井書に於ける良の方の管見」なる問題の提出を受け、私は偶然御遺文に於ける良方の拜讀をなしたわけであるが、何分短時日の云はゞ一夜漬程度の研鑽であつて、發表する事を躊躇したものゝ外に研究した人も無かつたので思ひ切つて發表して見たのであつた。(然し不幸にして松木先生が都合上臨席されなかつた關係上御批判を得る事が出来ず、不完全なまゝに正當な批判も與へられ得ず發表は終つて了て今日に及んで居る。)

本年度の棲神發行に先立て夏頃から何か投稿をと依頼を受けて居乍ら、旅行、卒業論文、説教、講演、其上十一月中旬には立正大學の雄辯大會へ派遣され、彼れや此れやで苒荏日を送り、終に思ひ附いたのが二ヶ年足らずも笈底に投込んで居いた、「良の方の管見」の焼直しである。が出して見ると忘れた處も多く、統一も附かなくなつて居り、不完全極まりないものだつたが苦しまぎれに

思ひ切つて投稿した次第である。

勿論未完成のものであり、不完全極まりないものであるが、大方先輩の御指導と御批判を待つて將來の再研鑽を約し、茲に前以て御斷りして發表するものである。

## 二、御遺文上に於ける良の方

宗祖御遺文の中に於て良方が明に示され、之が所謂指方立相的淨土と關係附けて見られ得るのは次の二書である。即ち一は波木井殿御書に於ける。

日蓮ハ日本第一ノ法華經ノ行者也。日蓮ガ弟子檀那等ノ中ニ日蓮ヨリ後ニ來リ給ヒ候ハバ、梵天、帝釋、四大天王、閻魔法王ノ御前ニテモ、日本第一ノ法華行者日蓮房ガ弟子檀那ナリト名乗リテ通り給フベシ、此ノ法華經ハ三途ノ河ニテハ船トナリ死出ノ山ニテハ大白牛車トナリ、冥途ニテハ燈トナリ靈山ニ參ル橋也。靈山ニマシマシテ良ノ廊ニテ尋ネサセ給ヘ必ズ待チ奉ルベク候。(一一一四)

であり。茲には明に靈山往詣の思想が見られ、其の「良の廊」も宗祖來迎の一證左と見られないでもない。勿論後に述べるつもりであるが宗祖にも未來觀の信仰の特に熾烈あつた事は否むべくもないが此の靈山が佛眼所證の

世界であり、本化正信の徒の眼前に展開される世界とすべきは所謂當家の成佛義の究極である。従て此の書に於ける往生思想の如きも淨土門の如き所謂指方立相の淨土觀と同一視し終るべきではなく、未來信仰としての往詣觀と娑婆即寂光に於ける靈山觀の調和を此の間に見出し得るものではないかと思ふ。此が即ち當研鑽の中心問題である。

而して次に第二の御書としては上野殿御消息に於ける。御臨終ノキザミ生死ノ中間ニ日蓮必ズ迎イニ參リ候ベシ。三世ノ諸佛ノ成道ハ子丑ノ終リ寅ノ刻ノ成道也。佛法ノ住處鬼門ノ方ニ三國共ニ建ツ也。此等ハ相承ノ法門ナルベシ。(一八四三)

である。が此れ亦往詣思想の一端とも見られないではないが此書の上の文に即身成佛義を力説されて、法華超越の所以とされてゐるに見て強ち往詣觀の所明と見るべきではなく、寧ろ此處に宗祖の成佛觀の特徴を拜するものがありはしないかと思ふ。

それは且く置いて前出の波木井書であるが、此の書は古來偽書說濃厚の書であつて、早くから身延歷代の先師が「他筆ナリ」と指摘されて居る如く、其の文章の連絡及び其の内容が餘りにも計畫的に見られ、且つ鹽田教授

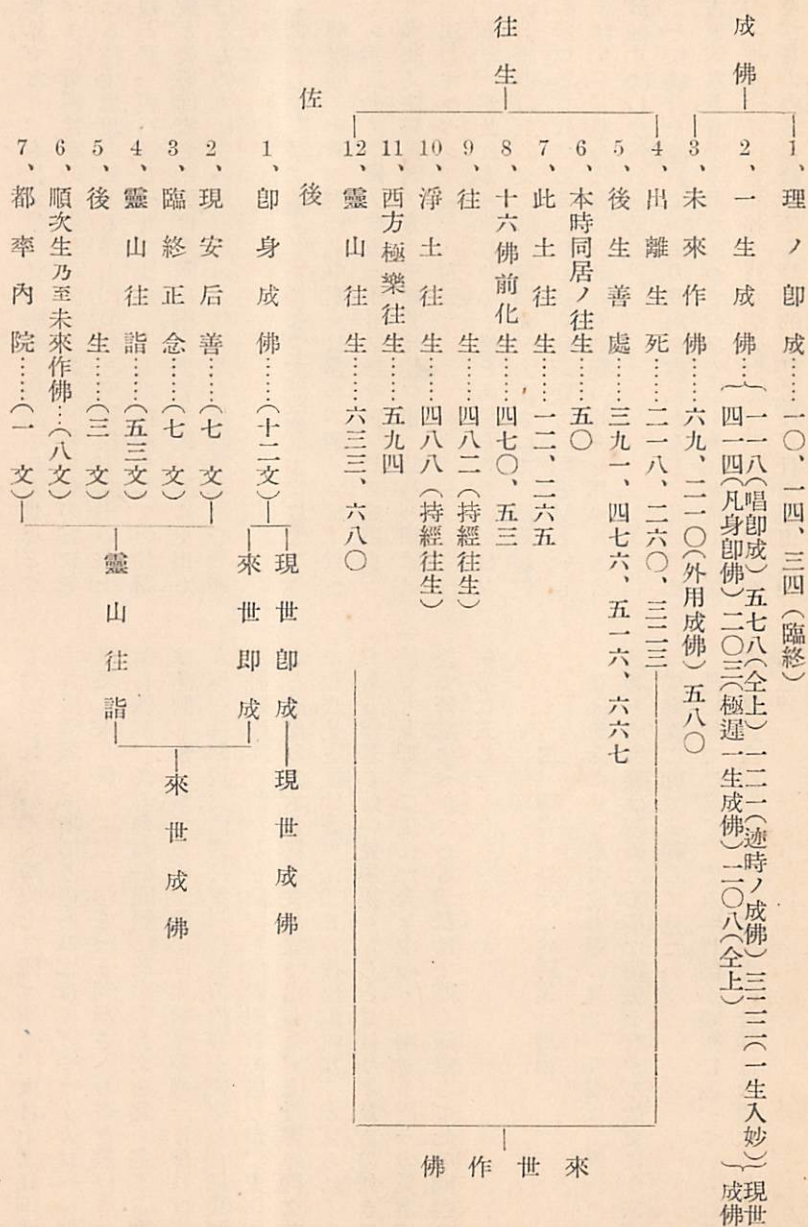
も指摘されている(崎報七九號)如く、九月十九日の波木井殿御報に「所らうのあひだはんぎやうをくはへず候事恐れ入り候」(二一〇五)と判形さへお書き遊ばされぬ有様が、後の御臨終間際に此書の長文を認め遊ばる事は想像し難い事である。故に「宗乘講義錄」に依れば誰人か「御遺文匡謬舛案」に其の内容を研究した結果諸御書の連絡編輯なりと斷定し、對照して居るが、夫に依ると前出の波木井書の文は次で出した、上野書の御文並に妙法曼陀羅供養事九二五の拔出編輯なりと見られるのである。若し此の見解誤りなしとせば今の良方の如きに於ても上野書に現れた夫を中心とし兩者を同一の見解に於て研鑽すべきである。私は今斯く斷定して此の問題の研鑽に入る。

### 三、御書に於ける成佛義の諸相

私は前節に於て宗祖成佛觀に就て一言觸れて置いたが良考と成佛義は極めて密接な關係を有する故更に今宗祖の成佛義に就て概觀して見たい。

此に就ては嘗て、安永辨哲師が崎報に述べていられるが、御書全篇を通じての文相上の分類は大體次の如くである。





右の如く、御書文相上に拜しても、其の異同は全く雜多で一見歸趨の迷はしむるものゝ如くに見ゆるが、然し、此等は畢竟、各宗權邪の成佛義を揚棄統一せんとの開會顯正の聖意に基ける結果と見るべきであつて、その眼目が即身成佛速得菩提の妙益に浴せしむるにある事は贅言する迄もないもので、即ち成佛義の根本的立場を信心正因受持正行に置く、受持成佛がその中心である。

而して、受持成佛の具體的相貌は、王佛冥合の至極に基く、所謂本門戒壇の建設、更には四海歸妙の實現であつて、此を逆次に云へば自己の妙法化（即身成佛）が漸次擴充され國家社會の妙法化（靈山淨土）に至り更に四海歸妙（全體淨土）に至る時當家の成佛論は完き相に達するのである。従て、個々の自然讓與受持即成の妙益を云ふも本義は全體的な完成を期する靈山淨土の建設の處に本化應生の大義はあるのである。

乍然、前にも述べた如く、宗祖に於ても現世のみでなく、未來觀の熾烈なるを拜し、之を個人の立場よりせば未來往詣ともなるが、之を社會的人類的に見る時は將來必ず娑婆世界の上に現實態として建設せらるべきもので此の意味に於て娑婆即寂光の立場に於ける靈山觀と、未來信仰としての往詣觀との調和は見出され得るものであ

り、其の究極は娑婆即寂光の建設に求めなければならぬものである。

即ち、其の未來靈山淨土往詣と云ふも、壽量品の實義我此土安穩、常在靈山の娑婆即寂光の教義をより具體化し、宗教化し、神祕化して現世成佛を久遠の未來に延長したに外ならないと見るべきである。

斯く解する時今の問題の良方の如きも指方立相上の一部門と見るべきには非ずして所謂即身成佛義上の一意義を含むものと見るべきである。

#### 四、良の意義

由來良なる語は東洋思想獨特の易に於ける語であつて易經說卦の下に「成言乎良」と説き萬物の太元の一に數へられて居る様であるが、其の性狀を靜止の義に置き、八卦の一として二を以て表するのである。

而して此が展開して六十四卦の一となり、「止まりて進まざる象の義」とされる様になつたのであらうが、其の「止まりて進まざる義」と云ふも「靜止の義」と云ふも消極的意味のものでなく、積極的究極の意である事は、易經象傳の下に「兼山艮、君子次思不出其位」とあるに依ても知られる。故に此を「限」となし、「堅」とな



し「難」とされ我が國に於ても此の意が傳はり良金神の通信俗仰に迄及で居るのが、良の語源であらう。

而して、此の良を後世の方位、時間に配して呼ぶに至たのであらう。が、方位では東北に當り、所謂古來鬼門と云はれ、此處に鬼神聚り住ふとされ、蕭古傳（隋書）には「廻風從良地鬼門」と云ふ如く、風の神とも解した様である。

而して時間に之を配しては午前二時より四時迄の間を當てゝいるが、所謂草木も眠る丑滿の頃であつて、古來我が國でも此の時間を神佛の祈願に結び附け「丑滿詣り」の誓とかがあるが、此を見ても東洋風習の上に此の良なる語は強い何物かの暗示を以て傳へて居る様である。

兎に角良なる語は東洋思想の上には相當深い迷信的？の傳説を含んで居る事は事實であるが此の事の探究は専門家に非る私の與り知る處でなく、又今の問題に左程深い關係もないから且く別として、宗祖の御書上に之を拜し得るのは、御巧説としての方便か、亦は「強ちに成佛の理に違はざれば暫く世間普通の義を用ふべきか」と云ふ御聖意かとも拜し得るが、今は「強ちに成佛の理に違はざれば」の御意と見て成佛の理と良の關係を拜したいと思ふのである。

## 五、佛教上から見た良

次に佛教上直接な良（東北、丑寅）の關係であるが、此に就ては可成り多くの關係を見る事が出来る。今其の主要なるものを述べ、

一、佛陀の誕生は―佛說灌佛經に依れば、太子四月八日夜半明星出時生れ地に墮ちて行く事七步とあり。

二、佛陀の成道―因果經に依れば、七々日思惟の後菩提樹下に於て二月八日（或は十二月八日）早曉明星出る頃の開悟と在る故、此の早曉明星出る時とは何うしても二時より四時迄の間とも見られ丑寅の時である。

三、佛陀の入滅―之を長阿含經並に大般涅槃經に見れば、均尸城外沙羅雙樹下に於て夜半入滅されたと在り、入滅後は城の東門より入り北門に出でて荼毘に付さが附れたとある。故に此の入滅にしても丑寅と何等かの關係けられないでもない様であり、且つ台當兩家が佛陀は靈山に於て八ヶ年法華說法遊ばし入滅は其の良跋提河畔、純陀が家にての入滅とし、宗祖の入滅も此の規に則られたと傳へられる如く、良の方向は佛陀の一生特に御入滅の故事と因縁附けられて現在迄可成り深く、何等かの意義に於て傳へられて居る様である。

四、佛教流傳の豫言——以上は佛陀との直接關係であるが更に今滅後佛法流傳史上の豫言として見らるゝのが佛教東流説である。此に就ては宗祖が屢々大師須梨耶蘇摩の羅什への豫言を引用されて、曾谷入道殿許御書(二二)

「此ノ經典東北ニ縁有リ予此ノ地文ヲ拜シテ兩眼瀧ノ如シ」

千日尼書(七五)「西天ノ月氏國ハ未申ノ方東方ノ日本國ハ丑寅ノ方也。豈ニ日本國ニ非ズヤ」と日本國と佛法は此の艮の方に一關聯を持つものである。

五、傳教大師——此の經東國に縁有りと豫言された法華經が吾が本朝に華を咲かした濫觴は傳教大師であるが、大師が、我が立つそまの叡山はゆくりなくも、都の東北であり、茲に都の守護鬼門の鎮めとして鎮護國家の道場となつたのである。

## 信仰と人間生活

以上の如く一般佛教の上から概観するに斯く且く五項目に於て見たが、此等は何れも重要な事項に屬するのである。從て此の先天的の關係が傳教大師に至ては此の先天的因縁と東洋思想に發する鬼門の觀念とが結合されて鎮護國家(都の守護)の道場となつたのであらう。而して宗祖であるが、宗祖に於て上記の諸觀念が取入られたのか或は傳教の思想が直接影響せられたのか、此點俄には斷じ得られないが、恐く直接には傳教の思想が自身安住の方向となつたものであらう事は上に引く曾谷鈔の文並に以下に述べんとする曼荼羅座配の上から見て想像される。又宗祖一代の事蹟に照して上記の諸項が宗祖の上にも幾分影響の有つた事も察知し得る。此等の關係並に意義は以下項を改めて述べる。(以下次號續)

## 証音寺惠進

私は曾て心靈學の講義を聞いたことがある。心靈學そのものは一種の科學として未だ研究の途上にあるらしい

然し私の如き凡才には、そのやうには思へないで立派な一つの科學のやうな感じがする。



心靈學にては種族我と個人我の二元論を基礎とし、原理としてゐるやうに思はれる。然らば種族我とは如何なりやと言ふに、種族我は不滅の實在にして、其認識力を靈覺と云ひ、即ち肉眼を使用せずして一切のものを見ることの出来るものである。故にこれ佛教の所謂佛性の如きものを指すのであると心靈學者は謂つてゐる。これに對して個人我は五感の認識する世界であるから知覺の世界と言ふべきである。

心靈學者は種族我なるものは、生むと言ふ文字にて表はし、個人我をば、作ると云ふ文字をもつて表はして居る。西洋人の思想の根柢は生むと言ふ觀念に非ずして、作ると謂ふ觀念にある。然るに東洋人中特に日本人の思想の根柢をなすものは、生むと言ふ觀念である。故に西洋人の個人主義に對して日本人は奉仕主義であると謂ふことが出来る。然るに東洋人は西洋思想の發達に伴ひ、幽玄なる種族我を失して信仰を失ふに到つたと、心靈學者が主張する如く、これ至極尤もな説だと私は思つてゐる。

だが然し心靈學者が所謂種族我の例證として、過去に死せるところの人間の姿を確實に、且つ判然と見ることが出来ると言ふが如き説は、文明開化の現代に於ては笑

止千萬であり、首肯し難きところである。

靈たるものは飽迄も現實的理論をもつて證明すべきでないと言ふ。故に如何に難行苦行の修驗者と雖も、これは不可能事である。しかし私は偉大なる超人間的、力を有する靈的活動を信じてゐる。靈魂は永劫に不滅なること疑ふ餘地がない。宇宙は神祕の寶藏であることは何人も異論なく肯定するところであらう。我々が神社佛閣に詣でて、拜殿に額突く時、その偉大なる神格靈感到れ敬虔の念を生ずる事實を見ても、靈の永遠は明白である。

然るに心靈學者は種族我の徹底せる結果は、過去の死人を眼前に見るの域に達し得ると言ふのである。これ或る意味に於て肯定せらるゝも、現代實社會にその域に達せる靈學者、又は靈媒者が存在してゐるとの主張に對して疑惑を持たざるを得ない、私は嘗て種々の靈覺者の不思議な靈媒行爲を聞いてゐるが、それは單に靈感と謂ふ程度のもので決して現實的でないのである。

然るに心靈學者は種族我の徹底せる靈學者には過去に死せる人間の姿が判然と見えると主張し、一般の人には見えぬと言ふのである。即ち一般人は個人我により種族我が障害されてゐるから見えぬと謂ふにある。これ甚だ

疑しい事であり、何人も詭辯論だと叫ぶであろう。

私は斯くの如きものを重要視せぬ、見えても、見えなくとも、どうでもよいのである。宗教的な、眞の信仰に對しては以上の如き理論は、大事の前の小事であると私は信じて止まない。

されば宗教的な信仰とは如何と言ふに、これ活命即ち生活と謂ふ事である。故に人間の日常生活に於て、宗教的信仰なるものを切離して考ふべき性質のものでない、人間生活の最も尊いところは、宗教的信仰あるの所以なりと謂ふことが出来やう。

蓋し宗教的信仰を有しない人々の生活そのものは、實に無價値な、そして無意義なものであると斷言し得る。

人間生活をして價値附け、意義を有せしむるところのものは、即ち宗教的信仰の外に何物も存しないのである。

然るに實社會に於ては宗教的信仰を有せざる人間が多數存在してゐる。彼等は相當の階級にあつて、無宗教主義を誇張し、得意然としてゐるものも存するのであるが、彼等の生活こそ何等の價値なき動物的下劣の生活なりと謂つても敢て過言ではない。

然らば無宗教主義の彼等は謂ふであらう。宗教的信仰を有しなくとも、人間生活に於て、何等の支障なき事實

を主張するに相違ない、然し單に生活を成すだけならば喧しく論ずる必要はないのである。犬や猫は宗教的な信仰を有せず唯本能的に、何等支障なく生活してゐることは周知の事實である。

されば宗教的信仰を有せざる人々の生活そのものは、犬猫同然の生活に過ぎないと斷定し得ると思ふ。人間が萬物の靈長と謂つて威張つて居られるのは、即ちこの宗教的信念たる信仰の存する所以である。故に宗教的信仰は即人間生活であり。この二者は相即不二の關係にあること明白であらう。私が無鐵砲に宗教的信仰と謂つても内容上正邪善惡の存することは勿論である。即ち天國に結ぶ戀とか言つて、佛教の所謂天の一部分の存在たる神を我等人間の救世主と仰ぐ、宗教的な信仰もあれば、本佛釋尊の方便權説なることを知らずして西方十萬億土の彼處の佛のもとに於て往生すると説く如き、壓世的な宗教信仰が現代の文明社會に儼然と存在してゐることは事實である。又醫術の發達したる現今に、病を治することをもつて、宗教本來の使命なりと考へ、社會人をして迷信の邪道に誘導するは無論のこと、他を顧みず利己的にして、打算的私利私欲に耽つてゐる宗教家が存在し、且つ彼等は社會的に觀て相當の地位にあるとは、誠になげ



かわしい次第である。尙そののみか、人間の弱點を把握して至極尤もらしき教説をもつて、惱み多き現代社會人已が信仰の圈内に入らしめてゐる、邪教と稱すべき宗教の存在がある。これ教團解散を命ぜられた邪教のある事實よりして明かであらう。

將たまた現今では邪義邪説中に法華經の思想を盗用しいかにも自家の極説の如く喧傳し、信仰せしめてゐる有名無實の宗教のあることも、時代進展上面白き現象である。

以上述べし如く、信仰の善惡邪正に付いては枚舉に追がない、然し正信と迷信の境界は、地圖上に表はれたところの國境線の如く判然と區別する譯けには行かないと思ふ。正信と迷信は表裏竹膜を隔つが如き關係にあつて、明晰判明し難い觀がある。

然りと雖も正師の正教は、どの角度より觀察しても、正教でなくてはならない、故に宗教的信仰の醍醐味を求むるには、謂ふ迄もなく、釋尊一代五十年の説法中、出世の本懷であり、佛教の最極説たる法華經を措いて、他に何物もないと信ずる。この法華經の根本精神こそ、我等大和民族の根本的精神即ち日本精神に外ならぬ。

こゝに於てか、吾々は幸ひにも生れ難き人間と生れ、

世界に比類なき神聖なる國家に生を得、遭遇たてまつること難きところの法華經に遭遇たてまつり。地涌の菩薩にあらずんば唱へ難きところの御題目を、心安く朝夕に唱へ奉つて日常生活を過し得るとは、誠に幸福なことである。

而してこの法華經の宗教的信仰の實踐的方面たる信念口唱の最易行に依つて、名宗即の荒凡夫は一躍肉身その儘にて、本佛釋尊の境地に達した時、宗教的信仰の究極目的たる即身成佛の大果を得るに到るのである。

故に宗祖大聖人は、十如是事に、  
『本覺のうつつの覺にかへりて法界をみれば、皆寂光の極樂にて、日來賤しと思ふ我がこの身が、三身即一の本覺の如來にてあるべきなり』  
と示し給ふてゐる。

然しこれ信仰心即ち宗祖大聖人の所謂信心を基礎として、題目を受持し讀誦し奉ること肝要である。

故に波木井御書に

『信心だも弱くば、いかに日蓮が弟子檀那と名乗らせ給ふとも御用ひは候はじ、心に二つましくて信心だも弱く候はゞ峰の石の谷へころび空の雨の大地へ落ると思食せ、大阿鼻地獄疑ひあるべからず云云』

と誠示し給ふてゐる。されば宗教的信仰の、いかに重大であり、且つ人間生活に缺くべからざることを明白であらう。

然るに現今は長期抗戦に設へて銃後の護りの堅實を要求してゐる。國家に於ても、國民精神總動員運動及び所有る物資に對して統制しつゝある今日、我等日蓮門下の弟子檀越は宗祖大聖人の異體同心の祖訓を奉持し、日本精神涵養に努め、國家社會世界人類を同化せしめねばならぬ。

東洋永遠の平和確立のため、正義日本の軍人は正義の利劍をもつて、斷乎膺懲し、連戰連勝武勳赫々たること日輪を見るが如きである。蓋しこれ人間業の到底及ぶところにあらず、一重に陛下の御稜威の然からしむるところであり。將た又忠勇なる帝國軍人の滅私奉公の献身的努力に俟つものである。これぞ日本武士道精神の發揚に外ならぬ。この精神の根據が奈邊にあるかを考察せんに、これ日本建國の精神に基くものと言ふべく、この建國の精神とは即ち法華經の精神であり、宗祖大聖人の精神であること疑ふ餘地がない。即ち日蓮が弟子檀那等は臆病にては叶ふべからずと宣ひ給ふは、これ日本武士道精神の根據と謂ふも敢て差支へないと信ずる。即ち宗教的信仰の信念の不動なる顯れとしては、實に皇軍向ふと

ころ敵影なく、無敵日本の武威を世界に示し、光輝燦然たるものがある。

斯くの如く、宗教的信仰は我等の生活をして意義あらしめ、價值あらしむるところのものである。

故に我等同心の門徒は、益々信心強盛にして、宗祖大聖人の御聖訓に遵守して、國家のため護法のため、大いに活躍奮闘し以て、社會に貢獻せずんばあらず、現今は實に日蓮門下の奮起すべきの時である。宗祖の所謂身輕法重死身弘法の精神は即ち日本武士道精神なること前述の通りであるが、この堅忍持久確固不動の精神を繼承せる我等同心の行人は、よろしく四海歸妙王佛冥合の理想實現に一路邁進せざるべからず。蓋し宗教的信仰に培れた信念の偉大なるを認識する共に、眞の人間生活は宗教的信仰を俟つて、始めて意義を生じ、こゝに於てか、人間の價值は必然的に生ずるものと思ふ。されば若し宗教的信仰なかりせば、人間生活の意義生ずるに到らず、人間としての價值も存しない譯けであるから、宗教をもつて阿片なりと謂つた人間の存在たるや、誠に疑しき存在であり、これ眞に宗教そのものの本質を辨へざるのみならず、宗教本來の使命の重大性を知らざる族なりと謂ふべきであらう。(完)

(九月二十七日脱稿)



## レムブランドの創作に就ての瞑想

原 隆 二

十七世紀の和蘭陀に於ける傑出せる畫家、更に奇跡<sup>ミラクル</sup>の畫家としてのレムブランドを知つたのは、私が中學時代繪畫部に於て彼に就ての大體の概念を與へられた事に始る。

其の後私が宗教に多くの關心を持つやうになつてからも適偶彼に就ての二三の書物を讀んで、彼が單なる小市民的畫家でなかつたことに喜びを感じた。彼は實に神祕的畫家であつたのである。と同時にその専門的な技術上の偉大さを超へて、その外貌をすら必要としない程にたゞの「人間」であつたのである。此のことは脚本作家或は譚語作家としてのゲエテに就ても、「ソナタ」作家としてのベエトーヴェンに於ても言へる事である。

彼の晩年の作には殆ど一人の女の像が描かれて居る、と言ふよりも靈魂が描かれて居ると言ふことが出来る。即ち彼女が此の畫家によつて捉へられた瞬間に生活して

居たであらう。總べての生活雰圍氣——涙や、笑ひや、苦惱や、歡喜が靈魂に落す陰影と言ふやうなものが他の一切のものより多く描かれて居る、と言ふ事は如何なる人が見ても感ずることである。

此の意味で彼は、たゞ一枚のポートレートでさへも充分悲劇的な効果を與へて居ると思へるのである。

斯かるものは他の單に審美的な動機から描く如何なる大家のそれにも似てゐない。此處に於て彼が基督を描き、その受難の諸相を描くとき、如何なる効果を與へるであらうか、疑ひもなく充分なる宗教的効果を與へるのである。

×

彼と同時代の畫家であり、そして和蘭陀の美術界を代表する、メッツも、ステインも、テルブルグも、クレスベツケも、其他二三の人々も、所謂美學上のテイヌの法

則に従つて居ると言つていふ、彼等は皆等しくその靜謐な、平明な、そして市民的、逸樂的な當時の國土の情趣を帯びて居ると見られる。彼等に於ては其の作品は聖典或は歴史より流れ出るところの偉大なる想念にまで高められたことはなかつた。それはまた彼等自身の生活の外廓を通じて、その核心にまで穿ち入るところの悲哀や絶望をも感じなかつたし、又全人類の感情をその心臓の奥底に潜むる術をも知らず、況や其の魂の叫びを表現することは及びもつかないことであつたに違ひない。

此等藝術家の間に在つて、レムブラントは正に奇跡の如く顯れた。十三世紀に於けるダンテの藝術、十六世紀に於けるセクスピア及びミケル・アンゼロの藝術に匹敵するものを彼の時代に對して打ち樹てたのである。

彼はあらゆる種族、あらゆる時代、あらゆる國土を超えた高さに於て立つて居たと私は思ふ。此の意味に於て若し彼が吾々大和民族の祖先として生れることが許されたなら、彼は吾々が信奉する宗教に取材した幾多の創作を通して、彼獨特の靈魂の世界を見出すと共に、人々に人間的な宗教觀を與へたに違ひない。何故ならば歴史はその事が歐洲に行はれた事を傳へ、又行はれつゝあることを教へるからである。

しかし乍ら十七世紀の和蘭陀は彼には隔離した存在でしかなかつた。そして彼を理解もせず、援けもせず、況や歡びもしなかつた。

宗祖が鎌倉幕府に容れられずして、幾多の困難に遭はれたのも當時の社會狀勢からして、その教義が餘りに奇異で且つ偉大であつたからである。いや恐ろしかつたのかも知れない、その結果としての四箇の大難である事は疑ふ餘地がない。

レムブラントは十七世紀の和蘭陀にとつては餘りに神秘的で、また偉大であつたのである。彼は實にその何れの地に生るゝも良かつたし、又何れの時に生るゝも其藝術は變るところがなかつたであらう。彼が夫の「夜番」を描いたのも、さう言つた本質的不變性を有して居たから爲し得た業なのである。

偕て十七世紀以降に於ける和蘭陀美術の代表者と云へば前記の小市民的藝術家達就中、ミイレベルトやヴン・デル・ヘルスト等であるが、それは狭い意味に於ける代表であつて、後に此れ等の藝術家達がその榮譽ある壇上から引き下ろされて、低級な位置を以て満足しなければならなくなつたのは、全歐洲が先んじて、レムブラントの偉大さを認識し、之を宣傳し始めたからに他ならない



のである。

×

「古代藝術に於ける神的美は、彼の創作の手に依つて熱情的な現世的眞實味に變つた」とベルハアレンは言つて居るが、事實私のやうな繪畫に經驗の淺い素人が見ても（勿論複寫版ではあるが）彼の基督、聖母、ベヌス、ダナエ等々は、そのあらゆる畸形以外に、病根及び醜惡をさへもつてゐて、これによつて人間感が刺戟される。即ちそれは我々に近く、否我々自身であるが如くにさへ性格化せられてゐるのである。換言すれば嘗て藝術の中にあらわれた人々に決して見なかつた程度にまで性格化せられても居るのである。

彼の創作を代表するものに有名な三種の描寫がある。

即ち「解剖」（一六三二）、「夜番」（一六四二）、「サンディクス」（一六六一）の三である。かゝる種別は或は彼の全作品の密林を探究する上に、ある方法を與へる便宜があるかも知れないが、然しそれは唯皮層的で、危險性を有すると思へない、なぜならばレムブランドの創作に對する描寫法は一つの他の方法を始むるために、現在にある一つの描寫法を用ひるといふやうなことをしなかつたからである。彼はラストマンの影響を除く外は、如何

なる影響にも及ぼされなかつた。彼はたゞ一つの描寫法即ち彼自身の描寫法によつて描いたと言ふか、或はまたその描寫法に無限性を持つてゐたと言ふことが出来るのみである。それは彼の驚くべき自己の革新が、十年毎にまた年々にさへなされたことを知る時肯かれるところである。

かくて彼が、その様式を益々擴くし、その描寫を自由にし、豊富な傲奢な色彩適用によつてその眼を養ひ、濃く深き色の量に慣れ、己れを擧げてさうした生活の中に赴かんとしたことは、實に彼のその次に於てせる努力であつた。彼は今や思ひ切つて、たゞ彼自身のうちにのみ聽き、彼自身だけで了解することを始めた。そうして最も速かに彼自身を征服しつくしたのである。その結果レムブランドは容易に了解されることが出来た。何故ならば彼は何よりも畫家として止つてゐたからである。だがやがて彼は「幻影を見る人」となりかけたのである。

私も始めにさう言つたが、人もレムブランドを定むるに「奇跡の畫家」とすることが出来る。彼が創造して以て凡ての時代の藝術に贈物したところの、彼のあらゆる藝術、色、幻術的な光線、それらは皆彼をこの最高の使命に適せしめた。彼は決して單なる宗教的藝術家でな

かつたと敢て言ひ度ひ、またたゞの空想的な悲劇的作者でもなく、と言つてまた描かれたる夢の喚起者でも、象徴の創造家でもなかつた。然らば彼は一體何であらう。彼は只常に、超自然を自然たらしむるところの人であつた以外の何人でもなかつたのである。彼の筆の下には、奇跡は眞に起つたと思へない。それ程彼はそれを深い、犇々人に迫るところの人間味を以て成就したのである。

×

又レムブランドは宗教と藝術との交渉を如何に爲したであらうか、宗教と藝術とは、そのいづれかゞ他の一方に屬する必然性を有する。何故ならば此の事がなくして宗教と藝術との一致性は認めることが不可能だからである。觀念論の立場に於て、その根本原理、根本過程たる眞、善、美、聖の融然一致境たる、ユートピアこそ宗教と藝術とで見出される美しい觀念の世界がその大部分を爲すことは、或る一面に於て肯けることである。此處に於てか、宗教は藝術に屬すべきか、藝術は宗教に屬すべきかの問題が必要である。

ステイルネルは其の「藝術と宗教」の中に「單に詩人ホオマアやヘシオドのみが、希臘の神を作つた」ばかり

でなく、その他のものも亦藝術家として宗教を作つたのである。よし彼等が藝術家と言ふ名前を附せられて、取るに足らぬものとして輕蔑されやうとも。藝術は初めてあり、宗教のアルファである。宗教は終りであり、藝術のオメガである。否それ以上に宗教は藝術の従者である」と言ひ。又ヘエゲルは宗教以前に藝術を論じて居る。言ふ迄もなく此等はその段階の論を出でない。宗教と藝術との價値的問題では決してない。只宗教の立脚地は藝術に存するに過ぎないと言ふことなのである。此の意味に於て私は宗教が藝術に屬することを肯定する。即ち藝術は宗教を作るの言を敢て否定しないのである。

その過程に於て、宗教は藝術とは對立的な道をたどるものである。即ち宗教は藝術家が作つた目的を、それが屬して居る内部へ取り戻して、再びそれを主體と爲さんとするのである。此の事は世界のあらゆる宗教に、具體的に妥當であるかどうかは知らないが、今レムブランドに於ては彼が藝術家であると言ふことが有利な材料になるが、事實爲された事に對して吾々は否定することが出来ないのである。又彼が單なる神的畫家から次第に「幻影を見る人」になりかけた事實を知るとき、猶更の感が深いのである。



彼は正しく藝術によつて宗教の世界を覗つた、即ち自己の作品に宗教を見出したのである。何故と言ふに、彼は殆んど謀るべからざる感覺によつて、神秘と生命とを一つに掴み、それを創作的に同じ焰の中で一致せしめたことがそれである。

x

東西古今を問はず、その時代と環境から距離れた幾多の傑出せる人物は存在もし、又現在も存在しつゝあるであらう。併し此れには、その時代と環境から除けられた者と、自ら自由に離れて居るものとの區別を生ずる。

今レムブランドは後者に屬するのであるが、その結果として容れられなかつたのは寧ろ當然である。彼の如き先見的才能を以て爲すその作品がやがては廣く了解される運命にあつたことは必然性を有する。此の事を實證するものとして、彼の藝術が十九世紀に到つて始めて認められたことを擧げなければならない。實に十九世紀程藝術が一般生活に穿ち入つたことは未だない事である。

嘗ては贅澤の花であり、王候や上層の人々の持囃し物であつた藝術が一般生活に穿入したと言ふことは、一つに革命のおかげである。そして繪畫に於てもレムブランドのその如き迫力に満ちた、所謂自然を超へた現實的

な作品に多くの關心を有するやうになつたのである。

ルウベンスやテイチアンはその作品から焰と靈とを剝いだ、そしてその傑作と稱するものは、たゞ生命の美しい外形の讚美に過ぎなかつたやうである。彼等は瞥見は持つた。しかしながら眞實の幻影は持たなかつたのである。

併しレムブランドは、ダンテやセクスピアの如く、一人の「見る」人であつた。未だ嘗つて畫家に彼の如き人は一人もなかつた。そしてそれ故に彼はあらゆる畫家の上に聳えて居る。嚴然とその地位は不動である。そうして永久にそうであることを信ずる。

何事にも魂に呼びかけた、ものであることが望ましい。それは決して無意味に終ることがないからである。

【丁】

### 川 三 題

田 川 惠 良

川岸の舟に荷積むや夏柳  
釣落す魚の太さや秋の川  
舟底を焼く冬川のはとりかな

## 愚 思 一 編

### 原 不 退

人間がもし、思索から全く離れて生活出来るとか、或は思索のない動物の一種であつたなれば、人間といふ名稱を保つ事が出来たであらうか？

私はかつてこんな事を考へた事がある。――全ての動物から人間が超越してゐる事、それは人間が思索するといふ一事である。宗教も、科學も、哲學も、ありと凡ゆる智的なものは、決して人間の價値を決定するものではない。人間が思索的な動物であるために、全ての智的な型體が、思索といふ本能的な働きによつて結實したものに過ぎないのである。もし人間が思索の故の思索による苦患を逃れて、大悟とか、大成とかいふ偽装の下に、思索的苦患から離れたなれば、それこそ最も恐ろしい墮落である。人間が人間としての價値に生きんとするなれば、決して偽装的な、安樂な思索を求めず、益々苦しき思索を求めて、迷ひから迷ひに進みつゝ、苦悶に苦考を重ね

て、その一生を終るべきである。生命には限りがあらう。然し思索には限りがない。弟子は師の跡を踏み、友は友の思索を追ふ。かくて果しなき思索は、果しなくつゞき、偉大なる思索の繼續は、偉大なる人間を生み出すものである。苦患の思索こそ、眞面目に人生を全ふせんとする良心的な人間の常道である。――そして私の歩んだ道、それは苦にもあれ惡にもあれ、思索の故の思索の道であつた。

この記録は、私が祖師大聖人を絶對の救護者として歸依し奉つた直前のものである。勿論、その善惡を今論じようとはしない。然し哲學の故の哲學といふ危険な道から、哲學による救ひの發見、ニヒリシズムの中から見出して來たといふよりも、ニヒリシズムの中から救ひ出されて來た私を見出すことが出来ると思ふ、必要以上に生命を必要としない私が、死線を越へて生存してゐる意義



も、祖師上人に給仕して初めて知る事を得たものである。自己を正しく生かさんために、眞面目に考へる人達よ、どうか思ふ存分君達の思索に走り給へ。そしてその窮したるところ、祖師上人の救護の手のなほ残されてゐる事を思ひ出してくれ給へ。

記録の中に出てくるコムジンなる言葉は、私が勝手に創つたものである。ニイチエの超人よりはるかに人間的なものである。では記録一編、即ち愚思一編を記して御笑納に賦する。

來りて救へコムジンよ。今や御身の子の悩みはげし、御身の子はその苦みに耐へ兼ねて、まさに斃れむとす。來りて御身の子を救へ。

汝弱き者、我が子よ。汝の悩みは汝を強め、汝の煩悶は汝を深む。子よ、弱きとは何者ぞ？ 未知の世界に怖ふ愚智に非ずや。汝の苦みは未知を開き、汝の悶へは理智を與ふ。

コムジンよ來りて導け。御身の子は今や旅路の第一歩に就けり。その足は乳色の土の上にあり。理想の靴は、一步を出ずして損したり。血は流れて石を染む。され

ど、その足を包まむ術を知らず。コムジンよ、來たりて看取り給へ。

汝愚なる弱き子よ。何故人生の道に棘あるを喜ばざるや。汝の血は汝のために流されたるカルバリの血に勝るに非ずや。その血もて汝は、今や世と世の全てに死することを得たり。人間の道の荒きこそ、汝にとりてよなき幸福なり。汝の傷は汝の師、汝の血は汝の光なり。一步を出ずして、理想の靴の損したるは、奈如に汝の祝福されたるかを示さんとする我が恩恵なり。子よ喜びて汝の血を流すべし。汝の疼を瘡すは我にあり。汝は只汝の道にのみ進むべし。平安と苦患とは常に汝の左右にあり。汝意のまゝにこれをとれ。されど平安は汝に苦く、苦患は汝に喜びを與ふるなり。

コムジンよ、奈如なれば御身は高きにありて、御身の子を見下し給ふや、御身の子は低きに呻きてあり、降りて而して來りて導き給へ。

子よ、何故我を高きと見るや。空間は汝にとりて何者ぞ、高きよと、汝嘆く勿れ、我もし低きに至れば、汝は高きに至るを得ず、汝と我との空間は、我が高きを示さんために非ず。汝の低きを示さむためなり。子よ空間を

越へて來れ。汝の羽は弱きに非ず。汝は未だ空翔けし事なければ、汝の羽の能力を知らず。怖れとは未知に對する愚さなりとは、既に汝の知れるところに非ずや。汝の嘆きは汝の低きにあり。我平安は我の高きにあり。翔へ、汝の翼の能力の限り、さらば汝は高きに至り、低きは汝の嘆とならず。

コムジンよ、我が内にあり、我が外にあり、我に有り、我に非ず、高きに住ひ、低きに懣ふもの、コムジンよ、榮光を嘲ひ、屈辱を意に止めず、色にして又無色、無の無にして有の有なる者、コムジンよ、全能者を捉へ、惡魔を征服し、幼子に事へて喜ぶ者、御身の子のために角笛と管とを取りて來り給へ。御身の子は患ひに勞れ、懊惱に悶へ、その涙もて御名を記す。かくて能力の湧き來るや、高慢りて患ひを思はず。喜びを樂しみて嘆きを樂します。樂しみを悦びて苦しみを喜ばず。言葉もて讃へ、心もて呪ふ。コムジンよお身の子の弱きを救ひ、苦みを苦まず、御身の高きに住ましめ給へ。愚かなる怖れを思はず、未知なる辱を嘆かず。誤てる道徳に従はず、偽れる宗教を信ぜず。他力に非ず自力に非ず、奇蹟に寄らず、理智に傾かず、正しきと、尊と、儀禮と、香華に跪かず、

御身と偕にあらしめ給へ。

コムジンよ、御身の子は倒れたり。何故御身の腫は斯くも冷きや。御身の子は傷付きし心の疼に耐へ難く、夜を日につぎて呻吟す。コムジンよ、お身の腫を和げ給へ、御身の子は煩ひて狂ふばかりなり。

子よ、我れ汝に語るを得ず、そは汝の苦みは、汝に歸すべき炎なればなり。汝今暫く苦みて、汝の過を知れ。汝の喜びは汝の涙となり、汝の死は汝の生とならん。されど、我れ汝を恵むの故に、汝の過を正さむとす。奈如なれば、汝は翼を息めてかの花園に懣ひしや、死の美は汝に好もしくとも、汝の心奪はれしは愚かなり。蜜の甘さは、汝にそこばくとなき樂しみを齎かせしも、汝の心與へしは哀れにも哀れなり。汝は我が子なり。世と世の慾は汝を慰むに非ず。汝の翼は、世と世の慾より飛び離れむために、我が與へし賜物に非ずや、汝はその賜物もて誇りに世を歩めり。汝今倒れて痛く苦しむ。汝の愛せし者は世のものに非らざるか、汝を生みし者、汝を育みし者、汝を慰むる者、汝を導きし者、援くる者、語る者、樂しむ者、皆世に住める者に非ずや、汝今にして倒れしを嘆く、我れ汝に告ぐ、汝速にその創始に歸るべし、



さらば平安は汝に歸せん。

コムジンよ、嘆きを去り、狂ひを正せし者、コムジンよ。御身のみに名に榮光あれ、美はしき自然は眼を被ひ、カルバリの血は乾きて慈愛は盡き、神は地に落ち、暗黒は涯なし。汚れし者、壞れし者、腐れし者、死せし者、等しく御身を仰ぎて榮光を歸す。子の心喜びて踊る。誠に御身と偕なるは樂しきなり。今や世と世の慾とは子の心を迷はすを得ず。コムジンよ、子の心定まりたり。御身の榮光は蒼空に輝き、御身の恩恵は地の涯に迄及ぶ。四聖は眼眩みて御身の榮光を拜し。老莊は待して創始を語る。誤てる豫言者は地に墮ち、神の子は荊冠の榮を受く、菩提樹は枯れ、赤青の葢瓦は壞滅す。毒杯は化して美酒となり、眞理のために死につく者一人もなし。お身こそ誠に星を頂きて冠となし、太陽を探りて玉となし、天に地に榮光を輝す者、主の主たる者なり。子の心喜びてその極を知らず。子の心樂しみてその讃言を知らず。子よ、愚かなる言葉もて誰を讃へむとするや、我は無なり、無の無なる者なり。

コムジンよ、お身の子は苦しみを味ひ、悶々としてそ

の苦き内にこよなき喜びの甘さを味ふ。御身の子は今にして眞の救ひを知り、苛しみを嚙みし味の尊さを知る。御身こそげに尊き無の無なり。無こそ御身の子に永生を與ふるものなり。

子よ今こそ喜び踊れ。汝の心は高められ、汝の思ひは深められたり。汝は今にして偽善より救はれたり。見よ彼の誇りかな神の子の群を、彼らは高慢りて己が救ひを讃ふ。されどその内は慕なり。慕の呼ぶ聲を聞け。「我れ救はれたりと。」そは空しく白く塗りたる墓碑なり。汝、我が恵む子よ。汝は幸福なり。そは汝の内なる偽善は汝の喜びとならず。汝の眞實は汝の苦みとなればなり。

全ての苦みに直面し、慰めを求めず、自己れを偽らず、苦み苦む者は幸福なり。汝の苦惱は無を悟り、無は汝に平安を與ふればなり。

完



文藝

山清し

齋藤慎吾

身延文庫古文書傳寫の爲、立正大學の派遣を以て吾れは昭和七年六月より同十年六月に及ぶ満三ヶ年を身延山久遠寺に淨居しき。

1 山寺元旦

靄白く罩めてひそまる山々の尾根をし見れば明け動きつつ  
禮法華一會無言の座に燃えて燭はかすかに音たててをり  
讀みなれし法華經なれど文々の韻は深く今朝の身に沁む  
そそりたつ杉の秀むらの眞白雪山はさやかに明け放れたり  
鳥が鳴く常陸の國のふるさとを一目わが見む山いただきに  
山頂に立ちてはるかに老いらくの父母ことほげば涙ぐましき  
元日はしづかに過ぎぬまなかひに富士大きくぞ夕かげり來し

2 山中淨居

朝夕の勤めさびしく身を置きて淨らに住めば心安けし



本讀みに疲れたる眼を谿邃く見放ちければ赤き南天  
老樹はつかに支へて疎なり白梅の花すがと朝霞せり  
小雀ら飛び立つなべに杉山の花粉流れて陽にけぶる見ゆ  
咲き光る鬱金櫻の花の搖れいのち思へばさびしきものを  
さるすべりしんみりと紅し朝じめる庭の木の間の茅蜩のこゑ  
山まゐりの人らゆくゆくうつ太鼓ひびきは高く天に牙えたり

3 山を下る

身延にて朽ちむぞよしと思ひにき仰ぐ高嶺は今日も雲ゆく  
うつしみの吾がいこふべきところなしひそかに出でて山を仰ぐも  
卑怯なるインテリの性は陰にして同僚おとしいれ己れ生きむとす(在京)  
幼きゆただに勵みて薄命のまゝに吾が生は終るならむか

4 元朝登詣

窓近くひびく川音明けそめし空かと見れば月傾きぬ  
山々の迫る峽間におりたちぬうつともなし照るおぼろ月  
杉の秀の霜やけなごみしづかなる北へ身延の嶺ろつづきたり  
眼を閉ちて思へば見えしこの山の晨の庭に今われは立つ

## 白 虎 隊

岡 村 敦 正

をさならがいのちひたすら朝明けの山路越ゆるとしはぶきもなし

(明治元年八月二十二日)

精根盡きゆくを冲天の焰赤々と斯くは死すべきいのちなりけり

(全八月二十三日飯盛山上自刃)

まつしぐらに七夜さを未だ暮進れると便り絶えしは母のたまふ (弟)

明日は前線にたつといふ弟の便り強きことのみ書きて短かし

父も母もいまさねばひとり耐へつつにをさなき胸は病みたまひけむ

(悼 静 子 様)

三十にして血壓すでにたかしとふおのれしみじみじめにをりぬ

ワッセルマン氏反應陰性といふ看護婦のこゑすがすがしうべなひあたり

(血液検査)

姓名判斷觀る人ありてひとつ處に吾の落付かぬ性は言ひしも (流轉)

## 嵐

六月二十九日横濱女子師範グラウンド崩壊罹災者を善行寺に收容す

嬰子を抱ける腕のしらじらと夕べ冷たき軀に對す (出征兵の妻)

避難民にをとめ交れりしかすがに歸りゆけるをさびしみにけり

嵐雨なごりなくして木立梢沁み入る丘の松蟬のこゑ

コーラスの流れよどまぬ聲ありて青々と空は晴れにけるかも

## 鶴見工場街を往く

大機械唸りたちくる朝明空おびただしくも陽ににぎりたる

## 母を思ふ

小 林 學 山

常日頃親に對し強情で不孝者であつた私も、病氣になつて初めて親の恩を知つた。醫者も博士も見離した大病人を息を引き取る臨終の際迄助けようとするのが肉親の親の心であらう。私が臥つて以來父と母は全く氣狂ひの様になつて了つた。育てた吾が子は次から次からと死んで了ひ、最後に残つた私を「此の子だけは」と士官學校卒業の日を待ち焦れて居た父母、學校も途中で死の床に苦しみ悶く私の姿を父母は何と眺めたであらう。あれ程すきな晩酌を決然と止めて藥代に替へ、又九大の博士の來診を乞ふ爲には二百圓近くの大金を投出す父であつた。多久村の民間藥が効くと教へられてはその晩の内に六里の夜道を厭はず買ひ求めて来る母、いよいよ病勢が募つてあらゆる醫藥も駄目だと悟つた時「此の上は神様にお縋りするより他に道なし」と



大資本ここにゆりいでて晝も夜も人の神經はおびやかすなる大機械どもす聞けば宗教てふ理念もつひに遠き思ひす小鳥さへこゑに鳴かなくひねもすを煤煙よどめるこの街空は宗教家てふ思索もなくてひと日けふ軍需工業の衝に疲れし眞夏日に萎へ盡したるものの翳。青稊栗の色おとろへす

わかれ

まみ涼しき妹ゆゑにひめしおもひさへすべなく山を明日去なむとす淡雪の光のなかに立ちなげく妹ゆゑ耐へむ心くづれつはかななる思ひにふたりあるさへや枯葉は山に音たてりけり

○

電報を受けしたまゆら召集とこころ決めにけり祖母死にたまひし祖母上を逝かせまをして身の不精の悔なしとならず一の孫われ

續 岡山に遊ぶ

道路標識朽ちかたむけり赭土のこの山路は吉備につづくかも岩影をたたへて深き青澗に木々の紅葉の散るしきりなさ背戸庭に柿の熟れ實をちぎりつつ戦さに死にし次郎思ひをり日もすがら疊表を織りつつに村の處女はさびゆくならむおのがじし蓄へきそひ親しまぬ村人らなりなかに吾が住むさむざむと遠山しぐれ夕づくを蘭田打ち人ら未だ歸らず蘭田水をかくるモーターの音とどろひびくに寒き十三夜月

かねて靈驗灼かと聞いて居た川上の寶塔様へ三年間跣足詣りの大願をかける母であつた。一口に三年といふものゝ雨の日も風の日も嚴寒凍る雪の日も三時に起きて水垢を取り、往復五里の山道を跣足で詣る母、これを理窟で解決することが出来ようか。身を捨てゝたゞ一途に我が子助け給へと神に捧ぐる一念凝つて立つる大願、何で他人が立てゝくれよう。肉親の親なればこそ。噫、併し何といふ皮肉であらう。私の病氣は日に／＼重くなるばかりだつた。私は幾度死生の境をさまよつた事か。

忘れもしない昭和六年の春四月、釋迦如來御降誕ましましし花祭りの祝日だつた。午過ぎ何時もの如く勤務先から歸つて來た父は枕元へ坐つて、「氣分はどうだ、苦しいか？」と尋ねてくれるのであつた。「阿父さん。私も後二三日持つまいと思ひます。生きて居た間親不孝の數々本當に済みません。此の世の御別れに御經の聲を聞てそれを便りに冥途へ行きたいと思ひます。何卒坊様を連れて來て

朝明けの田の面の薄氷割りつつに蘭植ゑす人らはやありにけり  
戸を開けてすなはち向ふ枇杷の木の花しらじらと朝しぐれ空  
茶の花は冬陽のなかにうす甘し小蛇らあまた下ごもりつつ

風がはこぶ雪さらさらと朝廷は萬両の實の赤かりにけり

隣家の粗摺る音のひびきつつ午すぎてよりつひに曇りぬ

春日光照りしづもれる瀬戸の海の未だも寒し青き潮騒（國立公園鷺羽山三首）

磯山の木の間ゆたてる千鳥かも高くは飛ばずこゑすくみ鳴く

うらうらと麥生明るく照り和みすでにしひばり高鳴けるなり

ひさしくを大忠の微望達せずとおのれ厳しく説きすすめつつ（日蓮上人）

勅語奉讀にも居眠れる多しうつつとなにを夢みるこの人らぞも

霜け田の水に照りしむ日のぬくさ蘭草は青く芽にたちにけり

植ゑつけしちさはまろ葉の顯たぬ間に吾れ岡山を去るべかりけり（三月十日）

## 煩悩讃歌

後藤龍子

ひたすらな昂に驅られ歩む道さるすべりは紅く花咲きてをり

さるすべりの紅き花瓣に燃えつきて我執さながら陽は照れりけり

思念いまに對へるものを超えにけりカンナの花の血ともゆる晝

咲き照れるカンナの花にむきたちて美を認めしはいつよりなるか

日没の照り衰へて風吹けりうつつとおもふわが肉體に

日ならべて降る雨寒く秋に入り豐者のごとく夜々をこもりぬ

空罐に花植えて愛で育くむは趣味ならねども樂し朝朝

下さい。」と言つた時父は兩眼から涙を  
はら／＼と流して、「そうか。そんな  
に悪いのか。よし暫らく待て、今すぐ本  
行様に御願して來るからな。」それから  
物の一時も經たない内に父は本行寺上人  
を伴つて歸つて來た。上人は酸素吸入を  
して居る私の衰弱しきつた姿を見て驚か  
れた様子であつたがやがて御經を訓讀で  
靜かに讀み始めた。今迄母の信仰を馬鹿  
にして居た私も此の時ばかりは泣かずに  
居られなかつた。この御經を便りとして  
冥途に逝かなければ他に便るものとてな  
いと思ふと上人の御經の一聲々々が全身  
に滲みわたるのであつた。「妙法蓮華經勸  
持品第十三……」

此の經文の意味、それは今を去る三千  
年前、大聖釋迦牟尼佛が印度に御入滅の  
際御弟子方を集め給ひ「汝達よ吾久しか  
らずして世を去るべし。されば吾がなき  
後に我に代りて如來の使となり三惡道の  
衆生を教へ導きてその苦しみを救ふは誰  
ぞ。」と尋ね給ひしとき。藥王菩薩、樂  
說菩薩その他御弟子の方々が世尊の御前



大輪の菊冷々と咲きてあれ齒を磨ぎつつも唇つめたかり  
朝々を散る花あればおのずから生きゆく意識きびしかりけり  
蓮池に蓮の花咲く清らかな朝の目覺めを欲りて久しき  
冬枯れの山のへに佇ち濃濫の海見てゐしが悔となり來つ  
夜の庭を歩む仕様なぞすべもなし他郷の山に圍まれてゐて  
閉まりし部屋に香をこめて藥草を煮をれば寒き霜夜にも似き  
樹々の葉の一樣に散る冬にむきすまじく心荒るゝ思ひす  
郵船俱樂部の屋上を今し離れたる眞晝の月は海にかたぶく

夏秋山麓居詠草

石川國武

初夏のけはひとなりしこの夜ごろ肌をぬぎては風にふかるる  
杉むらにたちこむる霧木の間ゆも這ふとこそすれわがゆく道に  
霧ふかみ水戀鳥の聲絶へし靜寂のみちをわけは歩みつ  
かなかなのこゑ親しもよ松ヶ枝に暮れなすむ陽のひかり残れる  
棕櫚の葉にふく風ありて動かざる山の上の雲のゆゆしきをみつ  
わたる日に空は照りつつ山の邊に凝る雲見れば炎暑おもほゆ  
窓の邊の楓にふきくる風をさへうれしみ思ふ暑き家居に  
夕ぐれの明るみにして廣原に遊ぶ童らが見ゆ旗うち振りて  
すかし見るすだれの外はすがし照りわたる月の白く光るも  
夕づきし深山の森に鳴く蛸の聲まれになりぬ夏ゆくらむか  
夕づきし葡萄の棚にふさぶさと垂るつぶら實の靜けさに居り

に進み出て「お釋迦様決して御案じ下さるなよ。如來なき後二千年。末法濁惡の世とならば、吾等必ず佛の使となり慈悲の衣に堪忍柔和の袈裟打ちかけて命を的に法を説くべし。大難も來らば來れ。世の爲一切衆生の爲捨つる命、など惜しからん。吾はこれ佛の使なり。衆の前に恐るゝ處なし。」といふのが此の經文の意である。何といふ強い力のある言葉だらう。つら／＼世間を眺むるに生あるものは必ず死す。尊きも賤しきも皆この道理から逃れる事は出来ない。定められたる運命の前には全世界の權勢を以つてしても、千萬無量の金力を以つてしても一分時の壽命すら伸ばす事が出来ない。生老病死の苦しみは何人も絶対に逃れる事は出来ない、生れ乍らに背負つて來る運命なのである。どうせ死ななければならぬとするならば短かい生涯を、親を苦しめ世を呪ひ地獄に墮ちてかくも苦しみに悶えつゝ死んで行くよりは、此の御經に書いてある様に、いつそ佛の使となり人を救ふ爲に命を捨てた方がどれ程幸福であ

現世は今日もかなしや亡き母を偲びて心泣かんとするも（命日）  
曼珠沙華は毒なりと叱へどきかばこそつみとり居りし幼妹世になし  
豫備少尉林是幹先生召集されこの峽の町きほひたちたり  
みまかりし防人の母ならむ白木の箱抱き来る人老ひましてぬ  
松虫の窓邊にきたりなきたつる夜はしみじみと思ふ事多し

### 拾ひ屑一束

東

菑

庭隈の紅き山茶花咲き初めて寒き曇りを四十雀の来る  
くぐもりの夕べさむしく山茶花にひつそりと来て鳴くみそさざい  
山並みのはたては晴れてすむ空に八ヶ高嶺の雪ぞ光れる（下部街道）  
ひとひとり通らぬれば椋の樹に雀はさわぐうるさきまでに  
ひそまりてものの音たへし夜の湖にうつる三日月光鋭く  
夜の湖は遙く寂けし吾が佇てる汀を洗ふ波もあらなくに  
朝霧の林をとほし窓に入る陽すぢはすでに秋づきにけり  
冬の陽のとどかずなりて庭隈の山茶花のはなは散りしきてあり  
深霜は日にけにきびし庭べの南天の實は朱味そめたり  
風のしづみし夕べ裏山に落葉をさむく踏む鳥のあり  
ここに來て心ひろらなり富士川の蜚蜨として白き一すぢ  
雪霧のふかくたちこめ見もわかぬ谿間にぞ來て鳴く鳥のあり  
曾つて師が住まひし釋迦堂今はなくて夕陽に淡く咲く胡蝶花の花  
胡蝶花の花むらがり咲ける崖なだり夕日あかるくしばしを照らす

つたらうと今になつて悔悟の涙がさんぜんとして枕をぬらすのであつた。

死に行く我が子の枕下で父母は茫然自失してつくねんと坐つたまゝ、手を合せて上人の御經の聲を聞いて居た。恐らくこれが此の世の最後の別れであらうと父母の顔を見上げた時あれ程肥つて居た父が今は六十の坂を越えて瘠せ衰へ、見るも哀れなおいばれ爺になり果てて居る母は雪より白い白髪頭。噫、此の老ぼれた父と母を残して死んで行つたなら。後に残つて父と母が何を便りに慕すだらう。

「噫阿父さん、お母さん。悪うございました。今日迄親不孝の数々。二十三の春。今こゝで私が死ぬといふ事を知つて居たなら、あなたに親不孝するのではなかつたのに、それは皆私に信仰心がなかつたからです。何卒お許し下さい。もう私はあの世へ旅立たなければなりません死んだなら一度御釋迦様の御膝下へ行つて、立派な御弟子となり今度この世に生れて來る時には必ず真心こめて親孝行を



夕陽あかあかと落葉松林に照れる時ながくは鳴かぬ春蟬のこゑ  
小夜更けを地震に目ざめてふとも聴くむさびの聲は谿を越えつる  
海ゆ昇る陽の明るさよ昨夜ひと夜雷は鳴りしが梅雨あくらし  
十四五の少女の唇に紅そめて暗きに恥じり客にもと言ふ（巷）  
これがめらは生活の爲に媚賣りて己れ醜く馴れゆくらしも  
磯砂を踏めばにじみ來水音のすがすがしも朝日を浴びにつつ

叙 景 雜 原 不 退

やはらかにたそがれそめし山並のみ雪の映へは愛しかりけり  
なよなよとうすくれないの花ゆらぐ合歡の梢に夕あかりして  
あかねさす深草百合の山かげにひかげこもりてひぐらしのなく  
窓下にのびひろごりしかんぼちやのかたちとゝのひしもの七八つも見ゆ  
夕ざれは生き咲きそふ白粉の花の紅ひ美しみ見つ  
種熟れしこれが大き向日葵に轟たのしげに來鳴きつればむ  
雲ひくゝさ霧の如にながれゆく山がひの街のあかつきよろしも  
きり小雨降りふかみつつまのかぎりおぼろけぶりて木立見へずも  
さらさらと又さらさらと群れて舞ふ落葉かなしも秋の風吹く  
ゆかしくもこれが賤家の軒にして菊咲きさけり大きな花して

御 廟 所

とほつ世に大きひじりの住みませしみあとおろがむ胸はせまりつ

致します。その時こそこの御經に書いてある様に一切の欲惡煩惱を捨て去つて佛の使となり命を捨て、衆生濟度に盡しませう。馬鹿だつた故に犯した此の世の罪を何率許して下さい。」と私は心の底から後悔するのであつた。

思へば昭和三年の春四月已來跣足詣りの願を起してから丁度滿三年目、今日こそ大願成就の日である。母の子に對する心、それを思ふと胸がはりさけるやうだつた。「さうだ此の年老いた父母の爲に斷じて死んではならぬ。それに今日は四月八日だ。」私は腹の底から湧き起る不思議な大勇猛心をむら／＼と感じた。病何者ぞ！私は床を蹴つて起きた。恐らくその時であつたらう。永年私を苦しめた病魔が朝霧の如く消失せたのは。

一切の魔を破して天晴地明、見る森羅萬象盡く如來の慈光に浴して和氣溢れ、世は皆希望に燃えて居る。かくて後、病も癒えて私は父母の許しを得て髪を剃り佛弟子となり、今は身延の聖地にあつてありし日の先哲の死身弘法の尊き御生涯

さゝがにの糸玉つらぬみ庵のありしむかしを慕ひおろがむ  
たへだへにつたふ懸樋に水波みつみさはにせりつむひじりとほとし  
夜もすがら要文誦持の聲たへぬとほきみ世こそ慕はしきかな  
ぬかずけば胸ちにせまるちからありみたまは今もこゝにいませり

### 戦傷の弟に

なりたちし醜のみ盾のいたつきに哀れ伏すてふ吾れかはらめや  
すめらぎの防人汝れの今にして白妙の姿おろがむ吾れは  
大君にささげし生命ながらへて白妙につゝむ赤きこゝろを

### 野菊

母そばの母めでませし一本のま白き野菊はこゝに咲けるに  
ま白なる野菊手折りてとみこうみ心しめやかに母を慕へり

### 俳句

若葉明るう雨過ぎてゆく山の晝  
花菖蒲朝をきはひて鯉の群  
團扇つかふ音のみに更けて床の暗  
蠶の匂ひこもりて峽の村十戸  
明けて行く堂うそさむし燭のゆれ  
谿に架す長き廊下や夕紅葉

嫩葉子

黒宮教文

をしのびつゝ行に學に一意精進を續けて  
居るものである。それにしても思ひ起す  
もの、眼に日夜浮び来るものは父母の姿  
である。川上川の上流風光清き處、日親上  
人血染の寶塔、清正公槍先の題目の靈蹟  
地寶塔山の拜殿正面に喜びの涙拭ひつゝ  
我が母が報恩感謝の赤誠こめて寄進した  
一尺五寸の大磬子、その銘に曰く、

「豚兒儀、陸軍士官學校在學中胃下垂症  
を患ひ、その後更に肺結核、肋膜炎、  
腹膜炎、脊髄カリエスを患ひ病床に呻  
吟する事三ヶ年その間死に直面する事  
前後九回、時に昭和三年四月八日斷然  
身命を捨て、法華經を信仰し三年跣足  
詣りの大願を立て神佛の加護を乞ひ奉  
りしに一念感應ましませしか大願成就  
の日病魔忽ち退散したるを以つて謝恩  
の爲磬子一個寄進し奉るもの也

昭和六年四月四日 施主小林みつ子

寶塔山主寶藏寺學進代

母は死すとも寶塔山の聲の名の存する  
限り母の愛は永へに世に輝くであらう。

— 完 —



作 品 集

隨 感 運 筆

望 月 海 順

暴支膺懲の聖戰も既に一ヶ年有餘、南京に打ち續く武漢三鎮の陥落に依つて、さしも妄執不屈な蔣政權の運命も、近い將來に精算されようとしてゐる。然し乍ら、彼等は今猶迷夢より醒めないで長期抗日を叫んでゐる。忠勇無双な我が同胞將士は大海

峻嶺を踏破して大陸の中央へと猛進撃をつけ、梅風沐雨、大慈折伏の利劍を振つて破邪顯正の聖戰を繼續してをり、銃後の國民は長期建設の大旗の下に自己の職務に精勵してゐる。過る日清・日露の兩役、引續いて歐州大戰、更に滿洲上海の兩事變を経て、我帝國は國威顯揚・國運隆昌の進展著しく、茲に先般國民政府に代つて建設された中國の新政府を擁護し、擴大し、強化して之と提携し、以て東亞安定の聖的使命を達成せんとしてをり、一方、日・獨・伊三國の防共協定を標軸として世界平和の招來に努力してをり、遂に世界情勢の動向を支配する體勢と實力とを具備しつゝあつて、世界の一大勢は今正に一大轉回せんとしてゐるのである。

かゝる空前のなる重大時局に直面して、吾人は今を去る七百

年の昔、立正安國の護國的信念に住して非常時日本國を救済すべく奮然と立上られた宗祖聖人の英姿を彷彿として追想するものである。その血涙を以て正法流布に殉ぜられた六十一年の御生涯は、今日無言の中に吾等宗團人の奮然歎息を督促してゐるではないか。然るに現今宗團の大勢を觀察するに、かゝる本質的な使命を達成すべき本分をば充分に忘失してをり、目前の小事にのみ神經を奮はれて萎靡卑屈の醜態をば遠慮なく暴露してゐるではないか、四海歸妙の佛國土建設の口には喋々と論じてはゐるが、さて之が實踐運動に至つては何等具體的な體制を整へてはゐらないではないか。

凡そ佛法の流轉は人師の如何に依つて實績上重大な影響を齎らすものである。如何に絶對的な正法であつても夫が靜的存在である限り、動的な人師の活動を無視しては眞價を發揮する事は出来ない。現今の宗團の狀勢は恰も之が實證を物語つてゐるものである。一念三千十界成佛の深遠幽玄の眞理を説く法華經であつても流傳上に適合した人師の缺乏した現狀では、正法の眞髓も實現され難く功力の實効も發揮されがたいのである。現代の宗團は全く人師の缺乏に由來する沈滯性を現出してゐるのである。

されば松野殿御書には「誠に我身貧にして布施すべき實なくば我身命を捨て佛法を得べき、乃至受け難き人身を得て適ま出家せるも、佛法を學し訪法の者を責めずして徒づらに遊戲雜談のみして暮さん者は法師の皮を着たる畜生なり。法師の名を借

りて世を渡り、身を養ふと雖も法師となる義は一つもなし恥ずべし、恐るべし」と仰せられてゐる。此の御文こそ正しく吾々現時の宗國人に對して最も適合した叱咤と鞭撻の御嚴誡である。此の御訓誡を拜讀する時感激の涙と慚愧の情で萬感胸に迫るものがある。

吾等は一度強固な決意を以て出家したからには、身輕法重の信念を以て爲法爲國に殉ずるの氣慨がなければならぬ。

現時に於て國家並に宗教について考察する時、大法西漸の時期の漸く渡來するかの觀があるのである。されば日本の佛法即ち本化別頭の大法は「日は東より出でて西を照す」の天理に順應して、日本國体の王道文化の西征と歩調を合せ、吾等之に指針を與へて、佛教（本化大法）を基調とした文化工作に由る日支の提携を齎らし、敢ては世界平和の確立に依り翹て四海歸妙、佛國土建設の大理想も着々として實現されなければならぬ。

今次事變に於ける聖戰の意義、亞細亞の盟主日本の本質的使命、宗教の重大時局に際しての立場等を考察する時、前述の如く現今は日本國の立正安國を世界に擴すべき秋の到來しつゝある事を確信するものである。即ち日本の立正安國が宇内安定の龜鑑となるものである。

往時宗祖大聖人が蒙古襲來に際して「立正」を叫ばれ日本國救済の警告を發せられたのであるが、その「立正」は取りも直さず世界平和確立への前提としての絶叫であり、世界救済の警

鐘であつたのである。從來動もすれば、神武天皇建國の御理想である八紘一宇の道義統一の主張や、宗祖大聖人の世界安泰の強調の如きをは、唯だ單なる大言壯語の如くに誤解されてゐたのであるが、今や夫等理想の實現が逐次遂行されつゝあるではないか。暴戾なる支那民族も日本國の正義の利劍に依つて漸く迷夢より覺醒しつゝあるではないか。斯様に考察する時、今こそ大和民族が奮然躍起して建國の理想に邁進しなければならぬと同時に、吾等本化門下は宗祖大聖人の念願せられた四海歸妙への實踐運動について慎重に熟慮し、大盤石の信念を以て理想實現に邁進しなければならない時である。

此の時に於て吾等祖山學徒は宿縁深厚の幸あつてか、宗祖の英靈永に存する棲神の御山に三、五の負笈を得られたのである。『青年老易く學成り難し』は先哲が吾等青年學徒に提示せられた千載不易の金言である。吾等は此の一句をば單に教科書の一頁を充す文字なりと解してはならない。夫は吾等學徒の動もすれば生じ易い怠惰性に對する警告である。死守せよ、學徒は自己に與へられた本分を。夫が取りもなほさず國民精神總動員の趣旨にも稱ふものであり、翹て將來宗國の中堅人物たるべき人格的基礎工事をば萬全に達成しえられるものである。

（一三、一一、一五於厚德寮）



# 時局と宗教

永瀧堯憲

高原はもう秋の空氣に包まれてゐる。然し戦争のために山からも一人減り二人減りの寂しさを忍ばれる。津々浦々どんな山間僻地にも「萬歳」の聲はとどろいてゐる。げに悲壯な萬歳である。が我等僧侶は此の時に於てこそ偉大な宗教家となり、もつと時代の趨勢を的確に觀察して正確な認識を得なければならぬ。現代日本の國は人物の養成と共に一般人の知識欠陥を擴充しなければならぬ。即ち啓蒙期が必要なのである。智育偏重と云つてゐるが、必ずしも知識教育をば排斥するには足りない。なるほど軍事的な科學や、工業的な科學、觀念的哲學等を考察して見れば或ひは我國はその點に於て世界各國に比して落ちないかも知れない。——が何故戦争が起るのか？——何故既成宗教は無氣力に保守的に或は退嬰的になつて行くのか？——何故民衆が生活難にあへがねばならぬか？等について正しき認識を持つてゐるものが今我國に果して幾人あるであらうか。げに寂寥たる觀があるではないか。宗廟大聖人の門徒にしても、眞實に大聖人の氣慨、信念を體得して經文、祖書を弘通し得るものが幾人あるであらうか。

現在の宗教界を觀察すれば丁度日本は天保時代あたりに凝すべきものであらう。當時外國の空氣（それは鎖國日本を根抵か

ら啓發させようとする）が、とう／＼として流れて來る中に時の支配階級である幕府の支配能力の没落、これを糊塗しようとする極端なる彈壓、大飢饉に依る民衆の極度なる生活難、大鹽平八郎先生の壯舉、頑迷なる國粹主義的鎖國派、幕府におもねつて尙立身出世をしようとする集團、學界では朱子學派の蘭學に對する、陽明學派に對する、陰に陽に壓迫を加へんとする工策、その時にあたつて、佛教側の態度はどうであつたか？キリシタン宗に對する極端な誹謗、幕府への密告等に意をうばわれて、民衆の精神的、物質的、苦惱を解決せんとする宗教本來の使命をよそに見て、莫大な土地と大伽藍を擁して内々利殖の道に汲々としてゐた佛教——

丁度かうした胎内の中に明治維新は刻一刻と誕生への機會を孕みかけてゐたのである。かうした狀態はそつくり、そのまゝ現在の社會に適用され得るのではなからうか。

明治初年より中期に至る間は我國に對してキリスト教は最も進歩的役割をもち、社會の發展を促進した如く、今後の日蓮宗も宗廟大聖人の該博と意氣と見識とを繼承して社會の進展に盡さなければならぬ。現今に於ける宗教の社會に有する役割は精神文化の根源となつて社會をより以上に理想化する重要な使命を持つものである。社會を隔つた宗教は次第に没落への運命を辿らざるを得ないであらう。宗教が現在の沈滞狀態より立上るには社會の中に根強く食込んで日常生活の基調たらしめなければならぬ。敢へて教團の奮起を念じて息まないものである。

## 吾人は斯く思惟す

啄 人 生

我々は現代宗教に對して率直なる思想をのべたい。如實に見した感想に就て嚴密なる批判は扱ておき現代宗勢が此の如き状態にあるといふ概念を把握して我々は我々の認識圈内に於ける提示を試みやうとするものである。社會的に其の宗教問題を見るに、宗教の指導性を忘失して如何に時代に追隨し若しくは適應せんかの苦慮は、已に周知の事實と言はねばならない。

我々は社會といふ大きな奔流を充分に検討し理性批判を加味して破邪顯正の法を以て指導せねばならない。我々がかゝる使命の下に思惟し活動し、往昔の日蓮を見倣ふて其の生活水準をより意義的に開拓したならば理想とする佛國土の實現は可能なると思ふ。

然るに現今宗教界特に現教團に於ける其の退廢振りは筆舌の範圍外なり。其の綜括的立場にある人物は到底我々の畏敬し渴仰するだけの價值を認めず多くそれ等の人物は敏腕家なる事を代表語とせらるべきもの多數なり。我々は久成の佛を信じ、神の絶對性と普遍性と超人的なる事を認む。然し其の信仰の一片は人間崇拜の現象を免れず、我々は宗教的人物の一舉手一投足は能く其の範ともなすなり。然るに其の價值的人物は曉天の星よりもまれにして求めんとすれども獨居默住、我々は憂惱する

ものなり。一人の潮腕家の登場は下層寺院に於ける弱者の多數を必要せり。優者はかゝる弱者ありて存在する、故に弱者は優者、強者の手段として存在の意義を見出す如き感痛切なり。我々は此所に彼の虚無哲學者ニーチエの思想の一端を見るべきなり青年の眞摯なる叫びも、宗教的乃至學問の懊惱も、純粹宗學の理念の發展も正義の訴訟も皆之文字として、個人として、空氣の音聲電波として、其の結果は空寂に歸するなり。我々の憤思なる愛法護持者の言は正しく一片の煙霧となつて虚空に消滅するのみ。それはかゝる地盤に宗門行政の權威者を非人格的な人を以て在らしむるの誤謬より出發するものなり。我々は此の根本解決をなさずんば如何なる努力も水泡に歸するなり。我々は其の人物の思惟と行動が法の如く教の如く、如々の言行者を希望し、我々の思想と行動との阻害者、中傷者たるべきものを速斷に除外すべきが急務なり。

かゝる行政的教團は弱肉強食なるを以て要たり。中流寺院の經濟的安心觀は伽藍増築、信徒取聚を以て本務となし、毫も宗教的情操の啓發をなさざるなり。新興類似宗教の隆盛は一つは我々に冥醒と刺戟の針なりと言ふべきに、教團人は傳統ある既成宗教を誇耀して、其の發展経路の跡を見ざるなり。かゝる教團人は類似宗教の如何に社會的に布教要素を内包しおるかといふ方法を思考せず徒らに彼等を非難攻撃して得々たるは、又何と無頓着なる單純なる頭腦なる事だらう。如何に新興宗教、はたまた邪教と言ひ、淺薄なる教義といひ一言にて嘲笑的態度を



取るに早急なる蒙昧者と見るべきなり。我々は知性を持つて彼の一長一短を解剖して學ぶだけの雅量欲するものである。

既成宗教が固定化した寺院組織と、教義内容を持つて時代趨勢の馳驅に指導せむとも適應せんとするは努力は實に、去曆昨食よりも無爲なる努力といはねばならない。我々が最も憂へ悲しみ、且つ慨嘆に價する事柄はかゝる時代に無自覺な宗教家の特に中層部に於ける法燈者の認識なり。まして一人者の地位にある無覺醒さは、闇夜炬火なきよりは更に渡りに船なきに、徒らに彼岸を憧憬するに似たり。

教團人は須くかゝる僻見を是正して、教義内容の固定化には新鮮なる時代の洗除をなし。癡せる人格者の淘汰をはかるべきなり。

現代社會は超世本位の思想より、漸時現世本位の傾向なり。唯物思想の實踐的論、化學的世界觀の成立、感情を主體とする文學の化學化、之等は宗教方面に於て神本主義より人本主義と進行せり、彌陀大日の住む念佛思想は疎遠せられ、凡て現世的に、即身的に、人本的に發達を見たるものなり。故に宗教問題に於ても問題は動搖を招き宗教自體の否定か改造か、之等の二點の歸着は或は唯物思想の前者を取る傾向等となりて、疑問視野の擴大は其の範圍は益々廣範に展出してゆけり。又教義内容を學問の進行にもなつて其の研究的態度は顯著にして、異宗教にありても其の最善なる内容は割除して、自己宗教の所説をなし、此の原理は我が教法に説誦しあるなり。彼の教義は盜見

なり等と稱してゐる者こそ、實に哀憐に似し見解なり。アカデミックな研究方法は已に時代の落伍者なり。梵本は漢譯に漢譯和本是更に洋本に、然して各國語譯に其の發達の遅たるは、今幾世紀の遅しを見るものあり。

マホメットに於けるハルクの意義等に於ては現宗團人が眠れる夢中に、衣類の交換にも似し、教義の逆作用を將來するものなり。

釋迦の所説特に法華經にありては至深最高宇宙の理法なり。

此の眞善美なる宗教的權威の教義的内容を持てるは、我々の誇りともなり、又幸福たるなり。文底秘沈の法門は順く廣開、開會して堂々流布すべきなり。何時迄もかゝる言を持つて固執するに非ず、正法流布のためには邪法と戰闘を宣告し正しい信念を持つて勇敢に、徹頭徹尾必勝を期するものなり。かゝる覺醒こそ、言を俟たず自己自覺によつて宜くするを要となすなり。

我々は此所に教團の知性人を見るなり彼等の大半以上が理に走つて事の等閑視するを明かに知見するなり。或る人の如き宗教問題を列記し其の所論實に鮮明にして首肯するなれど、彼の人物の心性を再検討すれば、其の言恰も無利有害なり。稱して二重人格者といふ。其の態度は哲人の如く其の眼光は人を射る如き炯々さを具備すれど、其の人の行動たるや以て問題視するに困難なる感あり。然れば言はざればかゝる批判的な觀察なけれども、言ふが故に其の行動と言語との比較を見て前者の方の遙かに重量なきを見るなり。かゝるバランスなき人は自己の言

によつて自己が救はれ、然して化他時に普遍すること肝要なれど、さにあらず前述の如き傾向なり。かゝる現象は罪人が教誡師を説教するにも似たり。吾々の尊敬する人物はかゝる者に非ず。法華經的情念の下に且夕を思惟活動する人こそ欲すれ吾々は此所に社會的宗教を提示するなり。我々教團人の理想は佛國土の實現、本門戒壇の建立にあり。基督教に於ける神の國の顯現、之等の理想は社會進化的にして其の主旨は慈悲、博愛等の統一的宗教の建立を期とせり。

日蓮の教判釋に於ける根本思想は

- 知レ教（宗教哲理的研究）
- 知レ機（個人應化的研究）
- 知レ時（時代應化的研究）
- 知レ國（國性應化的研究）
- 知レ序（宗教進化的研究）

かゝる知判に於て前四判は后一判に其の意義の總括たるものなり。此の五義に仍つて佛教最高の眞理、末法救済の要法たる壽量品文底の妙法五字を宗教的に建立して三開して三大秘法の内容となすなり。即ち圖解せば

- 本尊—壽量本佛—本果妙
- 三大秘法—題目—耳口意三業の妙行—本因妙
- 戒壇—國家的建立—本國土妙

要するに日蓮の主義は日本國は道義的建國にして正法を擁護し世界の道法的統一をなすべき天業ある國なるを自覺し皇室と人

民と一同に此の法に歸したる時、勅宣に由りて世界統一の本門戒壇を建立して國家を以て直ちに宗教的團結とし以て、宗教に實際の統一力を有せしめ各國家の道法的中心統一を期するものなり。

吾々は此所に教は教權的正教的、思想は統一的中心的、信仰傾向は現實的實行的、教化の方式の折伏的國家的、目的は世界的攝化、中心人格は心理、説法の教主としては佛陀と顯れ、唱導の師としては日蓮と現じ、戒壇建立の願主として賢王と生れかゝる世界的宗教の傳道者たるべき我々は今此所に私利私慾に走る徒輩を速に蹴放し、王佛冥合の理想を實現すべく、自覺奮起を希望するものである。（十三、十一。大泉精舍ニテ）

## 世界と日蓮

村田海仙

「中馬巷に蔽れ骸骨路に充てり、死を招くの輩既に大半を超え之を悲しまざるの族敢て一人も無し。屍を臥せて觀と爲し、尸を並べて橋と作す」とは宗祖御在世當時の有様を説かれた安國論の一説である。之れ正法地に墮ち邪法天下に蔓延せる故に於て、されば三災四劫を離出すること能はず、斯様な穢世を現出するに至るのである。

法と國とは休と影の如しと言ふ。かゝる鎌倉時代に於て人心



に原動力たる宗教や如何に。これを安國論に「或は利劍即是の文を專として西土教主の名を唱へ、或は衆病悉除の願を待みて東方如來の經を誦し、或は病即消滅不老不死の詞を仰いで法華經眞實の妙文を崇め、或は祕密眞言の教に因つて五瓶の水を灑ぎ乃至然りと雖も單肝膽を摧ぐのみにして彌鐘疫に逼る」と破せられる如く諸宗混沌たる邪惡の坩堝の中に但自が醜汚な姿を曝け出して互ひに醜き鬭争を逞しふするのみであつた。善神國を去りて安からず、國は戰亂の巷、天變地天の餌と化したのである。宗祖爲に之の迷網に縛せられたる國家を救済せんとして奮然蹶起し破邪顯正、舌端火を吐いて法華經を弘通せられ日本國を法華經化せんと努力せられたのである。

憶ふに日本國は法華經の國である。宗祖によりて眞に日本國の法華經性の本地が顯發せられ、それが原動力となつて日本乃至月氏漢土一圓浮提を一字とする活動が一層克明となつたのである。宗祖、日本國の法華經性を開顯し非滅の滅を洗足の郷に示されてより茲に星霜轉じて六百有餘年、今や八紘一字、妙法廣布の實現のため東洋平和を擾亂する暴支政府に對して一大鐵槌の全面的積極的而強毒之の大膺懲を加へて居る。即ち日本國の體内に躍動せる大日蓮の息吹きがかくさせたのである。「日蓮によりて日本國の有無はあるべし」之れ宗祖の誇大的言辭に非ずして金言である。故に私は謂ふ「日本國とは日蓮なり」と。斯くて今時事變を鑑へる時「汝（支那）早く信仰の寸心（亦化、英化の偏心）を改めて速に實乗の一善（日本八紘一字の精神）に

皈せよ」との日本より支那政府に與へたる大警鐘である。この警鐘は終には平和の女神の鳴らす樂土建設の梵鐘の音となるのである。この鐘に和を得たる者、滿洲あり、獨逸あり、伊太利あり。日本は世界のリーダーとして、良きタクトを振る者として、絶對の存在である。故に謂ふ「世界とは日本國なり」と。然るに一度視界を轉じて國內の現狀を眺むるに、何ぞ。果して本化同心たる日蓮の二字に包含せられて居るでふか。思想に於て赤化共產あり歐米禮讚あり、無政府主義あり等々國民の思想混亂し、且つ之等危き人心化導の任ある宗教に於て淫祠邪教の勃興は恰も雨後の筍の如く、一旦壞消すと雖ども餘蘊ありて猶強し。又關の東西に於ける水難禍、暴嵐、甚しきは下剋上の風さへも見えるに至る。撰時鈔の「日月に變あり大風と大雨と大火等出來し次には内賊と申して親類より大兵亂起り我方人しぬべき者皆打失ひて後には佗國に攻められて乃至是れ偏に佛法を亡し國を滅す故なり」とは昔の事に非ずして現在の如くにも思はる。茲に於て思ふに歴史は轉じて六百有餘稔を隔つれども世相に於て昔と未だ大差なきを痛感せざるを得ない。然し文化の發展は益々世相を繁雜ならしめ機械の進歩は人をして宗教的思索の餘猶を奪ふ。爲に佛法を亡して國滅せんとす、怖しき哉。

暴支膺懲の矛、武漢三鎮の堅盾を破ると雖も長期抗日の焰未だ息まずして威あり。我國の國民精神總動員は混沌たる思想を統一して唯皇道國體主義のみ巍然たるに至るは欣喜の極みであ

る。茲に於て精神總動員の原動力は大日蓮の息吹の顯揚、即ち日蓮によりて開發せられた日本の法華經を益々發揮せしむるにある。之吾等門徒の大使命である。「日本とは日蓮なり」の信念は其儘吾等の信念としなければならぬ。そして萬民一同に南無妙法蓮華經と唱へしむるこそ眞の總動員であり、世界の軸心たる日本の使命は建設されるのである。ここに於て叫ぶ。八紘一宇正法廣布の理想を有する法華經徒の奮起や今正に是の時なり蹶起せよ！

最後に私は謂ひたい。世界の軸心は日本にあり日本の軸心は日蓮にあり、されば世界とは日蓮なり、之又吾等の信條に非ずして何ぞ！と。

## 落葉斷想

畑 嬌 作

落葉、それは目に見えぬ季節を秋から冬へと誘ふ傳達者だ。落葉には何か言ひ知れぬ淋しきがある。その淋しさに私は愛着を持つ。秋は落葉と俱にある。

静かな秋の夜獨り机にもたれて、忍びよるやうな落葉の風にころがる音を聞く。消えるともなく消え起るともなく起る音。落葉の秋はここにもあると思ふ。

夕映えの空に亭々と聳える山道の銀杏の黄葉、夕陽に輝きな

がら散る落葉。山路に敷きつめた黄金色は黄昏れてあたりが暗くなつても明るい。その明るさ、私はそれに淋しきを感じる。落葉の秋はここにもあると思ふ。

朝霧罩めた山に點綴する紅葉、霧は紅葉の奥深さを教へてくれる。そして落葉には霜がさむ／＼と白い。落葉は眞赤だ。落葉の秋はここにもあると思ふ。

叱られて背戸に出て涙をふいて居た夕方、裏山に散る落葉を如何に寂しく思つたことか。山鳩が啼いて居たつけ。落葉は私の涙より多かつた。落葉の秋はここにもあると思ふ。

庭の落葉を掃いて焚く朝、太陽は霧の中だ。霜にぬれた落葉の煙が白く上る。落葉の秋はここにもあると思ふ。

風に吹かれて路に舞ふ落葉。夜の闇に人の足音とまがふ落葉。空に舞ひ地にころがる落葉。落葉の秋はここにもあると思ふ。

山影路の埋もれた落葉の中に、コホロギが消ぬがに鳴いて居る。私はその寂寥さを好む。コホロギの聲が落葉を寂しく思はせるのか、落葉がコホロギを寂しくするのか、それは知らない。唯落葉に感じた秋の淋しさが一層この時深く感ぜられる。落葉の秋はここにもあると思ふ。

一葉、一葉散る毎に秋の消息を絶つ落葉、然し私の落葉に對する愛着は盡きない。又盡きたくないのである。落葉、落葉。



## 敬神崇祖

齋藤 哲 一

我が國に於ては古來敬神崇祖の念あり。幼兒より之を吹き込んで居るが、敬神崇祖は我が大日本國の一大美風である。否、建國創始の由來は之が根本をなして居る。神武天皇御即位の儀式は即ち之が顯れであつて已降連綿と傳ひ來つて二千六百年、敬崇の道は國民道德の根幹をなして居る。

然し乍らこの事は意識的に行はれて居るのではなく長い歴史が吾れを無意識的に斯くあらしめるのであつて行動の一行が之に妥當するのである。日本國民性の良さはこの如く不知々々に行はれて居る最高道德にある。之の敬神崇祖の念こそ上下の心を團結さす基をなすものであるので今次事變に於て精神總動員の強調にともなひ殊に鼓吹されて居るのである。

では神とは祖とは何ぞや。神とは言ふ迄もなく建國の昔日本の基礎を作られ給ふた、天照大神、神武天皇等より代々の天皇に到る皆神である。今上陛下は現神であらせられる。祖とは吾等血縁の祖を言ふので、各自の父母の父母、即ち遠く溯つて尋ねれば建國聖業の昔神々に御遣ひ申したその一人が先祖である。然してこの神天地と共に窮りなく金匱無缺皇統連綿として萬世に垂れ給ふ。そして之におつかひ申す民は又萬世不易の民である。各自は祖先の遺業を繼ぎ且子系の範となり祖先の遺業を子

孫に繼がせるべき任がある。

敬崇とは、朝廷に於いては各祭日には神前に御供物を捧げて天皇には御親拜遊ばさる。又國家の爲の犠牲者、戦死者等に對しては靖國神社等に於て 天皇御親拜遊ばれる。上の行ふ所下之に習ふ。上下舉つて敬神の顯れは隨所に見られる。又祖を崇ふに於て好相珍物があれば必ず之を捧げ、事あれば之を奉告する等それである。禮記内則の「不善ヲ爲サント思ヘバ父母ニ差辱ヲ殘サント思ヒ果サズ」と、この精神こそ崇祖である。然して思ふ。神と祖とは冥合一體のものであれば神祖につかふるの道は唯真心、まことの心を以つて生者につかふるが如くするにある。神は誠を尊ぶ。神の意に叶ふものこそ眞に人道を濶歩する者である。然して現神の天皇と吾等臣民との關係や如何。皇室と臣民とは本家と分家親と子の關係なるや言を俟たない「義は君臣にして情は父子」である。故に代々の聖天子は我等を子の如く愛し仁しました。仁徳天皇の「高き屋に昇りて云云」の御製、明治天皇の

罪し有らば我をとかめよ天つ神

民は我身の生みし子なれば

の御製等歴代の御仁慈には拜聞して唯々感泣するのみである。此の様に民をみそなほす大御心何で之に御答へ申さずにをれよう。この氣持あればこそ戦の場に「天皇陛下萬歲」を唱へて莞爾として死に就くのでこれ敬神崇祖の最高の顯れである。

然して吾が宗祖に於て如何。宗祖程敬崇の念篤き聖者がに他

あらふか。佛教は報恩を説く教へである。況んや法華經の行者日蓮に敬神崇祖の念なくて何ぞ！立教開宗せんとして先づ伊勢大廟に参詣し、弘教に先きだちて母父を教化す。宗祖の孝は既に周知の處であり、國家鎮曉は國體を明らかにし神武聖業の精神に還さんとせられたのであり、又大曼荼羅の國神勸請は宗祖の敬神崇祖の最高の顯れである。

要するに敬神崇祖とは神祖に對する報恩感謝の念の顯露したものであると思ふ。故に常に報恩謝德の念を以てしなければ眞の敬神崇祖ではないと信ずるものである。(4) (完)

## 縁陰の下(蛇)

東 菫 生

「ガサ／＼ツ」心よく繁茂した叢を何かが渡る音がしたと思ふと、一尺程の蛇が濕つた路に走り出た。頭が馬鹿に大きく眼はラン／＼として、酒点童子の眼に稻妻を注いだ様な蛇だった。その蛇が私を追つて来る。私はゾツとして足が竦み息が詰り走れぬのを無理に道を馳驅つた。蛇は追つて来る。今にも大きな口が私の頭に噛み付きさうな氣がして恐怖しかつた。

不思議だ。蛇が大きくなるのである。三尺程になり五尺程になり終には一丈程になつて迫つて来る。二本の眞赤な毒舌がメラ／＼と火を吐いて物凄い。冷汗が出て恐怖の念は益々募る。

私は山を越した。野を越えた。川を渡つた。が蛇は追つて来る。まるで成道寺の旅僧安珍を追ふ蛇の如き執着さ。私は有らん限り疾驅した。と途は眞青である。一條の青い路が果し無く續く。走る。涯へ出る。下は怒濤岩を喰む荒海で、怪魚が牙を鳴らして水面を走つて居る。青い路は行詰つて涯上で没する。私はアツと思ふ間無く疾驅の餘力で足が空を飛び涯を離れて荒海がめけて轉落した……。

尻から魂を抜かれる様な氣がしてハツと我に返つた。夢である。私は夢を見て居たのである。氣が付くと体は冷汗でびつしよりと濡れて居る。

馨しい萌出た若草の香が心よく寢醒めの鼻を衝く。樹梢の嫩葉を漏れる陽射しがまぶしい程強い初夏である。樹の彼方に碧いコバルト色の海が和やかな微笑を覗かして居る。

私は午后、雜誌を讀む爲に此の林に來たのであつた。此の草の上で寢臥しつつ讀書して居たが何時しかうつ／＼と眠りの女神に誘はれたのである。女神は私を戯弄して恐しい蛇に私を追はしめたのである。何處かで女神が美しい嬌を作つて大笑して居る様な氣がする。深閑とした林の中、青草に綠樹を漏れて来る光が陰を印して居る。檐の綠葉が眩しく陽に映えて初夏の太空中突進して居る。揺らぐ青葉の上を悠々と白雲が往く。何處かの梢で笛の強調の様な鳥の聲が聞こえて来る。四圍が靜寂だけに良く透る。靜かに瞳を冥じて居ると森林の中に居る様な感



がする。林の奥に潜んで鳩の含み聲がホロ／＼と聞えて来る。初夏の林は静かである。

私は大きく胸を張つて林のフレッシュな大氣を吸入して歸途に着いた。歸途私は今年初めての蛇に遭つた。夢を見ただけにギョットして眼を見張つたが蛇は直ちに叢に吸はれる如く隠れて、私を追つては來なかつた。多分女神が私を可愛想に思つて蛇に追はせなかつたのだらう……。(4)——十一、五、末——

# 非常時に於ける吾等青年宗教家の覺悟

江口啓淳

今や支那事變も忠烈なる皇軍正義の膺懲に南京陥落を第一段階とし、除州占領を第二段階として舊冬早くも「中國臨時政府」の生誕を見、今春更に「維新政府」の設立等、蔣一派存続の影は愈々薄い、其れにも拘はらず尙虚勢を張つて長期抗日を豪語しつつある彼は、實に愚なる哀むべき存在である。

彼の赤魔の冷酷な鐵の桎梏の下に悲惨な喘ぎを續けて居る蒙昧なる支那四億民衆の爲、ひいては東洋永遠樂土建設の爲に、幾多の苦難を侵して聖戰を續け行く我が忠勇なる將兵を憶ふ時吾等青年宗教家は何を爲すべきか。聖戰に傷つきし將兵の慰問壯烈華と散りし極天護皇基りし英靈の追弔供養等、それも良からう。然し吾等本化門下にはそれ以上に重大なる使命がある！。

今次事變は單に支那一國のみに關係するのではない。東亞一角での銃聲は全世界へと波紋を振動する。且つ長期抗戰に入つた今日、吾等は一大信念と覺悟とを以て之に當り立正精神の高揚に邁進しなければならぬ。立正精神とは日本國と法華經との冥合である。思ふに日本精神とは黑白明克にし慈光賓土に遍ねからざるなき太陽の德輝である。その由來する所、皇宗神武建國の昔、

上則答三乾靈授國之德一、下則弘三皇孫養正之心一、然後兼三六合以開都一、掩三八紘一而爲宇不三亦可一乎

の御詔に肇まる維神の道である。之を明治天皇は國のため仇なすあたはくたくとも

いつくしむべきことな忘れそ

と仰せられた。これを具體的に示すものは實に鏡玉劍の三種の神器である。之即ち智仁勇の三德の表象である。然し乍ら一太陽に具する本有の三德である。旭日一度東天に出るや乾坤忽ち明らかに總べては育つ。その闇黒を照破する「破闇の力」は劍となり、總べてを照す「遍照の益」は鏡に顯はれ、總べてを育ぐみ惠る「生育の德」は玉と結晶する。この太陽は單に日本のみならず世界を隈く照す太陽である。

安房に降誕せられ、忍難事勝の生涯を破邪顯正、立正安國をモットーとし國難來の皇國の爲に敢然立つた日蓮聖人は正義の爲には何物をも恐れず、執權獨り實力を振へる鎌倉幕府當時に於て執權義時に對して、その大義名分より神嚴なる筆誅を加へ

る等日本精神をいかに發揮して居る。宗祖弘教の生涯は又如來の智（空座）仁（慈悲）勇（忍辱）の顯である。即ち「太陽の子」たるを自負し理想とせられたのである。八絃一字一六合一都の日本精神は久遠悠久の昔より盡未來際に至るまで赫々たる太陽となつて全世界に君臨する。然かもこの太陽の三徳を強く自己の信念とし宗教とし日本精神に生きられたのが日蓮上人なのだ。

斯かる偉大なる宗祖を戴く吾等は宗祖の信念を吾が信念とし宗祖の氣魄を取つて以つて吾が氣魄とし本門の題目、本尊、戒壇の三大祕法を以て一天四海闊浮同歸の大願業に邁進しなければならぬ。

我等はこの事變を契機として、渺くとも日本皇國の大使命たる「八絃一字、六合一都」の大理想を全世界に將來する前提として先づ東亞の天地を寂光土化する廣大無邊なる神意の發動なりと信解する。經曰「今正是時」と。さうだ正しく今だ。皇佛冥合、闊浮提内廣令流布の時は實に今だ。この實際化こそ現代青年宗教家に架せられたる一大使命なのだ。

その使命達成の爲には「我れ日本の柱、眼目、大船とならん」の大願を奮ひ起し、併せて忍難事勝の聖人の「立正精神」を体得發揚する時、東亞否、世界全人類永久の平和の光が輝き渡るであらう。（三）

（完）

## 雨の夜更け

磯邊 涉

雨は強く降り出した。晝迄は蒸暑い曇天だったが夕方豆腐屋のラツバが町に響いて夕餉の支度に取りかゝる頃から、降り出した雨はもう本降りとなつて、風も加はつた。前の檐が大搖れに搖れ初めた。トタン屋根を打つ雨音は強く、雨水が電灯に光つて屋根から駆け落ちる音も騒々しい。窓の隙間漏る雨風！それも不氣味である。私は虫の性か今晚に限つて強く泣き喚く二つの妹を背負つて玄關を出た。子守の爲である。父母は止めたが泣き喚く妹を見ては黙しては居られぬ。表は篠突く雨で、兩足が白く地に躍る。空は雨が風に霧の様に吹き飛ばされて居る。私は着物を上げ、飛ばされさうな傘を手流れ行く泥水をビシヤビシヤと歩いた。妹はすぐに泣き止んだ。

暗い街燈の下を行くと海へ出る。眞黒な魔物とも思はれる波浪の打寄せも物凄く海は猛り狂ふ。傘も吹飛ばさん程の風に獅噛付く様にして泥濘道をさけ歩き乍ら、妹が濡れはせんかと氣遣つた。遠く闇黒色の海の彼方の明滅の灯は燈台か漁火か。墨を流した沖は灯の他何一つなく自然の荒れる儘である。時折トドツと打ち揚げる怒濤。私は急いで町の通りへと向つた。追ひ立てる様な怒濤と雨と風である。

街燈の薄暗い途を行くとホテルへ出る。灯とネオンの光が闇



を漂ふてかすかに道を明るうする。何時かのジャズの音が嵐の底から聞えて来る。ホテル街へ出ると女給風の女が一人前を歩いて居る。蛇ノ目傘が貴かにネオンに映る。雨は横殴りに物凄い程である。鐵筋作りの十数の不夜城も物音一つしないで、雨中に建つて居るのが實に物寂しい。こんな夜は客が無いらしい。星降る夜の盛況に對して何と云ふ悲惨さだろう。風雨の厳しさはホテルへの暴客の如く又家の塵埃を洗滌に來た掃除人夫の如くにも見える。私はネオンの灯を浴びつつ足に降りかゝる雨の冷たい觸感を享けて其處を通りぬけ大通りに出た。自動車のヘッドライトが濡れたアスハルトに映して音もなく過ぎて行く。店のガラス窓が暗く光る。街燈や家を漏る灯がアスハルトに寂しい影を落して居る。ポプラの街路樹が颯々揺れる。激しかった風雨は小止みとなつた。電車が響々と重たさうにしきんと通ると雨の夜は一入靜かになる。

私は妹を寝かす爲に子守唄を唱つた。妹は聲一つ出さずに背に居て寝さうもなかつたがやがて寝入る氣配がした。子守唄を唱つて居る内に私も何か寂寥な氣持になつて、自分も幼ない時母の腕に抱かれて子守唄を聞いた事もあるんだと思つた。歌の中には父母の無量の愛と、苦勞を忍んだ父母の血が解け込んで居るのである。懐しい歌だ。人として子守唄に心打たれるは當然である。私も今は歸省して父母の慈愛深き腕に懷かれては居るが、初めて父母と訣別して他郷に行つた時の氣持はそして月光皎々とした夜異郷に聞いた子守唄はどんなだつたらう。私は

自分の歌つた歌が深く胸に食ひ込んで來て父母の鴻恩に感泣し噎んだ。

餘り遅くなると父母が心配すると思つて、歸途についた時は小降りになつて細い絹糸の雨が晴れかかつた中空から落ちて居た。妹の寢息が靜かに聞えて来る、可愛いものだ。

暗い家で塀の上にザクロの花が灯にほんのりと顔を浮べて揺れて居る。「ジジ」と眞暗な闇夜の何處からか蟬の聲が聞えて来る。自分の泥道を歩く音が妙に寂しくビシャ／＼と闇に響く……(3)

——九月十日——

## 沼を想ふ記

小林 是 淳

その沼には童子の夢が潜んでゐた。青い沼の水は時々白雲を沈めて深々と澄すで見えた。雨が滲みついた薄黒い切株にはヌルヌルと苔が生えて、山藤の蔓には青いトンボが靜かに止つてゐたりした。私達は放課を待つては沼の畔に集つた。

蜻蛉や蛙を追ひ廻して、ひねもすを暮れ暮す楽しさ……だが小さい暴君の一團は毎日のやうに仲間割れがしてそして一方の大將が忠雄君である時、他の一方は決つて僕で、小さいなりに殺氣立つた喧嘩隊は沼をはさんで對峙した。

弱蟲！ バカヤロ……こんな應酬にいゝ加減倦怠を覺える頃

## 身延の鐘に想ふ

黒澤龍正

沼の面は煙のやうに濃んで來て暴君達は日暮れに氣付く。もうその頃は青い融蜂の影も消えて、足許でなびくほへけたツバナの穂が白々と夕闇の底に浮いてゐるだけ……。

早くかへろ、蝮蛇の眼が光るよ

誰かが唄ふやうに呟鳴ると、みんな一聲にワイ／＼と逃げ出す程夕暮の沼は無氣味で醜怪で子供の私達には恐しかった。然し私達は同志を集めては夕暮も忘れて沼畔に悦樂の毎日を送つたのだつた。

高等小學校へ入學すると家が轉居して新しいグループが私の周圍をとりまき、彼等との交渉が遠くなると、私の記憶からも何時しか薄れ去つた沼や人だつた。

そして幾年かの或る晩夏、河原へつづく薄暮の小路で私は陸しさに自轉車で行く二人の中學生に遭遇した。軽い驚きに聊か狼狽してしまつたのである。見違へる程スマートに成人して男を上げた一人は忠雄君だつた。彼は私を忘れたのかベタルを踏んで去つてしまつた、が私はふと彼と對峙したツバナ咲く青い沼を想起した。晩夏の空に湧く入道雲を見て私は沼を畫いた。久しく忘れられた沼、過去の童子の夢を包んだ晩夏の沼。暴君の顔。無性に沼を想ふ心は暴君彼等への憧れかも知れない。春秋の隔りは私と暴君達とを引き離してしまつたけれど、沼を想ふ幼時の追憶は不思議に離れた暴君を懐しい雰圍氣の中に溶け込ませてくれる。私は沼を想ふ。そして幼時の追憶にひたる。

(一)

吾々は笈を延嶽に背負つて已來常に永遠に鳴り響く梵鐘の音を聴く。宗祖棲神の靈山をして、より以上に靈格たらしめるものはあの梵鐘の音である。恰度それは祖師弘傳の正法が末法濁惡の世相を打破せずんば鳴り止まぬが如く鳴り渡るのである。靈山身延に居住する者は勿論日々に參詣する老若男女をして、より以上に法悦慈愛の泉を涌かせしめ、澆季混濁の世に處する力強き羅針を與へしめんとして鳴り渡るのである。

大自來の活動が開始されんとして東天杳かに白み鷄聲黎明を告げんとする時、清冽な晨の大氣を打破つて韻々と鳴り響く鐘の音、吾等は之によりて覺醒し鼓撫されて自己特有の戰場に向つて勇ましい活動を開始するのである。若しも吾々が一朝でもあの朝空に響く鐘の音を耳にしなかつたなら、如何なる寂漠さと空虚さを痛感する事だらうか。

野に出て働く農夫の背にサン／＼と慈愛の光りを注いだ太陽も、秋空に眞紅なる光線を残して西山に没すると早や物寂しい木枯に似た夕風が山野を馳け廻る。秋！澄透つた秋の玲瓏さを増した夜空に望郷の懷を物かなしい雁の鳴く音に托した時、弧を畫いて山野にひびき渡る靈境の梵鐘、其處には拘めども盡きざる詩の泉もコン／＼と沸いて來るのである。



晨には生活向上への精進を促がし夕べには其の日の疲勞を慰すべく詩の仙境に遊ばし夜は悲母の子守歌をなすもの、それは延嶽に永劫に鳴り響いて止まぬ梵鐘の音である。永劫の音、それは久遠の生命である。吾々負笈の徒、この梵鐘の音を搖籃として朝には獅子王の勇猛心を起して行學二道の達成に力め夕には靜寂不動の安心を觀じ以て久遠の生命を自覺し正法弘通末法濁惡の闇を開拓せねばならぬ。

弧を描いて鳴り渡る鐘の音の韻、その韻の一つ一つを吾々の手によりて建築傳播しやうではないか。(3)

# 事變に際して日持上人を思ふ

阿部東洋

永仁三年一月、日持上人四海歸妙の聖教廣布の爲に單身蝦夷を發て滿洲蒙古の地に留錫し給ひてより茲に六百五十有餘年、此の支那事變に對して吾徒は日持上人に何を學ぶべきでせうか。それは宗祖上人の

「日は東より出でて西を照す、佛法も亦かくの如し。佛法必ず東土より出づべきなり」

をこの事變を契機として實現し、法華經精神による親日東洋平和の基礎を建設す重任ある吾等は、切に持師の信念と意氣と其の勇猛心とを學ぶべきであります。

佛教では因縁の稀濃が重大なる役割を示めして居るが、古來日支間は地勢上、民族上、文化上、殊に佛教に於て因縁淺からざる宿縁の間柄であります。茲に於て正義に惑ふ曖昧なる支那を救済することこそ吾等法華經の行者のとるべき急務では無いでせうか。日支の確乎なる握手提携こそ眞にアジア平和の確保される時であると信ずる者であります。

今や聖戰一年有餘、抗日の主都陷ち武器糧食の咽喉たる南支止めを刺され第二の都武漢正に浮藻草の如き存在となつて居ります。然るに蔣政權未だ惡夢破れず英ソに媚び抗日を叫び長期抗戰を夢見て居ります。之れ日本國民の熱し易く冷め易い短所を突いた予であります。之れに對して我國の日本精神發揚、即ち精神總動員は盾でありますが要するに思想戰の對峙であります。

思ふにこの聖戰は日本精神の發露であり「毒氣深入」の支那をして毒手より救はんとする良醫の破邪顯正のメスであり、法華經精神の顯れであります。日本は正法の國、正氣の國、正信の國であり、之を彼等の胸奥植え付けるのは吾等に與へられた天與の任務であります。

今後に来るべき文化工作に於て、思想對策に於て眞に日本主義を高揚し支那否東洋平和を遂げる者、吾等日蓮宗徒は日持上人大陸順化の大勇猛心を奮起して思想善導以つて四海歸妙の實現に努力邁進しようではありませんか。(2)

## 目 白

近 藤 義 見

勉強に疲れて窓を開けると、ほてつた顔に夕風が涼しい。夕陽を受けた山の樹々が一層新緑を装つて芳しい匂ひが鼻に来る。机にもたれ乍ら新緑の夕映えする景色に見取れて居ると、目白の鳴く聲が聞へて來た。耳を澄ますと二三羽居るらしい。私は暫くその鳴き聲に聞きとれて居た。

私は幼少の頃より目白に可成りの親しみを持つて來た。未だ小學校に通つて居た時分、秋から冬に掛けての目白捕りは楽しい日課の一つだつた。又捕らへた目白は毎朝餌をやつたり、水をやつたりして随分苦勞して馴らしたものだ。春になつて良い聲で高音を張る様になると、日當りの良い縁側の軒場に籠を掛けては、その聲に桃源境を想像し、又山に持つて行つて草原に寝ころんでは、その聲を聞いて往く雲に思ひを托したりして楽しんだものだつた。目白。私の幼時の思ひ出には無くてはならぬものだつた。

可憐に目白に親しみを持つて居た私が今、この延山で其の懐しい鳴き聲を聞いたのだ。思ひは幼少の故郷へと飛ぶ。

今靜かに目を閉じると、故郷の有様が繪巻物の如く現れて來る。家の裏山に登つて新緑に包まれた村を眺め、將來偉くなつて村の爲に努力しようと思つたこと。そして其の中に現れて來

る野、山、川、それは戦ごつこに、鯉釣りに、幼き頃駆け廻り且つ惡戯した所だ。遊びあかして夕闇を歸つて來ると母が門口で待つて居たりした。噫、母！故郷の懐かしさは又戀しさに變る。戀しさを増すとなぜか自然に淋しくなつて來るのだ。故郷を懷ふ心は懐しいだけに淋しい。

我に返つて外を見るともう夕陽は窮つて、薄い夕靄が樹々を包んで居た。目白の聲は聞えなかつた。私は夕靄のやうな淋しさをどうする事も出来なかつた。(2)

## 日 記

丘 龍 芳

二月三日(木) 晴 零下五度

冷たい朝風が身を切る様だ。おゝ寒い。戸外を見ると雀が二三羽寒さうな顔をして枯木にふくれたまゝ動かふともしない。今朝は霧が深かつた。寺平もあの墓場も霧に包まれて氷のやうに冷たく感じた。今朝は監督様のお出掛けで特に多忙だ。九時、元氣なお顔でお出掛けになつた。用を済まして統學寮へ行つた。寮生一同机の前で小さく蹲つて居た。霧は大分霽れて朝日が室に明るい。屋根をつたひ落つる霧だけの雫が白く光る。庭の霜柱の解ける音が親しい。寮生と雑談して居ると、突然M役員様かとんで來て



「T君、甲府が火事でA家が焼けたぞ!」

「えッAが焼けたんですか」

と吃驚したT君の聲、皆の眼は役員様とT君の驚き顔とを交々注目した。その時役員様は僕を呼ばれた。僕はどきッとした。

「岡山のBさんの家が類焼したとの電話だ。御見舞電報を打つやう」

と云はれた。僕は餘りの事に敵きのめされた様に愕然とした。

Bさんは僕の親戚だ。

「Aが焼たなら僕は行かなければならない」

T君は呆然と叫んで事務所へ走つて行つた。僕も電報を打つたが胸の鼓動は治まらなかつた。火事! いかなる人力人智を以つても自然に打ち捷つ事は出来ない。何處かで悪魔の巨手が人の幸を搔亂して居るやうな怖れを感じてならなかつた。今日は一日中、火事の悍から離れられなかつた。夕方寺平の焚火が夕闇の中に眞赫な焰を掲げて居るのに恐怖を感じた。夜、床に就いたがこの寒空に焼け出されたB家族を思ふと寝つかれなかつた。(2)

## 鼠

宮崎泰賢

「ガタ／＼ゴッ／＼」晝眞だと言ふのに戸棚の中で微かな音

がする。「ははあ、チユウ公だな」と思つて「こらッ」と呷鳴るとびたりと運動を中止する。暫くすると亦ガタ／＼初め出す呷鳴る。止める。こんな事を二三回繰り返す。

一心に試験勉強をして居る身には、この木を喰るやうな微かな音さへも大きく耳にこたへて癢に障る。つと立つて戸棚の戸をガラリと開ける。今迄の音がばつたり止む。「捜し出さずに置くものか」と皿を除けたり壺をのけたり、だが天に昇つたか地に潜んだか、その影すら見あたらず。「まさか魔術を知つてゐるわけでもあるまい。何處にか潜んで居る筈だ」と念入りに隅から隅まで掻き廻す。チユウ公たまらず飛出す。

「そら逃げた」と追ひ廻すと障子の間に逃避行だ。アースを撒けたり、棒でつついたり、チユウ公居たまらず敷居を傳うて豆電車のように走り出す。「ソレツ亦逃げた今度は逃すな」と向ふに居る人にも頼んで狭打ちにすると、チユウ公め、得意の輕業で柱を駆け上り鴨居を傳つて逃げて仕舞ふ。噫、残念な事をした。腕が泣ッ面をする。

併し鼠は「命拾ひした」と天井の巢で安堵の胸をなで下して居るだらう。さう思つて天井を眺める。とチユウ公めさつき逃げ込んだ穴から澄まし込んだ、よそ行きの顔を覗かせる。

「こいつ、一筋縄ではいかぬ奴だ」僕はそう思つて残念だが鼠退治を諦めた。(1)

## うれしかった事

K ・ K 生

今思ひ出すと大正十二年九月一日の關東大震災の時だつた。

雨上りの其の日父は市役所に出勤して居て家には母と六才の私と弟で晝飯の最中に地鳴りがしてあの悲慘が起つたのだ。すわと母と一所に玄關から飛び出した通りには前の二階屋根の瓦が落ち、あちこちの家から血相を變へた人々が飛び出して來た。私は母にすがつて裏の竹藪の中へ避難した事を憶えてゐる。

少しして火災が起つた。眞黒な煙が全市を包んでメラ／＼と火焔が立ち上つて來た。逃げ惑ふ群が通りを右往左往して海邊へと疾驅する。風呂敷包をかかへた者、行李を背にした者、皆顔色を變へて居た。火は山へ移つた。バチ／＼と物凄い音を立て、紅蓮の焔が天を衝く。私は母にすがつて「父ちゃんは／＼」と泣き乍ら叫んだ。

「もうすぐ歸つて來るよ」と言つた母の顔も不安な泣き出しさうな顔だつた。「お母ちゃん／＼」泣き叫ぶ子供の聲が混雜した騒然たる物音に交つて其處此處に起つた。私は氣狂ひの様に泣きわめいて父母を呼んで居る迷子を見て、一層悲しくなつて母に父を訴へるのだつた。

其の内に火は間近に迫つた。炎々とした黒煙は天を焦し、火焔はさながら地獄の様だつた。父は未だ來ない。火は近い。泣

き叫ぶ子供の聲がする。

私達は又避難所を海岸の原に見出して其處に移つた。單笥、長持、行李、雜多な物が亂雜に積み重なつて居る。其處へも火の粉は落ちて來た。私は又父を呼び叫んだ……。

間もなく父が歸つて來た。私は飛び付いて父にすがつた。父が歸つて來たんだ、父が。其の時の氣持、私は其の時程嬉しかつた時は無かつた。

母も安心したろう。あの震災で父を無くした者も多くあらう。母を失つた者もあらう。私はそれ等の話を聞く毎に當時の事が思ひ出されて目頭の熱くなる程の嬉しさを痛感する。(1)

## 鳥の聲

原田 鉄雄

朝の勤めを済せホット一息ついた私は机に寄掛つてゐた。昨日の疲れもすつかり消えて身体が爽かである。庭の青葉が春の麗暖い光と共に私の目を射る。そして耳に聞えるのは澄切つた小鳥の歌とお喋りとのコーラスである。

机に寄掛つたまゝ、耳を澄せてその聲をきく。我と我耳に恍惚とした風で鶯が聲を轉がす様に鳴いてゐる。頬白らしい奴がひとり事を言つてゐる。雀の慍やいだ喋り合ひ、四十雀の内細話どれも親しい聲ばかりだ。が……その中にオヤと思つて耳をかた



落 葉

山 本 榮 淳

向ける。聞き馴れない聲が時々交つてゐる。

もう庭の一つ／＼が朗かな輝しい朝の日光を一ぱい浴びて躍動して見える。小鳥たちは一層てんでに夢中になつて歌つたり喋べつたりしてゐる。

私はドイツトそれを聞き入つてゐる。

私は、あの小鳥たちの言葉が解る様になりたいと思ふ心持が湧いて来る。そして身輕に庭へ飛び出して私の言葉で小鳥たちに交つて話しかけたい心持になつてくる。

掴む事の出来ないものに引つけられる様になつて私は机から離れて小鳥たちの鳴いてゐる庭に出て見る。

私の姿が恐しい背嚙のジャイアント（巨人）が不意と、のつそり其處に現れた様に見へたのであらう。賑かなコーラスが、ばたりと止む。

おゝ……若し私が此處で聲を出したら、あの小さい者たちは野獸が吠えるその如くに驚き脅えるだらう。

私は一寸あてがはづれて再び部屋に入り机に向ふ。すこしすると今逃げて行つた小鳥たちであらう。少し離れた處ですぐ賑やかなコーラスを始める。ふと私は小鳥たちに相手にされない自分がおかしくなる。小鳥たちの聲はおらが朝を歌ひたてゝ止まない。

(1)

「カサリ、カサリ」

何の音だらうか？ 枝から寂しく地上に散つて行く落葉の音だ。物想ひに沈む秋の夕べに……。窓邊に佇んで庭を眺むれば、それは餘りにも寂しい秋の景色であり、あまりにも私に哀れさを訴へる秋である。限りなく澄んだあの大空も、これからはどんよりとした雪空になつてしまふのだ。大空に輝く星は變りなく光つて居るけれども、戸をたゞく風に散る木の葉は此の去りゆく秋を嘆くが如く私の耳に聞へて来る。こうして佇んでゐると何時の間にか郷里の思ひ出が湧き上つて来る。

あゝ、もう田舎は一面落葉が散り敷いてゐるであらう。秋の學校生活、それは田舎に生れた者のみが味ふものであらう。

日曜に紅葉した山へブドウ獲りに行つた時は楽しかつた。併し二度とそれもやつて来ない。學校から歸つて来ると皆んなで落葉拾ひに行つたり、枯れ果てた野に戦争ごつこに行つたり、親しい友人と共に紅葉した野に私達將來に就いて考へたり……そうした事が落葉を眺めてゐる私の目に幻の様に浮き上つて来る。舞ひ落ちる落葉。深い思ひに沈ませる落葉。落葉。善人は勿論の事、惡人迄も「カサリ／＼」と散る落葉の音を聞く時は純潔な心の持主となる事と私は信ずる。

(1)

# 校 友 會 々 報

愚かなる蒋介石は容共抗日の毒を吐いて自國の民草を枯らした。東洋民族を救ふ爲に我が忠勇なる將兵は十字火となつて進撃した。そこに前代未聞の支那事變が展開された。世界の眼は集まつた。皇軍の連戦連勝と敗戦蔣軍のばか面をみよ。一年有半の戦果は北中大陸の掃蕩とその宣撫である。

我が祖山學院校友諸師もすでに聖戰に参加し、宣撫に進出せられて爲法爲國不惜身命の金文を色讀してゐる。こゝにその芳名をつらね感謝の意を表する。

## 出 征 (イロハ順)

岩 田 堯 親	石 黒 湛 全
井 上 昭	林 是 幹
半 田 清	堀 内 義 光
小 川 龍 聰	加 藤 鍊 明
掛 橋 泰 壽	勝 部 亮 蓮
田 邊 正 知	高 木 鍊 精
中 里 是 要	片 岡 光 乘
武 内 觀 良	中 谷 堯 順
大 橋 潮 育	松 下 圓 信
前 花 鍊 章	古 屋 是 開

校 友 會 々 報

## 宣 撫 班

櫻 榮 鍊 靜	重 盛 快 哲
望 月 本 修	鈴 木 智 久
小 崎 龍 雄	田 丸 泰 宣
宇 佐 美 鍊 昌	草 ヶ 谷 宣 慶
結 城 瑞 光	

此に出征會員の武運長久を祈ると共に宣撫員として活躍せる會員の法運無盡を祈る次第である。尙昨秋赤紫部隊從軍布教師として勇名を轟かせた灘上惠教君は戦線に負傷して長く大阪陸軍病院に加療中であつたが略々全快して目下加藤、林、岩田三君應召後の母校の軍事教練を一手に引き受け、同時に厚徳寮副舎監として勤務して居られる。其の外の會員中にも川口智隨君が宗務役員として就任せる外或は信行道場に入りて將來活躍の第一步を踏み出せるあり、遠壽院の行堂に滅罪の苦行を積みつゝある諸君あり、各地の化境を守りつゝ鉢後の固めに盡力せられつゝあるの狀は慶びに堪えない。只其の中に先輩麻生是忍(日暗)師が今春忽然遷化せられた事は一抹の寂しさを覺ゆる次第である。

本年は校友會報を發行の豫定であつたが校友の動靜も判明せざる上に岩田、林兩幹事の續いての應召で頓挫してしまつた。來年度を期して各支部及一般會員諸君の通信を希望しつゝ、擲筆する。

(武田)



# 同窓會々報

昭和十三年度同窓會役員左の如し

會長	院長	望月日謙現下
副會長	敦頭	遠藤是妙先生
庶務部	部長	鹽田義遜先生
	幹事	下邨顯淨君
會計部	部長	中條是明先生
	幹事	田村啓孝君
辯論部	部長	松木本興先生
	幹事	清水文要君
文學部	部長	今村是龍先生
	幹事	熊谷海善君
	助手	米澤是忠君
運動部	部長	灘上惠教先生
	幹事	竹谷榮靜君

購買部

部長	福島義孝先生
幹事	香川英頂君
助手	上田玄忠君

(文學部助手米澤君入營後は帶金一義君が該部助手を引繼ぐ)

## 幹事の辭……

本年度同窓會の人的運用機關は、如上のメンバーを以て決定せられた。

直接、會務執行の大任を佩びた吾等幹事一同は、孰れも若輩未熟の者で到底その器ではないが、一度選ばれて退く事は男兒の本懐に非ずとの自覺の下に、目前に横たはる幾多の難局を豫期し乍らも、正義に燃えたつ愛校心の熱情に斷じて躊躇する事を許さず、茲に吾等は「異體同心なれば萬事を成す」の祖訓を奉戴して會務遂行の原則となし、如何なる迫害艱難にも忍従して所信を貫徹すべく、強固な決意を固めたのであつた。

凡ゆる犠牲を甘受して會務に殉ずる悲壯な覺悟は既に決してゐる所であるが、萬全なる會務の遂行は吾等凡身の容易に實現し難い處であつて、過分の大任とは識りながらも、誠意の一念に酬らるる三寶の感應を仰いで、大過なく一ヶ年の重責を完しえらるべく誓願に發して忍苦の壯途に上つた。

爾來會務は着々として進轉し、幾多の成果を収めつゝある。

その詳細なる報道は後記の各部報に譲つて、茲に些か吾人の心境を記述するに、今次の事變は、皇室の御稜威と、皇軍の愛國精神に燃える血み泥な奮闘が、克く銃後の強靱な結束と相俟つて、世界聖戰史上稀に見られる成果を収めつゝあるも、その後に来るべく對支文化工作の任務は、東洋平和確立上極めて重要性を有するものである。而もその大任は偏へに宗教家の雙肩にかゝるものであり、就中立正安國を標榜する宗團人は特に此の大任の本質を熟考し、確實な認識を以て實踐に乗出さなければならぬ。

宗祖の膝下に育れつゝある祖山學徒にも、將來如上の大任を分擔する重大な責務を課せられつゝある事を考察する時、三・五・八歳の修學期間は如何に大切であるか、今更贅言を要しない。吾等は單なる知識探究のみに止まつてはならない。信心爲本二道精通は一家の鐵則であり、大乘的な慈悲・信念・識見・迫力等の精神的要素が調和的に融合して高邁なる人格に統一せられ頑健なる肉體に具現する時、始めて時代の要求する處の宗教家が完成されるものである。祖山學徒の修學は茲に標準を求めて切磋琢磨の努力を盡さなければならない。

自治行政機關たる同窓會の運用も、今且く在延學徒に約して考察する時は、如上の理想實現に資してこそ、本會の存在意義が發揮されるものである。されば學徒各位は、克く本會の本質的使命を認識して之を有効に運用し、以てその性能を萬全に發

現せしむる様に努むる事が必要である。

終に臨み、本年度は本會に於ても戰時の反映で波瀾の多い歳であつたが、幸ひに會長現下を始め、各部長先生並に諸先生、本山當局の御指導と、先輩諸師、有縁各位、會員諸兄の御後援を得て大過なく會務の大半を遂行する事を得て感激に絶えず、以て滿腔の謝意を表するものである。

(下邨生記)

## 各部記事

### ◆庶務部

四月廿一日 選出された吾々は順次定期大會の準備をなしつゝ、當日を迎ふ。

四月三十日 第廿七回同窓會定期大會を本學院の講堂にて開催す。午前十時、難波庶務幹事開會宣言、先づ柿沼教授副會長代理として訓辭あり。次いで正副議長決定(議長松木教授、副議長中條教授)直ちに各部の経過報告。引續いて之に對する質疑應答、若干の質問あるも松木議長の痛快なる司會に依り至極順調に進行して間もなく終了す。次いで舊幹事を代表して難波舊庶務幹事の解任挨拶があり、引續いて下邨新庶務幹事の就任の辭があり、ついで下邨庶務幹事本年度豫算案を



説明し、豫算討議は至極順調に通過す、建議案はなく、緊急動議に移り、中學林同窓會編入の件につき高二河端君より提案す、會員の一部に強硬なる反對意見が生じて議場騒然化し、事態の收拾容易ならざる觀を呈せり。仍て松木議長の發案に依り、委員付託に決して各級より委員二名を出し、晝休を利用して委員會を開催す、その決議事項を午後の大會に付して賛否を採り、教師課及會員多數の協賛を得て遂に中學林の同窓會編入の件は可決さる。續いて種々有益なる希望案の提出あり、議事萬了し、議長解任の後、下邨幹事の閉會宣言を以て大會の結末を表す。時に午後三時。

正副議長兩先生並外諸先生及會員諸兄の御援護を全して、大會を有意義に開催し得た事は、吾々幹事一同の深甚なる感謝にたえざる所である。猶前幹事諸兄の勞を謝し、左に芳名を列記して滿腔の敬意を表す。

庶務部(幹事長)齋藤貫城君(八月出征)

難波智龍君(後)

運動部

辯論部

齋藤威運君

難波智龍君

高野敦誓君(難波幹事庶務移任後)

難波智龍君(高野幹事十月出征後)

文學部

助手

穗坂眞彌君

熊谷海善君

會計部

米村智淨君

購買部 清水文要君

助手 香川英頂君

四月三十日 學院助教授岩田堯親先生は今般應召さる。本日大

客殿に於て壯行式舉行し、本會より淨資を捧呈す。

五月一日 岩田先生身延山を出發するに付き、會員一同驛まで見送り激勵の辭を捧ぐ。

五月二日 文學部、購買部の助手候補者を決定す。四日選舉を行ひその結果米澤君文學部助手に、上田君購買部助手に決定す。

五月三日 本年度各部長決定(前記の如し)。岳麓遺足につき竹谷運動部幹事と身延案内所に行き種々熱議(以後數回に及ぶ)

(運動部參照)

五月五日 各部長に御慰勞を捧呈す。

五月六・七・八日 山門前にて道路布教の法陣を張る。(辯論部參照)

五月九日 先輩重盛快哲師出征につき祝電を發す。岳麓遺足に付き學院當局より許可せらる。

五月十二日 昨年度卒業記念寫眞成り、直ちに各卒業生に發送す。

五月十四日 中學林同窓會編入につき豫算の再度編成を行ひ、各級の委員會に付し、悉く可決さる。

五月十九日 立正中學五年生、教師課一行七十餘名來山。熊谷、香川兩幹事驛まで出迎ふ。田村、竹谷兩幹事思親閣まで案内

す。武井坊に宿す。翌日歸京につき清水、香川兩幹事驛まで見送る。

五月廿六日 遠藤敦頭御尊父が今般入寂せられ、本日御通夜につき下邨、田村、清水各幹事十如房まで出張して回向を申上ぐ。翌日御葬儀に際し、下邨幹事参列して弔辭を捧讀し香資を捧ぐ。

五月廿八日 嶽麓旅行を舉行す。〔運動部参照〕

六月三日 平賀僧正登山されて施餓鬼會を舉行し、本會へ莫大な芳志を賜與さる。

六月四日 敦頭先生より本會へ芳志を賜與さる。

六月十一日 第一學期雄辯大會開催。〔辯論部参照〕

六月十五・十六・十七日 宗祖御入山開闢會並祖廟中心法主即管長制度實現奉祝大慶典を記念して、山門前に於て大々的に道路布教を開催、多大の法益を收む。〔辯論部参照〕

六月十九日 第一學期庭球大會〔運動部参照〕

六月廿日 元庶務幹事田邊正知師登山され、本會に芳志を寄贈さる。

六月廿七日 榊原稿依頼狀發送す。

六月廿八日 厚德寮生の大半が流行病に冒され、本日より休暇となり、第一學期の試験は八月下旬に延期さる。

〇月〇〇日 田邊正知師出征につき祝電を發す。

七月二日 武智實靜師（校友）晋山式につき祝電を發す。

〇月〇〇日 會員香川是光君（高三）出征にて歸郷す。下邨、清

水兩幹事驛まで見送り、淨資を進呈す。

〇月〇〇日 先輩小川龍聰師出征にて歸郷す、下邨、清水兩幹事驛まで見送り、淨資を進呈す。

七月廿日 暑中見舞發送。

同日 會員宇佐美鍊昌君（高三）日蓮宗並身延山中支派遣宣撫員となり渡支するにつき身延山を發す。下邨幹事驛まで見送り淨資を進呈す。

八月廿一日 第二學期開校式舉行。翌日より五日間第壹學期試験執行。

八月廿四日 會員大森君（高一）入營の爲身延山出發。田村、熊谷兩幹事驛まで見送り淨資を進呈す。

八月廿八日 先輩村上顯養航空兵中支にて活躍中今般戰死さるゝにつき悔狀を發信す。

九月五日 第二學期劈頭の幹事會を開催し、今學期中の豫算及び會務遂行の方針を確立し、各部緊張し邁進すべく誓合ふ。

〇月〇〇日 先輩横山是昭師出征さるゝにつき祝電を發す。

九月十日 全會員舉つて勤勞奉仕す。荒れはてた學校々庭も一新するに至る。

九月十一日 宗務役員諸聖より一金二十圓也を賜與さる。

〇月〇〇日 會員穗坂眞彌君（高二）出征の爲身延山を出發。全會員驛まで見送る。淨資を進呈す。

〇月〇〇日 本會運動部長林是幹先生出征さるにつき、午後一時より大客殿に於て壯行式を舉行し、淨資を捧呈す。先生



は厚德寮の前副舎監にして、學院の教練に盡力せられる事甚大であつた。翌〇〇日身延山發、全會員一同驛までお見送申上ぐ。

十月一日 勅額拜戴記念會なるを以て山門前に於て道路布教を行ふ。辯士多數莫大の法益を收む。〔辯論部參照〕

十月四日 東京身延參拜團登山、本會に芳志を賜與さる。

十月七日 會員時澤存昭君（高一）逝去す。弔電を發してその冥福を祈る。

十月八日 林先生の後任として運動部長に灘上惠教先生就任せらる。先生は學院出身にして、今次の事變に於ては昭和の辨慶と謳はれし豪膽の師。林先生の全課目を引繼れて、今後學院に教鞭を採らる。

同日 午後より第二學期庭球大會開催。

十月九日 第二學期劍道大會開催。〔共に運動部參照〕

十月十二日 例年の通夜説教は、今般釋迦堂普請中に付き、祖師堂に於て七時の法要直後十一時近くまで行つて終る。

十月十四日 會員豐田演雄君（中三）逝去につき弔電を發して冥福を祈る。

十月十五日 午後六時より第十三回秋季聯合雄辯大會を身延町公會堂に於て開催す、雨天にも拘らず大盛況にて同十一時終了。閉會後、參加校各辯士を招待して盛大な歡迎慰勞會を催す。〔詳細は辯論部參照〕

十月十六日 先輩村上一等航空兵の本葬につき弔電を發し、香

資を進呈す。因みに同君は在學時代はスポーツ萬能選手にして、昭和十年中等部を卒業、享年廿三

十月十七日 甲府市制祭に際し、辯士數名出張して道路布教を開催。〔詳細辯論部參照〕

十月廿八日 漢口陷落祝賀法要（午前十時より祖師堂にて）引續いて立正大學教官今村嘉吉大佐の時局に關する講演あり。午後一時より全町を擧げて旅行列を行ふ。

十月三十日 下邨幹事、會の用事にて甲府出張す。

十月卅一日 臨時幹事會を開催。今般文學部熊谷幹事・米澤助手等來春早々入營する事に決し、後任助手の銓衡につき協議す、中五帶金君に内定す。

十一月二日 蓮盛房前住職入寂につき下邨幹事葬儀に參列し、香資を進呈す。

十一月六日 先輩谷川寛德師の晋山式につき祝電を發す。

十一月十一日 中三小林是淳君入營の爲歸省す、下邨幹事驛まで見送る。

同日 中二生一同大宮在の天母山に旅行す。會より應分の補助を出す。（引率者至住先生）

十一月十二日 中一生一同は下部及び毛無山に旅行す、會より應分の補助を出す。（引率者至住先生）

十一月十五日 立正大學に於ける各大學、高、專學校聯合雄辯大會に、高參離波君、同大住君を派遣す。

十一月廿日 中四小屋舞一君入營の爲歸省する、熊谷幹事驛ま

で見送る。

同日 峡南野球大會に我祖山チーム善闘して四連覇を實現する。(詳細は運動部参照)

十一月廿一日 高參押田郷藏君入營の爲に歸省する、會員多數車庫まで見送る。

以上が棲神發行前途に於ける部業の大半である。之より任期滿了までは五ヶ月ありせいゝ熱意を以て盡すつもりである。

### 出征軍人 入營軍人 に送る辭

今次の事變勃發してより茲に一有半歳、東亞安定の聖的使命を達成すべく敢然と奮起した皇軍の精銳は到る所に勇名を轟かして、南京に打續く武漢三鎮の陷落等空前の偉績を収めつつ聖業成就を目ざして邁進してゐる。げに雄々しくも尊い吾が同胞勇士の姿である。

さて茲に吾々は、本會員中より榮ある應召を得て曠野に轉戦する勇士の芳名を列記して其の勞苦に對して満腔の謝意を表するものである。

#### 出征軍人 芳名

(○印は本學年度出征)

- 林 是 幹先生 加藤 鍊 明先生
- 岩 田 堯 親先生 齋 藤 貫 城 君
- 香 川 是 光 君 松 岡 政 雄 君
- 高 野 敬 誓 君 ○穗 坂 眞 彌 君

次にやがて第一線に立つて活躍すべき重責を帯びて、今般入營の榮譽を獲得せられたる勇士の芳名を列記して厚く祝禱の意を表するものである。

#### 入營軍人 芳名

- |           |           |
|-----------|-----------|
| 大 住 快 仁 君 | 日 野 正 留 君 |
| 押 田 郷 藏 君 | 熊 谷 海 善 君 |
| 大 森 都 夫 君 | 米 澤 是 忠 君 |
| 玉 田 一 男 君 | 鈴 木 信 經 君 |
| 小 屋 舜 一 君 | 小 林 是 淳 君 |
| 望 月 六 博 君 | 後 藤 博 君   |
| 原 田 鐵 雄 君 |           |

(各銀杯一個を贈呈す、大森君は都合により淨志を進呈す。)

### ◇ 會計部

自然社會と構成社會の何れを問はず、これが活動發展の根源は資財の多少如何にかかる。随つて如何なる社會團體の生活に於いても、何等かの形を以て會計といふ一部門を設けざるを得ない。ここに會計といふ憎まれ役が存在するわけだ。



學院制度の改革により一時縮小したる我が同窓會も、今學年は中學林生の包含に由りて再び之が擴大せられ、隨つて本部に於ける資財の蓄積融通も潤澤を得ることゝなつた。

日支事變下に於ける國家方策に則り、各部に對しては可能な限度の節約を乞ふた。何んとなれば一事業に於ける出費を僅少し、以て一定資財のもとになされる事業のより大なるものを切望したからである。各部に於いては緊縮經濟なるに反比例し粉骨碎身、實に華々しき活躍をせられたことは今更此に言ふまでもない。然しそれは本部報の趣旨にあらねば省略することにする。

今や本年も餘す處僅となり、部業も滞り無く遂行しつつあるが、これ偏に各部長諸先生を初め、各幹事會員諸兄の御後援に依る賜と、茲に甚深の感謝の意を表するものである。

同窓會への寄附者芳名

## 庶務部へ

教頭 遠藤 是妙先生

一金拾圓也

一金貳拾圓也

一金參拾圓也

一金五圓也

一金參圓也

一金貳圓也

一金貳圓也

宗務院殿  
平賀實榮殿  
荒木義榮殿  
岡親修殿  
小島鍊戒殿  
亀口龍謙殿  
田邊正知殿

一金貳圓也  
一金拾圓也  
一金五圓也  
一金壹圓也  
辯論部へ

山梨縣日蓮宗布教師會殿

一金五圓也

一金參拾圓也

一金貳圓也

一金壹圓也

一金貳圓也

一金壹圓五拾錢也

一金壹圓也

一金壹圓也

文 學 部 へ

一金拾圓也

一金貳圓也

一金參圓也

一金壹圓也

蓮盛坊殿  
東都參拜團御中  
神保殿  
丸山はつ殿  
中野昇殿  
松司軒殿  
加藤案内所殿  
田中屋殿  
望月寫真館殿  
山田屋殿  
熊王堂殿  
新玉屋殿  
祖山學院校友會殿  
半澤海學殿  
中谷敦海殿  
井田正信殿

## ◆ 辯論部

言論は思想の花でありあらゆる文化文明の實は此の花によりて

結ばれた事は、東西古今の歴史が明らかに物語つてゐる。佛陀金口の所説が八萬四千の法門となり今日社會に及ぼしてゐる恩恵は絶大なものであり、宗祖又法華經色讀せられ立正安國の正義を絶叫し正邪に迷へる衆生を啓蒙され、ひいては今日吾國の興隆發展に偉大なる貢獻をなしてゐる事も明らかである。

我等祖山學徒は宗祖の膝下に於て、朝夕行學二道に勵み他日「二陣三陣續け」との宗祖の遺命を奉じて布教戰線に活躍すべく止暇斷眠の精進を續けてゐる。

敎家の生命は申す迄も無く布教である。祖山辯論部は此の意味に於て重大なる使命を持つてゐる。かかる重責ある該部幹事に不肖私が無力無經驗をも顧みず就任した事は光輝ある辯論部史に對して慚愧の念に絶へぬ所である。然し「延びんとするには先づ屈す」例の如く此の縮少により、更に大なる膨脹發展されん事を心より願望する者である。時恰も戰時体制下に於て祖國日本は八紘一宇實現に立上れる時、宗門に於ては祖廟中心制度確立され本化門下は四海歸妙の成佛國土建設に向ひ立正報國の精神のもとに奮闘すべき絶好の時を得て、本辯論部も耕辯會に山内説教に將亦街頭に進出して、宗祖大上人の御庇護並に松本部長先生の御指導と會員諸兄の絶大なる後援の下に大過なく該部の重責の大半を終了し得た事を感謝し併せて本年度の足跡を報告する次第である。

四月廿八日 前幹事難波兄より事務引繼完了。  
五月六日 釋尊御降誕會道路布教開演。

部

報

所 身延町山門前 辯士左の如し

清水 幹 事 宇佐美 鍊 昌 君  
難波 智 龍 君 田 中 靜 光 君

五月七日 同道路布教並映畫會

所 山門前

下 邨 顯 淨 君 宇佐美 鍊 昌 君  
難波 智 龍 君 松 本 部 長

映畫：身延山ニユース、宗祖御一代記 説明丸山布敎師

五月八日 同前 同所

米 村 智 淨 君 清 水 幹 事  
下 邨 顯 淨 君 難波 智 龍 君

宇佐美 鍊 昌 君 丸 山 布 敎 師

武 田 先 生 松 本 部 長

三日間の道路布教は天候に恵まれざりしにもかかはらず辯士諸氏の奮闘に依り盛大裡に終了す。

映畫布教に於ては特に丸山布敎師の御盡力を深謝す。

五月十四日 耕辯會並に説教儀式開催。

説教 帶金、香川、米澤、厚海、田中。

耕辯 勝山、小林、上田、齋藤、阿部、丘。

右の如き形式に於て毎週土曜日に耕辯、説教を開催す。

六月四日 山門説教出張

清水、宇佐美、難波、三君。

六月七日 大善坊説教出張。

二七七



六月十一日 校内各級選出春季雄辯大會開催す。當日のプログ

ラム左の如し、

一、開會の辭

清水幹事

一、母性愛

中學林一 幡野良仙君

一、今事變下に於ける本化學徒の急務全二

阿部東洋君

一、所感

中三 望月六博君

一、戦は吾等覺醒の時也

中四 大橋玄晃君

一、所感

中五 香川英頂君

一、佛敎を白眼視する當局者に訴ふ

高一 細井利行君

一、支那事變觀

高二 新津義尙君

一、日蓮上人の魂を体得せよ

高三 横山持教君

一、批評訓辭

部長 松木先生

一、閉會の辭

下邨幹事

六月十五日より三日間開會説敎出仕。同宗祖御入山記念並に奉祝祖廟中心制度確立の道路布敎開催す。

六月十五日 雨天なりしも二王門内に於て開催。

清水

幹事

望月海順君

下邨

幹事

宇佐美鍾昌君

田中靜光君

松木部長

六月十六日 道路布敎。

清水、下邨、小林、難波、宇佐美、津田師、武田先生、松木部長。

生、松木部長。

本日東京市大本願中野氏より辯論部に對し金一封を下さる。

六月十七日 道路布敎。

下邨、田中、難波、小林、宇佐美、丸山布敎師、

清水。

七月七日

蓮盛坊説敎出張。

難波、大住、宇佐美、三君出仕。

七月十六日

大善坊出張。

七月二十三日 總門發軔閣祭典説敎出張。

難波、牛崎、兩君出仕。

九月十日

説敎プリント發行す。

十月一日

勅額拜戴記念道路布敎。

下邨幹事、牛崎海勇君、望月海順君、齋藤威順君、

難波智龍君、田中靜光君、武田先生、灘上先生、大

住快仁君。

十月十二日 通夜説敎出仕。

本年は釋迦堂増築中につき午後十一時迄祖師堂に於て行はる

十月十五日 第十三回秋季聯合雄辯大會開催す。

參加團体 立正大學 日本大學 立正學院(大阪) 池上學院

祖山中學林 本化同心會 男女青年團

當日審査員諸先生を左の如く御願す。

審査長 柴田頤秀學監

松木本興先生

今村是龍先生

灘上惠敎先生

有光友逸先生

プログラム左の如し。

一、玄題三唱

一、開會の辭

◆優勝カップ返還式◆

一、審査員挨拶

一、黎明の叫び

一、支那事變下に於ける我等の覺悟中學林

一、或る女の死

一、國民精神總動員

一、出でよ時代の宗教家

一、法華經の時は來れり

一、小さき存在の叫び

一、我徒の覺悟

一、吾も又男子なり

一、八紘一宇の理想の下に

一、苦惱の中より

一、世界さば日蓮なり

一、日蓮主義の人格完成と誓願生活

一、農村青年の使命

一、汗と信念に生きたる者

一、獅子奮迅の姿

一 同  
幹事 清水文要君

本學教授 今村是龍先生

中學林 原田 鐵雄君

中學林 高橋 英正君

本 學 小林 是淳君

下山青年 遠藤 敏夫君

日本大學 我妻 岩吉君

本 學 黒宮 教文君

女子青年 藤田 みつじ嬢

立正學院 吉田 學量君

身延青年 秋山 米二郎君

本 學 帶金 一義君

池上學院 佐川 寶敬君

同心會 村田 海仙君

立正學院 川上 觀慧君

本 學 細井 利行君

身延青年 田中 萬造君

立大專部 河村 圓敬君

一、攝受折伏時に依るべし

一、身延人に訴ふ

一、奉仕の一念

一、人類の歴史は連繫的犠牲に基く

一、事の戒法

一、法華經行者の信念と覺悟

一、あれかこれか此の動きの中に見よ

一、改造か創造か

◆優勝カップ授與式◆

一、挨拶

一、閉會の辭

一、玄題三唱

審査の結果左の六君が優勝準優勝の榮冠を獲得された。

本學 優勝(カップ授與) 高 二 竹中仙一君

同 準 優勝(賞品授與) 高 三 田中泰勵君

他校派遣優勝(カップ授與) 立正學院 吉田學量君

同 準 優勝(賞品授與) 立正大學 岡 部 君

男女青年優勝(カップ授與) 田中萬造君

同 準 優勝(賞品授與) 片田爲丸君

廿五名の辯士は戰時體制下に處する我等の信念の歸依所を遺憾なく吐露す。本大會に際しては部長先生、本山布教部、審

日本大學 内海 龍觀君

同心會 片田 爲丸君

本 學 竹中仙一君

立大豫科 佐藤 辯修君

本 學 信田 運連君

本 學 長谷川泰溫君

本 學 田中 泰勵君

立大學部 岡 部 君

辯論部長 松木本興先生

幹 事 下邨 顯淨君

同



査諸先生及び各參加辯士の御盡力を感謝致しますと共に尙大會に際し御奉仕下された會員諸兄並に梅屋旅館御主人、身延印刷所に深謝申し上げます。

十月十七日 例年雨に苦しまれた甲府市制祭特別道路布教も本年は晴天。一行は牛崎海勇、大佳快仁、齋藤威遼、清水幹事の四名で晝夜二回に亘つて太田町公園の廣場に於て法陣を張り聴衆ひきもきらず盛大裡に終了した。

右催しに際しては特に鹽田先生並に山梨縣布教師會より絶大なる御支援をかたじけなうした事を厚く御禮申上ます。

十月二十九日 二王尊祭禮説教出仕。

丸山布教師、清水幹事。

十一月十五日 立正大學雄辯大會に高三難波智龍君、大佳快仁君を派遣す。

宗教の理想境

難波君

何が人間世界をこうさせたか

大住君

第三學期

宗祖御降誕會雄辯大會を開催す。

## ◇運動部

竹谷生記

運動。私は特に我國古來の武道と、外來の所謂スポーツとを同じく此の範疇に入れたい。何故なら武道とスポーツとはその型式に於て、一は堅苦しく、一は自由であるにも拘はらず、共

に身體を練磨、精神を鍛へる事に於て同一だと見るからである。現今の科學の發達は事物を分析し、或は綜合して現象の眞を精細に穿ちつゝある。然して我々の身體の複雑なる形質、それは一體如何なる微妙な作用を爲すものであるから研究されて居る。生理の學理が精細に究められれば、それに伴つて此の事も又精細にされるが此れを實際に活動し體驗し得るものはスポーツを置いて外にはない。されば競技は身體のリズムに緊張味に又部分的に等、配合的に試みられる。其れは丁度學者が眞理に就いて苦悶し、其處に樂しむと似たものがある。

「剛健なる精神は、剛健なる身體に宿る」と云ふ言葉がある。之れは身體が弱ければ意志が薄弱であるといふ反面を云つて居ると思ふ。然しそれ以上に、スポーツをやり抜くには何より先に氣魄が必要である。身體に先立つての氣魄である。私は、弱身の人が、何さかして丈夫になりたいと、朝日を浴びて冷水摩擦をして居る姿を想像する。此の人の氣魄こそスポーツの精神である。

私はスポーツの眞を身體の剛健如何よりも、氣魄の點に見たい。吾等は情熱に燃えた潑刺たる氣魄を以て終生生き通したい。永遠の若人たりたい。此の氣魄を以て宗教家として生きると共に、一方身體の強靱を求め、眞理に憧れる心は此處にも肉體の微妙なる作用を知り、其處より發する靈妙な力強き美しさを樂しみたい。運動し過ぎて身體を害すと云ふ人があるが肉體の節理を忘れてはならない。目指す處は肉體の完全なる肉體の働き

に至るにある。疲勞を回復し軽い運動をする事は勿論結構である。然し若き情熱に燃える者は唯それだけでは満足出来ない。必ずや肉と靈の交叉する深い／＼鍛錬を求めるに違ひない。私自身野球をやりつゝ、又他の部をも幹事として擴充發達させようとしたが、その成績のあがらざるを自ら省りみて深く愧ぢたい。

終りに、運動部長林是幹先生が名譽の應召をされ、九月二十八日全學院、全町の歡呼の中に壯途に着かれてより代つて灘上先生をお迎へした。林先生多年の御勞苦を感謝し、含せて新部長先生の今後益々我々を勵まされん事を御願ひして、筆を擱く。

## 劍道部

壹月三十日 一週間寒氣に堪へ体位向上、技術の練磨をはからんと寒稽古開催。稽古者實に二十名を數へ渡刺と寒氣風邪を蹴飛ばした。本日此期の納會試合にてその成果を發表しあつた。成績次の如し。

□紅白戦 勝——白軍

紅白軍共に好く亂れ戦ひ遂に大將の勝負にて決す。

□高點試合(トーナメント式)

一等 日野君、二等 齋藤(威)君、三等 株田君

□優勝戦

優勝 株田君、二等 齋藤(威)君、三等 前田君

秋正に超非常時局にあり、朝野舉つて体位向上健康第一を叫

ければる今日、武道精神の發揚と相俟つて當劍道部も晴天白日の野外をその道場として練磨を續けて來た。先頃機敏駿劍を以て重鎮たりし出島學兄を送り、新星芝田、多賀、岩城、細井、大橋の諸星を迎へたが我部も正に天をつくの概がある。都合によりて春期大會取り止めの爲その好期を逸した。秋期大會は前例無き大盛會で出場劍士廿數名に上り剩(岡志満々として床をも抜けん程だつた。

十月九日(前九時開催) 戦績左の如し

ド青	竹	内	田	ドメ、ドド、メド
コ荒	木	幡	野	コ
コ三	枝	木	鳥	メコ、コ
ドメ、ドメ、メ	岩	成	芝	田
メコ	鈴木新	前	田	ド
細	井	梅	原	
株	田	多	賀	
ドコ、ドド、ドド、ドド	株	田	白(十六本)	
紅(十八本)勝				

九時より時間勵行せし爲幾分遅くなりし者あるも開催初めからなか／＼激戦ことに内田君の奮戦は紅軍の心配の種であつた。

□高點試合

一等 株田君、二等 岩成君、三等 増田(慈)君

□優勝戦

優勝 鈴木(新)君、二等 株田君、三等 齋藤(威)芝田君



本山にて晝食後、午後一時より改めて優勝戦續行す。就中准々決勝に於ける齋藤（威）岩成兩君の一戦は一方大、一方小の珍景だつた。又鈴木、齋藤兩君の一戦に於て鈴木君も肘を破つて奮闘し遂に岩成君の雪辱をしたのは見事な一戦であつた。尙當日の審判を加藤要舜師に煩した事は厚く感謝する。午後三時皇國の萬歳を三唱して閉會す。

今や皇國は長期建設へ邁進して居る。我々宗門僧侶と雖も破邪顯正の劍を提げて二陣三陣續くには健全なる身体が必要だ。

正月二十二日より例年の如く寒稽古を開催する豫定。又選手を擇り南部警察署の納會に出場、身中劍道部等へ挑戦する豫定なれば今後とも期待されし。

諸兄！劍道をもつて益々その心身を鍛鍊し堅忍不拔質實剛健なる精神を涵養し以て國家社會、宗門のためにも充分盡粹せられん事を切望して筆を擱く。

# 庭 球 部

我が學院運動部の最古を誇る當部も近年部員の減少に禍して昔日の盛觀なく、只春秋の二大會あるのみ。本年の春季大會は不幸に厚德寮々生の病臥に遭遇し不參加者多かりしも、林運動部長出征後、灘上新部長を始め松本辯論部長、今村文學部長、望月觀爾先生御來場、各級を網羅しての秋季大會は近年になき熱戦裡に終了す。

六月十九日 春季大會成績

一、紅白戦 紅軍大勝す。

一、級 戦 一位中四、二位高三、三位高二、個人戦

□準 決 勝

香川天ヶ瀬組 2 — 1 佐藤杉山（見）組

内田 武波組 2 — 0 三枝 丸山組

□決 勝 戦（五回戦）

香川天ヶ瀬組 3 — 0 内田 武波組

十月八日 秋季大會成績

一、紅白戦 紅軍大勝

一、級 戦 一位高壹、二位中四、三位高三

一、個人戦

□二 次 戦

灘上部長組 2 — 0 株 田 組

幡野組 0 — 2 鈴木組

望月組（不戦一勝）

□準 決 勝

灘上部長組 2 — 1 望月組

鈴木組（不戦一勝）

□決 勝 戦

灘上部長組 2 — 0 鈴木組

望月先生組 2 — 0 天ヶ瀬組

以上の如く優勝旗は灘上部長望月先生組に授與さる。

## 卓球部

省みるに當部の存在は此の數年來躍進又躍進の著しき發展經路を示して居る。過去四年間に於ける名選手の輩出と相俟つて部員の斯道に於ける意氣軒昂たる猛練習は遂に今日の隆盛を見るに至つた。今や我が部の名聲は近くは峽内に遠くは山梨静岡兩縣下に咲き誇るに至る。之れ先輩諸氏の築きあげし苦闘の結果と深く感謝するものである。然しながら祖山の卓球部の曉將藤君の轉校こそ偉大なる大打撃である。我が卓球部を搖籃の内から育て、哭れた恩人、指導者藤君、氏の轉校こそ残念の極みである。たゞ君が残して哭れた我が卓球部をより一層堅實なるものとし益々斯道の爲に奮勵する事を誓つて君に饒けし以て君の功勞を感謝するものである。

又此處に特別大書すべきは往年の花形選手村上兄が今事變に於て名譽の戦死を遂げられた事である。謹んで故人の冥福を祈る。又當部の中堅選手として囑望された松岡、大森兩兄の榮へある入營と田口君の應召とは當部の最も痛手とするところであるが、國家の爲大いに祝し舉つて兄等の戦功と武運とをお祈りするものである。

現在のチームメンバーを見れば、主將として惑星竹中、副將として闊志満面たる意氣の鈴木、マネージャーとして古強者の増田。それに新進氣鋭の帶金、中村、遠藤等中堅選手として其

の技、將來大いに期待されて居る。今や名選手幾多去りしと雖も其の意氣と精進とを以て對外的對内的に其の名を止めて居る。

又部員として喜ぶべきは縣下にも比類無き豪華な卓球台が新調された事である。此處に卓球台の設計と新調の爲に勞を盡されし竹谷運動部幹事に部員一同厚く感謝するものである。

昭和十三年度に於ける足跡は次の如し。

### 第三學期校内大會

梅も微笑む春麗の一日を斯して祖山の誇高き傳統を持つ校舎にて昭和十三年度最初の大會を開催す。戦績要略せば左の如し

#### トーナメント

優勝 鈴木 君 (望月寛眞館寄贈盃)

二等 青柳 君 (小友氏寄贈盃)

三等 帶金 君

全 香川 君

### 第三回山靜兩縣下選手權大會

主催 祖山學院卓球部 後援 山梨日日新聞社 山梨水品會社

於身延小學校

準優勝前の戦績省略す。

#### ★準優勝戦

鈴木(祖山) 3 — 0 増田(祖山)

望月(Y.S.) 3 — 0 依田(身鐵)

#### ★決勝戦

望月(Y.S.) 3 — 2 鈴木(祖山)



龍讓虎搏の熱戦を交へしも武運拙く敗る、惜しい哉。然し敗れたりと雖も峽南の第一人者をして窮地に陥しめせしは其の意氣賞すべし、その前途囑望するに餘りある。

### ○春季校内大會

五月十五日に本學講堂に於て、部員一同並に飛入選手多數參加しA B二組に岐ち望月寫眞館寄贈盃並に小友寛榮氏寄贈盃爭奮戦を華々しく開始す。

#### A組トーナメント

優勝 大森君、二等 鈴木君、三等 竹中君、中村君

#### A組リーグ戦

優勝 大森君、二等 竹中君、三等 増田君、鈴木君

#### B組リーグ戦

優勝 村上君、二等 小山田君、三等 小屋君、

### ○第二回縣下男子學校對抗大會

主催 山梨縣体育協會

後援 山梨日日新聞社

山梨卓球協會

六月五日甲府高女學校コートで舉行。此の日本學代表として、大森、鈴木、増田、帶金、遠藤の五選手必勝を期して固き決意を以て遠征の途に上り參加出場す。戦績本學外は省略す。

祖山 3 — 2 甲商

祖山 2 — 1 甲中

祖山 0 — 3 高工

本舞臺は第二回の出陣なれど、竹中、中村兩選手が都合あつて出場不参加の爲これに代ふるに新鋭帶金、中村を以て參加出場す。甲中、高工に對しては善戦善闘せしが前年度の雪辱戦成らず再敗の血涙をのみ勇闘空しく千載の痛恨を残したりと雖も何時かはこの雪辱を期せん事を誓ふ。

### ○秋季校内大會

十一月十三日快晴に恵まれた絶好の日、本學講堂に於て部員一同並に參加者多數を以て、午前九時半より試合を開始す。激烈とした若人の胸には意氣と力と熱で張り切つてゐる。

何時もの如くA B二組に岐つ。

#### A組リーグ戦

優勝 鈴木君、二等 増田君、三等 村上君

#### B組リーグ戦

優勝 高宮君、二等 香川君、三等 榊原君

#### A B合同トーナメント

優勝 増田君、二等 鈴木君、三等 村上君、榊原君

以上

### ◆野 球 部

峽南野球大會に於て三連覇の遺業を繼承した當部は四連覇の大業を目標に山田友篤兄、鈴木彌吉郎(主將)兄、笹部守圭兄の三選手を送りし我等は、その後、新入部員荒木、鈴木(新)、幡野、村上の諸君を迎へて陣容をととのへ之が邁進に努力した。

五月中旬縣下軟式野球大會南巨摩豫選に参加、宮本青竹の兩君が缺場したとは云へ、脆くも二敗してしまつた。

かく危ぶまれた我等のスタートも、二學期に入つて漸く軌道に乗り、殊に林部長應召後、後任灘上部長の運動に對する熱心さ、望月(歡)先生と共に、シートノックに或は打撃に、その名コーチぶりは常に一同を激勵させ技術の進歩と共に部員の意氣天を衝くの概があつた。

十月十六日十九日巨摩八代鯉澤大會に参加、大明市川の二チームを撃破し、次いで縣下に名聲高き鯉澤チームと一戦、日頃練習の技量を充分發揮し健闘せり。

對 大明チーム 5 — 0 (勝)

對 市川チーム 9 — 2 (勝)

決勝戦

對 鯉澤チーム 4 — 4 (引分)

惜しや日没の爲引分となつたが常に有利に進行せし事は特記すべき事だ。かく熱戦裡に部員一同は平素の練習に於るより以上の收穫を得て歸山した。此の遠征に於て先輩長谷川兄の御援護を深く謝する。

□第九回峽南軟式野球大會

十一月十九日(土曜日)午後一時身延中學校球場に於て舉行。幾多先輩が血と涙で以て築いた三連覇の歴史をきづつけまいと部員一同頑張る。殊に過去三年間峽南大會の華、我が軍の天才投手宮本君、本大會も今年が最後、其の胸中や如何ん!

一回戦(十一月十九日)

祖山 不戦勝 驛前チーム

二回戦(十一月二十日)

祖山 1 3 0 2 2 1 0

南部 1 0 0 0 0 0 1

山 波 青 本 原 新 上 野 木 田

祖 鈴 木 武 竹 宮 梅 鈴 村 崎 荒 内

部 1 7 4 6 5 3 9 8 2

南 柿 山 山 田 青 鈴 諫 若 深

以上の如く樂勝。後半宮本投手に變りて青竹投手よく打者の弱點を突き健闘す。

決勝戦(十一月二十日)

祖山 0 0 0 0 0 3 A

水電 0 0 0 0 0 1 0

山 信 波 竹 本 原 新 上 木 田

祖 鈴 木 武 青 宮 梅 鈴 村 荒 内

電 2 3 1 6 5 4 9 8 7

水 池 田 望 熊 市 片 川 德 淺

打數20 三振8  
得點3 四死4  
安打3 失1

打數26 三振9  
得點9 四死17  
安打5 失6

打數28 三振6  
得點2 四死3  
安打4 失3

打數30 三振11  
得點1 四死11  
安打4 失1



午後三時、祖山對富士川水電の決勝戦水電先攻にて開始。

敵一回に先頭打者ヒットあり、二回三回満塁となるに對し、我軍三回共三者凡退して振はず甚だ危まる。四回敵凡退。我軍一死後武波敵失に出で青竹中堅を抜きしより氣揚りしも無念武波二三壘間に捕手索制球に刺され怨を残す。五回敵よく攻撃して二ヒット有るに對し我梅原の四球あるのみ。六回敵二者四球に出でて後右翼前打撃に荒木右翼手の本壘遠投及ばず遂に一點を許す。我軍全員奮起扼腕、之が奪回に全力を揚ぐ。一死後好く鈴木信四球を得二死後青竹之に續き次の強打者宮本の強烈なゴロに敵左翼手狼狽後逸、鈴木歡呼を浴びて生還。敵投手交代の機を見て梅原二壘打を放つて二者生還、二點を勝越し貴重な三點を得。最終回は夕闇變遷として殆んど球見えずA付にて終了す。茲に四連覇の榮冠を飾つたわけであるが、四年連投の宮本投手の功績偉大なるを感謝するの情や切である。殊に兄は卒業期を目前に萬難を排しての出場、謹んで部員一同厚く御禮申上げる。最後に灘上部長、望月歡先生始め應援の諸士に深謝して息まない。

## ◆富士五湖旅行記

月 日 昭和十三年五月廿八日

コース 身延—芝川—白糸瀧—本栖湖—風穴—樹海—紅葉

台—河口湖—三坂峠—甲府—身延

踏破旅程 四十五里

二八六

中條、望月(舜)、福島、武田、望月(歡)の五先生を始め總員五十二名、それに加藤案内所、熊王寫眞屋。

靈峰富士の裳裾にちりばめられた紺碧の五湖、それは天下の遊子の憧憬所である。本會に於ける之の試は該博の資たるに其の功甚大なるものありと思ふ。又浩然の氣が養はれたと思ふ。

旅装を整へ一行五十四名が身延車庫前に集合、若駒の如き濃潤さを新型バス二台に分乗したのは午前五時三十分だった。時は杜鵑啼く新緑の好季、氣使つた天候もハイキング日和で朝まだきの街を疾驅するバスも軽い。狭い教室より開放された籠の鳥は若駒の如き氣概で今日の壯途に血肉は休内に躍動する。舌端輕妙な武田先生のユーモアには爆笑！ 又爆笑。之等を孕んだバスは朝日に鮮明となつた翠巒を後に飛ばす。天井に飛び上る程の撃動も今日は愉快な雰圍氣を醸し出す。

芝川迄の山路は激流岩を噛む絶壁を急カーブしつつ疾驅するので冷汗三斗。芝川よりコースを轉じてバスは一路白糸瀧へ。次第に弧を描いて顯れ出した裾野。十萬坊ヶ原の大石寺を右に見て日興上人身延離山の往昔を回想しつつ白糸瀧に到着したのは八時廿分。

白糸瀧。大宮町驛よりバスで三十分の地點、高さ二十三米、幅三十米、附近に音止の瀧、工藤祐經の墓、駒止の櫻、曾我神社あり。

バス下車、坂を下ると名瀑白糸が熔岩質のそぎ立つた岩崖を馬蹄型に形造つて幾條とも知れぬ瀧がとどろき鳴り渡つて居る。

飛沫が霧となつて肌に寒い。或は崖より或は崖の割目より或は

中腹より或は緑樹の陰より千の針を突き出した如く落ち鳴りど

よもして水柱となり霧となり飛沫となりして朝日にきらめく壯

觀さ！清冽な瀧水の流れに佇み飛沫を背景に記念撮影する。豪

快を以て鳴る音止の瀧は白糸の右手にあり、曾我兄弟隠れ岩は

途中にある。曾我の仇討、富士の巻狩等の昔を畫いてバスに乗つ

たが瀧音が耳に泌みて離れなかつた。曠莫たる緑野の三里ヶ原

に見る富士は豪快そのものである。農作物不可能な此の溶岩地

帯の緑野には隨所に溶岩が黴んだ顔を見せて居るが、色あせ

た驕蹠が點綴して居る處で少憩十分、緑野に佇ちて毅然たる大

富士に對向ふ。威容富士！皇國日本そのものゝ富士！千古不

易の富嶽に人生の泡沫を思ひ曾我の英名竹帛に垂ると雖も暮

影日に空しきを嘆く。透谷の文に曰ふ「且に平氏あり夕に源氏

あり飄忽として去り飄忽として来る。一朝山を嚙んで一世紀没

し一朝退き盡きて他世紀来る。歴史の載する處一朝毎に葉数を

減じ古苔むしつくして英雄の遺魄日に寒し。……恒久不變の威

靈を保つ物、富嶽よ。汝こそ不朽不死に逼き物」と嗚呼！

本栖湖着十時、初夏の碧天を映じて紺碧に湖面は沈々として

神祕の色を呈す。四圍の樹木の緑と汀に屹とした熔岩の赭色と

碧湖とに私は原始時代の怪魚を想像した程だつた。

周圍三里五町、五湖中最も深し、鱒釣りあり、古代民族使用

の獨木船あり。鑑賞の暇なく直ちに進路。清純幽邃の精進、凄美の極致西湖には往かず青木ヶ原樹海に入る。數百種の對木が西、精進、本栖三湖畔に廣がる熔岩流の上に密生する千古斧鉞の入らざる原始林で學術的資料の豊富なこと世界屈指の由、時折は熊がノソ／＼と散歩に出てバス客を吃驚せしめ、亦バスとマラソン競技を演じる由、溶岩流の凸凹地に瀧水の如く繁茂せるこの樹海は全く原始的な雰圍氣に包まれるが一層感を深ふせしめたのは風穴である。

風穴。千六百餘年前富士噴火の際に出來た熔岩隧道。深さ十米、長さ三町、穴中に四時解けざる水柱あり、奥に蠶卵貯藏棚あり、天然記念物。冷氣の吹き上る穴口より臘燭の灯をたよりにして氷つた木の段々を下ること二度、横穴に出る。灯が人々の影を黒く印して天井にうつるのが五十餘名の人聲が洞中に籠ると共に無氣味である。氷つてやゝもすると滑りさうなので足に氣を付けると二尺程に低くなつた天井に頭を打つ。隨所に氷柱が立つて居る。千古の人の如き心持でふと仁田四郎が入つたと言ふ富士の人穴の地獄を思ひ出す。出口に出た時皆一様に太い息を呼吸した。

風穴迄迎ひに來た河口ホテルの番頭に案内されて樹海をぬけると視野が開けて紅葉台に向ふ長閑な雲雀丘に出る。揚雲雀が聲を響かせて初夏を唄ふ。なだらかな丘には農夫が鋤を陽に光らせて居る。ピクニックの好適地。自動車路より横に五丁坂を上ると眺望絶佳の紅葉台で、四里四方の樹海と本栖精進の湖が瞰



下される。實に茫洋の觀あり、雄大な景に陶然とし揚雲雀の聲を聴きつつ休憩して居ると天下も富も名譽も要らなくなる。カメラをむける者、聲を放つ者、店で買物をする者、騷然として旅は明朗そのものである。十二時船津着、河口ホテルの大客間を自分獨りで買切つた心算でふんぞりかへつて晝食をとる。

河口湖。海拔二千六百尺の高地にあり、五湖中最大にして周圍四里二十六丁、倒富士の勝地、水泳にボートに可、御屋敷の松、産屋ヶ崎の逆富士、壘石の夕映、敷島の松、淺間神社、胎内等の名勝あり。

記念撮影後、山中湖行は都合上中止にして三時迄この勝地を鑑賞すべく自由行動となり散會。三時遊子は三坂越えとなる。良くも築いたと思はれる峻峻な山路をバスは爆音を唸らせて河口を下下に眺めつつ登る。峠頂上の隧道口で少憩、最後の富士を賞す。この先に海拔一七八六米の三ツ峠の絶景がある由。隧道を出れば山腹を乾からびた白い路が樹間に山陰に隠見して果てしなく續く。曲りうねつたこの道を絶壁なす緑樹を仰ぎ乍ら砂塵を上げてバスは疾驅する。砂塵のひまに見える谿の松に懸る紫の藤の垂花も少しも揺れて居ない程静かなので砂塵は空間に屯したまゝ中々去らない。その中を次のバスは突つきるので塵埃まみれだ。薊が砂まみれになつて路端に咲いて居る。バスのエンジンが高い。薄霧が盆地に立ち罩めた頃坂路を下り盡した。黄昏がひっそりと桑畑を包み笛吹川に薄曇の中に白々と流れ、連峰は薄灰色にたゞなはり町には灯が點き出した。やゝ郷愁に

近いものを感じつつ甲府に入つた時は五時半だつた。ここで又英氣を養ふべく十時迄自由行動となる。十時過人員點呼の上分乗、活を獲た先生始め一同やんや騒ぎで爆笑を滿載、眞暗な田舎道を一路身延へと甲府の街の灯をあとにしたのであつた。

一笠一杖草鞋を履いて勝地を心ゆく迄鑑賞した昔の旅路に比して今日文化の旅は或は興がうすく趣味僅少の嘆があるであらう。然し之れだけの旅程を僅か一日で踏破した事を思ふと歡喜愉悅を禁じ得ない。文明には文明の味がある。(完)

(K・K生記)

## ◇ 文 學 部

支那事變を契機として日本の思想界も飛躍的發展をなした。

日本主義がそれだ。然し聖戰茲に一年猶餘、この日本主義が單なる民族主義に非ずして所謂東亞協同体へ向つての民族的全體主義の擡頭を見るに至つた。勿論全體主義、東亞協同体と謂つても全體の中に獨自のものを失する事なき、即ち日本は日本としての獨自性を有する所の部分は何處までも全體の中に包まれつつ、然かも獨自のものな有する處のものである。現今のゆきつまつた社會狀態を救ひ且つ東亞の暗雲を掃滅するには、この東亞協同体たる民族全體主義でなくてはならないと考へると共に是の主義が八紘一宇の大精神の顯現である事を思ふ時、吾等日蓮門徒は皆歸廣布の大旆を彷彿として想起するであらう。要

するに是の基礎とする所は精神である。人間、否森羅萬象悉く決して物質に依りて割切れるものではない。本化門徒の抱負を憶ふ。

扱へわれわれが文學をやリ文學によりて表現せんとするもの、それは常に精神の高潮にあるが故にこの全体主義と文學との關係が見出だされる。されば文學の役目こそ精神界を開拓耕作する重任を佩びたるものであつて、古來幾多の諸賢哲人の教説、大聖釋尊所説の修多羅等の世益を想ふ時、主義精神の根本活動力として文學の必然や亦言を俟たない。

斯く考へ來つて棲神への學生間に於ける投稿者の餘りにも寡少なるを見ると、その精神信念の欠漏に悲嘆せずには居られない。潑刺たる學生期、もつと／＼青年の意氣と熱との肉弾を棲神に敲き付けていゝ筈だ、時代に活目せよ。此の意味に於て又學生の親しみある棲神とする爲に「作品集」を思切つて創欄した。豊田正子の綴方教室に見える眞摯と純眞さは自己を隠蔽しない子供の故かも知れないが此の作品集も自己の信念を素直に顯した青年門徒の氣概を欲したい。敲き起したい。學生の活躍欄として（之が本當の棲神作成の意義だと思ふ）この作品集の充實擴大を諸兄の努力に依頼する次第である。（熊谷生記）

## 文學部へ寄贈書籍

立正史學  
報山學報

立正大學史學會殿  
比叡山專修院報山學會殿

部 報

信 人 松 楓 居 殿  
求 道 園 殿  
山 柿 會 殿  
其他新聞雜誌等 各 位 殿

## 同窓會文學部寄附者芳名（十二月以降）

一金 壹 封	法 主 現 下
一金 拾 圓 也	柴 田 執 事 長 殿
一金 貳 拾 圓 也	本 院 教 師 課 殿
一金 拾 五 圓 也	學 院 教 師 課 殿
一金 五 圓 也	鈴 木 智 久 殿
一金 貳 圓 也	永 瀧 堯 順 殿

## 『棲神』第廿五號

## 原稿募集

（切）昭和十四年  
八月三十日

今迄の棲神記載論説目錄を作成致します故十五號以前の棲神お持ちの方は御寄贈願ひます。尚棲神第廿、廿三號御希望の方は左記へ御申込下さい（六〇錢）

祖山學院内 同窓會文學部



7